HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	女子サッカー選手の労働と生活に関する研究 ： 不安定な競技実践形態とアスリート・アイデンティティをめぐるエスノグラフィー
Author(s)	申, 恩真
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14414号
Issue Date	2021-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k14414
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/96770
Type	doctoral thesis
File Information	SHIN_Eunjin (2021.6.23) .pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文

女子サッカー選手の労働と生活に関する研究

—不安定な競技実践形態とアスリート・アイデンティティをめぐるエスノグラフィー—

北海道大学大学院教育学院　生涯学習論講座　青年期教育論

申　恩真

【目　次】

序　章　1
１　先行研究　1
２　本論文の課題　8
３　調査概要　12
４　本論文の構成　13

第１章　女子サッカーという競技種目とその固有性　16
１　「男のスポーツ」としてのサッカー　16
２　女子サッカーをめぐる議論　21
３　女子サッカーと競技種目上のジェンダー　24
４　小　括　28

第２章　日本女子サッカーリーグの発足とその変遷過程　30
１　日本女子サッカーリーグの発足過程　30
２　第一期：1989 年～2003 年――1 部制　36
　２－１　リーグの成長期と好況期：1989 年～1996 年　36
　２－２　リーグの不況期：1997 年～2003 年　37
３　第二期：2004 年～2014 年――2 部制　38
４　第三期：2015 年～2020 年――3 部制　43
５　第四期：2021 年～――初のプロリーグの誕生に向けて　44
６　小　括　46

第３章　チーム運営の実態と選手の競技実践形態　47
１　チーム内部の財政的困難について　47
　１－１　チームの資金不足の実態　47
　１－２　不安定な選手の競技活動　49
２　チームの選手獲得困難と選手の競技実践形態の複数化　51
３　日本女子サッカー界における労働市場　59
４　小　括　59

第４章　女子サッカーチームの運営と秩序
：K チームでのフィールドワークから　61
１　K チームの運営全般について　62

２　K チームの選手とスタッフ構成　63
３　チームの活動について　67
３－１　練習　67
３－２　ホーム試合　69
３－３　アウェイ試合　70
３－３－１　移動日とミーティング　70
３－３－２　試合当日　72
３－３－３　居残り組　73
４　小　括　74

第５章　地域社会と K チームの関係性　76
１　J リーグの理念とその活動方針　76
２　女子サッカーにおける支援企業の位置づけ　77
３　K チームは「道徳の学校」である　78
４　地域貢献活動　80
５　スポーツ集団を越えて：地元を代表するアスリートとして　84
６　小　括　86

第６章　K チームの選手間における相互関係　88
１　「本当の選手」という論理　88
２　プロ選手とアマチュア選手の生活実態　91
３　「契約上のステータス」と「認識上のステータス」　98
４　プレー場面におけるプロ選手とアマチュア選手の立場の違い　99
５　小　括　100

第７章　プロ選手の労働環境　102
１　契約と労働条件　102
２　K チームにおけるプロ選手の位置付け　103
３　痛みをめぐる経験に見るプロ選手の困難　104
３－１　「病い（illness）」という視点　104
３－２　選手の競技実践形態を問わず、痛みはチームに公的に伝えること　105
３－３　PB さんの痛みに対する行為　106
３－４　女子選手同士に共有されている月経への理解　107
３－５　プロ選手の月経への対応を考察する　108
４　プロ選手の不安定な労働環境　110
５　小　括　112

第８章　支援企業の社員選手の労働環境　113
１　K チームの選手が支援企業で働くまで　114
２　支援企業における選手の働き方　115
３　順応しようとする選手の行為　117
４　セルフ・デボーションに逆向する労働環境　119
５　安定させるための労働から不安定な労働へ　120
６　小　括　122

第９章　女子サッカー選手におけるジェンダーと
アスリート・アイデンティティの探求　123
１　重層的なジェンダー構造　123
２　女子サッカー選手たちのジェンダー意識　125
２－１　サッカー経験の中で意識させられたジェンダーと男子選手への自己同一化 126
２－２　ピッチ上での「男らしさ」と、ピッチ外での「女らしさ」　128
３　「サッカー選手」として生きる：アスリート・アイデンティティの探求　133
３－１　サッカーは私の人生である　133
３－２　女子サッカー選手という困難を、あえて選択する　136
４　小　括　138

終　章　140
１　本論文のまとめ　140
２　結論　144
２－１　労働と生活から見た競技活動における不安定化の要因とその内実　144
２－２　ジェンダーの視点から見た生活全体における不安定化の要因とその内実　146
２－３　女子サッカーがアスリート及びスポーツ界にもたらす可能性　147
３　今後の課題　148

【参考文献】　151
【参考資料】　156
【謝　　辞】　161

序　章

本論文の目的は、女子サッカー選手の労働と生活の内実を実証的に明らかにすることである。具体的には、日本における女子サッカーの文脈を踏まえつつ、彼女らの競技活動とそれを可能にする労働と生活はどのように相互に関わりながら営まれているかを、選手当事者の視点から実証的に明らかにすることを試みる。

ここで言う「労働」[1]とは、収入を得る手段として、プロ選手であればスポーツによる労働、アマチュア選手であれば、スポーツをするために行う労働、つまり、競技環境とその条件を整えるために行う競技以外の労働を言う。この整理によれば、アスリート[2]の労働は大きく三つの形態に区分できる。一つは、プロ選手で、24時間を競技に従事することが生計を立てる手段となっている選手たちである。これを「労働としてのスポーツ」と呼ぶことにする。二つは、アマチュア選手（社会人）で競技に従事するだけでは生計を立てることが困難であり、競技活動を成立させるために別途の生計手段を確保しなければならない選手たちである。これを「スポーツのための労働」と呼ぶ。三つは、アマチュア選手（高校生や大学生）で、経済的基盤は家族など第三者が担い、その扶養の下で競技活動を行っている選手たちである。これを「他者の労働に支えられたスポーツ」とする。このように、アスリートの個人に注目すると、その労働形態は一括りには捉えられない。

これを考慮して、本論文は、アスリートの競技活動と日々の労働・生活との相互規定的な関係を捉えるため、この関係のありようを「競技実践形態」という概念で表すこととした。競技実践形態は、アスリートが競技活動と労働をどのように両立させ、やりくりしているかを論じる際に有効だと考えられる。

以下、序章では、アスリートの労働と生活に関する先行研究を検討した上で、本論文の問題設定を行う。

1　先行研究

そもそもアスリートはどのような存在であるのか。アスリートに求められる生活はどのようなことなのだろうか。アスリートとは、競技に専念する者としてのあるべき姿に生活全

1 これらの他に「競技活動」とは、アスリートが専門的に携わっているスポーツをめぐる諸活動を指す。それ以外（生活）は、競技活動でも労働でもない、人間関係、余暇、食事、身体症状などの日常生活を表す。

2 そもそも「アスリート」、「選手」というのは、男性を基準にして作られた社会的産物である。そのため、男性以外のアスリートは、同じアスリートといっても競技活動や社会生活において、ある種の差異が生じるだろうと考える。したがって、本論文では、性別二元論の実態により、女性を「女性アスリート」あるいは「女子選手」と呼び、男性に対しては「男性アスリート」「男子選手」、両性を含めるときは「アスリート」と用語を使い分ける。同じく、サッカーをする女性を表すときは「女子サッカー選手」と表し、女子サッカーに限定して述べる際は「女子選手」「選手」という表現を用いることもある。そして、サッカーをする男性に対しては「男子サッカー選手」、両方を含めるときは「サッカー選手」と呼ぶことにする。

体を通じて自己を同一化させ、それを絶えず追い求める生活（アスリート・アイディティティの探求）を過ごす存在である。アスリートとして生きることとは、競技活動に励むことの次元を越えて日々の訓練や競争メカニズムに参加して、強い身体と精神力を持つこと、それを享受するために尽力することである[3]。そのため、アスリートになるということは、勝利を得るための身体的・精神的な訓練を日常生活の最優先にすること、常に競争の世界に生きることを意味する[4]。このような状況に身を投じ、所属先（チーム）で求められるアスリートのあるべき姿に自己を同一化させることによって、それは可能になる。

ここで重要なのは、アスリート・アイデンティティ[5]の探求は、競技活動のみならず生活全体を通して追求されることである。たとえば、女子サッカー選手の労働について問題提起した Edwards［2014］は、選手たちが所属チームからサッカーと日常生活の双方において「自己訓練（self-discipline）」や「自己責任（self-responsibility）」の価値に沿った行動をするように訓練されていたことを指摘している。選手に要請される自己管理的な行動様式はサッカーを実践する場だけではなく、日常生活においても求められていた。

また、Wacquant［2004＝2013］は、シカゴの黒人ゲットー地区のボクシングジムでフィールドワークを実施し、ジムの独自性とボクサーの身体文化を内側から描くことで、ボクシング世界の対象化を試み、スポーツ空間の固有の論理について解明した。なかでも、シカゴストリートの若者が「ボクサーになる」論理では、無秩序的なストリートの社会経済的状況におかれているボクサーたちには、ストリートでは学習する可能性が低い「生活の規則性、規律に従う感覚、身体的精神的な禁欲」［Wacquant, 2004＝2013：61］をジムで学習するように求められていた。これらは、ジムというスポーツ空間で、ボクサーになることで獲得可能なアイデンティティや資質でもあった。このように、アスリート・アイデンティティの探求は、アスリートが競技活動のみならず、スポーツ以外の生活態度と強く結びつきながら追求されるのである。また、アスリートの競技活動も、日常生活と接合させて記述することによって、よりよく理解できると言える。

この点を明らかにするのに貢献したのが、アスリートの競技活動とその生活に入り込み、それを体験しながら細部にわたって観察を行うフィールドワークと、アスリートの目線か

---

3 石岡［2012］は、フィリピン・マニラのボクシングジムで住み込み調査を実施した。石岡は、ボクサーになるというのは、生活全体がジムの秩序に沿って身体的・内面的にアスリートとして長時間をかけて再編成されるプロセスである点を解明している。アスリートは、勝負に挑むために、鍛えられた身体と強い精神力を獲得する日々の過酷なトレーニングを生活の基盤にしているのである［Coakley・Donnelly, 2009＝2011］。

4 アスリートは、他者や他チームとの争いとともに、自チーム内においても、常に競争にさらされている［宮睾, 2003；岡部ら, 2010］。

5 「アスリート・アイデンティティ」に関する言葉として、主にスポーツ心理学において「アスリートのアイデンティティ」［豊田・中込, 2000］、「アスレティック・アイデンティティ」［ウルヴェほか, 2018］が使われている。これらは、アスリート個人が自分自身を選手としてどう考えているかに焦点を当てている。だが、本論文においては、個人だけでなく、他者（チームメイト、スタッフ、地域社会など）がアスリートとして自分をどう見ているのかという観点を含むものとして捉えている。そのため、本論文では、スポーツ社会学的にアスリートの労働と生活について検討する意味で、「アスリート・アイデンティティ」と言う言葉を用いることにした。

ら見ると、そこの現実がどのように理解されるかを描出したエスノグラフィーであった。先行研究には、Wacquant［2004＝2013］と石岡［2012］などがある。これらは、アスリートとして生きるのが簡単なことではないことを改めて突きつけた[6]。

さらに言えば、競技活動を中心とするアスリートにとっての経済的な基盤（労働）の現実も、また、それが簡単なことでないことを示している。アスリート・アイデンティティの探求に専念できるのは、いわゆるトップアスリートと呼ばれる一握りの者に限定され、多くのアスリートは競技活動ができる環境を確保するために、競技とは別の労働に従事することを迫られる。この実態を見れば、アスリート・アイデンティティの探求がどのように営まれるのかを明らかにする際、アスリートの競技活動とそれを可能にする労働に着目することは不可欠である。

現代日本のアスリートに関する既存の研究では、競技活動に終始するものが多く、労働についての着目は十分ではなかった。しかし、1990 年代以降、主にアスリートのセカンドキャリアという視点から、いずれ引退するアスリートの将来的な就労が議論されるようになり、また 2010 年代に入ると、デュアルキャリアの視点から現役アスリートの競技活動とそれを可能にする労働環境との関連が検討されるようになってきた［山中ほか, 2018；日本オリンピック委員会, 2019］。

これらの先行研究の内容を検討すると、アスリートの職務能力が低く評価されるため、労働と競技の両立に困難を覚えるアスリートについて述べている研究［国友, 1991］、トップアスリートが企業の職務上において有用な人的資源になる可能性を示して、企業スポーツの将来像を論じたもの［水上, 2009］[7]、競技活動のみを行うプロ選手より、企業で競技活動と労働の両立をするスポーツ選手の方が、引退後の社会生活や職務能力を身に着けるためには相対的に有利であるという指摘をした研究［井上, 2009］などがある。

なかでも、国友［1991］は、トップレベルの企業野球チームに所属する現役選手および OB 選手に対して、野球生活と職場生活の両立における困難についてアンケート調査を実施した。企業アスリートの労働は、「会社側も選手には一般業務での負担をかけないように配慮している」［国友, 1991：72］ことから、実際に、その労働は形式的であり、仕事に対する責任をほとんど与えていない点を問題視している。そのため、社内において一般社員と交流する時間や機会が少なく孤立しており、練習や試合で職場をあける時もあることから、職務に対する知識やそれを担う能力が乏しい点を明らかにしている。

---

6 Wacquant［2004＝2013］は次のように示している。「プロボクサーがある日グローブを壁に掛けて選手生活に終止符を打つのは、試合の激しさのためというより、むしろ、妥協も逃げ場もないトレーニングの厳しさのためだ」［Wacquant, 2004＝2013：350］。日々の厳しいトレーニングに没頭する義務を遵守して実践することは難しいことなのである。つまり、アスリートには、ジムのような所属先が求める規則、規律に沿って、試合へ臨む者として日々のトレーニングを実践する生活態度が求められるのである。

7 水上［2009］は、1964 年の東京オリンピックに出場した男子バレーボール選手を対象にして、彼が労働環境と競技活動を両立する姿を、ライフヒストリー法を用いて明らかにした。水上は、アスリートが、そうした両立する自身の姿をポジティブに捉えていた点を述べ、企業アスリートの労働環境や雇用モデルを説明し、企業アスリートの労働の重要性を提起した［水上, 2009］。

また、トップアスリートのセカンドキャリアに関する議論［豊田・中込, 1996 ; 豊田, 1999 ; 豊田・中込, 2000；井上, 2009；吉田, 2010；中村, 2017；浜田, 2019］が近年とりわけ活発になってきた[8]。またアスリートの職務能力の向上やセカンドキャリアへの移行にともなう不安や混乱を軽減させるという観点から、アスリートの生活全体を視野に入れるため「ダブルキャリア」「デュアルキャリア」を支える制度の必要性が提唱されるようになった[9]。ダブルキャリア、デュアルキャリアという言葉は、アスリートが、現役時点で競技と他の労働を両立させた状態を表す。ダブルキャリアとは、生計を立てるために競技活動以外の時間での就労を[10]、デュアルキャリアとは、引退後を見越して現役中から、それに関する教育や職業訓練を通じて経験を積むキャリアのこと[11]を意味している。

現在、企業のアスリート雇用の主流は、ひとつのチームを丸ごと抱える企業スポーツから、少人数のアスリートを従業員（正社員・契約社員）として迎え入れてアスリートの生活費と競技活動費の両方を支給する形に変化している。日本オリンピック委員会（JOC）キャリアアカデミーが運営する「アスナビ」は、この実態を示す代表的な例である[12]。企業にとって

---

8 吉田［2010］は、競技者のキャリア形成を 2 つの局面に分類している。それは競技者キャリア（競技者としてのキャリア：現役時のドロップアウト、バーンアウト、困難など）とセカンドキャリア（競技者キャリア終了後のキャリア）についてである。ここでは、これらの中でも、日本のアスリートと企業スポーツとの関係性について議論した先行研究を選別して議論を展開していくことにする。

9 2011 年 6 月に公布、8 月施行された「スポーツ基本法」に基づき、2012 年 3 月策定された「スポーツ基本計画」 は、アスリートのキャリア形成支援を政策として推進している［山中ら, 2018］。現役アスリートの時点からキャリア形成とそれへの支援が、国レベルで重要視されるようになり、アスリートの現役時代のキャリアが引退後にも続き、それがスポーツや社会の発展につながることが期待されている［日本スポーツ振興センター, 2014 : 207］。こうして、アスリートのキャリアをめぐっては、既存の「セカンドキャリア」という現役引退後に獲得するキャリアについての議論から、「ダブルキャリア」「デュアルキャリア」というアスリートの現役時代の複合的なキャリアへと視野が広がっている。

10 たとえば、午前中はコンビニエンスストアで仕事をし、午後から練習する日々を過ごしているアスリートの労働と捉える。このとき、アスリートは、アスリートとして競技活動をする時間の他に、競技とは直接的には関係のない労働（コンビニ店員）に従事している。

11 ダブルキャリアとは異なり、たとえば、現役中は、午前中のみ保険会社に勤めていた者が、選手引退後は同じ会社で、フルタイムで勤務するといったようなケースが考えらえる［日本スポーツ振興センター, 2014 : 2］。

12 この形態を支える仕組みが、JOC が 2010 年 10 月から活動し始めた、アスリートへの就職支援制度「アスナビ」である。「アスナビ」は、「生活環境を安定させながら競技活動を続行したいと考える現役のトップアスリートと、それに理解を示してくださる企業とをマッチングし、スポーツ界と産業界に“Win-Win”の関係をつくる」機能を果たすとしている。具体的にアスナビ制度の概要を見てみると、「①無料職業紹介事業、②正社員または契約社員での雇用契約、③競技活動費の実質補助、④競技優先の勤務体制、⑤引退後の雇用継続」［日本オリンピック委員会, 2019 : 3］と示され、トップアスリートが競技活動を生活の中心とすることができる生活基盤を提供する制度であることが読み取れる。なお、引退後の雇用継続も可能であるため、セカンドキャリアに対するアスリートの不安も減少させることができる［大崎企業スポーツ事業研究助成財団, 2005］。現役時代から引退後まで勤務先が確保できるという点は、アスリートにとって魅力的な制度であるに違いない。斡旋方法は、①「アスナビ」をチェック、②お問い合わせ、③アスナビ説明会、④候補選手決定、会社訪問、⑤面接・選考、⑥内定・採用～入社、⑦入社後のサポート、以上の順序でおこなわれる。具体的には、①「アスナビのチェック」は、企業が JOC 公

のアスリート雇用の意義は、企業内の一体感醸成と士気高揚とされる。アスリートの競技活動を社員たちが応援することで社内に一体感を醸成し、その応援に応えるよう努力するアスリートの姿と大会の結果が社員たちの士気を高揚させるという考えが示されている。他方で、企業が懸念している点は、他社員との公平性の担保であった[13]。このことは、企業アスリートの労働は、他の社員と同様に働いているのではなく、競技活動を優先できるよう優遇されていることを示している[14]。

このように、アスリートの労働に関する先行研究を整理すると、これらは皆、企業スポーツの男性トップアスリートを対象にしていることに気づく[15]。従来の研究は、トップアスリートのセカンドキャリア構想と競技環境に特化し、それ以外の、女性やトップではないアスリートについては検討の対象とされていない。これは、アスリート全体から見ると、かなり偏った、限定的な研究と言える。

ところで、アスリートと労働に関する議論が十分に展開されてこなかったのには、スポーツがアマチュアリズムと深く結びついてきたことが関っていると考えられる。スポーツにおけるアマチュアリズムとは、参加資格としてのアマチュア規定の成立に由来している。アマチュア資格の定義は、漕艇界が 1878 年に決定し、翌年 1879 年には最初のアマチュア成文規定として「ヘンリー・レガッタ委員会制定」[16]を適用したことにさかのぼる。この規定

式サイトにアクセスし、企業への就職を希望しているアスリートのエントリーシートを確認することである。ここで対象とされるアスリートたちは、各競技団体の推薦と審査を経たトップアスリートに限定される。②「お問い合わせ」は、企業が、興味のあるアスリートやアスナビ制度について知りたい点を、JOC に問い合わせすることである。③「アスナビ説明会」では、JOC がアスリートと企業を繋げるために開催する、意見交換の場となる。④「候補選手決定、会社訪問」は、アスリートとアスナビ担当者が企業に直接訪問することである。アスリートと企業双方の理解を深め、疑問や不安を解消していく段階となる。⑤「面接・選考」は、アスナビ担当者が、企業とアスリート雇用への具体的な日程を調節する。⑥「内定・採用～入社」では、企業がアスリートを採用したことによって各種手続きを行う段階で、アスナビ担当者のサポートも行われる。⑦入社後のサポートでは、アスナビ担当者が、アスリートが安心して競技に専念できるように企業をサポートすることになる。

13 「選手現役時代の扱いについては、競技優先の生活であるため、出社頻度や会社業務にかかわる時間が相当限定的にならざるを得ない状況」［山中ほか, 2018：190-201］だからである。

14 たとえば、中村［2017］は、企業アスリートの労働は、他社員との異なる扱いを前提とする、アスリートの就職支援だと言える［中村, 2017：80］。選手は、「従業員として勤務しながら自ら生活費を捻出した上で自主トレーニングを含む訓練と練習を重ね、試合に臨む」［井上, 2009：36］。この制度において、現役中に就労することが可能となり、企業の社員たちとの交流などを通して、一定程度は企業での労働や生活にも触れることになる。

15 トップアスリートのセカンドキャリアをめぐる内面の葛藤や外部の課題［豊田・中込, 1996；豊田, 1999；豊田・中込, 2000；青石・佐々木, 2010；吉田, 2010；中村, 2017］、また、企業スポーツのあり方と人事労務管理の意義［佐々木, 2005；荻野, 2007；佐伯, 2017］、アスリートの職務能力に関する研究［井上, 2009］などがある。

16 「ヘンレー・レガッタ委員会制定（1879 年）」では、次の者をアマチュアとは認めなかった。「1. かけ、賞金、入場料めあてにどんな種類のオープン競技会であっても、それに参加したことのある者。2. 賞金のためにプロフェッショナルといっしょに、あるいは対抗

の第 4 項「金銭または賃金のために、造艇の仕事にたずさわったことのある者」を除けば、これは、1866 年の全英陸上競技選手権規定と同じである［森山, 1977］。この大会では、機械工、職工、あるいは労働者、これらはアマチュアとは認められなかった［内海, 2007 : 27］[17]。こうして 1880 年代から「スポーツによる報酬を求めず高尚な道徳規範にのっとりフェアプレーを遵守」［池田, 2002 : 10-11］する者という意味が定着した。このように、アマチュア規定とは、労働者階級、女性を近代スポーツから排除するために、上層中流階級の白人男性によって導入された参加資格の区分なのである[18]。

このような歴史的経緯にもとづけば、労働者階級の間で広まったサッカーは[19]、アマチュア規定に真っ向から対決する競技であったと言える。上層中流階級は、サッカーに投資する立場をとり、労働者階級が所属するクラブを創設し、それを管理、資金などの運営を行うようになったのである［Gabriel, 2011=2012 : 14-15］。このように、サッカーは、上層中流階級によってアマチュアリズムに反するスポーツとして区別されるようになり、資本主義、商業

して競技をしたことのある者。3．生計の手段として、いかなる競技の練習においても、教えたり、従事したり・手助けをしたことのある者。4．金銭または賃金のために、造艇の仕事にたずさわったことのある者。5．現在および過去において、賃金で傭われた者、職工、職人・労働者である者、あった者。」［森山, 1977 : 80］。

17 しかし、「全英陸上選手権規定は 1868 年、アメリカに渡り、ニューヨーク・アスレティック・クラブで実施されたが、アメリカでは職人、労働者を身分ゆえに除外する条項ははじめから適用しなかった」［森山, 1977 : 80］。このことから、主に英国において、アマチュア規定がスポーツの参加資格として強く適用されていたと言える。

18 「ジェントルマン」と「プレイヤー」という対立概念は、「アマチュア」と「プロフェッショナル」の前史に位置づくものとして、アマチュアという概念が定着する以前、18 世紀から 19 世紀前半のイギリス社会のスポーツ場面で登場していた。当時の「ジェントルマン」は、スポーツを通じて報酬を得ることや賭博に参加するなどが常識化しており、それは不名誉な行為とされていなかった。「プレイヤー」は、例えばクリケットにおいて、バットで打つ地主貴族のジェントルマンに対してボールを投げる人びと、つまり労働者階級を指す言葉であった。このように、「ジェントルマン」と「プレイヤー」は、「『ジェントルマン』と『ノン・ジェントルマン』であったに過ぎなかった」［池田, 2002 : 10-15］。

19 19 世紀半ばの英国において、フットボール（サッカーのルーツ）は、パブリックスクールでアマチュアリズム思想を養う手段であった。当時は、ルールが学校ごとに異なり、それがパブリックスクールの代表を中心に統一されて（「ケンブリッジ大学・ルール（Cambridge rules）」：「『ボールをもって走ること』や脛を蹴る『ハッキング』を禁じており、ラグビー校にとっては不利で、ハロウ校やウェストミンスター校にとっては有利な内容」［青沼, 2014 : 871］）、1863 年にフットボール協会（FA : Football Association）が発足されることになった。1871 年には南部のアマチュアクラブを主体として第 1 回 FA カップが開催された。その後、キリスト教の教会や社会運動家を通じてサッカーは、労働者階級に普及した［山本, 2020］。サッカーとラグビーが企業と地域の統合策として導入され、工場の労働者を中心に、工場内にチームが結成され人気を博した［内海, 2003 : 31］。そして、サッカーは、1887 年に初めて Sheffield Wednesday（シェフィールドウェンディ）というプロフェッショナルチームが登場した。こうしたクラブの動向から、FA は 1888 年からプロチームも組織に編入するようになった［内海, 2003 : 31］。これは、労働者階級の若者たちの野心を掻き立てた。なぜなら、彼らにとって、サッカーをすることで生計を立てるプロ選手になれるということは、工場で苦労しながら労働に従事して一生を過ごすことに代わり、出世も夢見られる魅力的な職業として受け止められたためである。プロチームの発足に伴い、サッカーは労働者の間で人気を集め、盛んになっていった。プロ選手として活躍する労働者を、仲間の労働者たちが観客として眺めるようになった。

化と深く結びつくスポーツとなっていった[20]。

「アマチュアのスポーツこそスポーツ本来のあり方」とするアマチュアリズムは、「金銭や物質的利益のためにスポーツを行うプロは下卑なものであり、プロよりアマチュアの方が尊く」［野崎, 1991：24］とする見方を形成し、アマチュアとプロフェッショナルは対立的な概念として位置付いてきた[21]。他方、現実の推移を見れば、現在、スポーツは、資本主義による商業化、産業化、プロ化が進行している[22]。スポーツは、理念としてアマチュアリズムを掲げながら、現実としてはプロスポーツとして肥大化する道をたどってきた[23]。

アマチュアとプロという対立的な概念が、それぞれの競技やチーム、そして個人の中で、どのように統合されているのかは注目すべき点である。日本におけるアマチュアリズムの浸透は、スポーツを通した武士道精神[24]、苦しみに耐える根性など身体的・精神的な訓練を通じた人格形成と結びつき、当時のスポーツの担い手であった大学運動部は[25]、勝利と修養という二つの信条をモットーに苦しいスポーツをすることをスポーツの醍醐味や面白さとして意味づけたが［日下, 1996：207-209］、こうしたスポーツ観は根強く刷り込まれて、現

20 国際サッカー連盟（FIFA）がプロフェッショナルとアマチュア共存を理念としたことからも確認できる［牛木, 2013：13］。

21 プロスポーツの側からは、アマチュアリズムは、プロスポーツの高度化と大衆化を低迷させる弊害を生み出した側面もあった［内海, 2003・2007］。

22 サッカー以外の競技でも 1960 年代以降、プロスポーツは国際的な競技連盟によって導入されるようになった。1961 年、国際庭球連盟では、全ての大会において、アマチュアだけでなくプロ選手も参加することを許可した。1974 年、IOC はオリンピック憲章からアマチュア規定を削除した［野崎, 1991：25；池田, 2002：4；福田, 2010：194］。さらに、1984 年のロサンゼルスオリンピックでは、スポーツがビジネスの手段として確立するようになった［福田, 2010：194］。アマチュアリズムの象徴ともいえるオリンピックにおける、こうした変化は、スポーツ界に極めてプロスポーツの影響が大きくなった点を示している。

23 1920 年頃、従業員の労務施策の一環として実施された企業スポーツは、戦後、実業団として発展し 1964 年の東京オリンピックに参加した多くの選手は企業スポーツ選手であった。1970 年代から 1980 年代にかけて企業スポーツは、経済的成長とメディアの発展によりメダル獲得を目指す選手を育成するスポーツ界の担い手として成長した［荻野, 2007：69］。日本では、高度経済成長期にプロ化が進行せず、その役割を企業スポーツが担ってきたのである［内海, 2007：52］。だが、1990 年代以降、経済低迷を理由に企業スポーツから撤退するチームが増え、企業は多くの選手をプロとして採用することは難しくなり、その代わりに仕事と競技活動を両立する労働環境を提供する形で、彼らを社員選手として採用していった［荻野, 2007：69-73］。その結果、選手の競技活動と生活態度は、企業のイメージに直結するようになった。したがって、企業では、選手たちが競技活動に加え、日常生活においてもアマチュアリズムに沿って振る舞うことを強調した。

24 スポーツが移入され始めた明治期を、日本におけるスポーツ文化の発達段階と捉える日下［1996］は、その基底的性格とアイデンティティにおいて、「遊び」が「『武士的』な理想」［日下, 1996：219］に変化していったと述べている。また、舩場［2015］は、新渡戸稲造が、英国のパブリックスクールのスポーツ教育思想のあり方を、かつての武士の柔術にも存在したかのように説明し、アマチュアリズムと「武士道」を接続させたとしている［舩場, 2015：228］。

25「東京大学では、明治 16（1883）年を境に様々なクラブが組織され始め、翌明治 17（1884）年にはその統括組織で、他の帝国大学漕艇部の前身となる『走舸組』（そうかぐみ）が結成された。『走舸組』のメンバーは学内対抗の競漕会を開催するなど後に作られる運動部の中心的役割を担っていく」［石坂, 2002：63］。

在に至っている［岡部ら,2010 : 18］[26]。そして、こうした倫理観が、スポーツによって金銭的利益を得ることは望ましくないものとの理解を浸透させてきた。言い換えれば、スポーツには、人間形成としての教育面と、ビジネスとしての商業面の二つがあり、それらが対立しつつ「共存」しているのである。

サッカーで言えば、1993 年に男子プロサッカーリーグ（以下、J リーグ）の設立趣旨は、①「スポーツ文化」としてのサッカーの振興、②日本サッカーの強化と発展、③選手・指導者の地位の向上、④競技場をはじめとするホームタウン環境の整備の 4 点である［日本プロサッカーリーグ,2019］。サッカーを通じた、スポーツ振興、国民の福祉（心身の健康、交流など）、社会的地位の向上、地域貢献が目指されているように、サッカーチームに公共性が求められていることを確認できる［内海,2007］。これは、高尚な道徳規範を体現するアスリートという点でアマチュアリズムに接続するものと考えられる。少なくとも J リーグは、このような形で、プロスポーツとスポーツとしてのアマチュアリズムを「共存」させ、統合しようとしていると言える。こうしたプロスポーツとアマチュアリズムという対立概念の「共存」は、アスリートの競技活動とその環境を規定する大きな要因のひとつだと考えられる。

アスリートの経済的な基盤にかかわる労働が論じられてこなかったのには、スポーツのアマチュアリズムとプロスポーツをめぐる、こうした経緯が深く関っているのではないだろうか。アスリートの労働について論じるということは、スポーツにおける、この二側面の関係を問うことにつながり、それは競技活動以外の労働と生活を包括して検討することによって可能となる。

以上、先行研究の検討から、労働と生活の視点からアスリートを研究することは、アスリートと労働に関して、これまで論じられてこなかった点に踏み込み、アスリートの競技活動とそれを可能にする労働・生活との関係（競技実践形態）を明らかにすることで、アスリートとスポーツ界のありようを見直す契機を提供することにつながると考えられる。

２　本論文の課題

以上から、本論文は、女子サッカー選手の労働と生活の内実を、その競技実践形態に着目しつつ、フィールドワークをもとに明らかにすることを課題とする。これはアスリート現役時代の労働の実態を構造的な特徴と関連づけながら明らかにする質的研究として位置づけられる[27]。企業チーム所属ではないアスリートの労働と生活には、企業側と選手側だけではなく、チーム側の事情や論理も関わってくる。企業、選手、チーム、この三者が相互にどのように関わり合っているかが重要であり、それを解明するために最も適切な研究方法がフィールドワークなのである。これによってアスリートの競技活動と労働の相互の関係を実態に即して描くことが可能になる[28]。

---

26 これらが根強く刷り込まれているスポーツには、野球、特に学生野球がある［西原,2013］。
27 国友［1991］は、野球選手のダブルキャリアにおける不安や問題点を指摘しているが、その不安が競技活動にどのように影響するのか、相互の関係については記述していない。
28 既存の研究の多くは、アンケート調査に基づいた分析結果であるため、選手当事者の意

調査対象を女性アスリートに据えることも、男性のトップアスリートではないアスリートの経験をもって従来の研究を問い直すことにつながると考える[29]。アスリートとして暗黙のうちに前提されるのは男性であり、女性アスリートに関する言及は圧倒的に少ない。労働継続やセカンドキャリアに関しても、これらは女性アスリートにとっての課題ではないかのように扱われており[30]、企業は女性アスリートの現役以降に期待を抱いていないように見える。近代スポーツは、男女という二つに区分された性別二元論のもとで、男性の身体こそスポーツの競技力の高さに適合的であるとの考えを有してきたが、そこにおいて女性アスリートは、男性に劣る者として下位に位置づけられるか、男性とは異なる者として「女らしい」スポーツへと誘導されることになった。

前者の典型が女子サッカーである（女子サッカーという競技種目の固有の性質については第 1 章にて詳述）。女子サッカー選手の労働[31]について論じている Edwards［2014］は、日本トップクラスの女子サッカー選手であっても、低賃金の非正規職に就労していたとして、選手が流動的雇用の対象となりやすいことも指摘している。そして、安定した雇用と収入に解決の道筋を見出すことを提起する。すなわち、女子サッカー選手の労働環境を「正規職／非正規職」の枠組みで捉え、選手が正規職に就き、安定した収入があれば、生活上の困難は解決できるものと捉えている。しかしながら、そもそも企業によるクラブチームや企業の強力な支援が少ない、トップではない脆弱な立場に置かれている日本の女子サッカーを研究対象として設定したとき、この Edwards［2014］の認識は当てはまらず、全選手の正規雇用化という提案は現実的とは言えない。労働の場にも、またジェンダー秩序は浸透していることから、日本の女性労働の現状では安定した雇用が確保されること自体が困難であろう。

日本の女子サッカーと言えば、2011 年、女子代表が第 6 回 FIFA 女子ワールドカップ（ドイツ）において初優勝を果たし、一躍、注目を集めた。しかし、その選手たちであっても、アスリートとして競技活動を全うするのは並大抵のことではない。女子代表の選手ですら、競技活動を可能にする環境の確保が困難であるのだから、女子代表への招待に手の届かな

味世界や競技生活、労働生活の詳細や内実については十分に記述されていない。青石・佐々木［2010］は直接面接法や電話面接法を用いて行っているが、たとえば、彼らは「A 選手と B 選手はいずれも契約社員だが、これらの選手については、いずれも入社後に正社員から契約社員に契約形態を切り替えた」［青石・佐々木, 2010：40-41］といった説明からは、その理由や経緯を知ることはできない。

29 トップではない男性アスリートの経験として、水上［2009］は、「非正規労働者やフリーターとしてのアスリートと就労が一切免除された企業の宣伝媒体としてのプロアスリートの二極化」［水上, 2009：51］を指摘し、これは企業スポーツ衰退によってもたらされたと捉えている。

30 先行研究は、企業スポーツ選手の正規社員選手のうち、引退後 3 年以上会社に残る選手の割合が 8 割以上である中で、女性チームが 20.0%、男性チームが 78.0%であったと回答の結果を示しており、「チームの年齢および性別も引退 3 年後の継続就労率に有意に影響する」［中村, 2017：83］点を指摘している。さらに、企業側がスポーツ選手を雇用する際に、選手の適正、年齢、性別の影響を見据えた、選手への人事労務管理が必要だと指摘している。

31 Edwards は、男子サッカー選手の場合は、J リーグ以外のアマチュア選手を対象とし、女子サッカー選手の場合は、トップレベルで活躍している選手を対象としている［Edwards, 2014：452］。

い選手たちにおいては、なおさら、その労働が問題となる。こうした実情から、本論文は、ジェンダーの視点を持って女性アスリートに着目することで、競技活動と労働の両者のジェンダー秩序とその重なり合いをも明らかにすることとなる。

このように、本論文では、一様には捉えられない選手間の差異を念頭に置きながら、従来の研究が「フリーター・アスリート」[32]と名付けつつ、それ以上言及してこなかった女性アスリート（女子サッカー選手）の労働と生活に目を向ける。本論文の対象を図式的に整理すれば図の序–1 のように表すことができる。

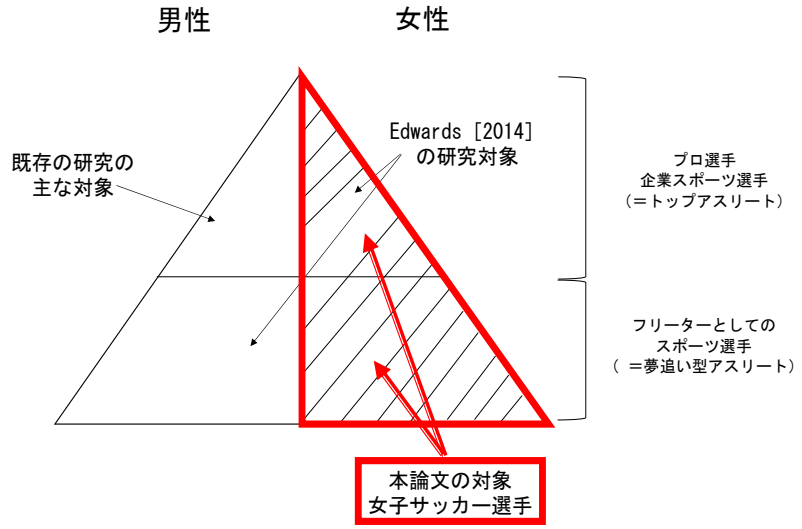


図 序－１　本論文の対象

ここで女子サッカーという研究対象の固有性について簡単に整理しておこう（第１章他で詳述）。一つは、女子サッカーはプロスポーツとして成立困難な脆弱性を有していること、二つは、それゆえに個々の女子サッカーチームは財政面の不安定性を抱えていること、三つは、チームの財政状況によって同じチーム内にプロ選手とアマチュア選手が混在している

32 本論文でいう「フリーターとしてのスポーツ選手」（夢追い型アスリート）とは、好きなスポーツを続けるために、敢えてリスク（経済的には将来の展望を描けない状態）を負って非正規職やアルバイトのような雇用形態に就き、スポーツと労働を両立する生活を選択したアスリートのことを指す。彼らの中には、トップアスリートになる夢を見ている者もいるが、必ずしもすべてではない。本論文の対象である女子サッカー選手も、ほとんどはそうでなく、現在の生活にスポーツに携われるかどうかを重要視する。つまり、「スポーツのための労働」を選択し、労働による責任を負うリスクも高い状況にある者を指す。なお、ここでは、トップではない選手たちに対して「二流」、「ノンエリート」という表現を使わずに「フリーターとしてのスポーツ選手」という言葉を用いることにした。こうした点に注目する本論文は、スポーツ社会学で等閑視されてきた、企業アスリートの労働環境を彼女らの立場から質的に分析する「企業アスリートの就労体験を主題化」[水上, 2009: 54］する研究の蓄積につながると考えられる。

ことがあげられる。これらのことから、本論文は、女子サッカー選手の姿を通して、サッカーにおけるジェンダー秩序［江原, 2001］を分析することとなる。ただし、フィールドワークという方法によって同時に明らかとなるのは、女子サッカー選手自身が、いかにサッカーに打ち込み、それに自らを投じようとしているかでもある。このことは、従来、男性アスリートを想定して考えられてきたアスリート・アイデンティティを相対化するものになりえる。ここから、ジェンダー規範から解放された、女性アスリートの別のあり方への可能性も最終的には提起してみたい。

以上、女子サッカー選手を対象に検討する本論文は、前節で述べたアスリートの労働と生活に関して、次のような新たな議論を展開することにつながる。

一つは、プロスポーツとしての基盤が脆弱な競技が、アマチュアリズムとの「共存」を模索するとき、どのような事態が生じるかである。競技だけで収入を得ることがほとんどできない、プロ並みの女子サッカーチームが、財政基盤を地域社会に依存しながら、同じチーム内に少数のプロ選手と多数のアマチュア選手で構成し運営する実態にクローズアップするのは、女子サッカーを通して、プロスポーツとアマチュアリズムの「共存」は、実際のところ、どのようになされているか、そこで選手とチーム、地域社会はどのような関係であるかを浮き彫りにすることになるだろう。

二つは、この点を個々の選手の視点から見れば、彼女らの日常生活の中に競技活動とそれを可能にする労働を加え、地域社会との関係による地域への貢献活動（恩返し、奉仕）が、半ば強制的に挿入されるということである。プロスポーツの公共性が問われる中で、これらを選手自身がどのように受け止めているかは、それぞれのアスリート・アイデンティティの探求に何らかの影響を及ぼしていると考えられる。つまり、プロスポーツでありながら、経済的な理由によって同じチーム内にプロ選手とアマチュア選手の混在が見られるという、その内実については十分説明されてこなかったために、これらも理念的な議論の枠を出ることがなかったと言える。

そのため、本論文は、競技としても、労働としても脆弱な基盤にあり、同じチーム内にプロ選手とアマチュア選手が混在している女子サッカーK チームでフィールドワークを実施し、その選手たちの労働と生活を描くことにした。ここで、競技実践形態という概念は有効性を持つ[33]。たとえば、日本女子サッカーリーグ[34]に加盟する K チームの日本国籍選手は、アマチュア選手とプロ選手といった二つの属性に括って捉えられないという実態であった。仕事とサッカーを掛け持ちするアマチュア選手といっても、チームの斡旋によって就労した者とそうでない者との競技活動やそれ以外の生活には差異が見られたからである。また、

33 「競技実践形態」という概念は、実際に、筆者が日本の女子サッカーK チームのフィールドワークを通して、選手間で異なる労働のありようが競技活動に大きく関わっていると気づいたことから設定したものである。

34 「日本女子サッカーリーグ」とは、地域密着型の運営形式をもつ女子サッカー32 チームが加盟しているものとして、ホームとアウェイ形式で公式戦が行われるリーグを指す。地域リーグは除外する。日本女子サッカーリーグ 1 部は「なでしこリーグ 1 部」と呼ばれ、2 部は「なでしこリーグ 2 部」、3 部に相当するものは「チャレンジリーグ」と呼ばれている。

大学生・高校生のように学業とサッカーを掛け持ちするアマチュア選手もいた。つまり、同じチーム内に「プロ選手」と「アマチュア選手」がおり、さらにアマチュア選手は「支援企業の社員選手[35]」、「一般企業の社員選手」、「学生選手」に分かれている。少なくとも四つの競技実践形態が存在するのである。

よって、女子サッカー選手の大部分は「スポーツのための労働」をしており、さらにその労働の在り方にも複数のタイプがあったため、同じチームに所属する選手であっても彼女らの日常生活を別々に区別して捉える必要があった。そこから、サッカーはチームスポーツでありながらも、同じチームの中にも様々な競技実践形態が混在し、それらが相互に関係しながら展開している点に注目することで、「ひとつのチーム」としては捉え切れない内実を描き出すことも可能になるだろう。こうした点は、石岡［2012］が、個人で戦うボクサーたちが集団練習と集団生活を通じてボクサー化していくという知見とは異なる観点を提供してくれると考えられる。

加えて、これまで女子サッカー内部に埋め込まれている秩序や特性を踏まえながら、選手たちの競技活動と競技活動以外の双方の生活をボトムアップ的に記述したものは、管見の限り日本においては見当たらない。つまり、女子サッカー研究は多くあっても、女子サッカー選手の経験に関する研究はほとんどない。このことは、女子サッカーをめぐって一般的・抽象的な知識は周知の事実であるが、現場での女子サッカー選手のリアリティについては個別的・具体的には明らかにされていないことを現す。理論と現場でのリアリティの間には理論的なものでは埋められないギャップがあるが［山室, 2007 : 136］、女子サッカー研究は、依然、そのギャップの中にある。

そこで、本論文は、そうしたギャップが埋められる、実践性のある女子サッカー研究を行う試みとして、選手の競技活動と労働・生活におけるリアリティを当事者の立場から記述することを目指し、そのためにフィールドワークを実施した。その結果、筆者は、彼女らの様々な経験を「人伝てによる二次情報ではない一次情報」［佐藤, 2008 : 177］として、女子サッカー文化を自分で体得することができた。したがって、このような研究方法を用いる本論文は、女子サッカーのエスノグラフィーの数少ない試みとして位置づけられる。

３　調査概要

本論文の調査は[36]、主に日本の女子サッカーK チームでの参与観察とインタビュー調査である。なお、補足的に K チームと同列にある、P チームの選手に対するインタビュー調査も行なっている。また、新聞記事とリーグの機関紙を中心とした、メディア報道と資料分析も試みた。これらの媒体には、新聞と編集者の意図が前提にあるのは承知の上で、そこにある伝え手の認識を対象化しつつ、選手の移籍やチームの設立・廃部といった事実の確認に活用

35 「支援企業」［日本女子サッカーリーグ, 2014］とは、一般的にいうスポンサー企業のことである。詳しくは、第 5 章で述べることにする。

36 事前に監督とアポイントメントを取り、K チームの事務所を訪問した。このとき、調査の目的や計画などについて説明し、チームでの参与観察と選手へのインタビュー調査に対する許可を得ることができた。

にした。これらの総合的な調査成果は、女子サッカー選手の労働とアスリート・アイデンティティをめぐる様々な課題を浮き彫りにし、新たな知見を提供すると期待できる。

それでは、以下から調査方法について具体的に説明していく。

第一に、K チームでの参与観察とインタビュー調査である。K チームでの参与観察の期間は、10 カ月間である[37]。筆者は、選手たちと同じく女性であることや、サッカー経験者である上に、JFA の公認指導者 C 級ライセンスを取得していたこと、またチーム内部では韓国籍選手を獲得しようとする計画がある中で韓国語を母国語としていることから、チームのスタッフとして研究活動と同時に、選手たちを身体的精神的にサポートするように、チーム側から要請された。筆者は、ホーム試合、遠征試合、練習、地域イベント、講習会、ミーティングなどの競技面にかかわる様々な活動に参加し、選手たちをサポートしながら現場での参与観察を行う機会を得られた。また、競技面以外の活動、たとえば事務所での補助的仕事や支援企業との決起集会をはじめ、選手たちとの食事会などを通して、選手の日常的な様子も知ることができた。

K チームにおけるインタビュー調査に関しては、16 カ月の間で行ったものであり、これまで 15 名に複数回の調査を実施してきた。調査への同意の得られた選手に個人的に会い、調査の趣旨を説明した。また、インタビュー内容を録音することについて選手に同意を得た上で、彼女らの競技活動と生活上の困難や不安を中心にして半構造化インタビュー調査を実施した。その際、選手には個人情報は加工して使用すること、研究以外には調査内容を用いることなく対象者に配慮してデータを扱うことを説明した[38]。

K チームと同列にある、P チームのサッカー選手 1 名にも、インタビュー調査をおこなった。K チームでのデータを検証する際に、他のチームの事例も念頭に置きながらおこなうことが不可欠だと考えたからである。幸いに、K チームの AH さんの紹介で、彼女の高校時代の仲間である二人にインタビュー調査の協力を得ることができた。彼女らにも、インタビュー調査の前に上記と同様な内容を説明した上で、調査を実施した。

以上のように、調査対象の所属チームが 2 つ登場するため、混乱を避けるために、次のような匿名を使用することにする。K チームの選手については、アルファベットで表記する。たとえば、プロ選手とアマチュア選手が混在している点を考慮して、アマチュア選手はアマチュアの頭文字「A」をつける形で「AC さん・AI さん」のように、プロ選手には同様に「P」をつけて「PB さん、PR さん」のように示す。そして、本文中で触れる P チームの選手 1 名に対しては、「恵さん（仮名）」と記している。

参与観察時やインタビュー調査時の選手の語りを引用する際には、《　》で示し、引用文の中での発言は、「　」を表している。なお、インタビューの中の筆者の発言は「◎」で示し、中略は「……」、筆者の補足は〔　〕と示している。

---

37 参与観察期間は、スタッフとしての同行期間 9 ヶ月と、これのためにスタッフ同士で調整、打ち合わせなどを行った 1 ヶ月を合わせて表している。

38 関［2018］の調査方法を参照。

４　本論文の構成

調査データをもとに、本論文では、以下の順序で議論を展開していく。

アスリートの労働と生活を根本的に規定しているのは、プロスポーツとして、どの程度の財政的基盤を有しているかである。その財政的基盤は、競技種目とアスリートの性別が日本の人びとにどのように受け入れられ、浸透し、定着しているかに拠っている。この点を明らかにする必要があることから、第 1 章から第 3 章では、日本女子サッカーの全体像を把握することを目指す。そもそも女子サッカーはどのような意図で作られたのか、どのような競技として見なされてきたのか、日本において女子サッカーという競技の社会構造的な文脈を明らかにし、その固有性について検討する。

具体的には、第 1 章では、女子サッカーがなぜプロスポーツとして脆弱な基盤しか持ち得ないのか、その原因を女子サッカーという競技自体の固有性から探る。そのために、まずは、日本における女子サッカーの位置付けやジェンダー構造、国内と海外における先行研究や英国の女子サッカー発展過程を確認することにする。その固有性のゆえに、日本女子サッカーリーグ（以下、リーグ）にどのような眼差しが根ざしているのかを検討する。それが第 2 章である。そこでは、女子サッカーリーグの変遷、現状を整理する。これによって、リーグ当局の運営方法自体が選手の競技実践形態に与える影響を検討することができる。そして、第 3 章では、そのリーグに参加している女子サッカーチームの財政的側面と、それによる選手の労働形態について明らかにする。また、ジェンダーが刷り込まれている競技に携わることが、チームや選手たちをいかに不安にさせているかを解明する。そこでは、現場の状況とチームの立場を優先的に考慮しないリーグ拡張が、選手の競技実践形態の複数化を促進したことを明らかにする。

このように、日本の女子サッカーチームの全体像を把握することで、個々のチームの内実をより理解することが可能になり、また個々の事実もより明確に捉えるようになる。これを鑑みながら、第 4 章以降では、フィールドワークによって把握した女子サッカーK チームと選手の生活全体を、チームの秩序と選手たちの経験を軸にしながら描出していく。

第 4 章では、個々のサッカーチームはどのようにチームの運営を行なっているか、フィールド先である K チームに即して検討する。そのために、選手とスタッフの構成について説明し、選手の競技実践形態を整理し明らかにする。その後、チームの活動を記述することで、チームの秩序と規律を身につけていく選手たちの姿を描く。その際、K チームは、財政面の課題を地域社会との関係構築と選手との契約様式の複数化によって解決しようとしていた。そのため、第 5 章では、K チームと地域社会との関係を検討する。ここでは、現代アスリートのあるべき姿として要求される地域貢献（社会貢献）が、女子サッカーチームと地域企業（支援企業）、地域住民との多面的な関係性に孕んでいる点について述べる。そこから、女子サッカーチームの脆弱さをより浮上させる。

第 6 章から第 9 章では、これまで明らかにした女子サッカーの状況の中で、個々の女子サッカー選手がどのようにアスリート・アイデンティティを探求しながら、競技とそれを可能にする労働・生活を営んでいるのかを検討していく。ここで、選手の競技実践形態による相違が、チームの秩序と選手の競技活動や認識に何をもたらしているかに焦点を当てる。こ

うしたアプローチは、本論文のオリジナリティになるだろう。

第 6 章では、選手の競技実践形態の複数化が、本論文を論じるにあたってなぜ重要な視点なのかを説明する。その後、大きくプロ選手とアマチュア選手に分けて、各競技実践形態に対する相互認識と、それによって生み出される差異や同一性について検討する。

第 7 章では、個々の選手の中で、まずプロ選手の生活実態や労働環境（競技環境）に注目する。プロ選手はどのように生計を立てているのか、また、チームにおけるプロ選手の位置付けを明らかにする。その後、プロ選手が直面する困難と、その困難の中でどのようにアスリート・アイデンティティを探求しながら競技に取り組んでいるかを検討する。

第 8 章では、支援企業の社員選手に注目して、アマチュア選手の労働と生活についてみていく。アマチュア選手はサッカーをするためにどのように就労し労働しているのか、また、チームにおける支援企業の社員選手の立場も一般企業の社員選手との働き方を比較することで検討する。また、彼女らは、サッカーと労働を両立する中で、どのようにアスリート・アイデンティティを探求しているのか、その中で抱える葛藤や悩みとどうやって向き合いながら生活しているのかを描く。

このようにして、女子サッカー選手の競技活動はなぜ不安定なのかについて、女子サッカーという競技種目、リーグとチームの運営の実情とそれによって構造化された選手たちの労働と生活の実態によって明らかにする。そこで見えたのが、全体を貫いているジェンダー構造である。

そこで、最後に第 9 章では、ジェンダーの視点から全体を関連づけて、プロ選手にしても、アマチュア選手にしても、女子サッカーの脆弱な状況と立場に置かれながらどのようにサッカー選手、アスリートであろうとしているのかについて考察する。

終章では、本論文で描いた K チームの女子サッカー選手の労働と生活を踏まえ、本論文が見出した新たな知見を整理して示す。

第１章　女子サッカーという競技種目とその固有性

本章では、女子サッカー選手の労働と生活へアプローチするために、女子サッカーという競技とその固有性を明らかにする。

１　「男のスポーツ」としてのサッカー

歴史的に見ると、日本の中学校と高等学校の体育では、男女差を前提として、女子はダンス、男子は武道といったように長年にわたり、男女で異なる内容を学習してきた。1970 年代以降の第二波フェミニズムの進展、1975 年の「国際婦人年」および 1976 年以降の「国連婦人の十年」とそれに伴う政府・自治体の男女平等への取り組み、1985 年の「女性差別撤廃条約[39]」の批准を経て、1989 年の「学習指導要領」の改訂によって、教育課程上の男女の区別が体育においても撤廃された。だが、実際には、学校での体育、スポーツ活動は、男女が二分され、それぞれが別の競技種目を行うといったように、その中にある種の差異は残存している［井谷, 2018：34-35］。

その中で、サッカーの取り扱いは、「中学校学習指導要領の保健体育」（1955 年）では「((サッカー))（男子のみ)」となっており、また「中学校学習指導要領の保健体育」（1972 年）でも「(サッカー)（男子)」となっていた。このようにサッカーは、学校教育において男子のスポーツとして位置づき、女子はサッカーをすることから遠ざけられてきたと言える。

このような傾向は、現在の日本全国高等学校の競技人口統計によっても確認できる。サッカーの競技人口は 173,388 名で、スポーツの中で最も多く、サッカーはアスリート育成の段階においても最もメジャーなスポーツとなっている（表 1−1）。他方で、競技人口における男女差が大きく、野球（硬式）に次いでその女性の競技人口が少ないことがわかる（ただし、女子の競技人口の数値が算出されていないボクシングとラグビーを除く）。このことから、日本国内において人気スポーツのひとつであるサッカーは、主に男性たちによっておこなわれており、また男性が参加しやすい競技であることが見てとれる。

39 1980 年代半ばは、「男女雇用機会均等法」が成立・施行され、日本政府が「女性差別撤廃条約」を批准（1985 年）するなど男女平等に向けた動きが加速した時期であった（1979 年に国連総会で採択)。特に、女性差別撤廃条約には、「固定的役割の変更が男女の完全な平等に不可欠」という理念や、「男女の社会･文化的行動様式の修正」が明記されている点が注目される。

表１－１　日本全国高等学校の競技人口

種目		競技人口（全国高等学校）			
		男子（名）	女子（名）	合計（名）	競技人口に占める女子学生の割合
サッカー		162,397	10,991	173,388	6.3%
野球	（硬式）	143,867	747	144,614	0.5%
	（軟式）	8,214	-	152,828	-
バスケットボール		87,524	56,132	143,656	39.1%
ボクシング		1,907	-	1,907	-
体操		1,957	2,718	4,675	58.14%
新体操		508	2,004	2,512	79.78%
ラグビー		20,011	-	20,011	-
陸上		66,868	38,960	105,828	36.8%
卓球		53,728	22,600	76,328	29.61%
バドミントン		65,742	55,986	121,728	45.99%
テニス		53,784	33,187	86,971	38.16%
ソフトテニス		46,122	33,308	79,430	41.93%
水泳（競泳）		21,131	12,737	33,868	37.61%
柔道		14,001	3,903	17,904	21.80%
フェンシング		1,388	998	2,386	41.83%
レスリング		2,101	276	2,377	11.61%
バレーボール		45,158	57,103	102,261	55.8%
ソフトボール		4,409	19,405	23,814	81.5%

（出所）女子硬式野球に関しては、日刊スポーツ［2017.03.02］を参照。それ以外のデータは、2019 年現在の全国高等学校体育連盟の「令和元年度加盟登録状況」と日本高等学校野球連盟「部員数統計」を参照して筆者作成。

また、JFA のチーム・選手数の比較も確認しておこう。ここで、女子として選手登録できる者は、「12 歳以上の女子選手のみで構成されるチーム L リーグ・一般・大学・高校・クラブ（高校）・中学・クラブ（中学）」［JFA ホームページ］と規定されている。その登録基準に 12 歳未満はカウントされていない。男子の実数は、女子の基準と同様にするために、第 1 種から第 4 種・シニアの中で、12 歳未満の種別である第 4 種の登録は除いてカウントしたものとなる。その結果を表したのが、表 1–2 である。ここで確認できるように、男女間のチーム・選手登録の差異は極めて大きい。2018 年度だけ見ても、男子は 17,996 チーム・590,168 名で、女子は 1,325 チーム・28,765 名である。男子チームは女子の約 13 倍、男子選

手は女子の 20 倍を上回っている。日本においてもサッカーは「男性向きの」スポーツとして理解されていることを示しており、実際にも男性が多く参加していることがわかる（図１−1、図１−2）。

表１－２ 日本サッカー協会 年度別登録数（チーム・選手）

	チーム登録数（単位：チーム）		選手登録数（単位：名）	
	男（第1種～第3種・シニア）	女	男（第1種～第3種・シニア）	女
1979	9,756	52	204,018	919
1980	8,532	111	215,911	2,290
1981	9,346	113	250,363	2,407
1982	9,611	127	245,472	2,631
1983	10,542	212	257,787	4,215
1984	10,261	264	293,152	5,518
1985	11,765	291	329,879	5,630
1986	12,094	360	374,764	7,403
1987	12,694	472	396,046	8,756
1988	13,055	470	414,383	9,647
1989	13,210	491	402,933	10,409
1990	13,550	573	400,305	11,992
1991	14,177	789	391,204	15,063
1992	15,428	877	447,798	17,814
1993	16,331	1,013	463,643	20,228
1994	17,462	1,150	516,762	23,597
1995	18,789	1,217	562,543	23,448
1996	19,167	1,179	584,833	23,796
1997	19,080	1,138	575,458	22,843
1998	18,985	1,082	568,965	21,336
1999	18,943	1,011	556,822	20,030
2000	19,014	993	542,826	19,147
2001	19,099	967	534,992	19,132
2002	19,205	974	535,243	19,717
2003	19,475	1,001	551,567	21,033
2004	19,494	1,054	562,073	22,581
2005	19,545	1,135	567,974	24,733
2006	19,455	1,187	570,494	25,545
2007	19,453	1,221	580,688	25,297
2008	19,325	1,221	582,063	25,071
2009	19,227	1,224	583,268	25,268
2010	18,963	1,226	582,668	25,278
2011	18,579	1,267	594,073	26,237
2012	18,524	1,337	608,010	28,524
2013	18,456	1,409	614,549	30,243
2014	18,400	1,216	622,172	26,978
2015	18,225	1,235	621,684	27,169
2016	18,270	1,251	620,062	27,912
2017	18,217	1,276	608,053	28,119
2018	17,996	1,325	590,168	28,765

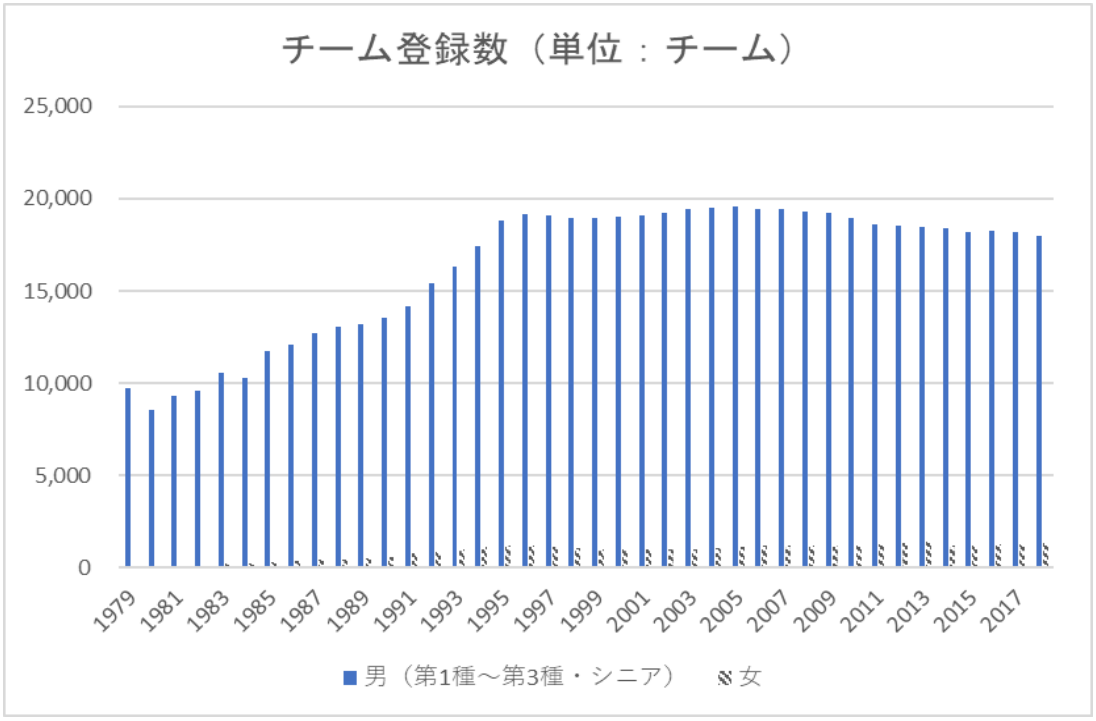


図１－１　日本サッカー協会　チーム登録数（年度別）

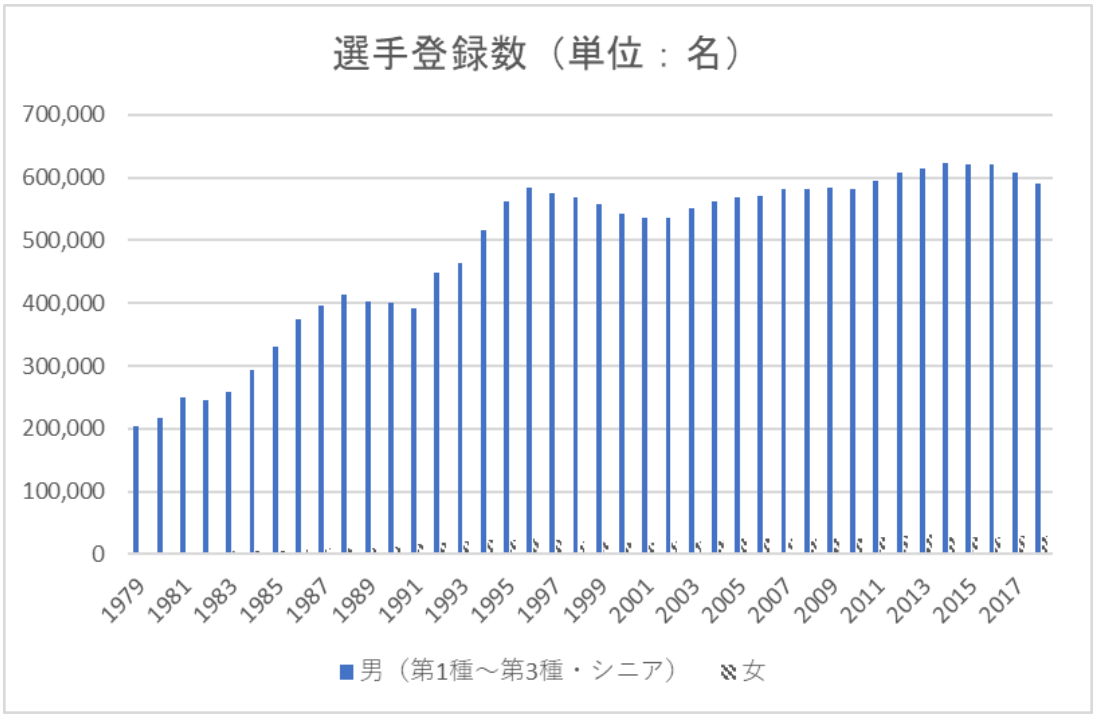


図１－２　日本サッカー協会　選手登録数（年度別）

ところで、サッカーがどのようにして「男のスポーツ」になったのかを見ると、そこには興味深い歴史的事実がある。

サッカーは、英国の白人男性の上流階級以上が通うパブリックスクールの学生を中心に発展したものであるが、その成長や普及の中心は労働者階級であった。19 世紀後半には多くの女子サッカーチームが結成されており、すでに注目を浴びていた[40]。女子サッカーの最古の試合は、1881 年にスコットランドで行われたと記録に残っている。1894 年には、イギリスの女子サッカーの歴史において有名なディック･カー･レディースというチームが結成されている。1895 年には、イングランドと北イングランドの対戦も行われた。このとき、女子サッカーは、男性と同じルール、同じユニフォームでプレーされた。性別によって競技種目やその様式が明確に異なっていた当時にあって、女子サッカーは極めて異例のスポーツであったと言える。

20 世紀に入り、第一次世界大戦が勃発すると、女性たちは男性の代わりに工場で働くようになった。当時のイギリス首相 David Lloyd George は、女子にサッカーを奨励して戦時下の士気を高めようとした。サッカーは女性労働者たちの間で広まり、1916 年には、工場の女子チーム同士の試合も行われるようになった。ディック･カー･レディース（図１−3）は、1917 年のクリスマスにホームグラウンドに１万人を、1919 年にはニューカルスで 3 万 5 千人を、1920 年にはリバプールで 5 万 3 千人を集客するほどの人気を集め、そこでの収益 200 ポンドを軍事病院に、1200 ポンドを地元の戦災被害に寄付するほどであった。

図１－３　ディック･カー･レディース（Dick Kerr's Ladies）
［（出所）The FA ホームページ］

40 女子サッカーの歴史については、Williams［2003］、池田［2016］、大住［2013.05.24］、Jackie［2019.07.10］、The FA のホームページなどの資料を参考にして整理しまとめた。

しかし、1918 年の終戦後、男性の帰省に伴い、女性労働者は工場を解雇されるようになった。中断していた男子サッカーのプロリーグも再開される。他方、FA は、サッカーは女子に不向きだという理由から、150 チームほどあった女子チームに対し、1921 年 12 月 5 日以降、グラウンドでの女子サッカーリーグを禁止したのである。1930 年にはディックカー・レディースも活動を停止せざるを得なかった。こうしてサッカーをプレーしていた女性労働者たちは、女性であるという理由によって、その機会を失うこととなった。女子サッカーに公式的な試合が認められるようになったのは 50 年後の 1971 年のことである。

女性解放運動（第二波フェミニズム）の世界的な潮流を背景に、1960 年代後半、イギリス女子フットボール連盟（The Women's FA：WFA）が 44 の加盟クラブの構成で結成され、1971 年 11 月 29 日以降は、FA 理事会によって女子サッカー禁止令は解除される。こうして 1972 年には、イギリスで初の公式女子国際競技が開かれた。1979 年には、FIFA が各国サッカー協会に対して女子サッカーもその傘下に置き、活動を支援するように要請した。1983 年、FA は WFA を同じ協会の組織として招待した。なお、1991 年には、第 1 回 FIFA 女子ワールドカップ（中国）が開催され、これによって WFA は、同年 24 クラブでナショナルリーグを発足させている。さらに、1994 年には、第 1 回世界女性スポーツ会議がイギリスのブライトンで開催され、女性のスポーツ参加に対する期待が高まった。

このような世界的な動向に対して、日本では、1979 年に日本サッカー協会（JFA）の傘下組織として「日本女子サッカー連盟」が設立され、1980 年からは、第 1 回全日本女子サッカー選手権大会（現、皇后杯・以下、全日本選手権）が開かれることになった。次いで 1981 年、初の女子代表チームが結成され、1989 年には日本女子サッカーリーグが発足された（第 2 章で詳述）。

以上のように、サッカーは意図的に女性を排除してきた歴史を有する。これに対し、約半世紀にわたる男女平等の取り組みの結果、現在では多くの女子サッカー選手が輩出され、国際大会も開催されるようになった。しかし、その競技人口を見ると、男性との差は歴然としており、特に日本においてサッカーは、「男のスポーツ」とみなされている。サッカーにおいて、女子サッカーチームや女子選手は、未知の存在だと言える。

２　女子サッカーをめぐる議論

それでは、このような女子サッカーをめぐって、現在、どのような議論が展開されているのだろうか。日本の女子サッカーに関する先行研究を概観すると、その議論の主流は女子サッカーの競技環境の改善という点であったことがわかる。具体的には、「学校教育との接合の必要性」、「切れ目のないサッカー環境の構築」、「女子サッカーの制度化をめぐる分析」といった観点となる。以下、その内容を見ておこう。

「学校教育との接合の必要性」を指摘した山科と入口［2006］の研究は、男性スポーツとして捉えられてきたサッカーにおいて男女共同参画を推進することが、男女平等なスポーツを実現するために必要であるとした。男女平等なスポーツの実現をはじめ、女子サッカーの普及につなげるために、学校体育で女子サッカーに取り組むことを提案し、女性がサッカーに触れる機会の保障が求められると述べている［山科・入口, 2006］。

「切れ目のないサッカー環境の構築」を指摘する研究として、たとえば、前田と川西［1994］は、女子サッカーリーグに所属する選手のスポーツキャリアパターンを、選手のサッカー開始・継続・離脱、といった過程に注目して述べる。これによって、前田らは小学生からサッカーを始めても中学入学後にはサッカーから離脱する者が多く、高校以降に再開することが多い点を明らかにした。この結果から中学校における女子サッカー環境を整える必要性を主張している［前田・川西, 1994］。また、石山ら［2009］は、私立大学の女子サッカー部の不在が優秀な女子サッカー選手を取りこぼしてしまう恐れがあると指摘し、高校生の女子サッカー選手が将来もサッカーを継続できる環境、つまり「高校生の受け入れ先を充実させるための解決策を模索し、大学リーグの加盟数を増加させ充実させていくことの必要性」を提唱している［石山ほか, 2009:76-81］。さらに大勝［2013］は、一般成人女子サッカー選手を対象にして、女子サッカーを振興するための課題を検討している。その課題への取り組みとして、「以前から指摘されている、中学生世代の活動環境としての部活動と大会の整備」、「多様なニーズに対応した大会を開催」、既婚者を含む「多様な参加者の受け入れ」、という三点を取り上げている［大勝, 2013:54］。

「女子サッカーの制度化」をめぐっては、東明ら［2002］と輪田ら［輪田ほか, 2012a ; 2012b ; 2013］の研究がある。東明らは、アメリカにおける女子サッカーの発展について解明する中で、アメリカ女子代表の活躍や選手の待遇にも目を向け、アメリカ選手と日本選手との待遇の差異を示している［東明ほか, 2002］。また、日本の女子サッカーについては、リーグの歴史や日本女子代表の実態を検討し、女子代表のステータスが低いこと、つまり、男子選手との待遇の格差を問題化している。さらに、そうした問題を解決するためには「女子スポーツの地位向上」や、日本サッカー協会による「女子サッカーの環境整備」に加えて「選手の意識改革」が必要だと主張し、女子サッカー選手としての実力や自覚を持つことを提唱している［東明ほか, 2003: 445-448］。また輪田らは、東明らと同様の立場をとりながらも、日本女子サッカーリーグの加盟チーム側が多くの問題点を抱えていると指摘し、チームの現状を把握する作業が必要だと主張している［輪田ほか, 2012a］。そして、J リーグ傘下の女子サッカーチームを対象として、チーム内の競技環境を明らかにしている。

ところで、ここで注目しておきたいのは、選手の待遇に関する次のような指摘である。輪田ら［2012b］は、チームの本拠地となる地域の企業に勤めるアマチュア選手（社会人）は、企業や地域住民の理解のもとで競技活動と仕事を両立させており、多くの選手は、その環境に満足しているという。しかし、チームによって事情は大きく異なり、女子サッカーチームが安定した競技環境にあるかどうかは、男子トップチームを率いるクラブの傘下に入っているか否かによって左右されているのが現状であるとも述べている。その場合、女子チームの予算は、クラブ予算によって捻出されるため、男子トップチーム次第なのである［輪田ほか, 2012b:26-29］。

以上のように、女子サッカーの環境改善への必要性を提唱するもの、女子サッカー制度や現場の運営状況について問題提起したもの、女子サッカー選手への経済的支援によって、その競技生活の困難が解決しうると指摘しているものなどの研究が多くみられる。日本女子サッカーの競技環境には、多くの現実的な課題があると認識されていることがわかる。

これらと異なる研究アプローチからの議論として、フェミニズム理論による女子サッカー研究がある。フェミニズム理論とは、文化や組織におけるイデオロギー、権力、変化に焦点を当てて批判的に検討することで、スポーツ界や社会全体において平等なジェンダーを実現するために有効である［Coakley・Donnelly, 2009＝2011：33-40］。

まず､女子サッカーに刷り込まれているジェンダーの階層性を浮き彫りにしたSkille［2008］の研究を見てみよう。Skilleは、ノルウェーの女子サッカーの現状を資料と文献分析を通して解明した。ノルウェーでは、福祉国家モデルをもとに男女平等政策が推進されるにつれ、家父長的な社会の支配的な考え方が変化した。家事労働に参加する男性が多くなったことによって、スポーツに参加できる女性が急増したという。女子サッカーも、急速に成長したが、ここでの課題として女子サッカー自体の規模が小さい点を指摘している。そして、ノルウェーにおける女子サッカーは、女性のスポーツ参加を誘導するのに最も貢献したスポーツである一方、現在もサッカーは、男らしさを作り上げる場として機能しているとし、競技活動においてジェンダーの格差が見られる点を明らかにした［Skille, 2008］。つまり、女子サッカーが制度と競技双方において発展を見せているにもかかわらず、男子サッカーの方が優位に置かれるのには変わりがなく、サッカーにおけるジェンダーの階層性が存在していることを浮上させた。

また、Ho［2014］は、日本のメディアに着目してジェンダーによる非対称性を指摘している。Hoは、日本のメディアが、ワールドカップ優勝を果たした女子代表選手について、主に「主婦」向けにナショナル・アイデンティティの形成を促す番組を製作し、放送している点を指摘している。なかでも興味深い点は、日本における女子サッカーは、バレーボールとは異なり「女らしさ」が欠けている競技と認識されているからこそ、メディアは女子サッカー選手の「女らしさ」を強調するような形で放送しているという発見である［Ho, 2014 : 164-165］。そこでは、選手は、国を代表する「娘」や「女らしさ」が強調され、「美しいストライク」のような可愛らしい外見が取り上げられ、「彼氏」とアイドルのために気遣う姿が抽出されている。Hoは、こうしたイメージで女子サッカー選手のスポーツパフォーマンスを不可視化し、彼女らを利用して日本の「女性らしさ」のイメージを作り上げようとするメディアを批判している［Ho , 2014］。

ここで読みとれるのは、メディアは、女子サッカー選手のパフォーマンスの力強さ、勇敢さ、逞しさなど、一般に「男らしさ」と結び付けられる側面を強調する形で放送するのは人びとの注目を浴びにくいと認識していることである。つまり、メディアは多くの視聴者を獲得するために、女子サッカー選手の「女らしさ」をクローズアップするのが有効だと考えているのである。サッカープレーでは「男らしい」女子サッカー選手のサッカー以外の生活での「女らしさ」を強調することで、そのギャップが人々の注目を集めると考えられている。これによって「本当は、女らしい」選手たちというように、サッカープレーにおける彼女らのパフォーマンスは、軽視ないし無視されかねない。

また、Williams［2003］もSkilleやHoと同様に、現代のサッカーに男女の格差が温存されている点を議論している。その格差は、英国のサッカー協会が1921年12月5日から1971年11月29日まで女性の参加を公式的に禁じていたこと、また、現在の女子サッカーの人気

や発展のために、代表チームが競技成果を出すことが欠かせない要素となっている点であるという。ここでの興味深い指摘は、男女サッカーはそもそも分離されて発展してきたため、男女格差が見られるのはごく普通のことであると捉え、英国の女子サッカーは、競技参加を最優先とするようなスポーツのあり様を追求することが現時点では望ましいと主張する点である。Williams の研究は、女子サッカーのビジョンは、必ずしも男子サッカーのような位置づけを獲得することではなく、勝利至上主義、成果主義に走ることでもなく、参加者自身の健康、楽しさ、幸福、自己の目標達成にあるという。このことは、逆に言えば、現代の女子サッカーには、ジェンダーの階層性／非対称性が未だに温存されていることを、彼女も認めていると言える。

その他に、性オルタナティブの観点からの研究として、韓国の女子サッカーに関する研究では、Kwon と Kwon［2012］、そして Hwang［2016］の女子サッカー選手の性自認や性役割をめぐる葛藤に関する研究、Jeong［2014］の女子プロサッカー選手の「男らしい」外見と身体能力[41]が他チームの関係者より取りざたされ、女子選手として侮辱を受けている点を問題提起した研究などがある。

このように、女子サッカーに関するフェミニズム理論の視点から論じた先行研究は、なぜ女子サッカーが男子よりも「格下」に位置づけられるのか、その要因とメカニズムを明らかにしようとしてきたことがわかる。加えて、女子サッカー選手のオルタナティブやジェンダー差別についても議論されてきている。

３　女子サッカーと競技種目上のジェンダー

では、女子サッカー選手は、現代の女性アスリートの中でも、どのような位置にあると整理できるだろうか。そのためにはスポーツとジェンダー研究の知見を踏まえることが重要である。

スポーツとジェンダー研究とは、スポーツにおける「男／女」といった性別二元論や異性愛主義を批判的に問い直し、スポーツの中に構築されているジェンダーを明らかにする学問領域である。具体的には、スポーツを扱う各分野、たとえば文化（コマーシャル、テレビ、ファッションなど）、身体（身体観、記録、セクシュアル・ハラスメントなど）、教育（学校教育、子どもの遊び、体力テストなど）、ムーブメント（組織、法律、メガ・スポーツイベントなど）において、性を分割する見方が構築・強化・再生産されている点を明らかにし、スポーツとジェンダーが密接に結びついている点を告発している[42]。最近は、ジュニア・スポーツの環境改革やジェンダー・フリー学校体育、スポーツ・イベントの発展などに注目してスポーツにおける性オルタナティブの主張もなされている。これらの知見は、女子サッカー選手をめぐる社会的状況を理解するための重要な手がかりを提供してくれる。

例えば、井谷［2020］は、近代オリンピックを「クーベルタン男爵が思い描いた、身体と

41 ここでいう「身体能力」とは、サッカー技術、持久力、筋力など、サッカーを実践する上で必要となる能力を指す。
42 飯田・井谷編著［2004］『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店を参照。

精神の鍛錬を通じて、自国と植民地の支配者としてふさわしい、逞しく克己心のある白人の男たちを育て、またその身体を崇める場」［井谷, 2020：156-157］と指摘し、そこには「人種・ジェンダー・イデオロギー」が通底しているという［井谷, 2020：157］。

このように、近代スポーツにおけるアマチュアリズムは、白人男性の上層中流階級によって、労働者階級、女性、黒人などを排除するためのイデオロギーとして用いられてきた。そのため、女性アスリートが近代スポーツへ参加することは、容易なことではなかった。この点について飯田［2004］は、「いずれの立場をとっても近代スポーツの枠組みのなかでは、ジェンダーの階層性と非対称性から女性は逃れることができない」［飯田, 2004：16］と指摘している。

> （略）近代スポーツの特徴の 1 つに「競技性」があるため、近代スポーツにおけるダブル・スタンダードの階層性／非対称性は避けられないという事実である。階層性とは、筋力やパワーに劣る女性は、新体操やフィギュアスケート、シンクロナイズドスイミングのような表現系の種目を除くすべての競技において「二流の選手」に甘んじなければならないということであって、非対称的とは、ほとんどの競技が「男らしさ」を育成する役割を受け持つ近代スポーツの中で、女性がクローズアップされるのは先のような一部の「女らしさ」の規範を受け入れた種目のみ、ということである［飯田, 2004：14］。

近代スポーツには性別二元論を軸にしたジェンダーの階層性／非対称性が温存されているというのである。これは現代スポーツにおいても引き継がれ、女性アスリートもこのダブル・スタンダードから逃れられないと考えられる。

ところで、現代の女性アスリートといっても、その競技種目によってダブル・スタンダードの現れ方は異なっている。なぜなら、競技種目それ自体にジェンダーが埋め込まれているからである。

Matteo［1986］の研究では、コーネル大学体育学科による、競技種目上のジェンダーイメージによって分類されたリストが紹介されている。これは、心理学科の新入生を対象にして、各個人のスポーツ経験をもとに、自分自身の性別と競技との適合性や、性別によってスポーツの経験が制限されるかどうかを調査して作成されたものである。

まずコーネル大学体育学科が、中等学校・高等学校時に経験した可能性のある競技 68 種目をリスト化し、次に新入生 80 名（男 40 名、女 40 名）に、各競技に関するイメージが「男らしいスポーツ（Masculine sports）」「中性的スポーツ（Neutral sports）」「女らしいスポーツ（Feminine sports）」のいずれであるかを、尺度得点で尋ねた結果にもとづき作成した。尺度得点は 1 点から 9 点まであり、1.0 から 3.5 の間は「男らしいスポーツ」、3.6 から 6.5 の間は「中性的スポーツ」、6.6 から 9.0 の間は「女らしいスポーツ」と分類している。この調査では、全 68 種目の中で、「男らしいスポーツ」が 30 種目、「中性的スポーツ」が 26 種目、「女らしいスポーツ」が 12 種目となった［Matteo, S.：1986：420-423］。それをまとめたのが、表 1−3 である。

表１－３　スポーツ・ジェンダー・ステレオタイプ（コーネル大学体育学科）

男らしいスポーツ Masculine sports （計30種目）	中性的スポーツ Neutral sports （計26種目）	女らしいスポーツ Feminine sports （計12種目）
野球	アーチェリー	エアロビクスダンス
バスケットボール	徒歩旅行	バランスビーム
ボクシング	バドミントン	バレエ
ボート競技	自転車ツーリング	社交ダンス
円盤投	ボウリング	チアリーディング
フェンシング	カヌー	フィールドホッケー
釣り	ダイビング	フィギュアスケート
アメリカンフットボール	ゴルフ	体操
高跳び	ハンドボール	アイススケート
ハードル	乗馬	ジャズダンス
アイスホッケー	ジョギング	モダンダンス
槍投げ	ラケットボール	ヨガ
柔道	ローラースケート	
空手	ランニング	
ラクロス	セーリング	
走り幅跳び	スキューバダイビング	
登山	スキーダウンヒル	
ノーチラス	スキークロスカントリー	
ポールボールティング	スノーシュー	
ポロ	ソフトボール	
ライフル射撃	スクエアダンス	
つり輪	スカッシュ	
ロック・クライミング	水泳	
ラグビー	テニス	
砲丸投	バレーボール	
クレー射撃	水球	
スカイダイビング		
サッカー		
ウェイトリフティング		
レスリング		

（出所）Matteo［1986：420-423］を筆者翻訳。

この表で示されているように、1980 年代のアメリカにおいてサッカーは、「男性向きの」「男らしい」スポーツとして人びとにイメージされ理解されていたことがわかる。サッカーという競技は男を主たるプレーヤーと想定し、「男らしさ（Masculinity）」を競うものであると認識されていたのである。

個々のスポーツ競技とジェンダーイメージとの関係は、メディアを見るとより明確に確認できる。森田［2009］は日本メディアの女性アスリートの描き方についての研究の中で、「女性に適した」とされる競技がメディアで大きく取り上げられる点に注目している。そうした競技には、第一に個人競技が多いこと、第二に相手との直接の身体接触がないこと、第三に自分のポイントがそのまま相手のマイナスになる競技が少ない、審判による採点や記録を競うような、基本的に自分との戦いをすること、という三つの共通点があると指摘する。

これらの特徴に該当するのは、フィギュアスケート、ゴルフ、陸上、競泳、アーティスティックスイミング、テニスなどの競技だという。また、こうしたスポーツが「『競争よりも協調』という女性の社会的行動に望まれる特徴の表れとみることができる」点を指摘し、それらは「サッカーやラグビー、バスケットボールのように選手同士がじかにぶつかり合う」ことや、「筋肉や体力、戦術を駆使して相手を倒そうとする」、競い合うスポーツの特徴と相反していると述べている［森田, 2009：99-100］。これを採用すれば、サッカーは、「女性に適していない」スポーツであり、「男らしさ」と深く結びつく競技としてメディアによって表象されていると言える。

このように、サッカーは男性に適したスポーツ、男らしいスポーツとして位置づけられている。したがって、そうした競技種目の女子選手には、よりいっそう「二流の選手」という烙印が付与されやすいのである。このカテゴリーには、女子サッカー選手を含め、女子野球選手、女子ラグビー選手、女子ボクサー、女子アイスホッケー選手などが当てはまる。

このような歴史を踏まえ、池田［2016］は、上野［1998］の「ジェンダー分離型」と「ジェンダー参加型」（略して「分離型」「参加型」）という概念を用いて、女子サッカーを「参加型」のスポーツとして位置付けている。「分離型」とは、「『性別役割分担』を維持したまま私領域の国家化をめざす」の性別隔離の戦略、「参加型」とは、「『性別役割分担』そのものを解体する」性別不問の戦略である［上野, 1998：67］。「性別隔離を受け入れれば、『女らしさ』の規範を受け入れなければならない」という。一方で、「性別不問の戦略は一見平等の達成のように見えるが、そのなかで生産や戦闘をになった女性たちは『公的領域』が男性性を基準に定義されている限り、『二流の労働力』『二流の戦士』であることに甘んじなければならない。さもなければみずからの『女性性』を否定して『男なみ』をめざすか、せいぜいよくて『女性役割』を保持したまま補助労働力と化す『二重負担』の道を選ぶかの選択が待っているにすぎない」［上野, 1998：93］。

これをスポーツに引きつけて、飯田［2004］は「男性向きの」「男らしい」スポーツに参入している女子選手について次のように述べている。「近代スポーツへの女性の参入は、分離型をとれば、その限られた枠内で女性指導者による女性スポーツを推進することは可能であった。しかし、それは同時に『女らしさ』や『母性』が女性の特性であることを引き受け、『女性』を構築することになった。一方、参加型をとれば、男性用に定義されたスポー

ツでは『二流の選手』という評価を引き受けざるをえないという事態に陥る」［飯田, 2004：15-16］。この概念を女子サッカー選手に置き換えてみるならば、彼女らは、男性性が基準と定義されるサッカーという男性の領域に、性別不問の戦略によって参入した「二流の労働力」「二流の戦士」と位置づけられる。

また、池田［2016］も、スポーツの歴史研究の視点から、英国スポーツにかかわるジェンダー空間の中で、「労働者階級の関与と大戦期のオールタナティヴとしてのスポーツ空間」［池田, 2016：61］をサッカー型と名づけ[43]、英国の初期のサッカーにおける女性の参与が「参加型」であったと指摘した。

このように、英国において、サッカーは性別不問の労働者階級のスポーツとして始まったが、第一次大戦後「女らしさ」が損なわれるスポーツとして位置づけられ、サッカーは「男らしさ」と強く結びつくものとされるようになった。それは、ディックカー・レディースのような、第一次大戦中に男子の代替とされ活躍した女子選手が既存のジェンダー秩序を揺るがすものとして警戒されたからだったとも言える。よって、現代の女子サッカー選手は、サッカー、そしてスポーツのジェンダー秩序を揺るがすものになりうる可能性があるとも考えられる。

4　小　括

本章では、女子サッカー選手の労働と生活へアプローチするために、女子サッカーという競技とその固有性を検討してきた。日本において、サッカーは、日本全国高等学校の競技人口統計と JFA の登録チーム数や登録選手数の男女比較から確認したように、男性が多く参加するスポーツとして位置づいていた。

ところで、サッカーがどのようにして「男のスポーツ」になったのかを見ると、そこには女性を排除してきた歴史があった。そもそもサッカーは、性別不問の競技であったが、そこに参加する女性を排除することで、女性を「女らしさ」と結びつけ、その結果、女性にふさわしくないスポーツとされていったのである。これに対し、現在では多くの女子サッカー選手が輩出され、国際大会も開催されるようになった。しかし、その競技人口を見ると、男性との差は歴然としており、特に日本においてサッカーは、「男のスポーツ」とみなされている。

こうした現実を踏まえて、日本国内の先行研究においては男女格差（経済的収入、競技環境など）と、それをいかに是正するかが主に議論されていた。海外の先行研究においては、フェミニズム理論の視点から、なぜ女子サッカーが男子よりも「格下」に位置づけられるのか、その要因とメカニズムを明らかにしようとする研究が行われていた。

---

43 池田［2016］は、英国スポーツにかかわる 5 つのジェンダー空間を次のように分類している。第 1 のカテゴリーは「クローケー型」、第 2 は「ブルーマーズ型」、第 3 は「サッカー型」、第 4 は「クリケット型」、第 5 は「スウェーデン体操、カニセニックス及び音楽体操型」というジェンダー空間である。これらの中で、分離型（性別隔離の戦略）に類別しているのは「ブルーマーズ型」と「スウェーデン体操、カニセニックス及び音楽体操型」であり、参加型（性別不問の戦略）に類別しているのは「サッカー型」である。

しかし、その後も、サッカーは「男らしいスポーツ」として発展してきた。よって、それに参加する女性は、男性と同じフィールドで戦うことが求められ、その結果「二流の選手」としてしか位置づけられてこなかった点が確認できた。そもそもサッカーという競技には、ジェンダー秩序が強くすり込まれているのであった。しかし、サッカーへの女性の参加は、参加することそれ自体に、そこにおけるジェンダー秩序を揺るがす可能性を秘めているものであった。参加の仕方をより詳細に捉えることで、この可能性を検討したいと考える。

第２章　日本女子サッカーリーグの発足とその変遷過程

本章では、前章を踏まえて、日本女子サッカーリーグの発足とのその変遷や現状を確認する。これまで、大住と大原［2004］の著書『がんばれ！女子サッカー』（岩波書店）及び、東明ら［2002］、輪田ら［2012a］の研究、サッカーマガジン編集部［2018］の『なでしこリーグ 30 年の軌跡』（ベースボール・マガジン社）においても、女子サッカーの歴史・制度について触れられてはいるが、ジェンダーの観点から整理したものは、管見の限りないと言って良い。したがって、リーグの変遷過程をジェンダーの視点から考察することで、日本における女子サッカーの社会的位置や、女子サッカーの固有性や特性を確認することが可能となる。

まず、日本女子サッカーリーグの成立過程を見る。その後、ジェンダーの視点から見た特徴を整理する。次に、リーグ当局が実行してきた事業内容を中心に論述する。リーグ当局の運営方式を検討しつつ、女子サッカーが男性の身体を基準にして作られたものであることや、そこから構築されてきた女子サッカーについての知識、社会的布置について確認する。用いる資料は、女子サッカーに関する文献や新聞記事、大会プログラム、機関紙などのメディア資料などである。この作業は、リーグ運営方法が次章で検討する予定の選手の競技実践形態にどのように関わっているか。また、どのような変化をもたらしたかを検討するためにも必要である。

具体的には、リーグ発足を出発点とした 1989 年から 2021 年までのリーグ体制を分析することにした。下部リーグの発足時点を軸に、三期に分けて説明したい。1 部制であった 1989 年から 2003 年までの期間を「第一期」とし、この間を大きく 2 つに分けて 1989 年から 1996 年までを「リーグの成長期・好況期」、1997 年から 2003 年までを「リーグの不況期」と呼ぶことにする。その後、2 部制となった時期の 2004 年から 2014 年までを「第二期」とする。最後に、3 部制で運営されている 2015 年から 2020 年までを「第三期」とし、初のプロリーグが開幕される予定の 2021 年以降を「第四期」とする。以下、リーグ体制について経時的にまとめていく。

１　日本女子サッカーリーグの発足過程

日本において、男子サッカー組織として JFA が設立されたのは、1921 年である。これに対して、女子サッカー組織は JFA の傘下組織として 1979 年に「日本女子サッカー連盟」が設立されたのが正式な組織の始まりとなる。この時期から、女子選手とチームの組織への登録が可能になり、女子サッカーが組織的体制のもとで実施されるようになっていった[44]。こ

44 それ以前の女子サッカーが行われた記録は、東明らによれば、「日本の女性がサッカーを始めた時期ははっきりしないが、昭和 41 年 12 月 23 日発行のアサヒグラフ誌によると,兵庫県神戸市福住小学校の小学校 6 年生が全国で初めての女子サッカークラブ『福住女子サッカースポーツ少年団』を 26 名のメンバーで結成したとある」［東明ほか, 2002 : 166］。

のように、男子サッカー組織が女子サッカーより 58 年早く結成されていたことは、サッカーは、男性主導で発展した競技であることを表している。

それでは、JFA は、女子サッカーリーグを発足させるためにどのような働きをしたのだろうか。女性が加盟団体に初めて登録可能になったのは、1979 年「日本女子サッカー連盟」が JFA の傘下組織として設けられてからである。当時、登録チーム数は 52 チームであり、登録個人選手数は 919[45]名であった。「日本女子サッカー連盟」が創設され、1980 年からは、第 1 回全日本選手権が開かれることになった。この時から競技スポーツとしての女子サッカー普及と育成が公式にスタートした［日本サッカー協会 75 年史編集委員会, 1996：170-179］。

次いで 1981 年、JFA は初の女子代表チームを結成させた。女子代表は、同年の 6 月に香港で開かれる第 4 回 AFC 女子選手権（現、AFC 女子アジアカップ）に参加し、初めて国際舞台で試合をおこなった。その後、女子サッカーが 1990 年北京アジア大会より正式種目になることが決定した。この時期（1988 年頃）から日本オリンピック委員会や JFA は、女子代表の強化を目指し、リーグ発足へ取り組み始めた［竹本, 2000：4］。この影響を受け、既存の「日本女子サッカー連盟」は「日本サッカー協会第 5 種委員会[46]」へと組織が改編された。こうした経緯を経て 1989 年の 9 月、全日本選手権に参加していた 6 チームを中心にして日本女子サッカーリーグが発足した。

日本女子サッカーリーグ発足時点の役員の一覧を表 2–1 に示した。現在は女性役員の比率が増えているが、当時の役員は 66 名のうち、男性が 64 名であり、女性は 2 名に過ぎなかった。このことは、女子サッカーに何をもたらしたのだろうか。

男性中心の組織構造で発足し運営されたリーグの現実をジェンダーの視点から検討すると、次の三点が注目される。一つは過去の女子サッカー競技規定、二つはリーグ名称、三つはリーグ機関紙の表紙である。

しかし、アスリートについて検討する本論文では、女子サッカー選手が協会に登録可能になった時点を、女子サッカーの始めとして見なしている。

45 JFA ホームページを参照。

46 「日本サッカー協会第 5 種委員会」は、日本の女子サッカー全体（草の根レベルから代表レベルまで）を統轄する機関をいう。「日本女子サッカーリーグ」は、地域リーグではなく全国レベルのトップリーグを表し、そのリーグを運営および管理する機関であるが、本論文では、それを「リーグ当局」と呼ぶ。

表２－１　日本女子サッカーリーグの役員一覧（リーグ発足時と現在の比較対照表）

1989年度（第1回）

大会役員	
役職	氏名
会長	藤田　静夫
副会長	島田　秀夫
	長沼　健
	岡野　俊一郎
	村田　忠男
	大畠　襄
顧問	鈴木　通弘
	中村　剛久
	武内　良生
	飯山　博康
	小菅　宇三治
	松本　隆子＊
	為郷　恒淳
参与	保坂　司
	小野　重夫
	吉江　経雄
	森　健児
	中野　登美雄
	望月　三起也
大会委員長	堀田　哲爾
大会副委員長	吉田　泰知
大会委員	浅見　俊雄
	伊藤　孝夫
	加藤　三郎
	菊地　博
	喜多　清
	小宮　喜久
	三枝　志郎
	重松　良典
	水嶋　正俊
	平木　隆三
	藤井　正訓
	森　健一
	森藤　輝夫
	吉森　茂雄
	西真田　英昭
計	男性：35名
	女性：1名
男女比	男性 97.2／女性 2.8

競技役員	
役職	氏名
委員長	鈴木　保
副委員長	川口　玲雄
	岡野　寧夫
	畑山　明
	高砂　嘉之
委員	森下　源基
	加納　孝
	吉川　則之
	小花　公生
	松尾　喬
	松井　修
	松本　康史
	竹本　一彦
	薩川　昌之
	加藤　寛
	永沢　孝男
	鈴木　良平
	黒滝　等
	蔵　力夫
	綾部　美知枝＊
	田中　英昭
	山田　拓史
	坂本　寿夫
	宮城　秀夫
	浅野　周二
	山崎　弘
	藤田　明
	宇野　浩
審判委員長	浅見　俊雄
審判副委員長	永嶋　正俊
計	男性：29名
	女性：1名
男女比	男性 96.6／女性 3.4

2020年度（第32回）

組織概要（一般社団法人）	
役職	氏名
理事長	岩上　和道
専務理事	奥田　泰久
理事	今井　純子＊
	手塚　貴子＊
	羽生　英之
	文　弘宣
	深井　正吉
	玉田　稔
	井上　有希江＊
	武田　信平
	大内　智重子＊
	ヨーコ・ゼッターランド＊
	窪田　慎二
	東明　有美＊
監事	須永　功
	福田　雅
参与	馬渕　明子＊
	本田　一男
	小野　俊介
	綾部　美知枝＊
	武田　厚
	黒田　和則
	北脇　助三郎
	山内　渉
計	男性：14名
	女性：8名
男女比	男性 58.3／女性 41.7

（注）＊は女性役員
（出所）日本女子サッカーリーグ［1989］；日本女子サッカーリーグHP

まず、過去の女子サッカーの競技規定についてである。全日本女子選手権が開催され始めた時期から、女子サッカーと男子サッカーとの競技規定は異なっていた（表 2–2）。第 1 回目の全日本女子選手権は、11 人制ではなく 8 人制でおこなわれた。また、サッカーボールは成人用の 5 号級ではなく、小学生用の 4 号球が公式球として使用されていた。試合時間も、90 分ではなく 50 分であった。ピッチも正規の 3 分の 2 の広さであった。

その後、全日本女子選手権の競技規定は、男子サッカーと同様なものへと、徐々に変化していった。1982 年の大会からは 11 人制がおこなわれ始め、1986 年には 5 号球のサッカーボールが使用されることになった。1989 年からの試合時間は、1 回戦から準々決勝までは 30

分ハーフの 60 分間へ、準決勝以降の試合は 40 分ハーフの 80 分へと変更された。この影響により、同年に創設されたリーグの試合時間は、全日本女子選手権と同じく 80 分となった。そして、1995 年の第 7 回目から 90 分の試合がおこなわれ始めた。

このように、競技規定の変遷を見ても、同じ競技であるにもかかわらず、男女間に差異が設定され、性別によって区分されていたことがわかる。こうした異なる競技規定が存在した背景には、サッカーに不向きな「女の身体」、男子より身体的に脆弱な女子という見方が隠れていたと考えられる。そのため、女子サッカーは男子サッカーより狭いピッチで試合が実施され、競技時間も短かった。そしてこの事実が、女性は男性より体力的に劣っているという偏見（ステレオタイプ）を生み出すことにもつながっている。現在、競技規定における男女差は解消されているものの、性別によって差異化された競技規定が設けられていた事実自体が、「女の身体」の限界を、選手や人びとに認識させた点は見逃せない。この点が、女子サッカー選手たちに対して、そのさらなる成長の可能性を閉じ、その身体能力を抑制することにつながったとも考えられる。

表２－２　女子サッカーの競技規定の変遷過程

年度	大会名	大会規定における特徴
1980	第1回全日本女子サッカー選手権大会	ボール4号球使用
		8人制
		ピッチ正規の3分の2の広さ
		試合時間50分
1982	第3回全日本女子サッカー選手権大会	ボール4号球使用
		11人制
		試合時間50分
1983	第4回全日本女子サッカー選手権大会	ボール4号球使用
		11人制
		試合時間60分
1986	第7回全日本女子サッカー選手権大会	ボール5号球使用
		11人制
		1回戦～準決勝の試合時間60分 決勝の試合時間80分
1989	第10回全日本女子サッカー選手権大会	ボール5号球使用
		11人制
		1回戦～準々決勝の試合時間60分 準決勝以降の試合時間80分
	第1回日本女子サッカーリーグ	ボール5号球使用
		11人制
		試合時間80分
1995	第7回日本女子サッカーリーグ	ボール5号球使用
		11人制
		試合時間90分

（出所）日本女子サッカーリーグ［1989・1992・1996］、大住・大原［2004］、高藤［2017］を 参考

次に、男性中心的な組織の具体例の二つ目として、リーグ名称を指摘することができる。男子サッカーは、日本サッカー協会と称するのに対して、女子サッカーは 1979 年女子サッカー連盟として JFA の傘下に設けられた。男子サッカーには、男性という性別にかかわる言葉が使用されていないが、女子サッカーには常に「女子」が付与され続ける。事情は英語表記でも同様である。リーグ発足時は、「Japan Ladies Soccer League」で、第 7 回リーグまで（1989 年～1995 年）使用された。1996 年から現在は「Japan Women's Football League」という表記が用いられているが、1994 年度の後期リーグから 2004 年度の前期までのリーグは「L リーグ（Ladies League）」という略称で呼ばれていた。これに対して男子サッカーは、「Japan Professional Football League」であり、性別に関する言葉は入っていない。日本語でも、英語でも、どちらも女性だけが有徴化されている。サッカーは男性サッカーと同様であるのに対して、女子がやるサッカーは「サッカー」とは別に「女子サッカー」と呼ばれ、サッカーと区別している[47]。

最後に、リーグ機関紙の大会プログラムの表紙に描かれる女性の姿を指摘できる。図 2−1 のように、1989 年には化粧している唇、1990 年から 1996 年までは全身（特に髪型・胸部・脚の細さと長さ）がエロティックなイメージで描かれるなど、過度に性的身体を強調した女子サッカー選手の絵が表紙を飾っている。これに対して、図 2−2 では、1997 年のものは、タフで、闘争的な表情が強調されている。また 2020 年のものは、競技中の現役選手の写真が表紙になっていた。これを見ると、少なくとも 1990 年代の半ばまで、女子サッカー選手の身体はいわばソフトポルノグラフィーの観を呈し[48]、そのエロティックなイメージが公に発信されていたことがわかる。

---

47 「lady は、woman の婉曲な言い回しだが、どうしてそのような婉曲な表現が用いられるかと言えば、尊厳や気高さといったものとは無縁と考えられている概念に、尊厳や気高さを付加することによって、丁寧な物言いとするためである。したがって、Cleaning lady とは言うが、lady doctor とは言わない」［小笠原, 1998：2-3］。また、近年、航空会社では、英語アナウンスで使用していた「Ladies and Gentleman」という呼びかけを廃止し、「Attention all passengers」・「皆様」と表現することになっている［BBC NEWS, 2020.09.29］。これらのことから、Lady という言葉には性差が含意しているのが見られる。さらに、Ladies and Gentleman ではなく passengers・皆様へと変化しているのには、性別二元論の超克が含意されてもいるとも言える。

48 森田［2009］によると、ソフトポルノグラフィーとは、「男性読者のヘテロセクシュアルな関心に取り入ったもの」という［森田, 2009：98］。その意味で、女子サッカー選手には「性愛化」の視点が反映されていると言える。森田［2009］が整理したメディアによる女性アスリートの描き方について補足すると、それには「幼児化・性愛化」「周縁化」「矮小化」という 3 点を軸があるという。第一は、女性アスリートの「幼児化」「性愛化」である。女性アスリートが「男性アスリートに比べて、ファーストネームで呼ぶ頻度が高い」点や、彼女らのスポーツパフォーマンスより外見やセクシーさが注目される点を問うている。第二は、女性アスリートとその業績の「周縁化」である。「男性アスリートに比べて、報道される量・時間が少ない」点と、「大きく報道される競技は『女性に適した』ものに偏っている」と指摘している。第三は女性アスリートとその業績の「矮小化」である。女性アスリートの業績を、さまざまなかたちで小さく見せる点を批判している［森田, 2009：95］。しかし、森田の「幼児化・性愛化」は、別の概念として捉える必要がある。本論文でいえは、発足時の女子サッカー競技規定は、女性への幼児化が表出されているが、性愛化は見られないからである。よって、本論文では、メディアにおける女性アスリートの描き方を、幼児化、性愛化、周縁化、矮小化という 4 点の軸で捉えようとした。

図２－１　日本女子サッカーリーグ・大会プログラムの表紙（1989 年～1996 年度）
［（出所）日本女子サッカーリーグ, 1989～1996］

図２－２　日本女子サッカーリーグ・大会プログラムの表紙（左、1997 年度）
／オフィシャルガイドブック（右、2020 年度）
［（出所）日本女子サッカーリーグ, 1997・2020］

以上、リーグ発足当時の女子サッカーは、男子サッカーとの差異化が図られ、競技規定が男子と異なっていた。また、女性の身体は、男性の身体より劣っているもの、サッカーに適していないものとみなされ、男性の性的眼差しに晒されていた。

２　第一期：1989 年～2003 年――1 部制

２－１　リーグの成長期と好況期：1989 年～1996 年

1989 年、リーグが創設された時点での加盟チームは 6 チームであった。それらを紹介すると、読売サッカークラブ女子・ベレーザ、田崎真珠神戸フットボールクラブ・レディース、日産 FC レディース、新光精工 FC クレール、プリマハム・FC・くノー、清水フットボールクラブである。その後、3 シーズン目を迎える 1991 年からは、4 チームがリーグに新加入することになり、計 10 チームがリーグ優勝を争うことになった。

リーグの成長期では、1992 年から下位リーグとして「JLSL チャレンジリーグ」が発足し、トップリーグと入れ替え戦がおこなわれた。また、リーグ形式も総当たり戦となった。翌年の 1993 年からは前期リーグ（第 1 節～第 9 節）と後期リーグ（第 10 節～第 18 節）に分けられ、それぞれのリーグでの優勝チームがリーグ優勝決定戦に挑戦できる形式が設けられた。

1994 年度の後期リーグからは、リーグの愛称が「L リーグ」と名付けられた。1993 年、男子のプロサッカーリーグが、その設立とともに J リーグという略称で呼ばれはじめた。この影響より、1989 年から 1994 年の上半期まで、リーグの略称として JLSL（Japan Ladies Soccer League）と呼ばれていた女子サッカーリーグが、1994 年度の後期リーグから「L リーグ」と呼ばれ始めた。そして、同年の 1994 年にはリーグ公式テーマソングが、翌年には加盟 10 チームのイメージソングも発表された［日本女子サッカーリーグ, 1996］。1995 年の第 7 回リーグからは、第 2 回 FIFA 女子世界選手権（スウェーデン）の試合時間に合わせて、リーグの試合時間も 80 分から 90 分となった［大住・大原, 2004］。

こうして、リーグは徐々に成長し、好況期とも呼べるほどの繁栄を見せた。そのため、この時期においては、「他の国のどの女子リーグよりも恵まれた報酬が得られる」として、「アメリカ、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、オーストラリア、中国などの主力クラスが続々と来日」［野田, 1995 : 10］し、リーグの競技力も高まっていった。さらに、1995 年には、女子代表が第 2 回 FIFA 女子世界選手権（スウェーデン）にてベスト 8 進出を果たし、1996 年の第 26 回アトランタオリンピック（アメリカ）から女子サッカーが正式種目として採用されることで、JAF やリーグ当局も女子代表をバックアップすることに力を注ぐようになった［日本女子サッカーリーグ, 1996］。その後、女子代表はアトランタオリンピック出場権を獲得したことより、女子サッカーがメディアでより多く取り上げられ、彼女らの試合がテレビで放送されるようになった［大住・大原, 2004］。加えて同年度に、初のリーグカップ戦である「OKI L リーグカップ 96」も開催された。

この時期の加盟チームは、大企業から資金を援助されるという、実業団チームとして活動するものがほとんどであった。多くのプロ選手や国から援助を受けるアマチュア選手もいた［輪田ら, 2012a ; Edwards, 2014］。当時のリーグや各チームは財政面においても豊かで、

選手がサッカーだけで生計を立てることができる世界唯一のリーグであった。それゆえ、世界各国からトップレベルの選手が日本に集まり、外国籍選手 30 人ほどが協会に登録されていた［田口, 2009］。この時期は、女子サッカー全体のレベルアップや日本サッカーの将来を担っているものとして、女子サッカーに興味のある人びとに期待をもたらした。

２－２　リーグの不況期：1997 年～2003 年

しかしながら、女子代表はアトランタオリンピックにて予選で敗退してしまった。その結果、そのオリンピックが始まる前の女子サッカーへの注目度は、一時的なものに過ぎず、女子サッカーブームを起こすことはできなかった。そのため、リーグ当局は、リーグと競技自体の認知度を上げるために、1997 年度のリーグからは、従来にも増して競技の発展を目指し、再跳躍しようとした。

ところが、この時期、日本はバブル崩壊により、女子サッカーにかかわっていた多くの企業が、経済危機に苦しんでいた。1998 年度の 1 シーズンのうちに、4 つの企業が女子サッカーチームの廃部を発表し、リーグから退会した。このことで、翌年度からリーグを開幕できるかどうかという、リーグ存続自体が危うくなった。こうした中で、リーグ当局は全国レベルの規模で、リーグを維持していくため、日本体育大学女子サッカー部（現、日体大 FIELDS 横浜）と浦和レイナス FC（現、浦和レッドダイヤモンズ・レディース）を加盟チームとして承認し、8 チームで開幕させた。しかしながら、再び 1999 年度に 3 つの企業チーム、松下電器パナソニックバンビーナ、OKI FC Winds、プリマハム・FC・くノーが退会した。そのうち、松下電器パナソニックバンビーナは、スペランツァ F.C.高槻というクラブチームへ移管してリーグに残り、同様にプリマハム・FC・くノーも、伊賀フットボールクラブくノーへ移管することでチームを存続させた。

だが、存続していた加盟チームであっても、豊かな財政で運営できていたわけではない。それらのチームも、経済的に厳しい運営をしつつ、リーグに残っていたのである。そのため、リーグ当局は「チーム数減少を食い止めるため、リーグへの参入基準を下げ、とにかくリーグに加盟してくれるチームを探すという姿勢で新加盟チームを募る方法をとり」［田口, 2009：12］、リーグ戦の形式や規定などを変更した。

たとえば、1999 年からは残された加盟チーム間で互いの戦力を均等に保つため、外国籍選手の登録を認めないという規定を定めた（図 2–3）［田口, 2009］。次に、2000 年からは、各チームの遠征費削減を目指して、東地域と西地域に分けて 1 次リーグを実施し、その結果によって決勝リーグと下位リーグに分けた上で、リーグ戦をおこなうことにした。また、有料試合から無料試合に変更することで、各チームの会場使用料の負担を減らし［輪田ら、2012a:21］、リーグの分担金も 735 万円から 150 万円へと引き下げた［読売新聞, 1999.11.12］。さらに、リーグ当局の規模も縮小させ、最小限の資源でリーグを運営し続けようとした。これらに加えて、加盟チームの運営体制の多様性を認めることで、とにかく財政能力のあるチームを、リーグに加盟させ、リーグを維持しようとした。こうした取り組みの結果、2003 年の第 13 回リーグでは、加盟チーム数を 1999 年の 8 チームより 13 チームに増やすことができたと考えられる。

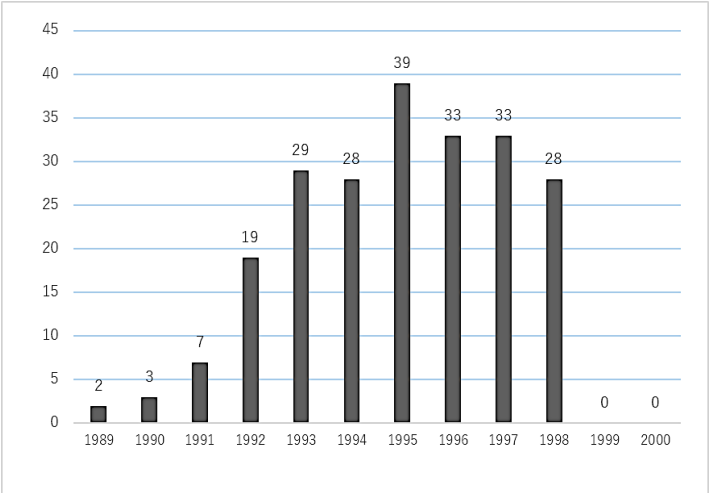


図２－３　外国籍選手の登録数の推移［(出所) 田口, 2009］

３　第二期：2004 年～2014 年――2 部制

こうした紆余曲折の中で、女子代表の国際大会での活躍は、女子サッカー界に明るい話題を提供してくれるものとして、女子サッカー関係者に期待されていた［日本女子サッカーリーグ, 2001］。ところで、女子代表は 1999 年の第 12 回 AFC 女子選手権（フィリピン）にてベスト 4 の成果を出した以外、同年にアメリカで開かれた第 3 回 FIFA 女子ワールドカップではグループリーグで敗退を喫し、また、2000 年の第 27 回シドニーオリンピック（オーストラリア）への出場権も獲得できなかった。2003 年の第 4 回 FIFA 女子ワールドカップ（アメリカ）でもグループリーグで敗退してしまい、女子サッカーへの認知度アップを図ることができなかった。ここで、リーグ当局は、女子サッカー界の活性化につながるよう、女子代表が好成績をあげることを願い、2004 年の第 16 回リーグから「L リーグ 1 部：L1」、「L リーグ 2 部：L2」と再編成し、2 部体制へとリーグ拡張をおこなった［鈴木, 2004（123）］。

こうしてリーグ当局は、リーグを拡張しつつ、女子サッカー界の新たな展開を目指した。L リーグというリーグの略称を「なでしこリーグ」という愛称に変更したのは、このときである。第 28 回アテネオリンピックの出場前、女子代表のメダル獲得への期待や応援の気持ちを込めて、女子代表に「なでしこジャパン[49]」という愛称が名付けられ［日本女子サッカーリーグ, 2004（130）］、女子サッカーと「女らしさ」は結びつけて演出されていた。それは、代表の選手たちがユニフォームではなく、着物を来て代表名の愛称を発表する姿からも見て取れる（図 2–4）。この「なでしこ」という言葉は、「日本女性特有の『諦めない／くじけない心』やナショナルな『らしさ』、ジェンダー的『らしさ』等を強調する過剰な欲望に基づく」［橋本, 2012：19］意味があることから、その名称は 2010 年のリーグから正式な名称として採択されるようになった。

49　女子代表は第 28 回アテネオリンピックの出場権を獲得できた。約 2,700 通の応募の中から「なでしこジャパン」という愛称が決定され、2004 年 7 月 7 日に日本サッカー協会にて女子代表の愛称発表がおこなわれた［日本女子サッカーリーグ, 2004（130）：5］。

このように、リーグ当局は、女子選手をジェンダーステレオタイプに適合させることで、女子サッカー業界を盛り上げようとした。つまり、メディアを通して、彼女らの「なでしこ」というピッチ外での「女らしい」姿と、ピッチ上でのサッカー選手としての姿（図 2−5）を対照的に発することで、そこから生み出されたジェンダー・ギャップを売りにして、人びとの耳目を集めようとしたのである。

図２－４　女子日本代表の愛称「なでしこジャパン」の発表会見
［（出所）時事通信社, 2004.07.07］

図２－５　ピッチ上で球を奪い合う女子日本代表（澤穂希選手）の姿

［（出所）JBpress, 2010.06.08］

それから、女子サッカーが正式種目となった 1996 年アトランタオリンピック以来、初めて女子代表が予選を突破し、ベスト 8 進出も果たす中で、フェアプレー賞も受賞した。「この活躍により、再び国内で女子サッカーの人気が高まりを見せた」［日本サッカー協会, 2011（328）：15］ことから、同年の 9 月にはリーグの愛称がなでしこリーグに決定された。それ以来、日本の女子サッカーリーグはなでしこリーグと呼ばれるようになった。

その後、2006 年の第 18 回リーグでは、リーグのオフィシャルスポンサーが株式会社モックへと変わり、新しく 3 年契約が結ばれた。既存の L リーグ 1 部は「Division1」に、L リーグ 2 部は「Division2」に再編成された。リーグ当局は、これを通して各チームの優勝争いを激化させ、また、女子サッカー界の成長につなげるという目的を設定した。ところが、モックは契約期間 3 年を途中で打ち切り、2 年でオフィシャルスポンサーから撤退した。翌年度からは、新しく株式会社プレナス（Plenus）がオフィシャルスポンサーに決まり、「プレナスなでしこリーグ」が始まった。

そして、女子代表が 2008 年第 29 回北京オリンピック（中国）において、過去最高 4 位となり、女子代表の記念品が作られるほど、女子サッカーは人びとの期待を集めるようになった［読売新聞, 2008.09.12］。このこともあって、同年の 11 月、リーグの総務主事により 2009 年から 5 か年計画で進める「リーグ改革」が以下の内容で発表された。「1・2 部各 8 クラブのリーグを、2013 年にはトップリーグの『なでしこ』（12 クラブ）と、『チャレンジ』（東西計 16 クラブ）に拡充……『なでしこ』と『チャレンジ』、地域リーグの間で入れ替え戦を行い、ピラミッド型の組織を明確にすることで競技力の向上を目指す。また、リーグや加盟全チームの法人化、なでしこリーグ全試合を有料化する」［読売新聞, 2008.11.08］。これは、「①女子サッカーの競技力向上、②リーグ運営力強化、③女子サッカーの普及活動」［輪田ら, 2012a：23］など、女子代表の活躍につれ、さらなる女子サッカーの発展とリーグの充実を目指すための改革であった。

こうして 2010 年から、リーグ 1 部は Division1 から「なでしこリーグ」に変わり、10 チームで構成された。2 部の方は 12 チームの構成で Division2 から「チャレンジリーグ（EAST／WEST）」に変更となり、全体的にリーグ改革が進んだ［読売新聞, 2010.01.22］。とくに、リーグ当局は、チャレンジリーグではトップレベルに相応する私立高校や私立大学が加盟できるように、加盟基準を設け、トップリーグと地域リーグを連携させようとした［輪田ら, 2012a：21-23］。さらに、2011 年 4 月 1 日より、リーグ運営力強化のため、任意団体であった女子サッカー組織を一般社団法人へ移行した［読売新聞, 2011.03.03；輪田ら, 2012a］。

そして 2012 年に入ると、リーグ当局の新事業が打ち出された。それはチームスタッフ雇用助成事業を実施し、なでしこリーグに所属する 10 チームへ 200 万円を援助するというものであった。この狙いは、チームが選手をスタッフとして雇用して、選手が女子サッカーの普及やチームの活動に専念できるようにすることであった。さらに、リーグの優勝チームに限って 500 万円の補償金が支給されていたが、2012 年のシーズンから 2 位のチームにも 300 万円、3 位のチームにも 100 万円の賞金が支払われることとなった［読売新聞, 2012.03.23］。また、新人セミナーも開かれ、「マナーや望ましい取材対応、食育、ケガや結婚など転機へ

の対処法」の講義もおこなわれた［読売新聞, 2012.05.24］。このように、女子サッカー選手は、サッカー選手であると同時に「女らしさ」を身につける教育を受けるなど、サッカー以外の場においては女性であることが要請されてきた。

その後、リーグ当局は、2013 年のチャレンジリーグの加盟チーム数を 16 チームへと増加させた。また、2014 年の第 26 回なでしこリーグにおいて、各チームが終盤まで優勝争いをおこなうよう、「スプリット（分割）[50]」方式に変えることを発表した［読売新聞, 2013.11.13］。それと同時に、「U-15 なでしこアカデミーカップ」も開催し始め、選手の育成へさらに力を入れようとした。このように、リーグ当局は女子サッカーの普及と発展を目指すということで、リーグの加盟チーム枠を増やしていった（表 2-3）。

そうした中、女子代表が 2011 年第 6 回 FIFA 女子ワールドカップ（ドイツ）において初優勝したことで、メディアでは女子サッカーが多く取り上げられ、国内での女子サッカーへの認知度が高まった。彼女らの好成績は、日本政府により「初優勝という偉業を成し遂げ、最後まで諦めないひたむきな姿勢によって、国民にさわやかな感動と、困難に立ち向かう勇気を与えることに顕著な業績があった」［日本サッカー協会, 2011（329）：14］と評価され、国民栄誉賞を受賞することになった。それに加えて、女子代表は、再び 2012 年の第 30 回ロンドンオリンピック（イギリス）にて銀メダルを獲得した。また、2013 年 EAFF 女子東アジアカップ（韓国）にて 2 位となり、2014 年第 17 回アジア大会（韓国）にて準優勝の成果を上げた[51]。

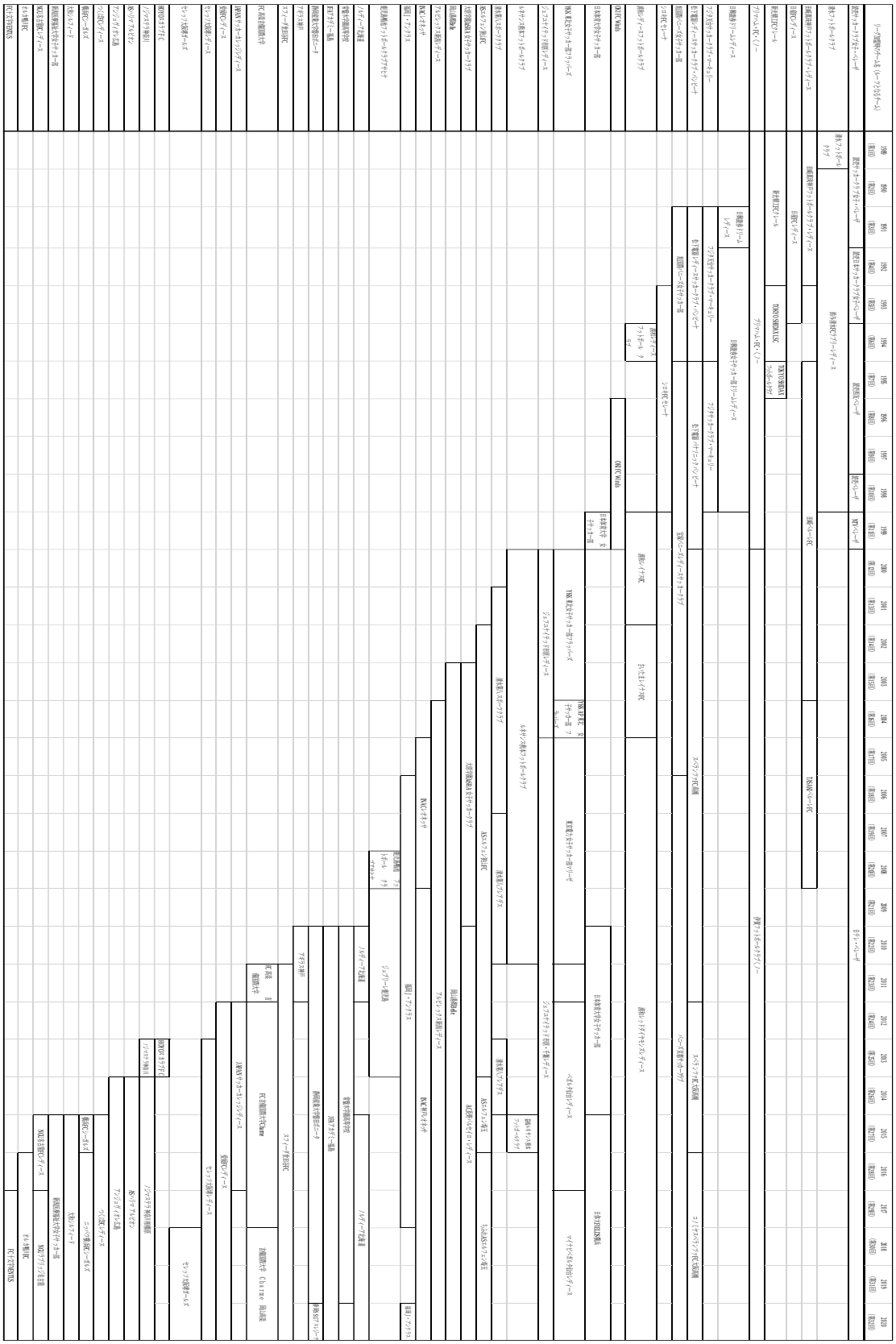
このような女子代表の活躍の影響により、リーグ自体を後援する大企業や各チームを援助する地元の企業が増加した。ゆえに、リーグ当局は、リーグ予算が例年より倍増したことを契機にして、新たな事業計画を構想し始めた［読売新聞, 2011.09.17・2011.10.15］。

---

50 「新方式は、10 チームの 2 回総当たりによるレギュラーシリーズ（RS、仮称）を行い、上位 6 チームが 2 回総当たりの『エキサイティング・シリーズ（仮称）』を戦って年間優勝を決める。下位 4 チームも同様の対戦方式で残留を争う。リーグ杯は廃止される」［読売新聞, 2013.11.13 より引用］。

51 女子代表が 2015 年の第 7 回 FIFA 女子ワールドカップ（カナダ）にて準優勝という再び好成績をあげた。この大会まで 3 大会連続、決勝に進んだ女子代表によって、女子サッカーは、将来性の高い競技として人びとの注目を浴びるようになった。また、女子代表が 2016 年の第 31 回リオデジャネイロオリンピック（ブラジル）への出場権を逃してしまったことで、女子代表のマンネリ化や実力不足について、メディアで取り上げられたこともあった［Cycle, 2016.03.10；Sportiva web, 2018.04.06］。その後、女子代表は 2018 年のアジアカップ（ヨルダン）にて優勝を果たした。また、2019 年開催された第 8 回 FIFA 女子ワールドカップ（フランス）では、ラウンド 16 まで進出することができた。これらのことで、低迷しているように見えた女子サッカー界に、改めて希望を持つ声が多くなっている。

表２－３　リーグの加盟チームについて（輪田ら［2012a］を参考に筆者作成）



４　第三期：2015 年～2020 年――3 部制

次いで、再びリーグ当局は、既存のリーグ体制を 2015 年シーズンより 3 部制に拡張することを発表した［読売新聞, 2014.03.18］。つまり、なでしこリーグ 1 部・2 部、チャレンジリーグといった 3 部制にリーグ体制を改革し、なでしこ 1・2 部は 10 チームずつ、チャレンジリーグは EAST／WEST 各 6 チームにして、計 32 チームがリーグに加盟できるように計画した（表 2–4、図 2–6）。なお、「1 部には普及を含めてサッカー活動に専念できる選手が 3 人以上いることを義務づけ、試合や練習時のケガの治療費をチームが負担し、15 歳以下のアカデミーチームを保有することなど」［産経スポーツ, 2014.03.18］、新たにガイドラインも策定した。リーグ体制それ自体は、J リーグと同じく 3 部体制で運営されている。

表２－４　リーグの加盟チーム数

年度	回数	チーム数
↓1部制		
1989～1990	第1回	6
1990～1991	第2回	6
1991～1992	第3回	10
1992	第4回	10
1993	第5回	10
1994	第6回	10
1995	第7回	10
1996	第8回	10
1997	第9回	10
1998	第10回	10
1999	第11回	8
2000	第12回	9
2001	第13回	10
2002	第14回	11
2003	第15回	13

年度	回数	チーム数
↓2部制		
2004	第16回	L1:8
		L2:6
2005	第17回	L1:8
		L2:7
2006	第18回	D1:8
		D2:8
2007	第19回	D1:8
		D2:8
2008	第20回	D1:8
		D2:9
2009	第21回	D1:8
		D2:8
2010	第22回	な:10
		チャ:12
2011	第23回	な:9
		チャ:12
2012	第24回	な:10
		チャ:12
2013	第25回	な:10
		チャ:16
2014	第26回	な:10
		チャ:16

年度	回数	チーム数
↓3部制		
2015	第27回	な1:10
		な2:10
		チャ:12
2016	第28回	な1:10
		な2:10
		チャ:12
2017	第29回	な1:10
		な2:10
		チャ:12
2018	第30回	な1:10
		な2:10
		チャ:12
2019	第31回	な1:10
		な2:10
		チャ:12
2020	第32回	な1:10
		な2:10
		チャ:12

・L1：Lリーグ1部　・な：なでしこリーグ
・L2：Lリーグ2部　・な1：なでしこリーグ1部
・D1：Division1　・な2：なでしこリーグ2部
・D2：Division2　・チャ：チャレンジリーグ

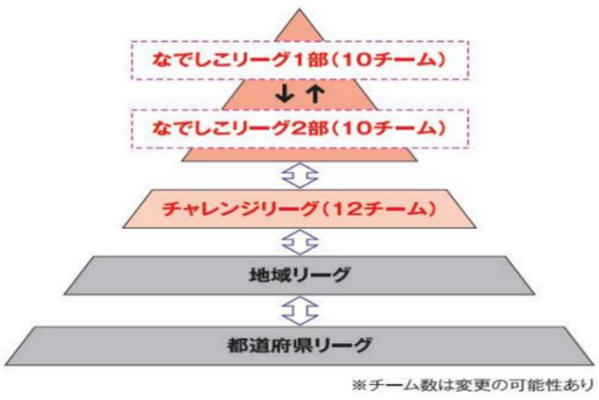


図２－６　2015 年以降 リーグ構造［（出所）日本女子サッカーリーグ, 2014］

５　第四期：2021 年～――初のプロリーグの誕生に向けて

2020 年 6 月 3 日、2021 年秋（9 月）より「WE リーグ（Women Empowerment League）」という名称で日本の女子プロサッカーリーグの設立が発表された［日本経済新聞, 2020.06.11］。既存のなでしこリーグ 1・2 部と地域リーグを維持しながらプロリーグも並行することになる（図 2–7）［日刊スポーツ, 2019.11.04；産経スポーツ, 2019.11.04］。初のプロリーグには、計 11 チームの入会が承認されている[52]。

そして、WE リーグの理念は「女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する」ことである。それらを実現するために、以下をリーグの各クラブの特徴として設定されている［WE リーグホームページ］。

・運営にあたる法人を構成する役職員の 50%以上を女性とする。
・意思決定に関わる者のうち、少なくとも 1 人は女性とすること。
（取締役以上が望ましい）
・プロ A 契約選手 5 名以上およびプロ B・C 契約選手［最低年俸 270 万円（消費税別）］10 名以上と契約を締結すること。
・監督は JFA･S 級（または S 級相当）、JFA・A-Pro の指導者資格を有する者。もしくは S 級資格取得講習会を受講中の者（ただし、女性に限る）。
・U-18、U-15、U-12 チームを保有すること。（ただし、U-18 チームの保有は入会より 3 年以内。U-12 についてはスクールまたはクリニックで代替可）

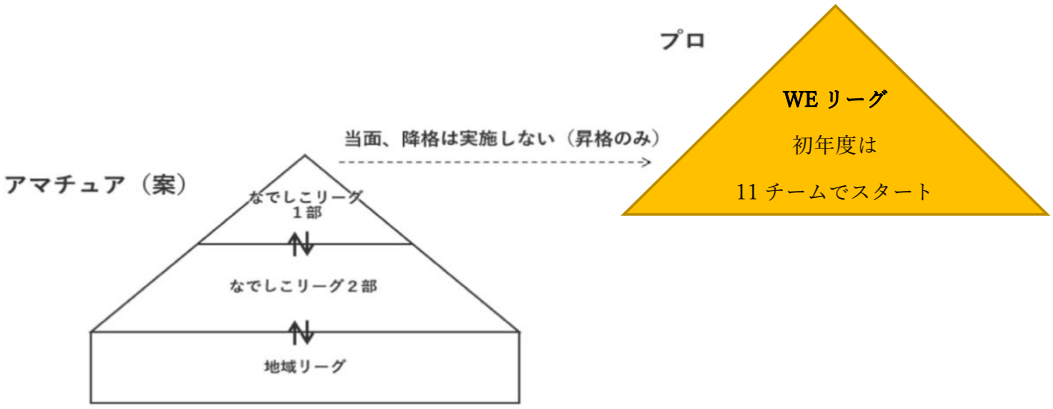


図２－７　2021 年以降の WE リーグの構造［（出所）WE リーグホームページ］

52 なでしこリーグからの参入は 9 チームで（略称で表記：仙台市のマイナビ仙台、さいたま市の浦和レッズ、埼玉県飯能市のちふれエルフェン埼玉、千葉市のジェフ千葉、東京稲城市の日テレ・ベレーザ、神奈川県相模原市のノジマステラ神奈川相模原、長野市の長野パルセイロ、新潟県聖籠町のアルビレックス新潟、神戸市の INAC 神戸レオネッサ）、新規参入は 2 チーム（さいたま市の大宮アルディージャ、広島市のサンフレッチェ広島）である［日刊スポーツ, 2020.10.15］。

このように、WE リーグの設立によって、女子プロサッカー選手という職業の確立や、女子サッカー関係者の人びとが意思決定に関わり、運営の主体として活動すること、女性がサッカーを通じて社会で活躍することが期待されている（表 2−5）。こうした初の女子プロサッカーリーグは今後どのように発展していくか、多くの人びとの注目を浴びている。これより、サッカーに参加する女性たちが、性別に関係なく夢を目指し、自分らしくサッカーを実践していくことが期待されている［朝日新聞, 2020.12.09］。

表２－５　一般社団法人日本女子プロサッカーリーグ理事会（2021 年 2 月 5 日）

役　　職	氏　　名	所　　属
理事長（チェア）	岡島 喜久子＊	（一社）日本女子プロサッカーリーグ
副理事長	岩上 和道	（公財）日本サッカー協会副会長、 （一社）日本女子サッカーリーグ理事長
理事	今井 純子＊	（公財）日本サッカー協会理事・女子委員長、 アジアサッカー連盟女子委員会委員、 （公財）日本スポーツ協会理事
	佐々木 則夫	（公財）日本サッカー協会理事、十文字学園女子大学副学長、 大宮アルディージャトータルアドバイザー　他
	手塚 貴子＊	（公財）日本サッカー協会理事・女子委員会副委員長
	大内 智重子（新任）＊	(株)電通執行役員、（一社）日本女子サッカーリーグ理事
	大江 修子（新任）＊	TMI総合法律事務所パートナー弁護士
	奥田 泰久（新任）	（公財）日本サッカー協会職員、 （一社）日本女子サッカーリーグ専務理事
	小林 美由紀（新任）＊	（一社）日本女子プロサッカーリーグ、 （公財）日本サッカー協会女子委員会委員、 （一社）全日本大学女子サッカー連盟理事 他
	佐伯 夕利子（新任）＊	（公社）日本プロサッカーリーグ理事
	播戸 竜二（新任）	（公財）日本サッカー協会アスリート委員会委員・SDGs推進チームメンバー、（公社）日本プロサッカーリーグ特任理事、 株式会社MR12代表取締役
	村松 邦子（新任）＊	株式会社ウェルネス・システム研究所代表取締役、 （公社）日本プロサッカーリーグ参与、 九州旅客鉄道株式会社社外取締役 他
	矢野 喬子（新任）＊	帝京平成大学女子サッカー部監督
	山岸 佐知子（新任）＊	（公財）日本サッカー協会理事・審判委員会女子部会長・リスペクトフェアプレー委員長、FIFA Referee Instructor、　AFC Referee Instructor
	立花 洋一（新任）	浦和レッドダイヤモンズ（株）代表取締役社長
	安本 卓史（新任）	（株）アイナックコーポレーション取締役社長
監事	須永 功	永和総合事務所代表税理士、（一社）日本女子サッカーリーグ監事 、（一社）日本フットボールリーグ監事 他
	町並 美保（新任）＊	永和総合事務所税理士、（公財）日本バスケットボール協会財務会委員、（独）日本スポーツ振興センター スポーツ振興事業助成審査委員会事業助成評価ワーキンググループ委員 他
計：18名（男性7名、女性11名）　男女比：男性38.8／女性61.2		

（注）＊は女性役員　（出所）WEリーグHP

6 小 括

第 2 章では、日本の女子サッカーリーグの変遷過程をたどるためにリーグ当局が実行してきた事業内容を中心に検討し、その運営方式を解明した。まず、前章で見た女子サッカーという競技自体の固有性が、日本ではどのような形で具体的に表れているかについて検討した。その結果、日本においてサッカーは、「男らしいスポーツ」として周知され、発展してきたことが確認できた。サッカーに参加した女性の身体は、男性の身体より劣っているもの、サッカーに適していないもの、男性の性的対象として見なされ、ジェンダー・バイアスの強化が長らくおこなわれてきた。そして、リーグ当局は、女子サッカーに「なでしこリーグ」「なでしこジャパン」のような「女らしい女子サッカー選手」というイメージを付与し、サッカー選手とのジェンダー・ギャップを売りにして人びとの耳目を集め、女子選手を活用して女子サッカー業界を盛り上げようとすることも見られた。これは Ho［2014］が述べたように、サッカーは男らしさが強調される競技であるからこそ、メディアでは女子サッカーにおいてジェンダー化を推進、強化しようとしていることに他ならない。

さらに、本章では、女子サッカーは、1998 年度の 1 シーズンのうちに 4 つの企業チームが、1999 年度に 3 つの企業チームが廃部を発表したように、社会や企業の経済的状況によってチームの存続が左右されやすく、1997~2003 年の間は、リーグの存続が危うい状況にまで至った。しかし、リーグ当局は全国レベルの女子サッカーリーグを維持するため、様々な取り組みをおこない、その結果、リーグの存続危機からは逃れた。そうした中で、リーグに加盟するチームが増加するとともに、リーグ当局は、女子サッカーの普及と選手の育成、代表強化などを目的にして、リーグをめぐる様々な事業を進め、リーグ体制は再編成されてきた。そして、2021 年の秋からは、初の女子プロサッカーリーグが開幕する。

しかし、ここまで検討してきた結果、リーグ体制はすべてトップダウン方式で再編成され続けてきたことがわかる。つまりリーグ当局が、女子代表の大会結果とリーグ自体の予算に依存しながら、リーグを拡張したり再編成したりする方法で、リーグ運営に努めているのである。このように、女子サッカーは、競技面と財政面で脆弱な基盤しか持ち得ない状況にあることが明らかになった。

第３章　チーム運営の実態と選手の競技実践形態

ここでは、第 1 章と第 2 章を踏まえながら、新聞記事やリーグの機関紙などを用いて、リーグに加盟した女子サッカーチームの財政的困難さ、それによる選手の不安定な生活について検討する。チームの運営難によって選手の競技実践形態がどのように形成され、また、その中で選手たちはどのような経験をしているかを明らかにする。このことによって、女子サッカーにおける労働市場の現状を解明する。

１　チーム内部の財政的困難について

女子代表はワールドカップ優勝という結果を出しており、リーグ自体も拡張されている。外部からみると、日本の女子サッカー界は全体的に成長しているように見える。だが、現場で浮上している女子サッカーの課題は、大きく二つある。第一に、女子チームの資金不足、第二に女子選手の生活上の経済的困難である。これらについては、女子代表が 2011 年 FIFA 女子ワールドカップで優勝を果たした後、メディアによって多く取り上げられているが、ここからはより具体的に事例を挙げて論じてみたい。現場では、なぜ経済的に不安定な状況が続いているのだろうか。チームと選手が抱える経済的困難はどのようなものかを検討する。

１－１　チームの資金不足の実態

日本女子サッカーにおいて、チームの資金不足は、第一に企業チームの廃部、第二に支援企業による支援打ち切りと支援企業の不在、によって生じている。当然のことながら、チームの運営難は、選手の生活を不安定にさせる。それは競技環境悪化と収入面での不安を生み出す。なお、ここでいう「企業チーム」とは、一社の企業によりチームの活動に必要な運営費及びスタッフと選手への人件費など、チームの全財政を巨額で支援されているチームを指す。他方で、女子サッカーにおける「クラブチーム」とは、それらの費用を多数の企業から小額を集めてギリギリで運営し、選手全員には人件費を支払えない状況にあるチームをいう。

それでは、まず、現場の経済的困難に関して、第一の企業チームの廃部の側面から確認しよう。1993 年、日産 FC レディースは親会社にあたる日産自動車の業績悪化を理由に、チーム廃部及びリーグ退会を表明した［朝日新聞, 1993.12.16］。次いで 1998 年リーグを限りに、経費削減を理由に日興證券女子サッカー部ドリームレディース、フジタサッカークラブ・マーキュリー、シロキ FC セレーナ、鈴与清水 FC ラブリーレディース」がリーグから撤回し、各チームは廃止された［朝日新聞, 1998.10.04］。また、OKI FC Winds も経済的不況の影響で 1999 年を限りにリーグを退会した［日本女子サッカーリーグ, 2000(77)］。2008 年には、女子サッカー日本代表の選手も所属するほどの名門チームである TASAKI ペルーレ FC が、母体企業の深刻な業績悪化によって休部となり、リーグを退会することを表明した［朝日新聞, 2008.10.11］。このように、企業は、経済不況による業務悪化の改善のために、女子サッカー部を廃部することを選択しているのがわかる。

第二は、支援打ち切りと支援企業の不在である。たとえば、2000 年からプリマハム・FC・くノーや松下電器パナソニックバンビーナという企業チームが、クラブチームへ移管した事例がある。プリマハム・FC・くノーは、親会社のプリマの撤退で廃部となり、伊賀フットボールクラブくノーというチーム名でクラブチームとして再出発せざるを得なかった。母体企業のプリマ側は「練習場のほか、クラブハウス、寮の継続使用を期限付きで認め」たが、それでも移管したチーム自体の運営のメドは立っていなかったという［読売新聞, 2000.01.26］。

また、松下電器パナソニックバンビーナは、女子サッカーチームの年間 7 千万円以上の運営費が、母体企業の経費削減の対象になったため、結局のところ廃部となってしまった。そこで、松下電器パナソニックバンビーナは、クラブチームスペランツァ FC 高槻（現、コノミヤスペランツァ FC 大阪高槻）に移管せざるを得なかった。選手の会費と、地元・協会が中心になって小口の後援会員を募って寄付金で、チームを運営することになった［朝日新聞, 2000.08.02］。

1995 年度からリーグに加盟していた宝塚バニーズレディースサッカークラブは、選手全員をプロ選手として雇用していた企業チームであった。だが、チームの母体企業は、1999 年から選手に仕事を課さざるを得なくなった。よって、このチームの選手たちは夕方まで働いてから、練習をするという日々を過ごさなければならなくなった［朝日新聞, 1999.10.06］。

それから、元々クラブチームからスタートしたチームも、支援企業の不在で苦労している。たとえば、岡山湯郷 Belle は、メイン支援企業の不況により、年間収入約 1 千万円の減収となった。チームでは、運営難を乗り越えるために「ホームゲームで無料配布するプログラムを印刷業者に依頼していたが、スタッフの手作りにするなど」の運営経費の削減に努めつつ、後援会の入会会員募集と支援企業募集に働きかけざるを得なくなったという［読売新聞, 2009.05.13］。

さらに、2015 年 7 月になでしこリーグに所属するスペランツァ大阪高槻は、元支援企業の破産の影響で、同年 12 月までの財政が 3 千万円不足しているとメディアを通して発表した。「選手や監督、スタッフへの報酬金が約 2 カ月未払いになっており、資金が集まらなければリーグ撤退の可能性もある」と、支援企業、地元の人びとに危機状況を知らせて後援を呼び求めた［朝日新聞, 2015.07.31］。このように、他の競技種目に比べて女子サッカーの場合は、トップの女子サッカーチームでさえ、母体企業の経済的事情によって経費削減されやすく、廃部されやすい対象になっていると言える（表 3−1）。

表３－１　撤退した主な企業スポーツチーム（1998 年以降）

競技名	チーム・企業名（カッコ内は理由、その後の形態）
社会人野球	東芝府中（本社チームと一本化）
ラグビー	日新製鋼（社会人リーグより撤退）
陸上	神戸製鋼所（成績低迷で合理化）
	ニコニコドー（経費削減の一環）
	東邦生命保険（米社と合併、業務再編）
アイスホッケー	古河電工（経費削減の一環「日光バックス」へ）
卓球	武田薬品湘南（不況の影響、選手補強難）
	松下電器（リストラの一環）
バレーボール	小田急電鉄（経費削減の一環）
バスケットボール	ジャパンエナジー（女子チームに活動限定）
	住友金属工業（選手セミプロ化に慎重）
	NKK（収益改善策の一環）
	大和証券（男女）
テニス	日本生命（日本リーグ傘下の辞退）
アメリカンフットボール	東海銀行（事業リストラの一環）
	住友銀行（事業リストラの一環）
女子サッカー	フジタサッカークラブ・マーキュリー（経費削減の一環）
	鈴与清水FCラブリーレディース（経費削減の一環）
	OKI FC Winds（経費削減の一環）
	松下電器パナソニックバンビーナ（経費削減の一環、「クラブチーム」へ）
	プリマハム・FC・くノー（経費削減の一環、「クラブチーム」へ）
	日興證券女子サッカー部ドリームレディース（経費削減の一環）
	シロキFCセレーナ（経費削減の一環）

*［日本女子サッカーリーグ, 2000：3］を参考に筆者加筆。

１－２　不安定な選手の競技活動

こうしたチームの運営難は、選手の生活上の不安定さにつながっている。それは、選手の競技環境と収入面に現れる。なぜならチームが廃部されると、選手は移籍先を探さなければならず、移籍先が見つからないと競技活動を中止することになり、選手としてのキャリアも断絶されるからである。

この例として、吉泉愛選手を紹介する［朝日新聞, 1999.04.09］。彼女は、移籍したチームが続々と廃部になるという経験した。吉泉選手が、最初に入団したチームは、日産 FC レディースであった。その後、TOKYO SHIDAX LSC に移ったが、2 年後に廃部となった。そのため、フジタサッカークラブ・マーキュリーに移ったが、このチームも 1998 年のリーグ後に解散となった。不安定な競技活動を経験した吉泉選手は、結局、リーグの加盟チームに所属し活動したいというこだわりを捨てることを選び、地域リーグで活動することにしたという。また、目時選手も吉泉選手と同様に、最初に入団したチームは、日産 FC レディースであり、同じくフジタサッカークラブ・マーキュリーに移籍したが、このチームも廃部になってしまった。結局、目時選手は、リーグの加盟チームに残ることを選択し、もう一度浦和レイナス FC に移籍した［朝日新聞, 1999.10.06］。

このように、吉泉選手と目時選手は、相次ぐ所属チームの廃部に直面した。彼女らは、常に競技活動ができるかどうか、不安を感じながらサッカーをしていたことがわかる。たとえば、吉泉選手が「あと 1 年プレーできたら、もっと力を出せたのに」［朝日新聞, 1999.04.09］と語っているように、チームの廃部というのは、選手にとって競技力向上を妨げられると同時に、サッカーキャリアを中断させる要因となっていた[53]。

なお、この二人の選手は、移籍と同時にプロ選手からアマチュア選手に逆戻りしたため、突然生活パターンが変化し、サッカーだけでは収入を得ることができなくなった。生活費を稼ぎながら、サッカーをしなければならなくなったのである。他方で、太田麻紀選手が「選手として採ってくれるチームがあれば、アルバイトでも何でもするつもりだ」［朝日新聞, 1996.03.18］と語っているように、選手たちは別の仕事をしてでも、サッカーを続けようとしていることがわかる。彼女らは何とかしてでも、サッカーを続けようとした。しかし、選手たちがサッカーに関係のある仕事に就くことは、現実的ではなかった。そのため、多くの選手がスーパー、教員、ホテル、工場、喫茶店、スポーツジム、本屋などで仕事をしながらサッカー選手を続けていた。

しかし、ここで見逃してはならないのは、選手たちは、働きながらサッカーの実力も伸ばさなければならないという点である。選手は、収入を増やしたいならば、1 日の時間は限られているため、練習時間を減らさなければならなかった。逆に、選手が練習時間を増やしたいならば、働く時間を少なくしなければならない[54]。伊賀フットボールクラブくノ一では、選手の要望でチームの練習開始を 1 時間早めた。だが、選手たちは練習のために仕事の時間を削るしかなく、収入の減少を受け入れざるをえなかった［朝日新聞, 2008.04.12］。

さらに、収入も練習時間もいずれも確保したければ、朝早くから仕事をはじめるしかなかった。たとえば、生活費と練習時間、両方をなるべく多く確保するために、朝 6 時半からコンビニエンスストアでアルバイトをする選手もいた［朝日新聞, 2000.08.02］。しかしながら、こうした日々は、肉体的疲労となって蓄積し、結果として選手の競技環境を悪化させ、生活上の不安を増すものであった。セミプロ選手[55]になれないアマチュア選手たちは、サッカーを取るべきか、生活費を稼ぐべきかという選択に迫られることになる。選手は、このような不安を抱えながら生活せざるをえないのである。

以上のように、母体企業の経済的困難は、チームの廃部、支援の打ち切り、選手の移籍、セミプロ選手からアマチュア選手への逆戻りにつながった。これより、プロ選手として契約できる財政がないチームでは、サッカーを続けたいなら、選手は別の仕事と掛け持ちをするしかなく、ほとんどの選手がそれを選択した。こうした現状は、表 3–2 から確認できるように、代表レベルの選手でも見られる。これは、2011 年の第 6 回 FIFA 女子ワールドカップ

53 1998 年に廃部となった日興證券女子サッカー部ドリームレディース所属の大松真由美選手は、移籍先の受け皿が少ない点に言及し、選手のキャリアが途切れてしまう恐れがある点を不安がっていた［朝日新聞, 1998.11.05］。

54 稼ぐのを選択するより、サッカーのために午後 2 時まで働いてから練習に参加する選手もいた［朝日新聞, 1999.04.09・1999.10.06］。

55 「セミプロ選手」とは「スポーツで、職業選手でないのに、それに準じた身分・待遇などを受けている選手」を指す［スーパー大辞林より引用］。

（ドイツ）で優勝して以来、現在（2020 年）も続いている［NEWS ポストセブン, 2015.07.09］。すなわち、女子サッカーには経済的困難がつきまとい、この状況の中で、競技がおこなわれているのである。

表３－２　女子サッカー日本代表選手の職業（2004 アテネ五輪）

ポジション	氏名（年齢）	所属チーム	職種
GK	山郷のぞみ（29）	さいたまレイナスFC	高校職員
	小野寺志保（30）	日テレ・ベレーザ	ヴェルディアルバイト
DF	大部由美（29）	YKK 東北女子サッカー部フラッパーズ	YKK勤務
	磯崎浩美（28）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	宮崎有香（20）	伊賀フットボールクラブくノ一	天理大学3年
	山岸靖代（24）	伊賀フットボールクラブくノ一	プリマハム準社員
	矢野喬子（19）	大学チーム	神奈川大学2年
	下小鶴綾（21）	スペランツァFC高槻	関西大学4年
MF	酒井與惠（25）	日テレ・ベレーザ	ヴェルディアルバイト
	小林弥生（22）	日テレ・ベレーザ	接骨院アルバイト
	安藤梢（21）	さいたまレイナスFC	筑波大学4年
	川上直子（26）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	山本絵美（22）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	柳田美幸（23）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	宮本ともみ（25）	伊賀フットボールクラブくノ一	専業主婦
FW	荒川恵理子（24）	日テレ・ベレーザ	スーパーアルバイト
	永里優季（16）	日テレ・ベレーザ	高校2年生
	丸山桂里奈（21）	大学チーム	日本体育大学4年
	大谷未央（25）	TASAKIペルーレFC	田崎真珠社員
	澤穂希（25）	日テレ・ベレーザ	プロ契約

（出所）朝日新聞［2004.05.24］

２　チームの選手獲得困難と選手の競技実践形態の複数化

ここまで述べてきたように、女子サッカーの現場をめぐって特化しているのは、財政面の困難である。こうした現場の課題を念頭に入れた上で、リーグ拡張が現場にとってどのような意味を持つのか、リーグ拡張とチームの運営難との関係性を探ってみたい。

リーグ拡張が始まった時期は、リーグの不況期以降である。不況期当時のリーグ当局は、リーグへ加盟してくれるチームを募集しつつ、費用をかけないリーグ運営に努めていた［日本女子サッカーリーグ, 1998：3］。そうした緊縮策の結果、2003 年までに 13 チームを加盟

チームとして確保できた。その上で、2004 年には 1 チームが追加となり、8 と 6 チーム、2 部に分けてリーグを開幕することが可能になった。

ところが、加盟チームの量的な増加が見られるとはいえ、それがチームの運営面での安定を表しているとは言えない。むしろ、不況期に残ることができた企業チームらは、相次いで廃部されていく他チームの様子を見てきた。そのため、企業の間では、女子サッカーへの後援が企業の経済的危機へつながる恐れがあるという噂が立ち、企業からの支援金が削減される場合もあった［東明ほか, 2003］。企業チームがほとんど撤退している現在、多くのチームは指定の企業による巨額の資金ではなく、小規模の地元企業や自治体、人びとの後援金により、チームを経営している。「リーグの不況期」において、リーグ自体は存続の危機を克服しているように考えられるものの、チーム自体の運営難は続いているのである。それを表しているのは、2015 年、なでしこリーグ 1 部所属のスペランツァ大阪高槻が、メディアを通して資金援助を支援企業に求めた事例である［日本経済新聞, 2015.07.30］。このように、女子サッカー界において、名門と言われるチームでさえ運営難に陥っているのが現実である。

それでは、なぜ女子サッカー界で、リーグ体制が大きく拡張されているにもかかわらず、チームの運営難は改善されず、逆に悪化してしまったのだろうか。

周知の通り、リーグが拡張されると、以前より多くのチームがリーグに加盟することになる。それによってチーム相互の優勝争いが激しくなり、ひとつのチームがおこなう試合数が増える。そして、それらは、チームの運営費がいっそうかかるということを意味する。なぜなら、ホーム試合での観客やサポートによる収入はほとんどない中で、試合のための経費だけが増えることになるからである（表 3-3）。

それゆえに、リーグ拡張（表 3-4）というのは、各チームに競技力向上・維持への負担と財政確保への負担を背負わせることになると考えられる。財政が豊富であれば、多くのトップ選手とプロ契約を結ぶことで、チームの競技力を向上することが可能になる。だが、女子サッカーの場合は、チームの財政それ自体が不足しているため、プロ選手を獲得することが厳しい。多くのアマチュア選手を中心に現在の競技力を維持することすら難しい中で、それの向上を図ることは言うまでもなく現実的ではないのである。

表３－３　ベガルタ仙台の試合数と入場者名・入場料収入

区　分	2018（平成30）年度実績 自2018（平成30）年2月1日 至2019（平成31）年1月31日	2019（平成31）年度実績 自2019（平成31）年2月1日 至2020（令和2）年1月31日	2020（令和2）年度計画 自2020（令和2）年2月1日 至2021（令和3）年1月31日
トップチーム			
試合数（試合）	21	21	20
入場者数（名）	292,921	278,662	300,000
1試合平均（名）	13,949	13,270	15,000
入場料収入（百万円）	608	615	675
レディース			
試合数（試合）	13	13	11
入場者数（名）	14,081	12,014	16,862
1試合平均（名）	1,083	924	1,533
入場料収入（百万円）	10	8	12

（出所）ベガルタ仙台オフィシャルウェブページの「決算の状況」より抜粋

表３－４　各リーグにおけるチームの試合数と日程

年度	回数	チーム数	試合数（1チーム当たり）		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			リーグ戦	リーグカップ												
↓1部制																
1989	第1回	6	10	—									1989.9.6~1990.1.28			
1990	第2回	6	15	—								1990.4.21~1991.1.27				
1991	第3回	10	18	—									1991.8.22~1992.2.9			
1992	第4回	10	18	—								1992.6.6~11.15				
1993	第5回	10	18	—					【前期】 1993.5.2~6.27					【後期】 1993.10.3~11.28		
1994	第6回	10	18	—					【前期】 1994.5.22~7.17					【後期】 1994.10.3~12.4		
1995	第7回	10	18	—								【前期】 1995.8.17~10.22			【後期】 1995.11.5~12.24	
1996	第8回	10	18	4					【カップ】 1996.6.2~6.30			【前期】 1996.8.18~10.13 【後期】 1996.10.27~12.22				
1997	第9回	10	18	4			【カップ】 1997.4.20~5.5			【前期】 1997.6.29~8.24			【後期】 1997.9.14~11.16			
1998	第10回	10	18	4			【カップ】 1998.3.7~3.29	【前期】 1998.4.25~8.9					【後期】 1998.9.6~11.8			
1999	第11回	8	14	—						【前期】 1999.7.18~9.19				【後期】 1999.10.2~12.12		
2000	第12回	9	1次リーグ：東日本6・西日本8 決勝リーグ：上位6・下位4	—							【一次リーグ】 東日本 2000.7.2~9.24			【決勝リーグ】 上位 2000.11.5~12.9 下位 2000.11.5~12.3		
2001	第13回	10	1次リーグ：8 決勝リーグ：上位6・下位5	—						【一次リーグ】 東日本 2001.5.13~7.29	【一次リーグ】 西日本 2000.7.1~10.1			【決勝リーグ】 上位 2001.9.2~11.4		
2002	第14回	11	1次リーグ：東日本5・西日本4 決勝リーグ：上位6・下位6	—						【一次リーグ】 西日本 2001.5.13~7.29				【決勝リーグ】 下位 2001.9.2~10.28		
											【一次リーグ】 東日本 2002.7.2~9.4			【決勝リーグ】 上位 2002.10.27~11.30		
											【一次リーグ】 西日本 2002.7.2~9.4			【決勝リーグ】 下位 2002.10.27~12.1		
2003	第15回	13	1次リーグ：東日本12・西日本10 決勝リーグ：上位10・下位6	—				【一次リーグ】 東日本 2003.4.6~9.7						【決勝リーグ】 上位 2003.10.19~12.21		
										【一次リーグ】 西日本 2003.5.11~9.7				【決勝リーグ】 下位 2003.10.19~11.30		

年度	回数	チーム数	試合数（1チーム当たり）		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			リーグ戦	リーグカップ												
↓2部制																
2004	第16回	L1：8	14	—						【L1/L2】2004.6.13~10.31						
		L2：6	15													
2005	第17回	L1：8	21	—				【L1】2005.4.9~11.3								
		L2：7	18					【L2】2005.4.10~11.3								
2006	第18回	D1:8	21	—					【DIVISION1】2006.5.21~11.4							
		D2:8	21						【DIVISION2】2006.5.21~11.5							
2007	第19回	D1:8	21	3				【DIVISION1】2007.4.28~12.9 【カップ】2007.9.2~9.17								
		D2:8	21	3				【DIVISION2】2007.4.29~11.8 【カップ】2007.9.2~9.17								
2008	第20回	D1:8	21	—				【DIVISION1】2008.4.12~11.23								
		D2:9	16					【DIVISION2】2008.4.13~10.26								
2009	第21回	D1:8	21	—				【DIVISION1/DIVISION2】2009.4.11~11.1								
		D2:8	21													
2010	第22回	な：10	18	4				【なでしこリーグ2010】2010.4.4~10.31 【カップ】2010.7.10~8.8								
		チャ：12	15	—				【チャレンジリーグ2010 EAST/WEST】2010.4.4~9.19								
2011	第23回	な：9	16	—				【なでしこリーグ2011】2011.4.29~11.20								
		チャ：12	15	—				【チャレンジリーグ2011 EAST/WEST】2011.4.10~9.25								
2012	第24回	な：10	18	4				【なでしこリーグ2012】2012.4.15~11.11 【カップ】2012.6.23~8.26								
		チャ：12	22	—				【チャレンジリーグ2012】2012.4.8~11.4								
2013	第25回	な：10	18	8				【なでしこリーグ2013】2013.3.23~11.10 【カップ】2013.5.25~8.18								
		チャ：16	22	—				【チャレンジリーグ2013】2013.4.7~9.22								
2014	第26回	な：10	レギュラーシリーズ:18	—				【なでしこリーグ】レギュラーシリーズ 2014.3.29~8.17								
			エキサイティングシリーグ：上位10・下位6										【なでしこリーグ】エキサイティングシ上位／下位2014.8.30~11.24			
		チャ：16	22	—				【チャレンジリーグ】2014.4.5~11.3								

年度	回数	チーム数	試合数（1チーム当たり）		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
			リーグ戦	リーグカップ												
↓3部制																
2015	第27回	な1：10	レギュラーシリーズ:18	―			【なでしこリーグ1部】レギュラーシリーズ 2015.3.28~9.27									
			エキサイティングシリーグ：上位5・下位6											【なでしこリーグ1部】 エキサイティングシ上位／下位 2015.10.10~11.8		
		な2：10	27	―			【なでしこリーグ2部】2015.3.28~11.3									
		チャ：12	15	―				【チャレンジリーグ】EAST/WAST 2015.4.4~9.21						【チャレンジリーグ】プレーオフ 2015.10.10~10.28		
2016	第28回	な1：10	18	8			【なでしこリーグ1部】2016.3.26~10.23 【カップ】2016.6.4~8.7									
		な2：10	18	8			【なでしこリーグ2部】2016.3.26~10.16 【カップ】2016.6.12~8.14									
		チャ：12	EAST/WAST：15・順位決定戦：3	―				【チャレンジリーグ】EAST/WAST 2016.4.10~7.24				【チャレンジリーグ】順位決定戦 2016.8.27~9.11				
2017	第29回	な1：10	18	8			【なでしこリーグ1部】2017.3.26~10.7 【カップ】2017.4.8~7.30									
		な2：10	18	8			【なでしこリーグ2部】2017.3.25~10.7 【カップ】2017.6.3~8.6									
		チャ：12	EAST/WAST：15・順位決定戦：3	―				【チャレンジリーグ】EAST/WAST 2017.4.16~7.23					【チャレンジリーグ】順位決定戦 2017.9.2~9.30			
2018	第30回	な1：10	18	8			【なでしこリーグ1部】2018.3.21~11.3 【カップ】2018.3.31~7.21									
		な2：10	18	8			【なでしこリーグ2部】2018.3.21~10.28 【カップ】2018.4.1~7.16									
		チャ：12	EAST/WAST：15・順位決定戦：3	―				【チャレンジリーグ】EAST/WAST 2018.4.15~8.5					【チャレンジリーグ】順位決定戦 2018.9.1~9.15			
2019	第31回	な1：10	18	8			【なでしこリーグ1部】2019.3.21~11.2 【カップ】2019.4.6~8.3									
		な2：10	18	8			【なでしこリーグ2部】2019.3.21~10.26 【カップ】2019.4.6~8.3									
		チャ：12	EAST/WAST：15・順位決定戦：3	―				【チャレンジリーグ】EAST/WAST 2019.4.13~8.5 【チャレンジリーグ】順位決定戦 2019.8.30~9.14								
2020	第32回	な1：10	18	中止							【なでしこリーグ1部】2020.7.18~11.21 【カップ】中止					
		な2：10	18	中止							【なでしこリーグ2部】2020.7.18~11.15 【カップ】中止					
		チャ：12	EAST/WAST：15・順位決定戦：3	―								【チャレンジリーグ】EAST/WAST 2020.8.22~11.22、優勝決定戦 未定				

※2011年、東日本大震災と福島第一原発事故の影響で「東京電力女子サッカー部マリーゼ」の活動は休止となった［朝日新聞，2011.08.23］。

※リーグカップの試合数は、全加盟チームが参加した場合のみを記入した。決勝戦の試合数は除いた。　※2020年度は新型コロナウィルスの影響より日程の変更や未定の場合がある。

このような中で、上述の 1990 年代の企業チームは、これらの負担に耐えることができず、リーグを退会せざるを得なかったと考えられる。リーグ優勝を連覇してきたチームさえ、チームへの支援企業がなくなり、チームが急きょ廃部されることもあった［朝日新聞, 1998.11.05］。こうして、チームでは「運営難＝廃部」と認識されるようになり、選手たちも急に居場所を失うのではないかという不安を抱えるようになった。また、チームは、常に費用のかからない運営方法を探りながら、緊縮的に運営をおこない、人件費を抑えるために選手とアマチュア契約を結び、資金集めのために支援企業を探し続けざるを得なくなった。

また、リーグ拡張は、チームにとって、より多くの財政の確保が求められる仕組みと解釈することができる。1 部リーグの分担金の例から見ても、「リーグの好況期」には 735 万円であった分担金が［読売新聞, 1999.11.12］、不況期に入ると、チームの事情を踏まえ 150 万円に下がっていた［読売新聞, 2004.12.04；朝日新聞, 2018.03.07］。その後、2009 年には 2 部制では 350 万円に［日本女子サッカーリーグ, 2009］、2012 年から 2014 年の間は 450 万円［輪田ら, 2012b；日本女子サッカーリーグ, 2013］へ、2015 年 3 部制からは 500 万円［産経スポーツ, 2014.03.18］と、リーグ拡張とともに、その金額も徐々に値上がりしてきた。

ところが、チームの経済的状況は、リーグの分担金の増額水準に比例するほど豊富になっていくとは言えず、多くのチームでは、この分担金を支払うために、さらに多くの資金を集めなければならなかった。その結果、チームを存続させるために、試合経費とリーグの分担金を削減することは不可能であるため、スタッフと選手の人件費を削ることを選択したのである。よって、同じチーム内に、わずかなプロ選手と多くのアマチュア選手といった形、チームは存続をかけて運営せざるを得ない状況になった。これらのことから、リーグ拡張というのは、結局、チームの運営面にも選手の競技面にも負担をより過重に負わせることにつながっているのである。

こうした中で、チームではどのようにして運営資金を得ているのだろうか。1998 年頃の企業チームでは、試合経費やスタッフと選手への人件費、リーグの分担金など、1 シーズン当たり、1 億から 2 億円を超える経費がかかっていたという［朝日新聞, 1998.11.05；2000.02.26］。現在（2020 年）の多くの選手がアマチュアとして構成されている J リーグ傘下チームでも、毎年約 2 億円前後の経費がかかることがわかる（表 3−5）。

表３－５　マイナビベガルタ仙台レディースの年間経費

区　分	2018(平成30)年度実績	2019(平成31)年度実績	2020(令和2)年度計画
	自2018(平成30)年2月1日	自2019(平成31)年2月1日	自2020(令和2)年2月1日
	至2019(平成31)年1月31日	至2020(令和2)年1月31日	至2021(令和3)年1月31日
レディース経費（百万円）	196	208	168

(出所) ベカルタ仙台オフィシャルウェブページの「決算の状況」より抜粋

したがって、チームでは、プロ並みのアマチュア選手を少しでも安定的に確保するため、彼女らを雇用し、給与を支払ってくれる支援企業を募集することになる。それまで、チームでは人件費以外の経費を寄付によって捻出する形で、財政難を解決しようとしてきたが、資金集めだけではなく選手の就労の場を確保するために、支援企業を募集することになった。つまり、チームにとっての支援企業とは、人件費の削減と選手の勤務先の確保において大きな存在なのである。こうして選手は、チームの斡旋によりサッカーと仕事を掛け持ちしながら、生計を立てられるようになった。

ところで、リーグ拡張とともに優勝争いが激化する中で、チームが生き残るためには、競技力向上に貢献できる選手も獲得しなければならない。ゆえに、あるチームでは、アマチュア選手だけでは競技力向上を図ることが難しいと判断し、わずかな人数でもプロ選手を雇用しようとする。しかし、これは、スペランツァ大阪高槻の事例からも推測できるように、資金が豊かにあるため、そうしているわけではない。資金が厳しいにもかかわらず、競技力向上のために、専任・常駐スタッフやプロ選手を雇用しようとするのである。

このようにして、女子サッカーでは、主にプロ選手から構成される男子サッカーとは異なり、同じチーム内にプロ選手、アマチュア選手が混在するものが多々見られることになる。なおかつ、サッカー以外の仕事をする選手の雇用形態や、その生活形態も一様ではない。雇用先の企業が異なることによって、同じチーム内でも個々の選手の労働環境も変わってくるからである（表 3–6）。このため、選手の競技実践形態は複数化するのである。

さらに、競技面におけるチーム間の争いは、支援企業争いの延長にある。なぜなら、選手の立場からすると、プロ契約を交わしてくれるチームが少なければ、より良い労働環境を提供してくれるチームで活動したいと希望するからである。筆者のインタビュー調査でも、K チームの AJ さんは移籍先を選ぶ条件として、支援企業への就労斡旋が体系化されているかどうかを挙げていた。

女子サッカー界では少なくとも安定的に収入を得られるような、仕事をしながらサッカーをすることが当然視されているため、選手の中には、より良い労働環境を求めてチーム選びをする人も少なくないと考えられる。したがって、チームでは、優れたアマチュア選手を獲得するために、選手が少しでも長くサッカーに集中することができる労働条件・環境や、選手へ給料を支払える支援企業を探さなければならなくなった。

以上から、チームの実情を視野に入れずにおこなわれるリーグ拡張は、現場の経済的困難を加重させる原因になりうることがわかる。つまり、現場にとって、リーグ拡張というのは、チームの運営難を継続させるだけでなく、むしろ運営難を引き起こすものにもなるのである。

表３－６　マイナビベガルタ仙台レディース選手の勤務先一覧（2020 年）

背番号	氏　名	勤務先
1	齊藤　彩佳	日進工具(株)
2	北原　佳奈	(株)ベガルタスポーツクラブ
3	市瀬　菜々	「－」（プロ選手）＊
4	高平　美憂	みやぎ生活協同組合
5	坂井　優紀	(株)パスコ
6	浜田　遥	(株)マイナビ
7	隅田　凜	「－」（プロ選手）＊
8	井上　綾香	(株)日専連ライフサービス
9	小野　瞳	東北放送(株)
10	有町　紗央里	(株)ベガルタスポーツクラブ
11	安本　紗和子	(株)トヨタレンタリース宮城
13	福田　ゆい	(株)マイナビ
14	國武　愛美	(株)マイナビ
15	宮本　華乃	(株)マイナビ
16	松本　真未子	(株)マイナビ
17	武田　菜々子	みやぎ生活協同組合
18	奥川　千沙	(学)朴沢学園仙台大学
19	佐藤　楓	みやぎ生活協同組合
20	白木　星	ダイシン幸町店
21	池尻　凪沙	ダイシン桂店
22	万屋　美穂	(株)高速
23	佐藤　瑞夏	ダイシン幸町店
24	成田　恵理	(株)マイナビ
25	船木　里奈	(学)朴沢学園仙台大学
26	西野　朱音	(株)マイナビ
27	池尻　茉由	「－」（プロ選手）＊

＊チームのウェブページに勤務先の記載がない場合は、「－」と表記した。なでしこリーグ１部のガイドラインでは、１チームにプロ選手を3名以上登録することになっている。このことから考えると、勤務先が記載されていない選手たちは、プロ選手であると言える。

（出所）ベカルタ仙台オフィシャルウェブページを参考に筆者作成

それに、リーグ当局は、各チームに対して、競技力向上とともに、地域でのサッカー教室やイベントなどの競技普及活動を積極的に行うよう求めている。これらの開催は、競技普及につながる可能性はあるが、これを主催するチームでは、肉体的にも財政的にもその負担が増すことを意味する。こうしたイベント活動は、サッカーのみではなく、別の仕事もしなければならないアマチュア選手において、身体的にも時間的にも大きな負担となる。イベント開催で身体を休ませる時間が少なくなり、疲労が蓄積されてゆくからである。つまり、選手の身体管理面を考えると、イベント開催というのは、選手にとってマイナスなものとして作

用する面もあると言える。

女子サッカーにとって、男子との格差［NEWS ポストセブン, 2015.07.09］、女子の競技人口数の確保、女性指導者の育成［読売新聞, 2016.06.09］、中学校チームの不足［前田・川西, 1994］、私立大学女子サッカー部の創設への必要性［石山ほか, 2009］などが課題である。だが、ここまで見てきたようなチーム運営実態に照らせば、日本女子サッカーリーグの構造や、選手に対する人びとの社会的認識が見直されないままでは、現在、リーグに所属している選手たちが抱える困難を、将来の選手たちへそのまま引き継がせることにほかならないと考える。

以上のように、リーグ拡張とチームの運営実態、とりわけ、その現場の経済的困難との関係性に焦点を合わせることで、リーグ拡張が、必ずしも現場の発展につながらない点を明らかにした。現場の経済的困難はむしろ増加しかねない。リーグ拡張が、チームの財政的な負担増加、支援企業獲得をめぐるチーム間の競争、各チームにおける好選手獲得への困難、選手の疲労過重および競技環境悪化を招来することが問題として提起できよう。こうしたリーグ拡張は、チームの運営難を継続させるものとして表れかねない点が見えてきた。

3　日本女子サッカー界における労働市場

これまでの日本女子サッカー界の労働市場は、選手がプロ選手として活動することがほぼ不可能な構造を持っていた。しかし、2021 年のプロリーグの開幕（予定）によって、女子サッカー選手たちもプロ選手になることを夢見る可能性が高くなった。だが、女子サッカーのプロリーグは選手の労働市場全般を改善していくための出発点であると言えるものの、それが女子サッカーの財政的な基盤が強化された結果ではない。それは、プロリーグであるが、1 つの加盟チームのプロ選手は最低 15 人で、その他はアマチュア選手でもよい［朝日新聞, 2020.12.09］とされていることからわかる。つまり、現段階では、プロリーグの創設が多くのアマチュア選手の根本的な労働環境を見直すことにつながるとは言い難い。むしろ、プロリーグの創設によって、アマチュア選手の労働環境は等閑視される危惧もある。それゆえ、女子サッカー選手の多くがアマチュア選手として活動する現状は、すぐには変わらないと考えられる。

女子サッカー選手は、こうした女子サッカーの現状、つまりチームの財政面の困難と女子サッカーの位置づけ、労働環境の乏しさを認識しているからこそ、どうやって競技活動とそれ以外の生活双方において、生活上のリスクを減らしながらサッカー選手として暮らせるかと模索を続け行動するのである。ゆえに、彼女らにとっての当面の目標となる点は、プロ選手を目指すこともあるものの、まずは何よりも、廃部される確率がより低いチームに所属し、安定的に競技活動を続けることであると言える。

4 小 括

第 3 章では、リーグの加盟チームの現状から、女子サッカーに携わることが、選手たちの労働と生活をいかに不安にさせるかを解明してきた。その結果、リーグ当局の運営方式が、チームの運営難と選手の競技実践形態の複数化をもたらした点が明らかになった。リーグ

拡張とともにチーム間の競争も激しくなったことによって、チームでは、競技力を向上させるために同じチーム内にプロ選手とアマチュア選手を混在させる形で、選手を構成せざるを得なくなった。さらにチームの運営難の中で、アマチュア選手たちはサッカーを続けるために、別の仕事をしながら生計を立てなければならない。こうして選手の競技実践形態は複数化していった。

このように、女子サッカーの労働市場は、選手がプロ選手として活動することがほぼ不可能な現状にある。女子サッカー選手に、プロ選手になることへの意欲や熱意があったとしても、それを受けとめることのできる競技環境ではないのである。2021 年のプロリーグの開幕は、女子サッカーのプロ化に向け期待が寄せられる一方で、これによって女子サッカーの根本的な社会経済的な脆弱性が改善されるとは考えられない。むしろそれによって女子サッカープローリーグの限界が示されることへの危惧もある。女子サッカー選手がアマチュア選手として活動することは、すぐには変わらない現実なのである。

ところが、これまでの研究では、選手の競技活動のみに焦点が当てられ、そうした状況の中で、選手たちがどのような想いで、どのように競技活動を実践しているのか、競技活動以外の生活については、ほとんど言及されてこなかった。メディアでは、アマチュア選手がチームの活動をする時間以外に、別の仕事をする姿を取り上げることはあったものの、そうした生活の中で、選手がどのような課題や困難を抱えているかについては、十分に説明されていない。

よって、次章では、こうした状況の中で、個々の女子サッカーチームが、実際にどのようにチームを運営しているのか、どのような競技実践形態を持った選手たちによってチームが構成されているかに着目しながら、筆者が K チームで行なったフィールドワークを元に述べてゆくことにする。

第４章　女子サッカーチームの運営と秩序

：K チームでのフィールドワークから

ここからは、脆弱性の上にある、女子サッカーチームの内部を明らかにする。具体的には、主に女子サッカーK チームでの参与観察とインタビュー調査の成果をもとに、選手の競技実践形態について描出する。Wacquant がフィールド先のボクシングジムについて「外部の観察者にはたやすく明らかにされていない機能や表象が溢れるほど詰め込まれた複雑で多義的な制度である」［Wacquant, 2004＝2013：18］と示唆したように、K チームにも外部には知られてない、フィールドへ踏み込んだからこそ見えてくる、内部の動態や制度が存在すると考えられる。よって、K チームに埋め込まれている秩序や規律を抽出しながら、女子サッカーチーム内部を実証的に描き出してゆく。論述に先立ち、K チームについて説明しておこう。

K チームは、もともと一定範囲の地域（地元とも呼ぶ）に根ざし、そこを中心に活動する、総合型地域スポーツクラブ「AK チーム」を前身とする。AK チームは、2000 年代に地方都市（人口約 17 万人）で発足した。発足当初のクラブは、サッカーが好きな友人同士で構成する同好会であったが、競技力の向上にともない、地域リーグで好成績を上げ続け、全国リーグ[56]に加盟することを目指し始めた。その結果、チーム創設 6 年目に全国リーグへの参入が決まる。これを契機にして、AK チームは、資金確保、スタジアムへのアクセス、より多くの地域住民との関係性を形成するために、チームを NPO 法人化（以降、一般社団法人への組織変更）し、近隣の都市部（人口約 200 万人）に本拠地を移転した。そして、チーム名を「K チーム」に変更するなど、全国リーグへの参入に備えて基盤を整えていた。こうして K チームは、本格的に地元を代表する女子サッカーチームになること、全国リーグのトップに立つことを目指して、全国リーグに加盟して活動してきた。

しかし、新チームとしてスタートした K チームは、平坦な道を順調に進まなかった。新チームに入団しようとする選手は少なかったため、選手募集に大変な苦労をした[57]。また、既存の所属選手もすべての競技活動に私費で参加していたため、選手は経済的困難に直面した。こうした状況であったが 2〜3 年も経つと、都市部にある高校卒業後の選手たちが入団しはじめた。K チームの活躍と指導者たちとのつながりを通して、さらに全国各地からも選手が集まるようになった。

このようにして、フィールドワークを行った 2015 年頃、K チームは、選手 24 名、スタッ

56 第 4 章からは、日本女子サッカーリーグのことを、選手たちが呼んでいる通り「全国リーグ」と呼ぶことにする。

57 AI さんによると、移転したことに伴い、練習場所の変更が生じるなど、高い競技能力を持つ選手を募集することに大変苦労し、知り合いのサッカー仲間を K チームに加入するように誘うほどだったという。また、社会人も所属していたため、選手何人かは、練習に参加できないものもあったそうだ。ゆえに、その当時は、選手が 11 人集まるか集まらないかという感じでチームが維持されていたという。

フ 14 名、支援企業（協賛企業）35 社、賛助会員約 2000 名で活動していた。チーム全般の運営に関する意思決定は理事会にあり、そこで理事、監督、フロントスタッフの審議によって様々なことが決まる。選手とスタッフの構成については後述する。

それでは、K チームは、実際にどのようにチームを運営し、その財政はどうやって確保しているのか。また選手たちは、チームにどのように関わり、チームからはどのような支援を受けているかについて、次に見てみよう。

１　K チームの運営全般について

K チームは、地域のサッカー協会、自治体、企業、住民との関係性を重視する経営方法、すなわち地域密着型の経営を標榜し、運営に必要な経費は、地元の人びとや支援企業約 35 社によって拠出されて成り立っている。企業は、資金援助の他に、選手雇用、競技用具と練習場所の提供などの支援を行っている。これらの支援によって、選手の活動経費（月会費、遠征費など[58]）が工面されている。また、チームとしては、専用のグラウンドは所有していないが、公共施設や学校を中心にグラウンドを借りて活動もできている。選手は私費をほとんど使わずに競技することが可能な状況にある。そのために、K チーム以前に別のチームに所属したことのある選手たちと AK チームでも活動した経験がある選手たちは、現在の競技環境について、以前に比べて資金面では良い環境に改善されていると感じている。

K チームの活動内容は、主に公式戦（ホーム試合とアウェイ試合）、チーム練習、ミーティング、地域イベント、合宿である。平日の練習は夜 19 時から 21 時まで規則的に行われる一方で、週末の練習の場合は借りているグラウンドの事情によって練習時間が不規則的であるため、集合時間に変動がある場合が多い。

1 年間の流れは以下のようである。まず、新しいシーズンを迎えるために、2 月から二ヶ月間をかけて運営準備およびチーム作りが始まる。この期間には、2 週間にわたる長期合宿[59]がおこなわれ、それ以外の時期は走り込みを中心に、週 4 回練習が行われる。選手への講習会も実施され、その内容は、週 1 回のスポーツ栄養や筋力トレーニングの講義など、サッカー選手として選手個人が管理すべき身体についての学習である。4 月から 9 月末までは、週末に公式試合が行われる。この間の練習は試合日程を踏まえながら週 4 回から 5 回行われる。9 月末のリーグ終了時点から 10 月中旬までは、チームの練習は行われない。その後、11 月末まで練習が週 4 回から 5 回行われ、12 月から 1 月 31 日までオフシーズンに入る（表 4–1）[60]。

シーズン中の一週間の活動を曜日別に見れば、月曜日は休み、火曜日から金曜日に練習、土曜日もしくは日曜日に試合が行われる場合が多い。チームミーティングは、主に試合前日

---

58 月会費は 8 千円、遠征費は選手 1 名あたり、1 回で 5 万円〜7 万円がかかる。支援企業が十分に確保されていない時期には、選手たちがチームへ月会費を支払っていた。

59 長期合宿に参加した支援企業の社員選手は、サッカーも仕事の一部と認められるため、会社を欠勤しても良く、固定給が支払われる。一方で、一般企業の社員選手は合宿期間中には職場に出ていないので、月給が減ることになる。

60 筆者が参与観察を行った時期は 10 月までであるため、11 月から 1 月の間の日程は選手のインタビュー調査の結果をもとに筆者が整理したものである。

と試合終了後におこなわれる。選手同士のミーティングは、必要に応じて時々開かれる。地域イベントは、公式試合がない折に何度かおこなわれる。シーズン中は、練習試合形式や女子サッカー以外の大会の手伝いで、月 1 回程度で行われていた。

なお、上述のチームの行事には、選手全員が積極的に参加し、常にチームに関する全般的な情報を得ておくことが重要になる。たとえば、ケガをしている選手であっても、必ずグラウンドに来てチームの情報を共有し、練習を見学しつつリハビリをおこなうよう、チーム内で指示されている。これらを軸に、選手たちは活動しているが、時折、スタッフの指示によって活動の参加内容が変わる場合もある[61]。

このように、K チームは、全国リーグに加盟し、そこでトップチームになることを目指して活動している。その活動は以上に見たように、地域密着型の経営方針に従って運営され、地元の企業や人びとによって主に支えられている。

表４－１　K チームの日程（年間）

<table>
<tr><td>2 月</td><td colspan="2">3 月</td><td>4 月</td><td>5 月</td><td>6 月</td><td>7 月</td><td>8 月</td><td>9 月</td><td colspan="2">10 月</td><td>11 月</td><td>12 月</td><td>1 月</td></tr>
<tr><td>新チームスタート／シーズン準備</td><td>長期合宿</td><td colspan="6">公式戦（ホーム試合とアウェイ試合）など</td><td>休み</td><td colspan="2">練習</td><td colspan="2">オフシーズン</td></tr>
<tr><td colspan="14">地域貢献活動（サッカー教室、お祭りやイベントに参加など）</td></tr>
</table>

２　K チームの選手とスタッフ構成

ここでは、K チームの関係者について、選手とスタッフに分けて紹介する。

まず、K チームの選手構成についてである。選手は全員で 24 名である。24 名のサッカーに参入した動機の中では、兄の影響が 13 名、友達と先輩の影響が 4 名、父の影響が 2 名、兄と父の影響が 1 名となっており、身近な他者（主に男性）の影響によってサッカーを始めた選手が 20 名を占めていた。こうしてサッカーを始めた選手たちは、前所属先の指導者による紹介や K チームの監督によるオファー、または自らが K チームに連絡をしてトライアウトを受け、K チームに入団しサッカーを継続している。

また、選手たちを属性で区分すると、プロ選手が 4 名、アマチュア選手が 20 名である。主に地元のある都道府県内の出身者を中心に選手が構成されているが、他地域からスカウトされた選手もいる。地元出身の AP さんは、他のチームではなく K チームで優勝し続けることを願っているほど、地元出身の選手たちは、チームの活動を通して少しでも地域活性化に貢献したいという思いを抱いている。選手の契約期間は、全員が 1 年契約である。よっ

61 例外的に経費がかかるためだと推測しているが、長期合宿時は、ケガ中であった AF さんと AH さんは、合宿に参加することができず、居残り組として地元に残ってリハビリをするようにチームから指示を受けていた。

て、契約更新も毎年行われる。

他方で、序章でも述べたように、K チームでは、彼女らの競技実践形態がプロ選手、支援企業の社員選手、一般企業の社員選手、学生選手の 4 つに分けられる点がポイントとなる。中でも、アマチュア選手に限っては、同じアマチュア選手であっても、それらを一様に捉えることはできない。本論文では、以下（表 4–2）のように、選手個々人の競技実践形態を整理した。

プロ選手[62]は、オファーを受けて入団し、フルタイムの職業としてサッカーを行う者、労働としてのスポーツに従事する者である。チームから給料が支払われるため、アマチュア選手のようにサッカー以外の仕事を掛け持ちはしていない。この選手たちは練習のない平日の昼間に自主練習や筋力トレーニングなどを行っている。

支援企業の社員選手は、アマチュア選手でスポーツのための労働を選択している者である。チームから給料を受け取らず支援企業での就労を通じて生計を立てている。この選手たちは、チームから就労の斡旋を受けた支援企業で働いている。

一般企業の社員選手は、アマチュア選手でスポーツのための労働を選択している者だが、支援企業以外で働く者である。彼女らは、チームからの斡旋ではなく、自らが選択をした企業で就労しているため、その勤務の事情から、チームの練習に遅刻したり欠席したりする場合がある。

学生選手は、高等学校、専門学校、大学に在籍中の者である。アマチュア選手で他者の労働に支えられてスポーツを行なっている者を指す。この選手たちも、在籍中の学校の行事や実習などのために練習を欠席・遅刻することがある。

表４－２　K チームの選手構成

プロ選手（4名）	アマチュア選手（20名）		
	支援企業の社員選手（9名）	一般企業の社員選手（2名）	学生選手（9名）
PBさん（20代）	ADさん（20代）	AVさん（20代）	AAさん（10代）
PQさん（20代）	ASさん（20代）	AGさん（20代）	ACさん（10代）
POさん（20代）	ATさん（20代）		AGさん（10代）
PRさん（20代）	AXさん（20代）		ANさん（10代）
	AWさん（20代）		APさん（10代）
	AEさん（10代）		AKさん（10代）
	AHさん（20代）		AMさん（20代）
	ALさん（20代）		AFさん（20代）
	AJさん（20代）		AUさん（20代）

（注）下線は、AK チームの出身者である。

62 彼女らは、男子の「クラブ・企業のプロ選手」と同じ待遇や地位を得ているとは言えない脆弱な立場にあるプロ選手である。また、プロ選手ごとに給料の差があるが、居住費以外の年俸は、約 180 万円～200 万円（2015 年当時）と推測できる。

このように、様々な状況の選手が混在している K チームであるが、重要なのは、チーム内でサッカーに関しては、選手全員が一律に扱われる点である。つまり、選手たちはそれぞれ競技実践形態も異なるし、将来に対する夢やサッカー選手としての目標もそれぞれである。だが、K チームに入団した以上は、リーグでの優勝を目指して取り組む姿勢が、選手全員に求められる。筆者の参与観察とインタビューでは、選手たちが将来的に就きたいと希望している職業は、プロのサッカー選手の他に、サッカーの指導者、教員、店長（接客関係）、OL など様々である。こうした希望はチーム内外でも共有されており、例えば AL さんに対する応援の掛け声は《頑張れ、保育園の先生》である。このように、選手たちは必ずしもトップのプロサッカー選手になることを目指しているとは言えない。

しかし、チームの目標達成のためには皆に一律の努力が求められる。そのため、チーム指導陣からすると、異なる志向性を持つ選手たちを管理し、統合する方法を模索する必要があった。したがって、チームでは、サッカーに対する選手の態度やその姿勢を訓練するときは、選手の属性や生活形態を考慮せず、以下で見るように全員を同じ選手として扱っていく。

そのため、将来的にサッカーに関する就労を目指していない選手であっても、チームと契約を結んだ 1 年間は、プロ選手と同列に扱われることになる。彼女ら自身も、チームが選手全員をサッカー選手として扱うことに同意し、その方針に従おうとする。入団を決断した以上は、本気でサッカーと向き合い、サッカーを中心に日々を送ることを最優先にするのである。

次に、こうした選手たちを指導及び管理し、統制する側にいる K チームのスタッフについて紹介する（表 4-3）。スタッフは計 14 名である。練習や試合の際は、監督 1 名とコーチ 5 名（コンディショニングコーチを含む）、計 6 名がチームを統括する。これを担当する者は、全員男性である。また、選手の身体を医学的に管理する者は 6 名（男性 5 名、女性 1 名；トレーナー2 名、医師 3 名、栄養士 1 名）いる。彼らは、試合時のケガに対応するものがほとんどだが、トレーナーについては練習に参加して、選手へリハビリテーションメニューを提示することもある。また、競技面と運営面双方において、選手に関する業務を担当し、チーム全般の運営を担うフロントスタッフが 1 名いる。それからマネージャーの筆者 1 名がいた。

スタッフとチームの雇用関係については、チームが採用した専従スタッフが MJ さん（監督）、MI さん（コーチ）の 2 人である。2 人は、競技面の指導をはじめ、支援企業の確保とそれへの対応などの事務所での仕事を並行して行っていた。現場スタッフ MK さんは、チームの練習や試合の競技面の仕事のみを行う、チームから雇用された者であった。MH さんは、支援企業の社員であった。MG さんは、支援企業以外で勤務しながらボランティアスタッフとして K チームで指導する者であった。

当然のことながら、これまで紹介したスタッフは、全員が同じように、チームの運営に関する決定権を持っているわけではない。チーム内での決定権は、競技面に関しては MJ さん、MK さん、MI さんが持っており、事務的な運営は MJ さんと ML さんが持っていた。決定権を両方持っている監督の MJ さんは、チームの活動はもちろん、チームの関係者全員に大

きく影響を与える存在である。なぜなら彼は元プロサッカー選手で、JFA 指導者として最上級の資格を取得しており、指導者としての社会的地位が高いからであった。

最後に、チーム内での筆者の立ち位置を説明したい。筆者が K チームで調査することが可能になった理由としては、調査協力のお願いをするため、事務所に訪問したそのとき、チームでは韓国籍の選手を獲得しようとしていた点をあげることができる。それに、筆者自身もサッカーの経験者であることから、研究をしながら、来季から通訳と翻訳を担当し、また選手たちを身体的精神的に補助することを、スタッフたちに推奨された。こうして筆者は、スタッフの 1 名として、練習時には主にマネージャーの役割を果たし、ホーム試合時は運営業務を担当しつつ、フィールドワークをすることが可能となった。

筆者は選手たちと一緒にいる時は、選手のように見えるスタッフであった。たとえば、グラウンドで、筆者が選手たちと群れておしゃべりをしていたら、MK さんが《申さん、みんなといるときは選手に見えるね》と言った。そして、時々、選手たちと共に、グループ練習に参加させてもらった。このように、選手にとっても、チームメイトのようなスタッフであったと考えられる。つまり、筆者は、スタッフでもなく選手の立場でもないという、どちらにも拠らない立場にいて、選手たちと比較的に近い距離を縮めて話すことができた。また筆者自身も、スタッフと選手の境界にあるものとして、状況によって自分の振る舞いを変えるように意識しようとしていた。

表４－３　K チームのスタッフ構成

区分	表記	性別	役割	チーム内の決定権
現場スタッフ（13 名）	MJ さん	男性	監督	あり（競技面／運営面）
	MK さん	男性	コーチ	あり（競技面）
	MI さん	男性	コーチ	あり（競技面）
	MH さん	男性	コーチ	なし
	MG さん	男性	コーチ	なし
	MF さん	男性	コーチ	なし
	ME さん	男性	身体管理	なし
	MD さん	男性	身体管理	なし
	MC さん	男性	身体管理	なし
	MB さん	男性	身体管理	なし
	WA さん	女性	身体管理	なし
	MO さん	男性	身体管理	なし
	筆者	女性	マネージャー	なし
フロントスタッフ（1 名）	ML さん	男性	運営者（事務）	あり（運営面）

また、以上から明らかなように、K チームには、女性スタッフが筆者とトレーナーの WA さん二人のみで、女性指導者はいなかった。つまり、チームの意思決定はすべて、男性によって行われ、運営されていたのである。このこともあって、男性の指導者陣は、チームにおいて権威ある存在で、女子選手たちは彼らに従順に従う者という位置関係にあった。そうした序列化された上位下達の関係は、チーム内のジェンダー秩序を強化していたと言える。ただし、ベテランの選手たちは、意思決定を持っていない男性コーチたちとは、チームの活動前後にお喋りをしたりすることは日常的に見られた。

３　チームの活動について

ここからは、選手たちとチームスタッフの主な活動を紹介する。彼女らはどのような活動に参加し、そこでどのようにふるまっているのか。個々人が、集団になって活動するときに、彼女らはどのような経験をしているのか。チームの活動を踏まえながらその秩序を明らかにする。

３－１　練習

平日の練習は[63]、19 時から 21 時までおこなわれる。プロ選手は、当然全員出席しているが、アマチュア選手の中で、とくに学生選手は、実習や送り迎えをする両親の事情、学校の行事、試験勉強で練習に遅刻するか、欠席する場合が多少見られた。一般企業の社員選手の中では、退社してからグラウンドに向かうため、時折、練習にギリギリに間に合う選手もいる。

また、これに関連して学生選手は、定期試験期間が近づいてくると、練習参加と試験勉強の間で葛藤するところも見られた。また、そうした選手の悩みや実際に休みを取りたいと申し出た選手の行為は、男性スタッフには理解し難しい点であった。たとえば、AU さんが地域貢献活動に参加せずに、その代わり勉強ができるならば、「優」の成績をとれるかもしれないと言い出した。それを聞いていた MH さんが、AU さんに向かって《勉強しなくていい》と言った。すると、AU さんは《女子の場合は、男子と違って、サッカーだけでは食べていけないんですよ》と言い返す。このように、男性はサッカーのみで生計を立てることが可能となるため、女子選手たちが必死に学業に励むことが、理解されにくいこととされている。つまり、男子選手であっても、全ての選手がそのような生活が可能なわけではないが、女子に対して相対的にサッカーを生業とすることができる見通しを持っているため、女子選手がサッカー以外のことに尽力することがほとんど考慮されていないのである。

このように、アマチュア選手はサッカーと仕事・学業との両立を図りながら、練習に参加していた。だが、平均的に見れば、ほとんどの選手は、遅くても 18 時 40 分までに練習場所に到着している。

---

63 週末の練習時は、平日の練習の流れとほぼ一緒であるが、練習時間が平日時より伸びて、3 時間ほど行われる場合が多く、また公式戦がない時は練習試合が組まれたりする。

K チームには、専用のグラウンドがないため、ロッカールームがないどころか、選手がチームの練習前に自主練をすることも難しい。そのため、19 時ギリギリまで、車持ちの選手たちは、自分の車の中で待機することが通常である。車を持っていない者同士は、競技場の玄関の前でおしゃべりしながら待機するか、仲の良い車持ちの選手とともに、車の中で休んでいる。

ボールや道具は、主にコーチが毎回持ち運ぶことになっているが、車に乗せ切れなかったものは、車持ちの選手が持ち運ぶことになる。このとき、誰が道具を、持ち帰るのかをめぐって、互いに顔色をうかがうような微妙な空気が流れる。そういう空気を破って、率先しつつ呆れがちな表情で、道具を車に乗せ始める選手は、献身的な AG さんか AX さんである。なお、練習前に車から道具を降ろし、練習後にコーチの車に乗せるのは、車を持っていない選手がする場合が多く見られた。

競技場に入ると、更衣室に移動する。ひとつしかない更衣室に、パーテーションを境にして、選手とコーチが分かれてジャージに着替える。着替え後、集合がかかるまで、体をほぐす選手もいれば、テーピングを巻く選手もいる。だが、AE さんと AF さん、AK さんと高校生組は、急いで着替えをしてから、ボールの空気圧チェックやボトルを用意する[64]。ところが、あるとき、いつも準備と片付けをする選手が決まっている点が問題とされた。そのため、選手全員でいくつかのグループに分かれて、1 週間ごとに準備と片付けを回すというルールが決まることになる。毎回のゼッケンの洗濯は、選手全員が年齢順で担当していた。

練習時のアップは、全員で行う。ケガからの回復中の選手は、ケガの手入れをしてもらったり、グラウンドのサイドで用意された別のリハビリテーションメニューをおこなったりすることになっている。ここで重要な点は、チームの原則として、ケガ人も全員練習に参加しなければならないことである。ケガで公式戦に出られないものであっても、チームの練習を見ておくことや、指示事項を知っておくこと、また選手間の顔合わせなど、チームの情報を常に共有し合う態度も、チームの一員としてやるべきこととされる。

アップ後は、フィールドプレーヤーとキーパーとに分かれて練習をする。グループの練習時は、サッカーで「遊ぶ」ことが、チーム内では重要視される。スタッフは、遊ぶ感覚でサッカーをしないと、相手のプレッシャーに緊張してしまい、周りが見えなくなると考えている。そうなると、選手の身体が固まり、プレー範囲の視野が狭くなり、その結果、焦りが出てしまうという。その繰り返しが、チーム全体のプレーの流れを良くない方へ促し、自チームのミスを作り出すことになると考える。ゆえに、スタッフたちは、フィールドプレーヤーに対して、常に《遊ぼう》と呼びかける。

他方で、キーパーに対しては、正確にボールを止めることはもちろん、倒れた状態から素早く立ち上がって再びボールを止める動きが重要視される。キーパーの身長が高ければ高いほど良いが、身長は高くても、ボールに対する瞬間的な反応が遅いとキーパーとして認められづらい。また、ロングキックを、遠く蹴るだけではなく、高く蹴る技術も、そして守備

64 スタッフが、グラウンドに早めに到着したときは、競技場の玄関の前で道具を用意できるときもある。

陣とのコミュニケーション能力も要請されている。

このようなグループごとの練習が終わり、全体練習が始まる。セットプレーの練習もあれば、試合に近づくと、紅白戦も開かれる。練習後は、全員が集まって、スタッフから指示事項を受ける。また、次の日程についてアナウンスされる。この際、特に日常的に発される内容は、身体管理をするようにという点である。スタッフは、選手たちに自分の日々の生活に合わせて、たとえばストレッチや栄養、睡眠など身体を自主管理することを習慣化するように促す。また、選手間で共有したい情報があれば、キャプテンが話題を短く触れるように投げかけてくる。選手だけのミーティングは、場所が取れないことや、選手それぞれの生活形態が違うことから行うのは難しい。約 2 時間の練習が終了すると、練習道具の片付けは、年齢の低いアマチュア選手がほとんどおこなってから、スタッフの車に乗せておく。それ以外の選手たちは、着替えてから、各自解散し帰宅する。

３－２　ホーム試合

リーグの公式戦は、ホームとアウェイ形式でおこなわれる。ここでは、まずホーム試合について紹介する。

ホーム試合時は、K チームが運営本部となる。設営や試合に関するすべての運営業務を担当し、K チームの後援会員募集ブースも運営する。フロントスタッフのみでは、運営しきれないので、エントリーメンバー16 名以外の選手は、運営委員に回される。また、スタッフの知り合い、選手の知り合いなどがボランティアスタッフとしてお手伝いをしてくれる。

集合時間は、試合開始 3 時間前となる。専用のグラウンドがないため、ホーム試合時の道具をスタッフが事務所から運んでくる。サッカーの道具自体は、競技場にあるものを借りる。ゴール、得点版、時計、ボールパーソナルの椅子、担架、審判員、リーグの看板、案内デスクなど、試合のために必要なものを全て設置する。1 時間程をかけて、これらを設営する。その後、30 分間は休憩をしたり、弁当を食べたりする時間を持つ。そのとき、運営委員となった AF さんに、試合に出場できず、運営業務をしなければならない点について、どのように考えているのかを聞くと、《それは監督が決めたことだから、悔しいけど、次は自分も出たいなって。今はチームのために、自分でできることをやるだけです》と回答した。AF さんのように、運営委員の選手たちは、監督が決めたことに対し、感情的になることはなく、まず自らがその指示に順応しようとしている。

試合開始 1 時間半前に、スタッフ（指導・医療）とエントリーメンバー16 名が競技場に集合する。試合に出場する選手たちは、《運営、ありがとうございます》と挨拶をして、運営業務をしてもらうことに対して感謝の気持ちを表す。選手たちは、テーピングを巻き、アップの準備をする。アップは、まず補助競技場でおこない、それからメイン競技場に移動してアップしながら、当日の芝の状態を確認する。選手にとって試合前のアップは、極めて重要な意味を持つ。アップを丁寧にしたものこそ、試合に向けて誠実な態度をとっている選手と見なされている。こういう態度こそが、試合だけを考えることにつながると理解されている。身体的には、試合中のケガの予防につながる。試合前のアップと練習時のアップは、選手たちにとって意味の重さが違う。

それから、設営が終わった運営委員の選手たちは、半分に分かれ、チームを支えるものと、案内デスクでファンを直接に迎える役割のものとに分かれる。チームを支えるグループは、マネージャーの役割をすることとなる。試合のビデオ撮影やアイシング、飲み物を用意しておくなどである。案内デスクにいる選手たちは、ファンと挨拶し合うことと、後援会員を募集する役割を果たす。運営本部は、スタッフたちが統括する。時折、支援企業の関係者の方々も試合の観戦に来る。

キックオフになる前、円陣を組んでからファイトを叫び合う。その後、チームの関係者は、ロッカールームの外で一列に並んで、スタメン選手が出てくるのを待つ。スタメン選手は、テーピングを最終的にチェックしたり、サッカーシューズを結び直したり、手首にテーピングをグルっと回して気合を入れたりする。スタメン選手は一列にロッカールームから出てきて、外で待っていたチームの関係者たちとハイタッチをしながらピッチに出ていく。

試合終了後、選手たちはクールダウンを行う。身体の疲れをとりやすくするためである。エントリーメンバーではあったが、試合に出場しなかった選手は、運営委員のように扱われ、競技場内の片付けを手伝う。事務所に戻しておく荷物を車に乗せれば、片付けは終了となる。ロッカールームの外では、選手の家族と知人たちが集まって、試合の内容について話合う。その後、スタッフと選手全員が集まって短くミーティングをおこない、勝った時は喜び合いながら、拍手しつつ解散となる。一方、負けたときには、悄然とした雰囲気になる。このとき、悔しがらず反省せず、おしゃべりをしたり、ふざけたりすると、空気を読めないものとされる。

３－３　アウェイ試合

アウェイ試合時は、運営費削減のため、試合に必要な最低限の人数のみが遠征先に同行する。スタッフ 6 名（現場＋フロント）と、エントリーメンバー16 名のみである。遠征先にいくということは、他地域の人びとに K チームを宣伝できる機会になる。選手が試合に向けて集中するのはもちろん、K チームの選手として身だしなみを整え、きちんと行動することが求められる。筆者が同行した、ある遠征について一連の流れを以下、描写する。

３－３－１　移動日とミーティング

遠征先への移動は、試合の前日に行う。ある土曜日、翌日にあるアウェイ試合に向けて、選手たちは、朝 9 時に集まって練習をする。この日は、本拠地での練習であったため、居残り組も一緒に練習する。しかし、居残り組は、そのまま帰ることになる。遠征メンバーに選ばれた選手は、スーツに着替えてから再び 13 時までに集合となる。選手全員にスーツ姿で移動するように指示が下ったからである。ジーンズなどの姿は禁じられている。また、選手は、チームが貸与しているスーツケースを使用する。これには、いくつかの支援企業名が入ったシールが貼られている。選手全員が集まったら、弁当を配り、昼ご飯を食べながら移動時刻まで待機する。

16 時頃、宿のホテルに到着した。チームの大きな荷物はフロントに預ける。それから、18 時半まで自由時間となった。遠征先での一番大事な目的は、試合で勝利することである

ため、チームでは経費の負担をかけながらも、選手へ最適な環境を提供しようとする。ゆえに、選手が試合に向けてコンディションの管理を個々人の状況に合わせておこなえるように、全員にシングルルームを提供する。

シングルルームが提供された選手の部屋割りは、401 号室には背番号 1、402 号室は背番号 2 の部屋のように低い数字から選手の背番号順で決まる。選手たちは、自由時間の間、おしゃべりをしたり、ホテルの周りを探索したり、学生選手はシングルルームだから勉強することができると張り切る。

その後、ホテルの小会議室で 18 時半からチーム全体のミーティングが始まる。監督が、明日対戦するチームについて分析をした動画を選手たちに見せる。このときの雰囲気は、厳粛そのものだ。選手たちもおしゃべりをせずに集中する。それから、パワーポイントで作られた K チームのフォーメーションが監督より発表される。11 人のポジションが、名前が呼ばれると同時に、サッカーグラウンドの画面上に、アニメーション効果で一人ずつ写真が写る。そのとき、名前が呼ばれた選手は、1 人ずつ《はい》と答える。名前が呼ばれなかった選手は、ベンチメンバーとなる。そして、紹介された 11 人を中心に、どの選手がコーナーキックを蹴るか、フリーキックを蹴るか、また攻撃時・守備時のポジショニングをどのようにするか、ベンチメンバーの交代も想定し、プレー時にどう対応していくか、具体的に説明される。

そのとき、レギュラーになれなかったベンチメンバーは、名前が呼ばれなかったことについて口出しはしなかった。決定された結果について不満を言う者はいない。それは選手として許されないこととされている。その理由としては、ベンチメンバーたちは、遠征先に来られたこと自体を感謝しているからだ。なぜなら、その場に居られることが、チーム内での自分の居場所が確保されていることを意味するからである。つまり、遠征に同行する者として選ばれなかった選手は、現在、チームの戦力外ということである。選手にとってアウェイ試合は、試合での勝利のみならず、アスリートとしての自己の存在を確かめる場にもなる。

ミーティング終了後は、全員一緒にレストランに移動して夕食をとる。食事は、アスリート向けの高級なバイキングが用意されている。スタッフたちは、選手が普段から食事を栄養バランス良くとることを推奨してきた。そのため、選手たちがバランスよく料理を取っているかどうかをさりげなく確認する。選手たちも好き嫌いを言わずに、バランスよく料理を皿にとる。選手は選手同士で、スタッフはスタッフ同士で分かれて食事をとる。食事中は、おしゃべりをしながら自由な雰囲気で食事をする。食事を終えた選手たちは、スタッフや他のテーブルに座っている選手を待たずに、先に席を立って良い。

食事後から翌日の朝まで、自由時間となる。試合をしに遠征先に来ているため、《早く寝るように》とは呼びかけるが、就寝時間は決まっていない。そのため、選手がこの自由時間をどのように過ごすかが、「本当の選手」（後述）としての評価に関わる。つまり、自由時間ではあるが、選手としての自覚が問われる時間にもなりうるのである。

シングルルームという空間で、誰にも関与されず、選手は 1 泊を過ごすことになる。なお、スタッフも筆者以外は、全員男性であったため、自由時間におけるすべての行為は、選手の自己管理に任せていた。そのためスタッフは、選手に対して遠征先で、はしゃがないで、

試合のことだけを考えることや、これに相応する姿勢や態度を示すことを強く要請していた。選手が、前日に自己管理、自己規制してこそ、翌日の試合への集中度につながると判断していたからである。スタッフは、選手の態度をみておいて、次のアウェイ試合にもその選手を同行させてよいのか、評価しようとした。これは、Wacquant がシカゴの若者がボクサーになる過程について示唆した結果と同様であろう。K チームの選手には、単純な技術の身体化を越えて「生活の規則性、規律に従う感覚、身体的精神的な禁欲が求められ」［Wacquant, 2004＝2013：61］ていたと考えられる。

次に、選手たちの自由時間の過ごし方を描写しよう。軽傷を負っている選手は、身体のケアを受ける。選手何人かは、遠征先の地域に住んでいる友人や前所属先のチームメイトがホテルに訪問して来てくれるため、ロビーに集まって話し合ったりする[65]。自分の部屋にまっすぐ戻る選手もいる。筆者は、AE さんと AU さんと一緒に、周りのショッピングモールへ行った。彼女らが、先ほどの自由時間に探索した結果、可愛い T シャツが 500 円で買えるということで、お揃いのシャツを着て、記念に写真を撮ろうと誘ってきたからである。それで、筆者もお揃いのシャツを買い、3 人で写真を撮って時間を過ごした。その後、二人の共通の友達にビデオ電話をかけたりしながら、自由時間を過ごしていた。その後、筆者はスタッフミーティングに参加し、明日の試合の流れなどを話し合った。

以上から、遠征先にいくということは、選手たちにとって、試合で勝利するためだけではなく、ミーティングや食事を通したサッカー選手である自分自身と向き合う時間、知り合いと会う機会、チームメイトとおしゃべりする楽しい時間という意味も持つ。そして、スタッフにサッカー選手として評価される機会でもある。

また、そうした時間を大事にすることはもちろん、見えないところで、自己管理、自己規制することも、大切なこととされる。そのため、AM さんは、試合の前日には、仲良い選手同士で集まりやすい環境にいるからこそ、あえて一人で行動しようとしているという。ともかく早く寝ようとしているし、そういう態度が試合のために、自分がやるべきことだと考えていた。《遠征に来て、おしゃべりしたりするのは良いけど、夜遅くまでテレビを見たり、ずっと遊んだりするのは、あんまり良くないと思う》と、AM さんは話した。チーム内で一人になるということは、決して寂しいことではなく、むしろ必要な行為とされていることがわかる。こうして、1 日目の日程は終わる。

３－３－２　試合当日

翌日、朝 6 時にチームの全員は、一緒に散歩をする。ホテルの近所にある公園に移動し、全員で体ほぐしをする。公園とホテルを移動する間は、おしゃべりをしても構わないが、ストレッチする時は、真剣に取り組まないといけない。

その後、7 時からは、朝食を食べる。スタッフは、選手に《朝ごはん、油ものは避けるよ

65 AX さんは、遠征先に行けるというのは、試合に勝つのももちろん重要だが、《友達が応援にきてくれる》と話し、試合もでき、友達に会えることも楽しみだという。

うに》[66]とアナウンスする。朝食後は、スポーツドリンクが選手たちに配られ、試合開始 90 分前までに飲んでおくように、指示が下る。このように、チームに所属しているということは、飲食というごく個人的な好みさえも、チームの指示事項に従わなければならないということを意味する。

9 時にチェックアウトしてから貸し切りのバスに乗って、リーグの競技場に向かう。競技場に入るためには、リーグの ID カードを首にかけなければならない。競技場につくと、選手たちはアップの準備をはじめる。スタッフ 3 名は、本部のミーティングに参加する。アウェイ試合であるため、K チームは試合だけに集中すればいい。そのとき、相手チームの出場メンバーについて、はじめて把握することができる。その後、フロントスタッフとベンチメンバーは、応援席にあがって遠征先まで、足を運んでくれたサポーターズに挨拶をする。選手たちは、アウェイ試合にもかかわらず応援に来てくれたサポーターズに深く感謝しようとする。選手たちの家族や知人も試合を観に来ている。そして、ボトルを準備したり、サッカー道具を用意したり、応援幕を貼ることは、ベンチメンバーと筆者が共におこなった。

ピッチ上のアップ開始時刻になると、選手全員は、芝生状態をチェックしながらアップに集中する。キックオフ 20 分前までアップは続く。練習とは違って、全員が真剣な姿で取り組む。掛け声を出し合いながら、微笑んだりするものと話し合いをするものは見られるが、軽々しくおしゃべりをしながら笑ったりするものはいない。アップ終了後は、ロッカールームでチームの全員が集まって、試合でやるべきことの最終チェックをする。11 時、キックオフ、試合が始まる。

試合終了後、試合の結果は問わず、チーム関係者全員は、K チームの応援席の前に移動して、サポーターたちに挨拶することで感謝の気持ちを伝える。それから、交代でも試合に出場したものは、クールダウンをする。それ以外のものは、片付けをすることになる。選手たちは、更衣室へ移動し、シャワーを浴びてから帰る準備をする。帰るときも、チームの関係者は、試合で疲れ切っている選手でも、スーツに着替えて移動しなければならない。

本拠地に到着し、解散となる。このとき、アマチュア選手の表情はあまり明るくない。ホーム試合とは違って、遠征で疲労がたまっているにもかかわらず、身体を十分に休ませることができず、翌日は出勤や登校をしなければならないからである。この点について、PB さんが《本当に働いてる子たちすごいと思う》と語っているように、その苦労をプロ選手たちも知っている。ゆえに、プロ選手は、アマチュア選手の前で、休みや疲れについて言いにくい。口を慎む。以上のように、遠征先では、全員同様なものとして扱われるが、競技活動が終わった瞬間からは、生活上における選手間の身体的・時間的な違いが大きく見られるようになる。

３－３－３　居残り組

遠征先に同行できなかった選手は、本拠地に残って別のトレーニングを実施しなければない。しかし、遠征先での経費に対する負担があるため、チーム内ではわざわざ居残り組の

66 お米や野菜を中心に食べるように、揚げ物は食べないようにという意味である。

ために、グラウンドを借りておいたりすることはできない。言ってしまえば、チームには、居残り組まで気を配る余裕がない。よって居残り組は、集合した形で、ジムでトレーニングをするか、公園で練習をせざるを得ない。この扱いに対して文句を言い出したり、練習を休んだりしてはいけない。スタッフ 1 名が練習をみる。それに、この練習を休んでしまうと、チーム内で「本当の選手」として認められなくなる。心の狭いものとして、「ガキ扱い」されてしまうからである。

居残り組は、アウェイ試合を現地で見ることもできない。勝ったときは、グループチャットを通して《勝利、おめでとうございます》とメッセージを流すしかない。チームメイトの顔を見ながら、情報を収集したり、応援したりすることもできない。このときの居残り組は、チームの一員というより、まるで応援団のように見える。遠征先への移動が平日に行われたとき、支援企業の社員選手なら、遠征先へ同行することが仕事の一部として認められるが、同行できなかった選手に対しては、出勤して仕事をするように、チームから指示が下る。支援企業も、遠征先に行っていない選手が、仕事を休むことを許可しない。

アマチュア選手は、仕事や学業とサッカーを掛け持ちする中で、食事をきちんととることが困難な状況にある。だからこそ、居残り組は、遠征先でのみ食べられる、アスリート向けの栄養バランスの整った食事をする機会も失う。また、ホテルのシングルルームで贅沢をしてみることもできない。そもそも居残り組からすると、遠征先に連れて行かれなかったこと自体が悔しい。

以上、本章では、チームの主な活動を取り上げて、選手たちがチームの秩序に順応する身体と精神を養成することが求められ、目標意識などを学んでいることを描いた。それは、スタッフの指示を素直に受け止め、文句を言わず遵守すること、言い換えると、チームの秩序や規律に順応せざるを得ない仕組みの中で、彼女らは生活している。そうしないと、試合に出ることが難しくなる場合も、選手としての自覚も問われる場合もある。つまり、チームの秩序に従うことは、選手間の相互認識によるためでもあるし、サッカーを続ける上でやるべき行為でもある。要するに、それは、サッカー自体に関連する行為だけでなく、服装、食事、自由時間など、活動全般に及ぶ。こうして選手たちは、選手同士、選手とスタッフとのふるまいや対話を通じて、K チームの選手としてどう振る舞うべきかを習得し、K チームの選手として作り上げられるのである。

4　小　括

第 4 章では、脆弱な基盤の中で、個々の女子サッカーチームはどのようにチームを運営し、どのような活動をしているか、K チームに即して明らかにしてきた。K チームの概況と機能、運営方法、選手・スタッフの構成を整理し、チームの主な活動について記述することで、K チームの秩序と規律を明らかにした。そこには、スタッフ（男性）の判断と指示の下、選手（女性）が従順に従うという構図が見られた。ただし、女子選手といっても一様ではなく、何人かの選手たち（主にベテラン）は、意思決定を持っていない男性コーチたちとは、チームの活動前後にお喋りをする様子は日常的に見られた。

また、K チームは、地域標榜型の運営を行なっており、サッカー活動とともに地域内のイ

ベントなどの活動も行っていた。選手たちは、チームの活動だけでなくそれ以外の労働と生活においても、K チームの秩序や規律に即して振る舞うことが認識されていた。このように、選手がサッカー選手になっていく過程においては、身体を鍛えることだけではなく、K チームの秩序や規律も身につけなければいけないことは、本章においても実証することができた。他方で、サッカーは集団競技であるゆえに、その活動においては、選手間の競争とそれによる選手の葛藤が生じる局面もあった。本章では、特に遠征に関する事例では、選手間のレギュラー争いとそれに伴う処遇の差異が見られた。ここには、異なる競技実践形態を結びながら、スタッフによってサッカー選手として一律的に処遇するという状況が前提とされていた。

これらのことから、フィールドワークを通じて見られた K チームの秩序の特性は、序列化であると言える。それは、スタッフによる選手に対する同一の要求と選手の競技実践形態の差異、選手個人の契約、年齢によってもあらわれていた。選手たちは、スタッフによって一律にサッカー選手として扱われ、そこでの評価によってリーグ戦の出場が決まる。そのルーティンが、リーグ戦があるたびに繰り返される。だが、その競争には、プロ選手、アマチュア選手（社員選手、学生選手）といったように差異があり、競争への参加条件も同一ではない。それは契約関係だけではなく、サッカー選手として身体管理がいかにできるかという生活の差異として現れる。しかし、チーム内では、そのような差異を表出することは「サッカー選手らしくないこと」となっている。翻ってスタッフは、そうした選手たちを統率・管理するために、「同じサッカー選手」といった選手の一体感を醸成する言葉を発していると考えられる。つまり、同じではないのに、同じであるように行動しなければならず、そこでの評価がリーグ戦の出場に関わるという矛盾を抱えながら、サッカーを実践しているのである。この点は、プロ選手のみで構成されているスポーツチームとは異なる点であると言える。

さらに言えば、リーグ戦での実績は来期の契約にも関わってくる。チームと選手の契約期間は、全員が 1 年である。そのため、特にプロ選手は、プロとして契約更新されるかどうかに対して大きなプレッシャーを感じることになる。また、アマチュア選手たちは、実績によってプロ選手として契約される可能性も有している。それは、将来的にトップレベルのプロ選手や女子代表を目指していない人であっても、サッカー選手であろうと覚悟した現時点において、1 年でもプロ選手で活動できることは越したことはないと考えている。このように、選手個人の契約においても競争関係が形成され、それによるプレッシャーによって、それぞれが競争的関係になることが迫られていたと言える。

また、年齢のことも序列関係をもたらす。特に、学生選手たちはチーム内で発言することがほとんどできない。選手の年齢の幅が広いため、意見が聞かれる場合があっても、意見することは難しい。

このように、K チームの選手たちは、常に序列化の中にいた。このことについて、選手たちは、女子サッカーである以上は仕方がないことと理解をしている。しかし、それがチーム内での緊張感を孕んだ不安定要素になっているのは事実であった。この点については、第 6 章でさらに掘り下げて検討することにする。

第５章　地域社会とＫチームの関係性

本章では、地域社会におけるＫチームの活動に注目し、財政的な基盤が脆弱的な女子サッカーチームが、地域企業（支援企業）や地域住民とどのように関係を築きながら活動しているかを検討する。サッカーチームにおいて、なぜ地域貢献活動が重要視されているかをＪリーグの設立理念を確認した上で、Ｋチームと支援企業との関係、地域におけるＫチームの役割とその活動を見ていく。

１　Ｊリーグの理念とその活動方針

1993 年に始まったＪリーグは、発足時からサッカーを通じた社会貢献（地域貢献）を重視して励んできた。サッカーを通じたスポーツ振興、国民の心身の健全さ、国際社会への貢献を常に目指すとしている。その理念を説明するために提示されたＪリーグの設立趣旨と活動方針について確認しよう。

Ｊリーグの設立趣旨は、「①『スポーツ文化』としてのサッカーの振興、②日本サッカーの強化と発展、③選手・指導者の地位の向上、④競技場をはじめとするホームタウン環境の整備」［日本プロサッカーリーグ, 2019 : 2］である。ここには、Ｊリーグの設立によるサッカーの普及、スポーツ文化の醸成、国民の心身の健全さの発達、サッカーの競技力向上による国際大会への常時出場とそれによるサッカーのステータスの向上、ホームタウン環境整備による地域貢献が期待され、目指されている。

Ｊリーグの活動方針は、日本プロサッカーリーグの「Ｊリーグ入会（Ｊ3 リーグ参加）の手引き【新たに入会を目指すクラブ向け】」に以下のように記載されている。

１　フェアで魅力的な試合を行うことで、地域の人々に夢と楽しみを提供します。
２　自治体・ファン・サポーターの理解・協力を仰ぎながら、世界に誇れる、安全で快適なスタジアム環境を確立していきます。
３　地域の人々に、Ｊクラブをより身近に感じていただくため、クラブ施設を開放したり選手や指導者が地域の人々と交流を深める場や機会をつくっていきます。
４　フットサルを、家族や地域で気軽に楽しめるようなシステムを構築しながら普及していきます。
５　サッカーだけでなく、他のスポーツにも気軽に参加できるような機会を多くつくっていきます。
６　障がいを持つ人も一緒に楽しめるスポーツのシステムをつくっていきます。

ここには、Ｊリーグの各チームが地域に根ざして活動することが重要視されている。地域の人びとに「夢と楽しみを提供」するためにフェアな試合を行うことや、地域の人びとと選手や指導者が交流すること、障害者を含む地域の人びとがスタジアム環境やサッカー以外のスポーツを楽しめるシステムを構築することが推奨されている。

Jリーグに加盟できるチームは、競技力のみならず、このような地域に根ざして活動することを前提している。またそうした運営を持続的に経営できるチームがアマチュアリーグより、J3リーグに入会できる審査を受けられることになる（図5−1）。このように、Jリーグはプロサッカーリーグであるが、商業性を前面に出すのではなく、地域活性化といった公共性を常に重視するリーグとして発展してきた。そうした考え方は、日本女子サッカーリーグに傘下した全チームにも求められ、地域に根ざして活動することが推奨され、実際にその役割は諸義務として遂行されている。

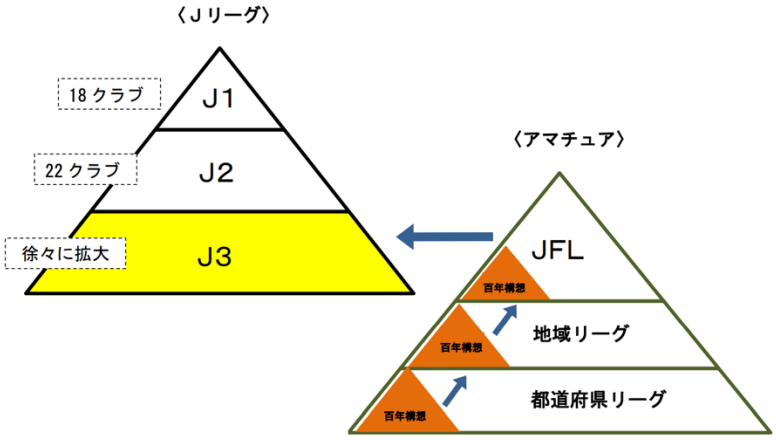


図５－１　Jリーグの構造［（出所）日本プロサッカーリーグ, 2019］

２　女子サッカーにおける支援企業の位置づけ

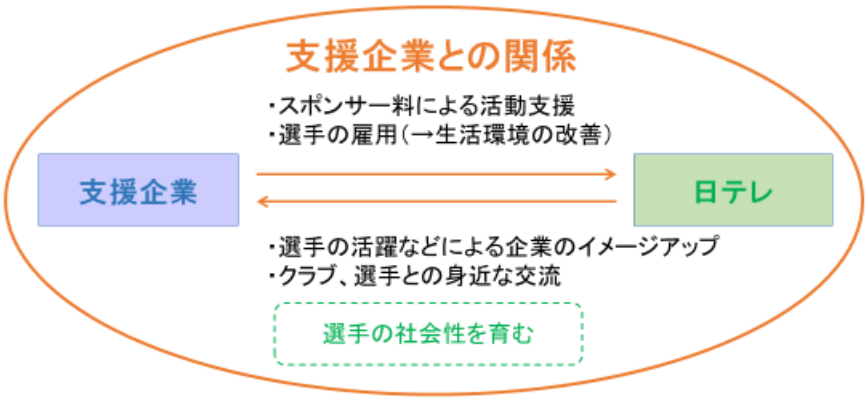
次に、女子サッカーチームと支援企業の関係について考察したい。支援企業とは、女子サッカーチームを支援する、主に地元企業のことを指す。地域社会における支援企業は、Jリーグが提唱してきた「市民・行政・企業の協力関係がJリーグを支える三角構造」［髙橋, 1994 : 42］を構成する役割を果たすものと考えられている。また支援企業の側も、女子サッカーを支援することで、地域社会への貢献および文化の生産者として自らを位置づけている。

支援企業による支援のありようは多様である。金銭的支援のみを行う企業もあれば選手雇用のみに協力するもの、その他にスポーツ用具の協賛および練習場所の提供を行うものもある。こうして支援企業は、女子サッカーチームへ資金提供や選手の雇用を行うことで、選手の生活環境の改善を図ることに貢献している。

他方、支援企業が、女子サッカーチームと関係を結び、選手たちを支援する利点は、企業のイメージアップや社内の活性化とされている。なぜなら、女子代表が第6回FIFA女子ワールドカップ（ドイツ）で優勝したのが、2011年3月11日に発生した東日本大震災後まもなくであったことから、人々は女子代表の「あきらめない心」や「粘り強さ」が震災被害者

に希望と勇気を与えた[67]という雰囲気が広がっているからである。この時から、そのような役割を果たしている女子サッカー選手たちを応援することは、企業や人々において社会貢献活動の一貫とされ、企業のイメージアップにもつながることと捉えられるようになった（図 5–2）。

女子サッカーチームは、そうした支援企業の援助に応えようと、支援企業の人びととの交流活動に励む。選手たちは支援企業の運動会への参加や講演会の実施などを行っている。また、リーグで活躍することで、支援企業のイメージをアップさせる役割も期待されている。企業は、こうした選手たちの活動を、彼女らにとって社会性を育む教育的な機会であると考えている。このように、支援企業と女子サッカーチームとの関係は、支えるもの／支えられるものとして形成されている。



＊日テレは、女子サッカーチームである日テレ・東京ヴェルディベレーザの略称を表す。

図５－２　支援企業とチームの関係図［（出所）日本女子サッカーリーグ, 2014：4］

３　K チームは「道徳の学校」である

K チームと支援企業の関係から確認したように、K チームもまた、地域や地元企業から支援されており、地域社会のために責任を果たすべきスポーツチームとしてあり続ける必要性を感じていた。それゆえ、選手もスタッフもチームのことを、単にスポーツだけをしていれば良いとは捉えていない。K チームの全員が地元の企業や人びとに支援される地元を代表する女子サッカーチームであると自覚しながら競技やチームの運営を行っている。ここに見られる K チームの考え方には、Wacquant が言う「道徳の学校」［Wacquant, 2004＝2013：19-20］の機能が作用しているといえる。

67 森田［2012］は、女子代表の優勝が 3.11 東日本大震災から数カ月後だったことで、「メディアが意図したかどうかにかかわらず、『あきらめない心』や『粘り強さ』といった名でしこジャパンの特徴とされるものが、今このとき『日本人』に求められている心性のようなものと重なってしまった」と指摘している［森田, 2012：45］。

Wacquant は、シカゴのゲットー（Ghetto）のボクシングジムが、①鍛冶場、②危険性に対する緩衝材としての場、③道徳の学校、この三つの機能を持っている点を見出している。ここでジムとは「自分自身の身体を形作っていく鍛冶場」であると同時に、「ストリートから彼らを守り、近隣地区での危険や日常生活の圧力に対する緩衝材として作用」するものであり、なおかつ「規律を保つ精神、集団への忠誠、自分を敬うように他者を敬うこと、自律した意思、などをつくりあげていくようにデザインされた機構なのである」［Wacquant, 2004＝2013：19-20］。

なかでも、ジムの「道徳の学校」の機能を参考にしてみると、これらと同様の秩序が K チームでも重要視されていることがわかる。スタッフは、選手自らが競技面において優れた身体を作り上げていくことのみならず、競技以外の面においても K チームの選手であることを自覚し、自分の行いを規制して、禁欲的に心身を管理することを要請しているからである。これがチームの秩序の一部分に組み込まれており、このような自己規制や自己管理ができる選手は、選手の間でも尊敬される選手として評価される。

そのため、チームメイトの前で、走り込みが多すぎるとか、仕事がきつかった、時間なくてご飯食べられなかったなど、練習に来て苦情をこぼす選手は、選手の間で「ガキ扱い」をされる。

> AM：ガ〜って言うじゃん、文句。思ったら言っちゃうじゃん、その場で。空気も考えずに、わがままだよ。よっぽどのことないと、変わらないと思うよ。あの人たちは、ガキというのは。

このように、言動において自己規制ができない者、チームに与えられた環境に感謝しない者、チームの指示に文句を言い出す者は、選手としての資質が低いと選手間で評価される。それをここでは「ガキ」と表現しているのである。「規律を保つ精神、集団への忠誠、自分を敬うように他者を敬うこと、自律した意思」といった振舞いがアスリートとしての資質として欠かせないという意味で、K チームにおいても、Wacquant のいう「道徳の学校」としてのジムの機能が作用しており、共通しているといえる。

一方で、ゲットーのジムと K チームでは差異もある。それは、K チームでは地域社会との関係性が常に問われている点である。特に、K チームの地域社会への「恩返し」という意識がその特性を表している。ここでの「恩返し」とは、金銭的な意味ではなく、リーグ戦で勝利することに加えて、地元地域への貢献、地元地域の人びとに元気と勇気を与えること、社会的規範を乱さないこと、社会人のお手本になるようにふるまうこと、子どもたちの夢となるチームであり続けることなど、社会秩序としてのルールを守り、そのように努力することである。

たとえば、ホーム試合を目前にした練習の解散時のことである。スタッフが選手たちに、髪の色が明る過ぎる点を指摘し、ホーム試合までに、髪の色を日本ヘアカラー協会で定めているレベルスケールを基準に、黒っぽく染めてくるように注意したことがあった。その理由は、《〔社会的に〕ルールが決まってるから（ML さん）》というものだった。つまり、女子サ

ッカーを応援してくれる多くの人びと、とくに子どもたちが競技を観戦していることが予想される中で、「社会的常識」から見てふさわしくない、茶髪などの明るい髪色をした選手たちが、ホーム試合に出場することは望ましくないというのである。

それに、前の試合で負けたことも理由のひとつとしてあげられ、髪の毛を黒くすることで勝利への落ち着きのあるプレーにつながることが期待されると、スタッフは考えていた[68]。彼女らは、サッカー選手として「一人前の大人」としての「社会的な常識」や模範を見せることが要求されており、選手たちもそれを理解している。その結果、茶髪の選手たちは、すでに高校を卒業している選手たちは、そうしたスタッフの指示に不満はあったものの、全員がその指示に従い、ホーム試合までに髪の毛を黒く染めてきた。

この事例から、K チームの「道徳の学校」の機能がその内部で作用していることに止まらず、選手個々人が地域社会といった K チームの外部への道徳的な機能を果たすことが要求されていることが見て取れる。選手たちも、それを受け止めざるをえない立場にいると考えているため、選手自身の意志を貫くより、ホーム試合までには髪の毛を黒く染めた。このことから見えてくるのは、K チームはスポーツ集団を超えた、ごく個人的な選手の身なりや言動さえも地域の人びとに影響を与える、模範的な集団としての存在であるよう自らに課している点である。

4　地域貢献活動

例えば、それは次のような場面において現れている。K チームの 1 泊 2 日の地域貢献活動を通して、K チームが地域の模範になるチームとして、また地域活性化のためにどのような活動を行い、どのように地域住民と関わっているかを確認することができる。

K チームは、毎年 2 月に監督の知り合いの山谷さん（仮名）がいる真福町（仮名）で地域貢献活動をおこなっている。具体的には、合宿という名のもとでおこなわれる、サッカー教室兼練習と、地域のお祭り参加及びキャラバン活動である。この活動には、選手全員が参加することが当然視されるが、どうしても参加できないアマチュア選手の場合のみ、スタッフの判断により欠席が許される。しかし、選手が勝手に欠席することは許されない。サッカー選手による地域貢献がチームの方針であるからである。

たとえば、合宿以外の活動に関するエピソードを紹介すると、AT さんが体調不良で地域活動を欠席すると当日に報告した日のことである。その報告を聞いた監督は、AT さんが、前回の地域貢献活動時も体調不良で休んでいたことに対して《契約違反だぞ、もう 2 回もイベント来てない》と問題視して、AT さんの携帯電話に電話をかけた。AT さんが電話に出ない。すると、他のスタッフが実家に電話をして（AT さんは実家暮らしをしている）お母さんに、事情を説明し AT さんの体調を確認した。何日か後、講習会のために、選手全員が事務所に集まったとき、AT さんは、スタッフに呼び出された。スタッフは、体調不良だった

68 これは、高校野球で髪を伸ばすと試合に負けるというような固定観念から発された考えだと推測できる。女子選手であるため、「丸刈り」ではなく「髪染め」の指示が下ったことと考えられる。

ことは仕方ないが、もっと競技以外の活動に積極的に参加することを、彼女に要請し、注意した。このように、地域貢献活動は、チームのために選手がすべきことと見なされている。なぜなら、これこそが支援してくれた人びとに、身近な距離で、恩返しする機会だと考えているからである。

それでは、話を戻して、1 泊 2 日の活動について述べていく。一日目の日程は、事務所前集合→真福町へバスで移動（移動距離約 300km）→宿での夕飯の準備→サッカー教室兼練習→温泉→夕飯→就寝という流れであった。まず、真福町へ、チームの大型の専用バスに乗って移動した。運転は監督がする。出発時は、選手全員と他のスタッフたちが《お願いします》と、監督にいう。道路を走るうちに、真福町の標識が見えてくる。監督は、真福町に入ると、真っ先に山谷さんのところに向かった。監督とキャプテン（プロ選手）・副キャプテン（アマチュア選手）がバスから降りて、山谷さんご夫妻に挨拶しにいく。他の関係者たちは、バスの中で待機していた。少し後、監督がバスに戻ってきて《前、お世話になった人いたら、挨拶に行って来い》と言った。その瞬間、選手何人かがパッと立ち上がり、急いで山谷さんのところへ挨拶にいく。

それから、宿（真福町の研修施設）に向かった。山谷さんも自分の車で同行する。山谷さんの車が前を走ると、その後を K チームのバスがついていく。宿には、大部屋が二つあった。年齢順に分かれて部屋を使うことになった。選手たちは、20 代中盤から最年長者までを「大人たち」と呼んでいたため、大人部屋と若者部屋に分かれる。

その後、サッカー教室・練習に行く前に、夕飯の準備をすることになった。練習から戻ってきて、すぐに食べられるように用意しておくため、「大人たち」の指示に従い、全員が厨房に集まり、夕飯の準備をする。料理するのが苦手な選手も、とくにやることがないものも、とりあえず厨房にいなければならなかった。サッカー教室開始の 30 分前、選手たちは、ジャージに着替え、洗濯袋と着替えを持って、競技場に向かった。

競技場に到着すると、中学生の女子生徒 4 名が、選手たちを待っていた。サッカー教室は、中学生もクリア可能な基礎レベルで 1 時間ほどおこなわれた。中学生が K チームの選手とともに練習する時間を大切にするサッカー教室であった。そのため、2 人 1 組で練習するときは、必ず中学生と選手がペアになった。中学生たちにとって K チームの選手は、夢のようなスターなので、選手たちに直接にサッカーを教えてもらえることで大喜びだった。また、親御さんも、誇らしい表情で練習を見ていた。

サッカー教室が終わると、中学生たちは、その後の K チームの練習を見学する。選手たちは、中学生が見ているため、ミスをしないように集中し、張り切って練習をして良いところを見せたがっていた。すべてのトレーニングメニューが終わると、中学生も一緒に混ざる形で、全員が円になって監督の言葉に耳を傾ける。監督は、単にプレーするのではなく、意識を持ったプレーをすることや、周りからのプレッシャーに勝つようなプレーをすることが、サッカーをする上で大切だと説明する。

それから、選手たちは、温泉に移動してお風呂に入る。各選手は、練習で着ていたものを、自分の洗濯袋に入れる。山谷さんは、選手全員分の洗濯袋を回収して、自宅の洗濯機で洗ってくれるということだった。選手たちは、宿に戻り、全員で夕飯の支度をする。思ってもい

なかったピザとおかずの差し入れがあったため、選手たちは喜ぶ。食事は、年齢が近い選手同士で座って食べる[69]。一番年上であるAGさんが、全員が揃っているのか確認をしてから、《食べようか》と言ったら、他の選手たちは、《いただきます》と言ってから、食べ始める。食事中、AEさんが、グループチャットをお知らせの場として使用したい点や、リーグのサイトに連携されているチームのブログに、背番号順で投稿してほしいという。

食事が終わると、片付けも選手全員でする。片付けをしていたら、山谷さんが洗濯したものを宿まで運んでくれた。選手たちは、自分の洗濯袋を探して、持参したハンガーにかけておいた。その後、22時が過ぎ、就寝時間となった。消灯時間はとくに決められていなかったが、筆者がいた「大人たち」の部屋では、多くの選手が横になると、この部屋で一番年下であったAXさんが《電気消していいですか》と聞く。それから電気を消す。すると、選手たちは自分のペースで就寝する。

二日目の日程は、朝食→宿の掃除→練習→地域のお祭りに参加→温泉→帰宅という順であった。朝食の準備は7時半からだが、厨房にはすでに山谷さん夫妻が朝食を準備していた。選手たちは、山谷さん夫妻と共に食事をした。その後、各自荷物を整理し、8時45分から宿の掃除となった。キッチンやお手洗いなどの掃除場所は、キャプテンが決めた。宿から出ていくとき、選手の皆が集合している前で、監督は、山谷さん夫妻に深くお礼を言い、自分のジャージとサッカーシューズをプレゼントする。

それから、昨日と同じ競技場に移動して、9時半から2時間練習をする。サッカー教室に来ていた中学生4名も練習を見に来ていた。練習後、選手たちは、公式的な活動時に着るチームのピステ[70]に急いで着替えてから、真福祭りの会場へ向かおうとした。このとき、中学生たちと山谷さんご夫妻が、選手たちを見送ってくれた。監督が、バスの中で、選手たちに手を振ってあげるように声をかける。すると、バスの中の全員が、笑顔で手を振りながら、お別れの挨拶をした。

真福祭りの会場には、子どもから年配の方々まで多くの人が参加していた。バスから降りた選手たちとスタッフ1名は、そのままステージに上がり、Kチームの紹介と宣伝活動をおこなった。スタッフは、支援企業の募集についても説明する。企業さんより支援していただくことで、その企業の名前を、選手が着ているピステ、ユニフォームなど、ジャージに貼らせてもらうことになる点を強調した。また、チームのホームページに企業名が公表されることも広告する。それが、Kチームを支援することで得られるメリットであるそうだ。会場のテントに集まった選手たちは、軽食を食べる。

食べ終わる頃、スタッフによって「営業バック」と呼ばれるものが机の上に出される。その中には、サポーターズ募集の書類とペンが入っていた。選手たちは、スタッフよりキャラバン活動について説明を受ける。活動方法は簡単で、選手2、3人がグループごとに分かれて、会場にいる人びとから後援金を集めてくること、またサポーターズへの入会を勧誘する

69 筆者以外のスタッフたちは、真福町のサッカー関係者たちと食事に出かけていた。
70 ピステとは、サッカーやバレーボールなどのスポーツをする際に着用する防寒アイテムのことをいう［スポシル編集部, 2018.01.08］。

ことであった。ここで極めて興味深かった点は、スタッフ 1 名が、選手たちに向かって《お兄さんか、おっさんのところに》なるべく行くように、と助言したことである。男性のところに行って、女の子らしさをアピールするようにという意味だった。AK さんが、こういう活動が苦手だと言い出すと、スタッフが《一緒にいるだけでいいから》と励ましたことも、非常に印象深かった。その言葉を受けた AK さんは、抵抗せず仕方がないというように、他の選手たちと一緒にキャラバン活動を行なった。それは、他の選手全員が行う中で、彼女だけ別行動をとることはできなかったからだと考えられる。スタッフや選手たちの姿を見て、強くは抵抗できず心理的な圧迫によって、AK さんはそこにいざるを得なかった。

こうして選手たちは、できるだけ家族連れではない、若い青年から中高年までの男性たちに挨拶をしながら、写真も一緒に撮ってあげながら、募金活動をおこなった。この後援金は、チームの運営費として使われる。

これで、公式的な地域貢献活動は終了し、温泉に移動して 14 時まで休憩をとった。帰る時間となり、全員がバスに乗り始める。帰るときの運転も、監督がした。しかし、帰る途中で、誰にも同意を得ず、急にバスが休憩場所に入って止まる。監督がそのまま眠りについた。ところが、誰一人として監督の行動に対して文句を言わなかった。選手たちは、弁当を食べたりしながら、静かに監督の疲れが取れるまで待っていた。40 分程過ぎてから監督が起きた。前日から運転と練習、人びととの交流、祭りなどで、監督の苦労をチームの全員が理解していた。バスは再出発する。向かう途中で、パーキングエリアにも寄った。監督 MJ さんは、真福町で頑張ってくれた選手たちにソフトアイスクリームをご馳走した。その後、事務所前に向かい、解散となった。ここを見ると、監督は、サッカー指導という本業ではない、バスの運転もする苦労をしている。このような監督の苦労を見ている選手たちにとって監督の存在は尊敬や権威の対象とされる。それゆえに、選手たちは、監督による評価や言葉などに注意しようとする。

以上、チームの地域貢献活動（地域イベント・お祭り・サッカー教室、泊まり先での様子）が集約された事例を確認してきた。K チームも「地域の人々を巻き込んだチームづくり」［日本女子サッカーリーグ, 2014 : 6］活動を実施していた。選手たちはこうした活動を通して、地域住民たちと交流すると同時に、地域と結びついたアスリートとなっていった。

また、地域を大切にするこうした考え方は、一時的なものではなく、K チームの選手たちには日常的に要求されていた。スタッフは、ミーティングや解散時の報告などを使って、選手たちにチームの一員として自覚することを忘れずに行動するよう、日常的に選手たちに呼びかけていたからである。彼女らはサッカー選手として勝利することだけでなく、地元から支援と応援を受け、模範的な市民、道徳的な存在として社会からの期待に応じなければならない。彼女らは、チームの活動のときだけでなく、いつでも、どの場所にいても、K チームの選手として責任を持って振舞うことがチーム内で強調される。

他方で、ここで描出したキャラバン活動は、女子サッカー選手のダブルスタンダードを浮き彫りにする出来事であった。なぜなら、ピッチ外の場面において、選手たちは「女性」として振る舞うことが求められていたからである。このことは、第 4 章で述べた練習や試合、遠征先で、彼女らにアスリートであることが求められていた場面とは大きな差異があると

言える。チーム内でも、リーグ当局の運営方法と同じく、選手たちのピッチ外での「女らしい」姿と、ピッチ上での「男らしい」サッカー選手としての姿のギャップを売りにして、K チームへの後援金を集めようとしていることが明らかになった。

５　スポーツ集団を越えて：地元を代表するアスリートとして

それでは、選手たちは、そうしたチームからの要求をどのように受け止め、理解しているだろうか。選手たちは、地元の企業や人びとの期待に応える社会的責任のあるアスリートとして人びとに常に評価されるよう、それを意識しながらサッカーに関する諸活動に臨んでいた。

PQ：前、他の地域行ってて〔活動〕して来たんですけど。まあ、やっぱり、G チームにもその思い出とか、その土地で色んな人に支えられていたんで。E チームでも、それなりの思い出はありますけど、この地域は、やっぱり自分の生まれ育った場所ですし、地元チームが何かで勝つと、やっぱり自然に嬉しいんじゃないですか。地元のプロ野球チームのことが好きか？って言われたら、別にって思うんですけど。この地域に住んでいるから、やっぱり地元チームを応援するみたいな、そういう感じなんですけど。自分の出身地でもあるから、地元のためにっていうなら、自分ができることが少しでもあるならやりたいなって思う感じですね。

このように、PQ さんは地元を代表する女子サッカーチームが勝利することは、地元出身の人や在住している人びとを自然と喜ばせるものと考えている。PQ さんは、過去に地元ではないチームで活動した経験があるからこそ、地元チームの勝利というのが、より自然に嬉しさを感じられることと捉えられる。よって、PQ さんは、自分が K チームで活動して、勝利することが、地元の人びとに貢献することになると考えている。こうした PQ さんの考えには他の選手たちも同意する傾向がある。選手 24 名のうち、21 名の地元が K チームの本拠地だからである。PR さんも、移籍先を決めるとき、他チームからもオファーがあったが、地元に貢献したい気持ちがあったため、K チームに入団することを決めたと語ったことがある。

AG：勝利が一番恩返しにはなるよね、きっと、きっと、その結果を残す、それで上に上がるっていうことが、まあ、応援してくれてる人の恩返しにはなると思うけど。でも、それが全てじゃないと、自分は思ってるから、その全国各地から応援してくれる人もいるけど。ここだったら、色んな所に行って、色んな人の力を借りて合宿行ったり、何々やるっていう、その中でのサッカー教室とか、コミュニケーション、例えば、2 年前に行ったところを、また合宿地で行って、とかっていうところで。まあ練習させてもらったり……

こういうなんて言うの、親睦会とか開いてくれたら、そこで色々やったりとか、なんか応援してくれてる人のスポンサーとかに行って、何かお手伝いしたりとか、そう

いうのも、恩返しになると思ってるから。

だから、もうそういうイベント関係があるときも、まあ、全力？周りから見られてるのは当たり前だから、チームエンブレムつけてる以上は。だから、そのエンブレムつけてる以上は、試合だけじゃなく、まあ、どこに行っても、それ相応の身なりと、きちんとした格好をしないといけないなっていうのが、それが多分自分の中では恩返しだと思ってる。

AG さんは、勝利することのみならず、応援してくれる人びとの期待に応じるように振舞うことも、地元への恩返しになるという。たとえば、サッカー教室のイベント開催や、親睦会を通して地元の人びととコミュニケーションをとること、また支援企業を訪問してお手伝いすることをあげている。

ここで最も印象的なのは、AG さんが《チームエンブレムつけてる以上は、試合だけじゃなく、まあ、どこに行ってもそれ相応の身なりと、きちんとした格好をしないといけないな》と語っている部分である。AG さんにとって、チームに所属するということは、競技面だけではなく、社会人として良識ある言動をすることが重要なのである。チームは活動時のみならず、どの場所でも選手としての自覚を持って振舞うことが極めて大切な行為とみなされている。

そうした考え方は、自分たちがサッカーをする女子生徒たちの憧れの対象になり得ることからより重要視される。

AX：自分入って、今 3 年目なんだけど。入ってずっと合宿に行ってて。そしたらサッカー教室するんでね。そうすると、サッカー教室してた子どもたちが覚えててくれて。昨日も頑張ってみたいな、すごい言ってて。なんかそういうのを見ると、じゃあ、このかかわった子たちのために、この子たちの目標になるのが K チームなら、もうちょっと頑張りたいなって思った。〔ただ〕地域のためというよりは、会った人たちのために、お世話になった人たちのために、一瞬でも関わった人たちが喜んでくれればと思う。

◎：プレー見てくれたり、それを覚えてくれたりすると嬉しいよね。

AX：昨日会った子の中に、中学入ったらサッカー辞めるって、去年言ってた子がいて。でも、すごくうまいの、その子。もったいないよ、やった方がいいよって、ううん、ダンスやるの、見たいな。でも、もったいないって言って。昨日会ったら、サッカーやってるよって、AX さんと約束したからサッカーやってるのって言われて。マジかって思って。今日試合見てて、すごかったよってみたいな。だから頑張って K チーム入るんだって言われて……そういうのがあると嬉しいし、なんか頑張ろうって思えるよね。

このように、AX さんは、サッカー教室で出会った子どもたちが、アスリートとしての自分の姿を覚えてくれたり、応援してくれたりすることによって、サッカーを頑張れる気持ち

になると述べている。また、子どもたちが AX さんに向かって《だから頑張って K チーム入るんだ》と言っているように、K チームや選手たちを、全国レベルの女子サッカーチーム、地域を代表する選手たちとして憧れの対象とみなしていた[71]。こうした経験は、K チームの選手たちに、よりサッカー選手として道徳的で模範になる振る舞いをすることを自覚させる。

ここで重要な点は、K チームの選手たちが地域住民たちとの交流によって、彼女らのアスリート・アイデンティティを強化していることである。AX さんは、《サッカーやってるよって、AX さんと約束したからサッカーやってるのって》、《だから頑張って K チーム入るんだ》と、自分を見て夢を抱く子どもたちを通して、自分のサッカー選手としての存在価値を再確認しており、女子サッカー選手ではなく、サッカー選手としての自負を感じていた。ここでは性別は関係ない。AX さんが目標に描くサッカー選手に自分を同一化していた。サッカー教室での経験を通して、彼女は、厳しい競技環境の中でもアスリートとして頑張ろうという力を得ることができている。このように、選手たちは、子どもたちとの関係においては、女子サッカー選手という周囲の視線から解き放たれて、サッカー選手としての自分を確認していた。

なお、AX さんは、家族やサポーターズ、選手個々人の知り合い、女子サッカー選手を夢見る学生たちなど、今もこれからも、彼女らをアスリートとして見続けてくれる人びととのかかわりを大切にしている。その人びとは、彼女らを男子より劣った存在として位置付けられる女子サッカー選手と見るのではなく、サッカー選手としての彼女らの姿を応援している。

以上、本章で確認してきたように、K チームと選手たちは、支援企業と地域住民に支えられているため、自らをサッカーする集団としてだけでなく、社会的な責任をもつ、人びとに期待されている集団であると自覚している。これらの人びとのおかげで、サッカーをする環境が与えられており、それに感謝するとともに、その期待に応えなければならないと考えているため、良識のある市民として行動することが日常的に彼女らに課せられた課題となっている。選手たちは、サッカー教室の活動を通して、自分たちが地域を代表するアスリートであること、地域住民たちに支えられていることを実感し体験している。

このように、地域社会と K チームの関係は、支援を媒介にして多面的な特性を持つ。つまり、互いに応援、協力していく関係が、企業による選手雇用・後援、選手のイベント参加、そこでの選手と企業・地域住民との交流などによって形成及び維持されている一方で、その関係が続くためには、K チームと選手は、地域社会の要請に従順でなければならないというジレンマも存在するのである。

６　小　括

第 5 章では、地域社会における K チームの活動を通して、財政的な基盤が脆弱的なチー

71 男の子たちが女子サッカー選手を憧れの対象と捉えているかどうかは、本論文では調査仕切れなかった。この点については今後の課題としたい。

ムでは、地域企業（支援企業）や地域住民とどのように関係を築きながら活動しているかを検討してきた。サッカーチームでは、J リーグの理念とその活動方針のもと、地域社会に貢献する活動を行うことを重要視する考え方が、女子サッカーにも求められ、K チームでもそれに則って活動を行っていることが確認できた。

支援企業による支援のありようは多様である。金銭的支援のみを行う企業もあれば選手雇用のみに協力するもの、その他にスポーツ用具の協賛および練習場所の提供を行うものもある。こうして支援企業は、女子サッカーチームへ資金提供や選手の雇用を行うことで、選手の生活環境の改善を図ることに貢献している。女子サッカーチームは、そうした支援企業の援助に応えようと、支援企業の人びととの交流活動に励む。選手たちは支援企業の運動会への参加や講演会の実施などを行っている。選手たちは、自らを単にスポーツチームを運営しているにとどまらず、地元地域を代表する社会的責任を持つ「道徳の学校」に相当する集団として意味づけて、その支援への恩返しの一環として、地域社会への貢献活動やサッカー教室などに励んでいた。このように、支援企業と女子サッカーチームとの関係は、支えるもの／支えられるものとして形成されている。

これらがよく浮上しているのが、地域貢献活動である。選手たちは、サッカー教室、お祭り、そこでのキャラバン活動などを積極的に行うことが、選手としての役割の一つであった。

しかし、このような関係性が一方では選手たちの生活を規定する場合もある。支援されるほど、彼女らは地域社会から常に見られる立場に置かれ、髪型すらも選手の思い通りにはできないことも見られた。さらに、地域社会との関係性による規定は、選手たちの勤務先などでものしかかり、選手たちはチームの活動以外においてでもサッカー選手でなければならなかった。これらについては、第 8 章で詳しく述べることにする。

第６章　K チームの選手間における相互関係

ここからは、女子サッカーの全体像を踏まえて、選手たちがどのようにサッカーを実践しているか、彼女らの視点からその労働と生活のリアリティに焦点を当てていく。

本章では、競技実践形態が異なる選手個々人が、互いをどのように理解し、そのような関係の中で共にサッカーをしているのかを検討する。ここで重要な点は、選手たちの労働と生活には、それぞれ差異がある一方で、サッカーのプレーにおいては同じように扱われる点である。競技実践形態は、単に労働や生活を示すにとどまらず、選手個人、選手同士、指導者と選手の関係に作用し、緊張をもたらすため、そこからチーム内に何らかの摩擦や葛藤が生じると考える。

そのため、本章では、特に K チームにおいて複数の競技実践形態が混在していること（差異）と同じチームのサッカー選手だという（平等的な側面での同一性）がどのように関わり合い、絡み合っているかに焦点を当てて、選手たちの日常の経験を描出することが重要である。

１　「本当の選手」という論理

ここでは、選手間の相互理解について確認する前に、チームの関係者全員が各選手に求めている「本当の選手」像[72]に言及しておきたい。チームの中では、「本当の選手」になることに価値が置かれているからである。チームの一員として競技活動をするには「本当の選手」としてチームの皆に認めてもらえるかどうかが極めて重要な意味を持つ。

> MG：疲労もたまってきているし、生活のこともあると思うけど、皆、サッカー選手だもんな。大変なことがあってもサッカー試合の日がやって来たら、試合はやらないといけないもんな、な？明日が公式戦、最後の試合になるけど、試合に出られる選手も、交代される選手も、また準備だけして終わる選手もいるかもしれないけど、皆サッカー選手だからそれぞれ試合に向けて頑張ろうね。

これは、MG さんが、ロッカールームで選手全員に対して発した言葉である。彼は、《皆、サッカー選手だもんな》《皆サッカー選手だから》という表現で、選手間の差異を帰一し、ひとつの集団としてまとめようとしている。この前提には、生活形態においても、試合時の役割においても、選手間に差異がある点を認めた上で、試合に向けては、全員がひとつになる必要性を強調することがわかる。そこには、多様な選手をひとつにまとめるための論理として「本当の選手」が持ち出されていた。《皆サッカー選手だから》と言っても、「本当の」

72 チーム内では、「本当の選手」像の表現として、それ以外に「本当のサッカー選手」「本物」という言葉も使われていた。その中でも、選手がサッカーに対する考え方や信念を述べる際は「本当の選手」という言葉は多く使われていたと感じたため、ここでは「本当の選手」という表現を用いることにした。

サッカー選手としてチーム内で、どの位置を占めるかをめぐって牽制や対抗、過剰同調が繰り広げられることになる。

では、「本当の選手」とは何か。それは、サッカーに本気で取り組む姿勢とチームへの貢献によって裏付けられる。どれだけサッカーに本気で取り組んでいるか、どれだけチームに貢献しているか、「本当の選手」として認めてもらえるかどうかは、それにかかっている。それでは、K チームにおいて「本当の選手」とされる例は、具体的にどのようなものをいうのだろうか。

サッカーに本気で取り組む姿勢というのは、まず身体的なデボーション（献身、専念すること）である。試合のプレーによる貢献（サッカーの実力）だけでなく、それに至るまでの選手個人の身体管理への姿勢を含む。この身体管理は、チームの練習に参加しただけで自然に出来上がってくるものでもなく、一日努力したからといって済むものでもない。それは、チームの練習以外の、皆の見ていないところでの努力に対して、より高い評価が与えられるものである。選手の競技実践形態が混在する K チームでは、チームでの行動時間が極めて限定的であり、チームの活動以外の時間の個人による自律的な身体管理が一定の比重を占めることとなる。AE さんに、チーム内で一番尊敬している選手について質問したところ、次のような回答がかえってきた。

> AE：なんかね、AU さんは、本当にすごくて。AU さんとは K チーム入った当初からだから、5 年ぐらいは一緒にやってるんですけど。すごい、努力する人なの、見えないところで。まあ、みんなもしてると思うけど。

AE さんの語りからわかるように、チーム内で尊敬される選手の条件となるのは、《見えないところで》、常に努力しているかどうかである。チーム内で、誰かが見ているところで努力することは、当たり前のことであり、尊敬される決定的な要因にはならない。一日で 2 時間ほどの短いチームの練習は、誰かに見られている状況にあるが、そのような活動時での身体管理は、そこまで評価されない。

評価要因になる身体管理というのは、チームの練習前後で行う個人練習や筋力トレーニングのような、《見えないところで》努力するものと見なされる。チームの練習の 2 時間以外の、1 日の 22 時間をどのようにチームのために費やしているか、競技のためにどのように自らの身体管理をしているかが、「本当の選手」という評価とかかわるのである[73]。そして、チーム内では、選手個々人の身体管理が、やがてはチームの競技力の向上につながるはずだと信じられている。日々の生活においていかに身体管理をしているかが、その選手がどれほどチームのことを思っているかを示すものであり、「本当の選手」としての姿勢に関わ

73 選手が《見えないところで》の努力をしているかどうかは、チーム内でどのようにしてわかるのだろうか。たとえば、チームのための貢献は、選手やスタッフの話の中で出てくる場合が多い。競技のためには、多くが身体管理に関わる努力になる。これは、練習や試合でのサッカー実力が目に見えるほど向上したことによって、チームの全員の気づきからわかるようになるものと言える。

ると考えられている。

しかし、競技面の身体管理だけでは「本当の選手」とされにくい。つまり、サッカーの実力だけでは、チーム内で尊敬されない。それに加えて、チームへの貢献も必要である。チームへの貢献とは、私生活を犠牲にしてまでチームに自らを捧げること、またサッカーのプレー以外のところでチームに貢献することである。

AG：プレーの方がうまい人？とかは、こういうプレーしたいとかっていうのがいっぱいいるから。自分の中では尊敬には当たらなくて、自分の中で尊敬するっていうのは、人間性だね……強ければいいっていうもんじゃないし、チームとして団体競技だから、人間性も絶対必要だから。うまければ良いですっていうのは、自分の中ではあり得ないから。

このように、「本当の選手」と見なされるためには、AG さんが指摘したように、《強ければいいっていうもんじゃない》のである。競技面やチーム活動時の意識だけではなく、生活面においても《人間性》が必要とされる。とりわけ、印象深かった点は《チームとして団体競技だから、人間性も絶対必要だから》という AG さんの語りである。一般的に考えると、サッカーは集団でおこなうスポーツであり、選手個々人の言動に目を向けるより、チームとしての結果がより重要視される競技のように考えられている。

しかし、彼女は、実力のみならず、選手個々人の人間性が大事とされる競技と言っているのである。それでは、ここでいう人間性とは、どのようなことなのか、AU・AC さんについての AE さんの語りを見てみたい。

AE：チームに対する愛がすごくて、自分の高校のときのね、修学旅行を AU もすごく行きたがっただろうけど、修学旅行の日と試合がかぶってて、それでも修学旅行はいかないで、試合をとって、本当に K チームのために、すごい尽くしてきたのが、もう AU なんだよね。だから、そういうのを見たり聞いたりしてるから、この子は、すごいなって思うし。自分もそのぐらい K チームに対する、なんだろう、情熱を注いでいきたいなと思うし、だから本当に努力家だし。なんだろう、なんか、めげない、負けず嫌いだし、すごい。

AE：合宿のときとかも一番最初に動くのが AC だし。そういうのを分かってるし、自分がやらなきゃっていうなんか責任感と犠牲心があるなって思って、そういうところは自分も見習えるし、サッカーとかでもいつも落ち着いてて、サポートできて、助けてほしいときにいつも助けてくれるのが AC。

以上のインタビューからうかがえるように、AE さんは、AU さんが、彼女の人生において一回しか経験できない高校時代の修学旅行より、試合を選択したことに感心している。AE さんは、こうした AU さんの過剰にチームへ同一化する姿を、「本当の選手」の姿として

受け止めているのである。このようなAUさんに対するAEさんの評価は、チームに尽くすということがどのようなものなのかを現している。ここにあるのは、チームへの過剰同調や自己犠牲への賛美である。

そして、ACさんは、チーム内で《一番最初に動く》選手である点が、AEさんにより指摘されている。ACさんの態度は、AEさんにおいて、チームに対する責任感と犠牲心によってできる行動として認識される。加えて、ACさんの競技面についても《サッカーとかでもいつも落ち着いてて、サポートできて、助けてほしいときにいつも助けてくれる》と語っているように、そのようなACさんの普段の心構えがあるからこそ、競技面でも、自分だけではなく、他の選手をサポートするプレーが可能になっていると、AEさんは考えている。

このように、サッカーに本気で取り組む姿勢とチームへの貢献をもつことが、選手個々人のチームにおける評価につながる。ここで、選手の属性や競技実践形態は問われない。選手たちは、そこにおいて高い評価を得るべく、努力することに日々、駆り立てられている。また、自ら積極的に「本当の選手」になるべく努力する。

以上に見てきたKチームにおけるデボーションは、チームの活動時の「デボーション（devotion）」と《見えないところで》の「セルフ・デボーション（self-devotion）」という二種類から捉えられる。

「デボーション」は、チームの活動時に忠実に忠誠心を持って、献身的にチームのために励む姿である。選手全員に義務づけられている、選手としての基本的な競技実践への基準である。「セルフ・デボーション」は、チームの活動以外の生活において、チームの指導者や選手たちが見ていないところで、選手の言葉で言うと《見えないところ》で、選手が競技に専念しようとする意志、姿勢、態度、行動である。たとえば、自主練習、筋力トレーニング、試合分析、普段の振る舞いなど、選手自らが競技とチームに対する情熱や責任を持っていないと、自らは実践できない姿勢とされる。また、チームのために忠誠心をもって献身的に貢献することが求められるときに、チームの指示事項に文句を言うことは、デボーションしていない選手の態度として理解される。このように、Kチームでは、選手の競技実践形態が多様であることで、選手全員が集まって活動する時間が少ないからこそ、セルフ・デボーションがデボーション以上に「本当の選手」としてのあるべき姿として繰り返し強調される。

以上で、Kチームの選手たちは、デボーションとセルフ・デボーション双方を日々実践し、習慣化させることによって、「本当の選手」になっていくと考えられている。これはサッカー選手（アスリート）が探求し、獲得すべきアイデンティティとして女子サッカー選手たちの中に浸透しているのである[74]。

２　プロ選手とアマチュア選手の生活実態

さて、選手たちは「本当の選手」になるべく、デボーション、セルフ・デボーションが求

74 女子サッカー選手になるということは、セルフデボーションをしているかどうかにかかるため、AGさんが《サッカーと向き合うっていうことは、やっぱりそれなりの覚悟とか必要だから》と語っていたと言える。

められ、互いに切磋琢磨している中で、競技実践形態によって各々の生活において異なる経験が生じている。そこで、アマチュア選手とプロ選手が、どのように異なる生活をしているのかを確認することとする。生活形態から生み出される差異は、チーム内の人間関係と、選手として一番大事な身体管理に大きく影響する。まず、アマチュア選手とプロ選手の自由時間には量的な差異がある。

一週間のアマチュア選手の自由時間（表 6–1）は約 4 時間半、他方、プロ選手の自由時間（表 6–2）は約 53 時間半で、両者の差異は 49 時間となる。これは、選手たちにとって、週 1 回ある試合に向けて、身体管理ができる時間の量的な差異と言える。

表６－１ アマチュア選手の生活形態
（支援企業社員と一般企業社員の平均的なスケジュール）

	日	月	火	水	木	金	土
7:30	試合	起床	起床	起床	起床	起床	チームの練習 or イベント
9:00 ～		勤務	勤務	勤務	勤務	勤務	
17:30		自由時間	練習場所へ移動	練習場所へ移動	練習場所へ移動	練習場所へ移動	
19:00			チームの練習	チームの練習	チームの練習	チームの練習	
21:00			帰宅	帰宅	帰宅	帰宅	

＊点線は、自由時間を表す（表 6–2 同様）

表６－２ プロ選手の生活形態

	日	月	火	水	木	金	土
8:00	試合	全休	起床	起床	起床	起床	チームの練習 or イベント
～			自由時間	自由時間	自由時間	自由時間	
18:00			練習場所へ移動	練習場所へ移動	練習場所へ移動	練習場所へ移動	
19:00			チームの練習	チームの練習	チームの練習	チームの練習	
21:00			帰宅	帰宅	帰宅	帰宅	

また、練習場所への移動についても、そこに身体の負担の差異が生まれる。専用のグラウンドがないため、選手全員は、グラウンドを転々することになる。それは、移動の多い選手は、より疲労度が増すことを意味する。K チームの練習場所について示すと、表 6–3 の通りである。

それでは、上記のような場所への移動が、選手の属性によってどのように異なる影響を及ぼしているのか、例として AS さんと PB さんをあげてみたい。まず、表 6–4 と表 6–5 に示した、AS さんと PB さんの総移動距離と総移動時間について、一週間単位で比較してみよう。総移動距離をみてみると、2〜3 月は 577.3km（AS さん）－ 177.9km（PB さん）＝399.4 km、4〜11 月は 548km（AS さん）－ 152km（PB さん）＝396 km となる。総移動時間 2〜3 月は、15 時間 57 分（AS さん）－ 5 時間 44 分（PB さん）＝10 時間 13 分、4〜11 月は、16 時間（AS さん）－ 4 時間 56 分（PB さん）＝11 時間 4 分、のような差異がある（図 6–1、図 6–2、図 6–3、図 6–4）。

表６－３ K チームの練習場所

Kチームの練習場所（2〜3月）

曜日	練習場所
月	休み
火	練習場所B
水	練習場所E
木	練習場所A
金	シムD
土	事務所C
日	練習場所B

Kチームの練習場所（4〜11月）

曜日	練習場所
月	休み
火	練習場所F
水	練習場所A
木	練習場所A
金	練習場所F
土	練習場所A
日	練習場所A

表６－４ アマチュア選手とプロ選手の移動について（2～3 月）

ASさんの移動経路（支援企業Aの契約社員・2~3月）

曜日	移動経路	総移動距離(km)	総移動時間
月	自宅-勤務先-自宅	86	2時間30分
火	自宅-勤務先-練習場所B-自宅	136	3時間4分
水	自宅-勤務先-練習場所E-自宅	93.5	2時間41分
木	自宅-勤務先-練習場所A-自宅	104	2時間44分
金	自宅-勤務先-自宅-ジムD-自宅	100.4	3時間6分
土	自宅-事務所C-自宅	9.4	30分
日	自宅-練習場所B-自宅	48	1時間22分
一週間の合計		577.3	15時間57分

)さんの往復移動経路（プロ選手・2~3月）

曜日	移動経路	総移動距離(km)	総移動時間
月	休み		
火	自宅-練習場所B-自宅	66	2時間2分
水	自宅-練習場所E-自宅	17.4	40分
木	自宅-練習場所A-自宅	22	40分
金	自宅-ジムD-自宅	0.7	2分
土	自宅-事務所C-自宅	5.8	18分
日	自宅-練習場所B-自宅	66	2時間2分
一週間の合計		177.9	5時間44分

表６－５ アマチュア選手とプロ選手の移動について（4～11 月）

ASさんの往復移動経路（支援企業Aの契約社員・4~11月）

曜日	移動経路	総移動距離(km)	総移動時間
月	自宅-勤務先-自宅	86	2時間30分
火	自宅-勤務先-練習場所F-自宅	106	3時間5分
水	自宅-勤務先-練習場所E-自宅	104	2時間44分
木	自宅-勤務先-練習場所A-自宅	106	3時間5分
金	自宅-勤務先-自宅-練習場所F-自宅	106	3時間12分
土	自宅-練習場所A-自宅	20	42分
日	自宅-練習場所A-自宅	20	42分
一週間の合計		548	16時間

POさんの往復移動経路（プロ選手・4~11月）

曜日	移動経路	総移動距離(km)	総移動時間
月	休み		
火	自宅-練習場所F-自宅	32	1時間8分
水	自宅-練習場所E-自宅	22	40分
木	自宅-練習場所A-自宅	32	40分
金	自宅-練習場所F-自宅	22	1時間8分
土	自宅-練習場所A-自宅	22	40分
日	自宅-練習場所A-自宅	22	40分
一週間の合計		152	4時間56分

ASさんの移動経路（支援企業Aの契約社員・2～3月）
※【片道の距離・移動時間】

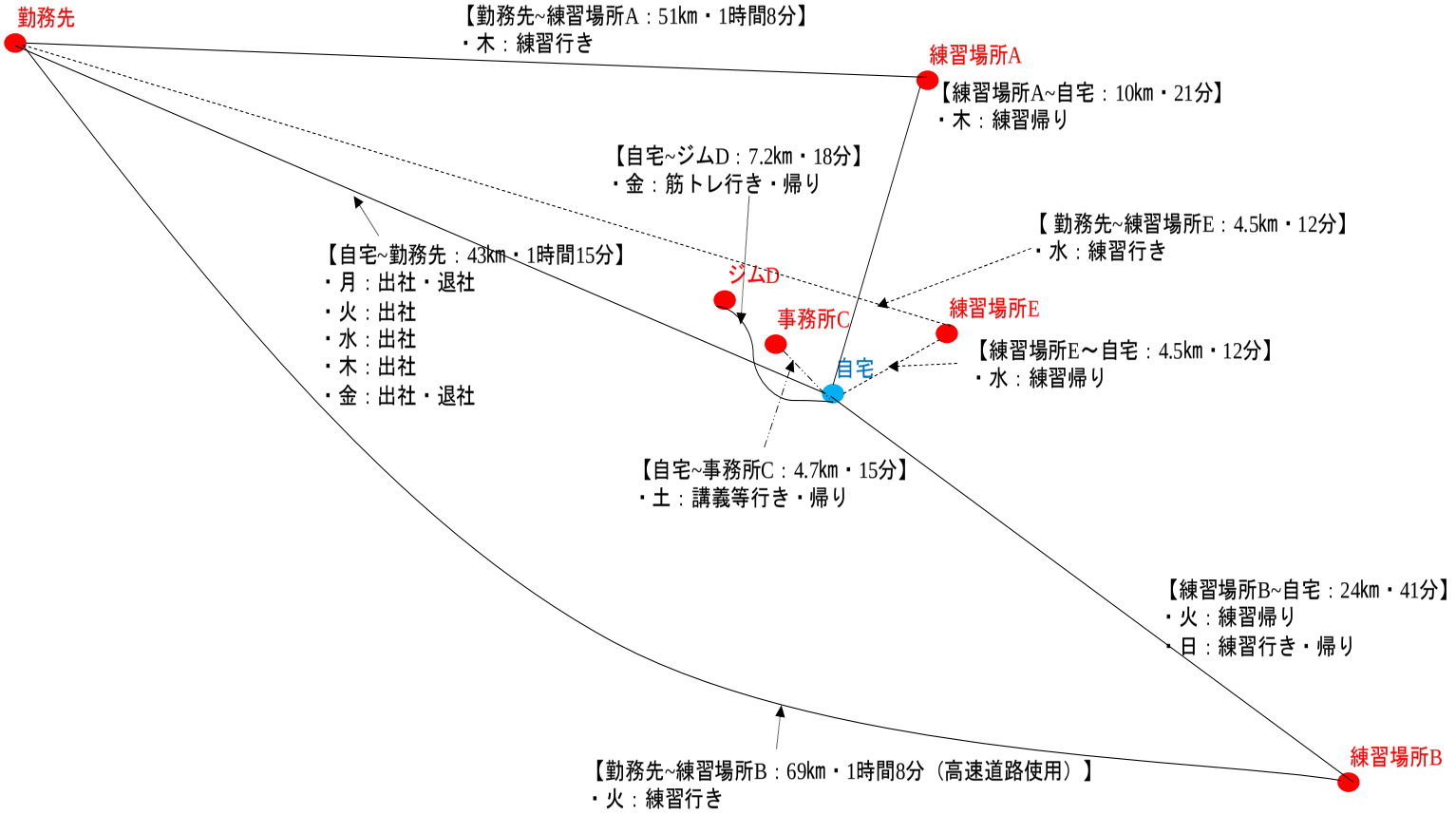


図６－１　アマチュア選手（ASさん）の移動図（２月～３月）

POさんの移動経路（プロ選手・2～3月）
※ 【片道の距離・移動時間】

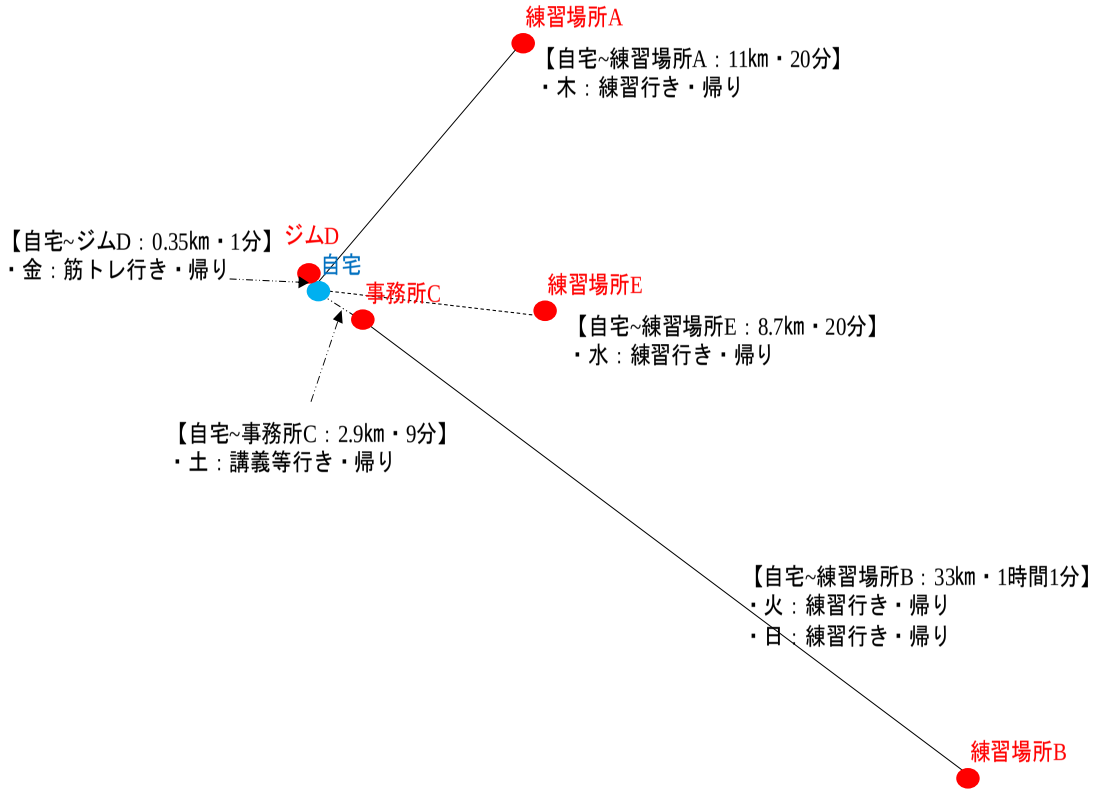


図６－２　プロ選手（POさん）の移動図（２月～３月）

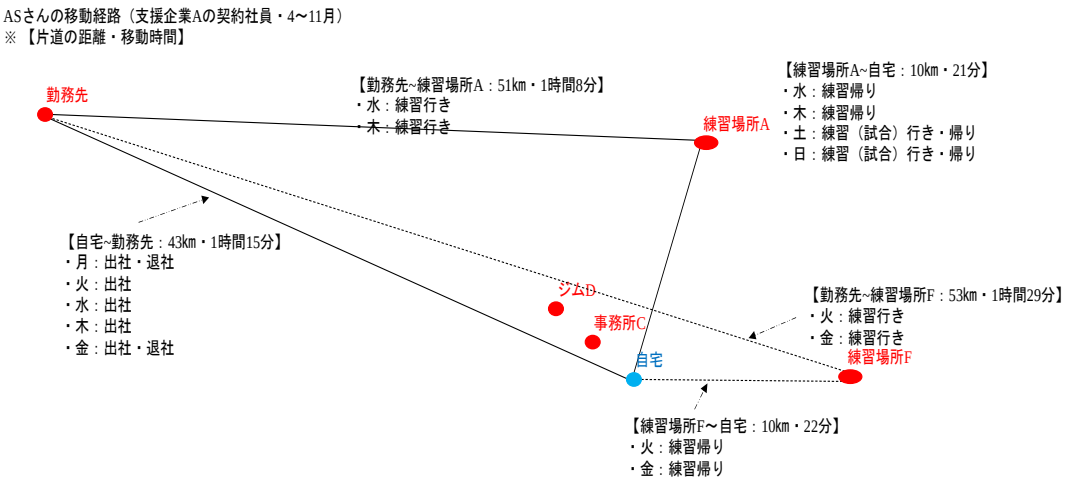


図６－３　アマチュア選手（AS さん）の移動図（4 月～11 月）

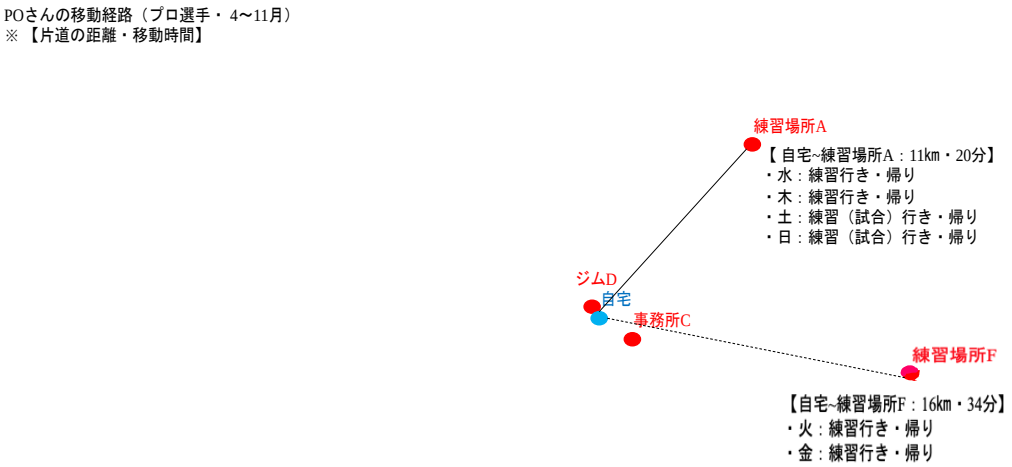


図６－４　プロ選手（PO さん）の移動図（4 月～11 月）

つまり、アマチュア選手とプロ選手は、同じチームで活動しているけれども、一週間における両者の移動距離には、約 400 km の差が、また移動時間にも 10 時間以上の大きな差が見られる。このことは、アマチュア選手がプロ選手より身体的・時間的に負担が大きい日々を送っていることを示している。例えば、AS さんの場合、平日において、身体管理をする時間的な余裕がほとんどない。退社した後は、練習に遅れないようにすぐ移動するため、夕食を食べられない場合も多い。また、AX さんも、平日、練習から帰宅しても洗濯などの家事もしなければならないため、睡眠時間を削るしかない生活を過ごしていると語ったことがある。

ここで重要な点は、これらの時間の量的な差異が、選手たちにおいて、サッカー選手としての身体能力と生活の質を左右するものとして作用している点である。週末の公式戦に向けて、身体を作り上げておく時間の有無が、選手としての役割を果たすために不可欠なものだと、選手たちは捉えている。つまり、選手たちにとって、サッカーを中心にして生活することが一番大事なことであるがゆえに、日常的におこなうべきと考えられている身体のケアや身体の疲れを取っておくという時間があるかどうかが、彼女らの生活の質を大きく左右する要素となる。移動距離と移動時間が増大すればするほど、選手の身体にとって負担となり、身体管理をすることが厳しくなるため、逆にチーム内でプロ選手は、アマチュア選手に比べ身体管理に集中できる時間のある者と見なされている。そのため、プロ選手は、練習や試合においても、アマチュア選手より高い身体能力を発揮することが期待され、また本人たちもそうしなければならないと考えている。

さらに、プロ選手の自由時間における日常的行為も、より監視されるようになる。なぜなら、アマチュア選手が働いている昼間の時間に、自主練習をしているかどうか、チームに貢献する時間の使い方をしているかが、スタッフやアマチュア選手たちによって、理想的なプロ選手として評価される条件となっているからである。自主的な身体管理のできない者は、プロ選手であっても、「本当の選手」として認められることが難しくなる。こうした理由で、同じチームの選手であっても、アマチュア選手とプロ選手の日常生活の経験は一概に捉えられず、各々に対する評価もその基準が異なる。

このように、日常生活の過ごし方の差異が、アマチュア選手とプロ選手の間の溝を深め、K チーム内で選手の間に仲間割れのような、互いにせめぎ合う状況を生むのである。これが、同じチーム内で選手の競技実践形態が混在している場合に生じる選手間の葛藤である。これは、同じチーム内で選手の属性が同じである場合には生じない。

３　「契約上のステータス」と「認識上のステータス」

こうして選手たちの間で生活実態が異なるため、プロ選手とアマチュア選手の間では、ある選手に対して「本当の選手」かどうかは、属性に相応しく行為しているかどうかで、相互に理解される場合もある。そのため、チームの中には「契約上のステータス」と「認識上のステータス」が生み出されていると考えるのが妥当である。

「契約上のステータス」とは、プロ、アマチュア、支援企業社員、一般企業社員など、チームが選手を受け入れるときに、選手情報として獲得できる身分上のステータスをいう。

「認識上のステータス」は、個々人に対して付与される評価によって構成される。プロ選手がアマチュア選手に対して《みんなは働いてて〔偉い〕》という表現や、アマチュア選手もプロ選手に対して《プロなんだから〔もっと頑張るべきだ〕》と言っているように、互いを認識し合うことによって形成された、他者理解上のステータスである。

K チームでは、選手の属性は、選手登録上の区分を意味するに留まらず、身体管理に割くことのできる時間の量的な差異も生み出すことから、「本当の選手」に対する相互の評価は、契約上のステータスによって異なる尺度が用いられる。ゆえに、契約上のステータスと、選手同士が互いの属性にもとづいて日々の生活や行為の違いを認識した上で形成される認識上のステータスという二つのステータスが、チーム内でせめぎ合うことになる。「本当の選手」かどうかは、選手全員に一律に求められていたが、実際には契約上のステータスによって、認識上のステータスを図る評価の尺度は異なっている。

たとえば、契約上のステータスの場合、プロ選手が自分を含めて《みんな》と語っているのではない。その「みんな」とは、自らとは異なり、昼間に別の所属先で、サッカー以外の就労や学業をしているアマチュア選手のことを指している。また、認識上のステータスの《プロなんだから》という語りは、アマチュア選手である自分自身と、プロ選手とを別の存在とした上で語られているものである。こうして K チームの選手たちは、互いを同一に捉えているのではなく、属性ごとに違いをもつ存在として認識している。そして、それにもとづいて互いの評価を行い、そこに認識上のステータスを形成している。

このように、同じチームの選手であっても、プロ選手とアマチュア選手の日常生活の経験を同一視して捉えることはできないのである。ここでポイントとなるのは、プロかアマチュアかで選手の生活が大きく異なるので、サッカーに専心できる環境にあるプロ選手に対してはより厳しい評価が、サッカー以外の労働に追われるアマチュア選手に対しては相対的にはより寛容な評価が適用されるという点である。ここにおいては、プロ選手の方がアマチュア選手より厳しい評価の目にさらされ、追い詰められがちなのである。

4　プレー場面におけるプロ選手とアマチュア選手の立場の違い

そうした点は、プレーの場面においても生じている。プロ選手とアマチュア選手は、相互に《プロなのに》《アマでも》という視点から認識し評価し合う。特に、紅白戦においてプロ選手とアマチュア選手の間の溝は深くなる。そこでは、競技面における貢献について、プロ選手に、より高いハードルが課せられる。アマチュア選手よりもプロ選手の方に、より強いプレッシャーがかかり、チームの中での認識上のステータスに影響を与えている。プロ選手の方がアマチュア選手よりもチームの中で圧倒的に人数が少ないこともあり、相対的に立場が弱いという状況が出現している。

PB：練習と試合が違い過ぎて、練習のプレッシャーの速さと試合のプレッシャーの速さと全然違うから、練習中も〔試合では〕こんなプレッシャー遅くないなとか思いながら、いつもやっている……〔試合と同等なレベルでの練習ができないから〕試合の方が自分にどんどん苦しんでくるし。だから試合のときに、判断遅いし。そういう部

分で、試合出ている組とやると、自分ボール取られたりするから。だから、もっと来てほしいとか思う。最初の頃は、何も考えないでやってて、今日調子良いなみたいな感じでやってたけど。試合で、何でこんなに自分練習でやっていることができないんだと思ったときに、練習のときの意識だなと思って。最近は、そういうのは、すごく意識しようとはしている。

PB さんは、プロ選手や競技力の高いアマチュア選手との練習について《試合出ている組とやると、自分ボール取られたりするから》と表現しているように、ボールを取られた方が、プロ選手にとって同様な実力で練習ができていると感じていることがわかる。試合に出ていない組に対しては、《もっと来てほしいとか思う》と語っているように、競技面において、一部のアマチュア選手の競技力に不満も示している。そうした不満は、試合を経験していく上で、ますます強く感じるようになる。しかし、PB さんは、そうした不満を言葉で表すことはできない。なぜなら、アマチュア選手は、仕事をしてから練習に来ていることを知っているからである。PB さんは、練習時において、競技力向上への欲求が満たされないまま試合に臨んでいる。ここで、プロ選手は、アマ選手に対して、不満を抱くとともに、遠慮もしている状態と言える。

また、PB さんは、《負けたときとかに、プロの選手が、やっぱりそれなりに働きをしてないから勝ってないわけだし、他の子は働いているから、その分、プロの 4 人がいないと勝てないよねって思わせるぐらいじゃないといけないけど》と話し、試合につながらない練習をしている点は言い出すことができない。だが、PB さんがミスをしたら、アマチュア選手たちから《日頃ちゃんと練習してないでしょう》と言われる。練習それ自体より、選手の属性が、評価の要素や非難の対象となる。こういう点に対して、PB さんはストレスがたまるときがあるという。このように、プロ選手は、チーム内でむしろ弱い立場であることがわかる。

よって、チーム内部では、競技以外の活動時の発言権の順位が、次のように現れる。それは、発言権の強い順に、スタッフ、最年長の選手（アマチュア選手）とキャプテン（プロ選手）、アマチュア選手（社会人）、プロ選手、アマチュア選手（学生）の順であった。一般的には、アマチュア選手とプロ選手が混在している場合、プロ選手に発言権があると思われがちであるが、K チームではキャプテンを除いて、その立場が逆であった。プロ選手は、アマチュア選手より身体的に時間的に余裕があるという理由によって、チーム内では、アマチュア選手より相対的に脆弱な立場に置かれていた。

このように、本章では、認識上のステータスが契約上のステータスより低いものとなっていることが明らかになった。よって選手たちは、チーム内での自分の立場と振る舞いの間に混乱し、より不安定にさらされながら、競技を実践している姿が見てとれた。

5 小 括

第 6 章では、同じチーム内で選手の競技実践形態が異なる中で、選手たちはどのような経験をしているかについて検討した。選手たちが K チームに所属するということは、選手個々人の感情を抑えてまで、チームの指示事項に従順にならなければならないことを意味して

いた。それがチーム内で「本当の選手」として認められるために必要とされる選手としての態度でもあった。そこにおいて「本当の選手」に求められたのは、特にはセルフ・デボーションであった。これはサッカー選手が獲得すべきアイデンティティとして理解されていた。

そのため、選手個々人がチームへ自己犠牲することが賞賛されることもあった。それが特徴的に現れたのは、AE さんが修学旅行より、試合を選択した AU さんを賞賛する語りである。高校時代の修学旅行は、AU さんの人生において一回のみで、リーグ戦は毎年 10 回以上行われる。だが、AE さんは AU さんの選択を尊敬している。こうしたチームへの過剰同調や自己犠牲への賛美は、アスリート・アイデンティティの探求に付随するものであると言える。

このように、K チームでは、選手の競技実践形態が多様であることで、選手全員が集まって活動する時間が少ないからこそ、セルフ・デボーションがデボーション以上に「本当の選手」としてのあるべき姿として繰り返し強調される。ここには、石岡が、ボクサーはジムでの集団練習と集団生活を通してボクサーになっていく点を示唆した点と相応する。「ボクシングは、ボクサーの日常の深淵から捉える限り、個人競技ではなく集団競技なのだと言える」［石岡, 2012 : 127］という指摘を鑑みると、サッカーはその逆であると言える。サッカーは、集団競技だからこそ、選手個々人の役割やサッカーに向き合う態度が非常に重要視されるからである。よって、選手個々人の労働と生活から捉える限り、サッカーは集団競技であると同時に個人競技でもあると言えるのではないか。

また、選手個々人の生活実態が、大きくプロ選手とアマチュア選手の軸で異なることから、プロ選手の方がより厳しい評価の目にさらされ、追い詰められがちであった。例えば、プレー場面において、プロ選手は昼間に仕事をしていないため、小さなミスでも責められる立場に立たされていた。そのため、一般的には、アマチュア選手とプロ選手が混在している場合、プロ選手に発言権があると思われがちであるが、女子サッカーチームでは学生を除いて、その立場が逆であった。それゆえに、プロ選手たちは、アマチュア選手から突き上げを食らったりしても反発できず、それに対してプレッシャーを感じて遠慮したりする姿も見られた。

以上、K チームの選手たちは、サッカー選手として同じ競争をしながら、他方で認識上のステータスが契約上のステータスより低く位置づいていることによって、競技活動とそれ以外の生活が総体的に不安定性にさらされながら競技活動を行なっている点がわかった。

第７章　プロ選手の労働環境

本章では、K チームの選手の中で、プロ選手の労働環境に注目する。プロ選手の競技活動はどのようにして可能となっているのか、またプロ選手のチーム内での位置と、それゆえに直面する困難を明らかにする。

１　契約と労働条件

K チームのプロ選手たちは、監督のスカウトによってプロ契約に至った。4 名のうち、1 名は K チームへ移籍、もう 1 名はセレクションで選ばれ、残りの 2 名は大学のインカレでスカウトされたという。こうしていずれの選手も、監督に声をかけられ、K チームへプロ選手として入団することになった。

契約時の年俸金額は概ね以下のようだと思われる。トップリーグの女子プロサッカー選手の年俸は 300~400 万円[75]、同じくトップリーグのアマチュア選手の年俸が 180 万円~200 万円と報道されることから、K チームのプロ選手の年俸は、180 万円~200 万円程度と推定される。この金額は、現代の日本で自分一人の生活すら賄うことが難しい程度の金額であり、プロ選手とは言っても、その生活の経済的基盤はかなり厳しいものにならざるを得ない。それでも生活できているのは、彼女らは実家で生活しているためである。実際、実家暮らしではない選手は、チームが提供するアパートに住んでおり、この選手と実家暮らしの選手とでは年俸の金額が異なっていると考えられる。

プロ選手たち自身は、自分の年俸に対してどう受け止めているのだろうか。一言で言えば、皆、その金額に納得しており、むしろ女子サッカー選手の中ではアマチュア選手に対して相対的に優遇されている方だと考えている[76]。なぜなら、女子サッカー選手は、サッカーをするために別の仕事と両立しながら、競技活動をしなければならないのが当然のこととして選手間で共有されているからである。それゆえに K チームのプロ選手たちは、決して十分とは言えない、社会的には低所得者層に位置付けられる年収であるにもかかわらず[77]、トップ選手ではない自分がサッカーで収入を得られていることを誇りに思っている。そこでは、男子サッカー選手との格差も大して問題となっていない。それが現実だと考えている。
このように、プロ選手たちは、贅沢はできない最低限の生活の中にありながら、しかし、サッカーができる今この瞬間を何よりも大事なものとして受け止めている。

プロ選手の契約内容とは、サッカーの試合において結果を出すことに尽きる。そのために、選手は、1 日の 24 時間をすべてサッカーのために捧げていると言っても過言ではない。実

75 J-CAST ニュース［2015.07.07］を参照。
76 以前アマチュア選手として活動したことがあった PQ さんと PO さんは、サッカーだけで生計ができる現在に満足しており、PO さんは、もうアマチュア選手に逆戻りすることはできないことを語るほど、プロ選手になれたのに対し責任を感じつつも生活面では安心していた。
77 低所得者に関する明確な定義は存在しないものの、厚生労働省の調査では、ケースバイケースの対応によって 200 万円以下を低所得者と捉えている［THE PAGE, 2016.04.25］。

際の平日のチームの練習は２時間とわずかであるが、プロ選手は週末のリーグ戦に備えて、日々身体を訓練し、サッカーに没入することが義務付けられている。そして、その努力がチームの勝利につながるように結果を出すことが、彼女らの最も大事な仕事である。また、プロ選手はチームの顔として、新聞や雑誌、メディアのインタビューなど様々な宣伝活動に応じることも重要な仕事とされている。このように、プロ選手は、プレー面においても、チームへの貢献面においても、アマチュア選手より多くの責任が負わされている。

その労働時間の多くは、先に見たように、個人による自主練習によって構成される。それは主に筋力トレーニングや走り込み、キックやシュートの練習、サッカー試合分析などをあげられる。

２　K チームにおけるプロ選手の位置付け

すでに述べたように、プロ選手は、アマチュア選手よりも、身体管理にあてる時間的な余裕がある。そして、それが返って競技活動における両者の溝を深めている。ここで重要なのは、その溝が競技活動以外の場でも作用し、プロ選手は、常にアマチュア選手からの評価にさらされている点である。

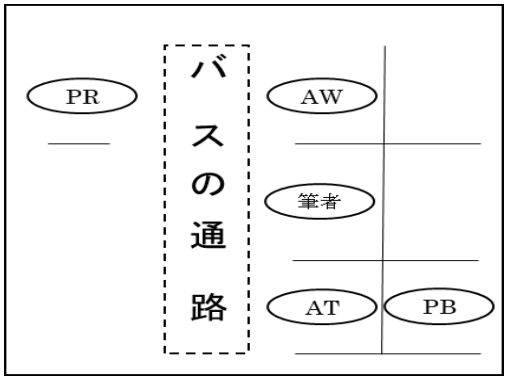


図７－１　バスの座敷配置図

たとえば、ホーム試合のため、競技場へ移動している際、バスの中で生じた出来事である。このエピソードは、PR さんのモバイルゲームのスコアが非常に高いのを、AW さんがからかうことによって発生した。二人は、SNS 上で友達となっているため、同会社が開発したゲームでは、スコアや順位を互いに知っていた。それで AW さんが、PR さんのゲームスコアを知った。

バスの中で、二人は近くに座っていたこともあって（図 7−1）、AW さんは、PR さんに向かって《何時間ぐらいゲームしていたの？》と聞くと、PR さんは、《そんなにスコアあげてないでしょう》と答えた。すると、AW さんは《暇人～》と PR さんをからかい始める。それを言われたとたん、PR さんは《暇じゃないよ。結構忙しいよ》と言い返しながら、イヤホンを耳に当てる。その途端、PB さんが AT さんにむかって《どうせ暇だから、昼間にご飯作っといてね》と、PB さんの家の近所で働いている他のアマチュア選手に、そう言われたと苦情をいう。プロ選手たちは、チームの活動以外の日常生活において、アマチュア選手が勤務している間に自由時間を過ごすことができるため、アマチュア選手より時間的な余裕があるものと見なされ、「暇人扱い」をされているのである。

そこで問題となるのは、アマチュア選手がプロ選手の自由時間の使い方について干渉してくる点である。アマチュア選手からすると、プロ選手が昼間に遊んでいる姿が容赦できないのである。この点が、プロ選手に、チーム活動以外の生活においても、息苦しさを感じさせている。プロ選手は、スタッフやアマチュア選手による評価に、日常的に縛られている。

ところで、プロ選手たちは、自由時間に遊んでいるわけではない。プロ選手なりに、自主

練や筋肉トレーニングをしている。しかし、PB さんが《他の選手は働いてて、絶対時間的にも厳しいし、体もきついと思うけど。やっぱプロの選手ってそれがそのまま消える》と語っているように、昼間に働いていないという理由で「暇人扱い」をされているため、体のきつさについては到底言い難くなっている。また、PB さんは、《日頃ちゃんと練習してないでしょう》とアマチュア選手に言われた経験があることから、言われたことに対して言い返しても、それは言い訳をしていると思われがちな状況にある。ゆえに、プロ選手は「暇人扱い」をされても、アマチュア選手の前で身体と時間に関する発言はできず、プロ選手の発言に関する立場は、アマチュア選手より弱者に位置づいているのである。

３　痛みをめぐる経験に見るプロ選手の困難

３－１　「病い（illness）」という視点

プロ選手がアマチュア選手の前で身体の疲れや時間に関する発言ができないことを顕著に示しているのが月経の痛みへの対応に関する、以下に述べるような事実である。筆者のフィールドワークでは、プロ選手は、チーム内で自分の居場所を確保しつつサッカーをし続けるために、月経の痛みを隠すという行動をとっていた。なぜ、彼女らは、このような行動や対応をするのか。月経への痛みを隠す行動は一般社会でも見られることであるが、ここではサッカーチームにおける痛みの意味の考察を経て、その痛みを隠すという行動から読み取れる、女子サッカー選手固有の意味を検討したい。

ここで、Kleinman［1988＝1996］の「病い（illness）」の研究は有効な概念となる。月経は病いの事例に当てはまるものではないが、Kleinman が病いの事例を通じて「痛み（suffering）[78]」の考察へと展開したことに明らかなように、本章においても参照されるべき重要な研究となる。

Kleinman［1988＝1996］は、ある人間が病んだ経験について「疾患（disease）」と「病い（illness）」を区別する。「疾患」とは、患者の経験を医学的治療の視点から捉え、その経験を生物医学的に診断する用語である。一方で「病い」とは、病者が患うことの経験を主観的意味や社会的文脈に沿って理解するものを指す。つまり病いは「病者やその家族メンバーや、あるいはより広い社会的ネットワークの人びとが、どのように症状や能力低下を認識し、それとともに生活し、それらに反応するのかということを示すものである」［Kleinman, 1988＝1996：4］。彼は、病いの経験へアプローチするためには、「一般に共有されている文化的意味と、個別の下位集団に限られる文化的意味とを分けて考え」、そこでの症状を特徴づける「ローカルな知識体系や、ローカルな人間関係システム」を把握する必要があると指摘している［Kleinman, 1988＝1996：17］。本性では、この Kleinman の指摘をもとに、選手の痛み

78 「pain」とは、頭痛・歯痛といった痛みそのものを指している一方で、「suffering」とは、「自己概念にも影響を及ぼしうる心身の苦しみや痛み」［楠永・山崎, 2009：26］である。そのため、「suffering」に関する研究では「ある個人が痛みをどのように語り、どのような出来事がそれを引き起こしたか」［Black・Rubinstein, 2004：S17］に焦点を当てており、痛みをめぐる個人の経験について説明しようとする。したがって本論文では、痛みの英語訳として pain ではなく「suffering」という用語を使う。

の経験について、医学的処置によって乗り越えるべき困難として捉えるのではなく、選手を取り巻く知識体系や社会関係とのかかわりから論じる。

３－２　選手の競技実践形態を問わず、痛みはチームに公的に伝えること

K チームにおいて、通常、痛みに関しては、選手の競技実践形態に関係なく、スタッフや選手たちに伝えることができる。フィールドワーク中、日常的に見られたのは、スタッフたちが選手全員に対して身体管理の徹底を要請する場面であり、これが彼女らのケガへの対処にもつながることが強調されていた。練習終了後、チームの全員が集合した際に、スタッフがケガへの注意やその予防、ケガからの復帰のため、選手たちにチーム練習以外の時間における筋力トレーニング・栄養・睡眠・ストレッチといった身体管理の重要性について述べるのは、極めて日常的である。なぜなら、チーム内では、軽い捻挫から靭帯損傷までケガが頻出しており、とくに重傷の場合は、選手としてのキャリアが左右されサッカーのキャリアを諦めた選手もいるからである[79]。

そのため、選手たちもまた、チームの競技力と自らのキャリアにかかわる問題であるとして、自己管理を徹底しようとする。つまり、K チームでは選手の身体管理の徹底は、スタッフの要請だけではなく、選手の自覚によって遂行されているのである。1 日に 2 時間ほどしか時間を共有できない K チームの事情から、選手が自ら身体管理することはとりわけ重視されている。

こうした文脈において、選手たちが、認識上のステータスの維持と関係して最も重視しているのが、軽いケガを抱えているときや風邪などでコンディションが悪いとき、どのように身体を整え、どの程度までプレーをできるか、的確に自己対処することである。そのため、選手がチームに自らの身体状態について公的に伝えることが重要になる。まず選手はコンディショニングコーチに身体の違和感を報告する。そのコーチは、それを監督 MJ さんや他のコーチに報告し、彼らと選手が今の身体状態をどのようにして最大限に競技中に行かせるかを互いに確認する形になる。

たとえば、PO さんは足の動きに違和感があった際に、自らの身体状態をチームに伝え、リハビリメニューを実施しようとした。ところが、スタッフは、PO さんの足の動きに制限があるにもかかわらず、彼女と話し合った後、彼女のできる身体の動きに合わせてフォメーションを再整備し、彼女を試合に出場させることにした。つまり、選手はスタッフへ身体状態について報告し、スタッフは選手の身体状態を確認しながらチーム全体がそれを共有する。その上で、スタッフはチームとしての対応を練るのである。このことについて PO さんは、《それでも〔足に違和感をもっていて、完璧な身体の動きができないのに〕出してくれたから、監督から信頼されてると思った》と、筆者に語ったことがある。選手はケガを抱えていても、その中で出来る範囲でチームのために貢献する姿勢が、チームにおいて信頼を獲得する要因となっている。すなわち、ケガはチームに申告し、むしろそれに対してどのように対応するか、善処の姿勢を見せることが信頼につながるということになっている。

---

79 AG さんは、ケガのため 1 年間選手のキャリアが中断されたことがあった。

よって、K チームの選手にとってケガとは、すべてがマイナスなものと捉えられているわけではなく、それをどのように管理し対処するのかに応じて認識上のステータスの維持が促されるのである。選手はケガを隠さず、身体状態についてチームに公的に伝え、なおかつ、その中で善処する姿勢を見せることによって信頼を得ようとする。ここにおいては、自らの身体状態をチームへ公的に伝えることが、選手にとって重要な営みとなるのである。

３－３　PB さんの痛みに対する行為

しかし、月経の痛みをめぐる PB さんの事例からは必ずしもそうは言えないことがわかる。彼女は、痛みについてチームへ公的に伝えなかった。これは、選手個人の痛みは公的に共有すべきというチームの規範とは異なった行為であった。彼女は痛みをスタッフや同性のチームメイトに伝えず、それを我慢してでも走り込みの練習に参加し、さらに先頭に立って走り続けていたことがある。これに注目すると、選手の痛みをめぐる困難には個人の心理的生理的経験を超えた、チームの秩序の中で起きる認識上のステータスが深く関係していることが、より鮮明に見えてくる。

具体的には以下のような経緯である。平日の走り込みの練習が開始する前、筆者は駐車場で PB さんにばったり出会った[80]。彼女は将来的には体育教師になることを目指しており、頻繁にチームメイトと試合後には審判の判定などの競技に関する話をしたり、また、普段から身体状態や恋愛話、好きな食べ物などの日常的な話題を共有したりする社交的で活発な性格の選手である。そうした彼女が、この日は小さい声で《生理痛がひどい[81]》と辛そうに筆者に言い出した。

PB：今日何も食べれなかったし、生理二日目で、めっちゃ吐いてから来たんだよね〔筆者にむかって〕。
◎：無理しないで今日具合が良くないと〔コーチに〕言った方がいいと思う。
PB：いやいや、まあ、走ってみるわ。

上記のように、生理痛を抱えていた彼女は《走ってみる》と言いながらグラウンドに向かう。PB さんは生理痛で苦しんいることを男性コーチに伝えようとせず、普段どおり選手の円陣の中に立っていた。それどころか、彼女は生理痛を表に出そうともせず、《いつもより広くありません？めっちゃきついと思う》と走る範囲が広すぎると発していた。この言葉は、すでに PB さんが生理痛で苦しんでいることを聞いた筆者からすると、チーム全員の前で痛みを隠しつつ、ほのめかしているようにも見えた。

結局、PB さんは、グラウンド全体を使って行うハードな走り込みに参加し、先頭に立って走りながら練習メニューをこなしていた。さらに、他の選手に先頭を抜かれないように、

80 当日、練習に参加していた 5 名のスタッフのうち、女性スタッフは筆者のみであった。
81 本章では、月経をめぐる痛みを表す言葉として「生理痛」を用いる。また、その痛みを分析的な用語として論じる際には「月経」という言葉で表記する。

最後まで先頭のまま完走した。それを見ていた筆者は、彼女の痛みが治まってきていると捉えていた。その後、ミニゲームも行われた。PB さんはプレーし続けた。

練習が終わって解散となってから、筆者は駐車場に向かって歩く PB さんに近寄り《もう大丈夫ですか》と声をかけた。すると彼女は《いや、早く帰って休みたい》と言いながら、その場を去った。つまり、彼女は生理痛を我慢してそれを隠しつつ練習メニューをこなし、ただ練習をこなすだけでなく、ハードな走り込みも先頭に立って走ることを選択したのである。

ところで、実はこの練習中、次のようなこともあった。ミニゲームの最中に、AP さんが、めまいがしてきたことを男性コーチへ伝え、ゲーム途中に休憩を取ったのである。その後、AP さんは、もう大丈夫になったとスタッフに伝え、ミニゲームに復帰した。きつい生理痛でも、その痛みを言い出さなかった PB さんと、ミニゲーム中でもめまいを訴え、休憩をとった AP さんの行為は対照的なものであった。

３－４　女子選手同士に共有されている月経への理解

ここで、PB さんの行為を考察する前に、女性の月経や女性アスリートの月経をめぐってどのような議論がされてきたかを検討しておきたい。これが、PB さんの月経への対応を理解するのに手掛かりになると考えたからである。

これまでの研究では、医学的観点から女性アスリートの月経をめぐる困難は、主に心理的なサポートや月経の対処教育によって解決できると論じられてきた［橋本ほか, 2003 ; 佐藤・斉藤, 2010 ; 小田ほか, 2010 ; 津野ほか, 2015］。特に女性アスリートの間では、体調管理という観点から、女性アスリート個人が月経を自己管理し、医学的処置をすることが推奨されている[82]。

日本において月経は、明治期以降、病理化言説や非病理化言説、母体としての身体管理など、その医療化が進められ［田口, 2003 : 196］、その結果、「女性たちがさまざまな人びとと社交的に築いているネットワークや身近な人との関係性を断ち切り、自己がプライベートな空間で自分の身体と向き合わされることを帰結」［田口, 2003 : 198］したとされる。

他方で、月経に関する主流となる議論は、月経のタブー性である。とりわけ、異性に対して語りにくい月経として議論されてきた。女子大学生の月経の捉え方を調査した佐藤と斉藤［2010］は、女子大学生が月経を理由に大学やアルバイトを休めなかったのは、「『休む理由として認められなさそう』『月経中であることを知られたくない』『異性に伝えにくい』」［佐藤・斉藤, 2010 : 218］からだと指摘している。

身体をめぐる政治という観点から歴史社会学的に女子体育を検討した角田［2000］は、女性の月経について「教員に対して『体操を休ませるということになって』はいるが、女子からの自己申告はまずない」［角田, 2000 : 79］という。ここでは、女性が男性教員をはじめとする異性に対して月経について語り出すことが自己規制されていたことがわかる。また、男

82 「月経困難症を有する女性は月経困難症でない女性と痛みの認知に差があるとの報告もあり、運動が痛みの認知に影響するという可能性も考えられる」［橋本ほか, 2003 : 167］

性は女性に月経について尋ねることが、セクシュアル・ハラスメントと取られる恐れをもっており、女性も男性に自分の月経について話すことで、男性に嫌がられてしまうと記し［津野ほか, 2015 : 27］、男女ともに月経について語ることが難しいと指摘している。このように、月経をめぐる痛みについて、とくに異性へ語りづらい点を指摘した研究が多く蓄積されている。

逆に言えば、これらの先行研究では、月経は同性間において、異性間よりも語りやすいことが示されている[83]。月経について女子同士の関係においては、その経験を共有し、互いに情報を得るなど、月経は日常的な話題であり、共感し合えるものとして位置づいていると言える。そうだとするならば、女性アスリート同士でも、月経を媒介とした共同性が成り立つと考えられる。実際、AH さんは、日常的に生理痛でチームメイトから薬をもらったり、他の選手と身体状態を話し合ったりするのが日常的なことという。このことから、K チームの選手間にも月経を媒介とした共同性が存在すると言える。

３－５　プロ選手の月経への対応を考察する

以上を踏まえて、PB さんの事例に話を戻すと、PB さんが女性のチームメイトにもその痛みを告げていなかった点が注目される。K チームでは、選手全員が自らの身体状態や痛みの症状をチームに公的に伝え、それをチームと共有することがひとつの秩序となっており、また、生理痛に関する症状[84]について現場スタッフに報告することは抑制されていない[85]。にもかかわらず、彼女はなぜ練習の際、月経による痛みを男性コーチにはもちろん、女性のチームメイトにも公的に言い出さなかったのか。PB さんは、先輩たちとも円滑な人間関係を築いていたが、先輩たちにも身体状態について打ち明けていなかった[86]。それどころか、それを我慢して走り込みの練習に参加し、あえて先頭で走ることを選択した。

めまいを訴えてきた AP さんと比較したとき、こうした行為の違いは、K チームにおける痛みと属性に基づく行為の規定性を示しているものであると考えると、PB さんの事例から二つの点が導かれる。ひとつは、K チームにおける痛みの意味は 3 つ存在することであり、

---

83 武谷［2012］が「月経に関するもっともオープンな国のひとつであるアメリカでは、初経が始まる前に主に母親から月経に関する予備知識を得ている……月経時の具体的な処置、初経後の女性としての振る舞いなどの実践的な知識は、母親などの親しい女性から知識を得ていることが多い」［武谷, 2012 : 201］と述べているように、月経は異性の父親よりも同性である母親に語りやすいものとして人びとに理解されている。また、猪瀬［2010］は、女子学生が初経の経験を友人の経験も参照していたことや、母と月経の経験を共有し、処置の仕方など月経に母娘間で伝達ややりとりが行われている点に着目している［猪瀬, 2010 : 10］。

84 有村と岩本［2005］は、月経による身体状態について「月経前から月経時にかけて各部位の疼痛、乳房緊満感、下痢・便秘、イライラ感など様々な随伴症状がある。それらの症状の多くは、痛みを伴うことを特徴としている」と報告している。

85 K チームでは、選手が生理痛に関する症状についてスタッフに報告することは抑制されていないが、推奨されてもいない。

86 《ベテラン組の選手がすごい大人だから、PQ さんとか、AS さんとか、だから自分とかが言ったこととかも、全然受け入れてくれる》と筆者に語っているように、PB さんは先輩たちと円滑な人間関係を築いていたことが見られる。

もうひとつは、K チームのプロ選手は、アマチュア選手の方より、サッカー選手としての自己意識とチーム内での認識上のステータスを維持するために、あえてその痛みを表面化せず、そしてそれによって身体的に自分を追い込んでいく可能性がある点である。

ひとつ目の K チームにおける痛みの意味は、3 つに分節化して捉えることができる。それは、性に関係なく語られる痛み、異性には語られにくい痛み、同性にも語られにくい痛み、である。では、これらの痛みをめぐる行為と認識上のステータスはどのように関わっているのだろうか。

性に関係なく語られる痛みは、男女共通で発生しうるケガや身体状態によるものである。すでに述べてきたように、めまい発生を男性コーチに伝え、途中で休憩をとった AP さんの場合や、PO さんが足の動きに違和感があることをチームへ報告したことも見られた。また AT さんは、風邪にかかったことを申告してチームイベントに欠席した。そして、PR さんは、練習中に足の痛みをその場で表明してからベンチで治療を受けたことも観察された。すなわち、めまい・風邪・捻挫など、男女共通で発生しうる身体状態や痛みに関しては、選手の属性に関係なく選手たちがチームへ申告しているのである。

異性には語られにくい痛みとは、女性特有の月経の痛みとして、男性へ語り出せないもののことをいう。PB さんは、足に違和感があった場合、コンディショニングコーチへ足の痛みを伝え、練習や試合前に普段からテーピングを巻いてもらっていた。しかし、生理痛をそのスタッフに伝えることはしなかった[87]。以上は、先行研究でもすでに指摘されてきた点と一致する。一方、本論文としては、見落としてはいけないのは次に述べる痛みである。

同性にも語られにくい痛みは、女性として共同性を備えた痛みであるにもかかわらず、社会的文脈次第で同性にも語れなくなるものをいう。PB さんは、男性コーチに対して生理痛を公的に言えなかっただけではなく、同じ女性であるチームメイトに対しても生理痛に苦しんでいることを伝えようとしなかった。彼女は、生理痛を理由に練習を休むことを、プロ選手として相応しくない行為として捉えており、それがプロ選手としての認識上のステータスにそぐわない行為であると判断していたと考えられる。選手の競技実践形態に基づく認識上の行為が重要視されるアスリートの間では、選手間のレギュラー競争のゆえ、チームメイトの女性同士の間でも月経は語られにくい。

K チームで言えば、他の選手から生理痛の薬をもらったり痛みの状態を話し合ったりする、また生理用品を貸し借りするという、月経をめぐる対処方法に関する共同性は、女子サッカー選手同士でも、プロ選手／アマチュア選手という競技実践形態の相違によって、その表出に差異が生じているのである。

PB さんは、痛みによって他者との関係やプロ選手としての評価が脅かされる点を憂慮し、生理痛を理解してもらえる可能性をもつ同性のチームメイトにも、その痛みを言い出せず、

87 「＜リオ五輪＞中国の競泳選手、生理とスポーツのタブー破る」という記事によると、「(世界レベルの) コーチの多くは男性なので、『いま生理中です』と言い出しにくい女性選手にとっては大変だ」と報告されている［BBC, 2016.08.16］。このように、PB さんも生理痛を男性コーチへ言い出すことが難しいと判断していることがわかる。さらに言えば、彼女が生理痛についてチームへ公的に伝えようとする行為は観察されなかった。

隠せざるを得なかったと考えられる[88]。すなわち、PB さんにとって、月経へどう対応するかが、自分の認識上のステータスの維持に関わっており、チーム内での居場所の喪失、アイデンティティの不安と関連することとして作用していたのである。

杉野［2010］は、スポーツ競技者自身が感じるケガとは、肉体的・精神的な原因を含む運動動作の障害であり、思い通りに体が使えない状態のことを「スポーツ障害」と定義している。過去に可能であった身体動作がケガによって不可能になることから生じる主観的経験や困難が「スポーツ障害」の経験だという［杉野, 2010：12-14］。また、ケガは居場所の喪失やアイデンティティの不安をもたらす恐れのある「スポーツ障害に特有のもの」であると述べる［杉野, 2010：26-32］。杉野はチーム内で選手に信頼が寄せられており、実力が認められている場合は、その選手にとってチーム自体が「居場所」となる点を見出している。

PB さんにとって、「本当の選手」としてみなされることは、認識上のステータスを維持すると同時に、居場所の喪失やアイデンティティの不安を現実化させないためにも、同じ女性の選手に対しても生理痛の辛さを表面に出さないよう、痛みを隠すことを選択せざるを得なかったと言える。つまり、彼女は走り込みの練習で、先頭で走ることによって、自らのステータスを維持し自分の居場所を獲得することに努めていた。彼女は、他のアマチュア選手から《プロのくせに、ふざけやがって》と言われたことがあり、月経によって休みを取ることがプロ選手としてのステータスに支障をもたらす恐れがあると考えていたのだろう。

以上のように、K チームのような集団では、認識上のステータスによって、選手は、よりいっそうの競争にさらされる。そのとき、選手間での標的になりやすいのは、属性別の人数が少なく、物理的な条件が有利な立場にあるプロ選手である。女子プロサッカー選手は、決して安定しているとは言えない。本章で見てきた通り、プロ選手の方が《プロとして》《プロなのに》という目線から常に厳しい評価の目にさらされる。

その結果、プロ選手は、女性同士が共同性（仲間意識）を確認するひとつの契機とも言える月経への対応においても追い詰められてしまうのである。競技以外の生活においても他の選手から監視の対象になっている不安定な日々を過ごしている点が明らかとなった[89]。

4　プロ選手の不安定な労働環境

本章では、Kleinman の「病い」への接近方法に倣い、女子サッカー選手が対応する、月経

88 月経に関する選手の行為は、AH さんからも説明することができる。AH さんは、生理痛でチームメイトから薬をもらったり、他の選手と身体状態を話し合ったりするのが日常的であった。他方で、プロ選手が生理によってプレーに支障が出た場合、それが言い訳として通用しないのみならず、居場所が確保できなくなる不安が潜んでいる点が考えられる。このように、月経をめぐる選手の行為は、アマチュア選手とプロ選手といったステータスによって構造化されていると考えられる。

89 最後に、PB さんが筆者に生理痛を言い出せた理由はなぜだろうか。それは、筆者が彼女の居場所に何の支障をもたらさない立場にいる者だったからであろう。筆者はコーチでも選手でもない、チームの秩序の外に位置する存在であったため、生理痛で苦しんでいることを表出できたと考えられる。このことから、認識上のステータスに左右される社会関係の内部においては、痛みを表出化できない秩序が暗黙に形成されている点がより鮮明に浮上する。

という痛みをめぐって考察をおこなった。K チームにおける痛みと選手の属性の関係性を解明することで、月経がどのように女性アスリートたちに意味づけられ、また、それが彼女らの人間関係においてどのような状況を生み出しているかをボトムアップ的に描いてきた。その結果、痛みをめぐって生じる出来事を通して、K チームには次の 3 点が存在することがわかった。

第一に、認識上のステータスをめぐってせめぎ合いが起きている集団では、異性間に限らず、同性間においても月経をめぐる「痛み」を語りがたい点が、本章の事例を通して見られた。K チームでは、選手が自身の生活形態に合わせて身体管理を遂行することが課題とされていた。選手たちは、常に選手としての行為への自覚が問われ、試合に向けて最善の準備を習慣化することが当然視され、とりわけ、プロ選手は「暇人扱い」をされるなど、アマチュア選手よりも、時間的に余裕のあるものと見なされているため、より厳しく「本当の選手」であることが要求されていた。これによりプロ選手は、アマチュア選手に対して反論するのが難しい。他方で、アマチュア選手はプロ選手を標的にすることが可能であった。このように、彼女らは互いを認識し、相互評価をしながら日々の生活を過ごしている。
それゆえに女性同士であるにもかかわらず認識上のステータスによって、月経は語れなくなったのである。月経の痛みという痛みの種類、および選手の属性に基づく認識上のステータスという規定性が、そこに孕まれていた。

第二に、女性アスリートは、月経がパフォーマンスを妨げるものと認識し、自己や月経する身体に対してネガティブな意識を持ちやすくなると考えられる。『女性アスリート戦略的強化支援方策レポート』によると、「女性には月経周期が存在し、女性ホルモンの変動とともに摂取エネルギー量の増加や体水分量が増減し、結果として体重や体組成の変動が起こる。月経周期が存在する女性アスリートにとって、このような生理的変化がコンディション維持を難しくする一因となっている」[順天堂大学マルチサポート事業, 2013 : 29] という[90]。この点は、女子サッカー選手たちにもおそらく同様に当てはまる内容であろう。

だとすると、女性アスリートたちは、パフォーマンス能力を発揮しなければならない試合時において、月経によって思った通りにプレーができない場合、月経を経験せざるをえない自身の身体によりアスリートとして大きな不安を抱えるようになる。PB さんのように、月経への対応が自分の認識上のステータスの維持に関わる集団内にいるものであれば、なおさらアスリートとしてのアイデンティティへの不安を抱えることになるだろう。

第三に、選手の属性が混在するチームでは、競技環境や選手の立場については、むしろプロ選手の方が脆弱であるという点である。杉野［2010］が「競技スポーツをしている者は、多かれ少なかれ、試合に出るために無理はしている。ただ、どの程度まで無理をするかは、本人の競技にかける気持ちのほか、チームの競技レベルや指導者の方針など、チーム環境によっても影響される」［杉野, 2010：22］。

---

90 月経周期と心身のコンディションとの関係性についての問いに対し、「関係があると思う」と回答した者が 72.9%であり、「関係がない」という回答（27.1%）より有意に高い割合を示しているのが報告されている［順天堂大学マルチサポート事業, 2013：36］。

このことから、K チームに見たように、プロ選手が、日常的にアマチュア選手によって自由時間に干渉され「暇人扱い」をされることになったり、月経への痛みさえも発言できなくさせたりする中で、PB さんのように無理をしてでも自分の居場所を確保しようとすることは、女子プロサッカー選手に、その不安定な競技環境が行為させる結果であると考えられる。さらに言えば、プロ選手は、競技実績により契約更新されるかどうかが関わり、それで生計を立てる可能性も関与しているため、競技活動への依存度が大きいトップアスリートであればあるほど、チーム内の問題（セクシュアル・ハラスメントや性虐待など）を受容し、それが摘発できない構造に置かれていると言える。

最後に、Hall［1996=2001］は、「女性の身体は、常にフェミニズムの中心に据えられてきたが、スポーツする身体についてはなおざりにされていた」［Hall, 1996＝2001：117-118］[91]と指摘している。月経は女性特有のもので男性アスリートには理解しにくい症状であり、月経による痛みや出血の量は、個人差がある点も月経を一般化して述べることを難しくしてきた。むしろスポーツ現場では、月経は女性の甘えと捉えられかねない。それは、男性指導者と女子選手の間で、あるいは、本章で確認できたように女子選手同士でも起き得ることである。つまり、女性アスリートにとって月経は、それによって甘える可能性がある点において、アスリートとしての自覚が低い二流の選手とする一要因になる危険性がある。その意味で、女性アスリートについて論じる際は、月経といった彼女らの身体的経験への視点は欠かせないだろう。この点において、本章の事例は、プロ選手の労働環境の不安定性だけでなく、女性アスリートの身体経験の重要性を指摘するものでもある。

5 小 括

第 7 章では、プロ選手 PB さんが月経の痛みへどのように対応するのかに注目して、プロ選手の労働環境がいかに不安定であるかを検討してきた。同じチーム内に競技実践形態が異なる選手がいる場合、プロ選手は、アマチュア選手からの評価の目に晒され、その労働環境が不安定である点が見出せた。月経の痛みをチームメイトにも隠していた PB さんの行為から、集団内で月経への対応が自分の「認識上のステータス」の維持に関わり、また、その痛みを訴えることが、チーム内での居場所の喪失、アイデンティティの不安を自らが招くことになりかねないことが垣間見られた。このように、K チームでは、アマチュア選手の方がプロ選手より相対的に強い立場にあることが本章の事例を通して浮き彫りになった。なお、現代の女性アスリートにとって月経は、アスリート・アイデンティティ、居場所確保を不安にさせる要素である点が事実である点も確認できた。以上のことから、一点言及しておくと、女性アスリートは、男性より競技を実践していく上で、月経のような身体的により難しい調整に迫られている。その意味で、女性アスリートが競技へ没入し、専念していくことは、男性よりも高いハードルに挑戦している点も描く事ができた。

---

91 Hall［1996=2001］は、女性のスポーツ経験を研究する際、スポーツをする女性の立場から、男性用と定義されているスポーツを行う女性ならではの身体経験、文化などをラディカルな観点から研究する必要があると指摘している。

第８章　支援企業の社員選手の労働環境

本章では、アマチュア選手がアスリートとして生きるために、どのように労働と競技活動を両立しているかについて明らかにする。とりわけ、ここでは、アマチュア選手の中でも、特に支援企業の社員選手に注目する。支援企業で働く選手たちの勤務内容は、企業での仕事とサッカー、二つである。彼女らは、サッカーができるという条件付きで、支援企業の支援の一環として雇用されたため、給料は支援企業によって支給される。しかし同時に、サッカーも仕事の一部とされるため、一般企業の社員選手と学生選手に比べ、同じアマチュア選手であっても、チームへの貢献に対する役割や負担が課されている。それゆえに、支援企業の社員選手の労働環境を検討することは、アマチュア選手の労働の質について考察する上で不可欠である。したがって、彼女らの労働環境は、競技環境の質と切り離せないものである点を確認し、アスリート側から考える労働環境とは何か、その状況と意味を議論する。

最近、アスリートの労働をめぐって、セカンドキャリア以外に、ダブルキャリア、デュアルキャリアという言葉が多く用いられ、アスリートのキャリア支援が注目される一方で、その内実については十分に議論されているとはいえない。アスリートはどのように就労し、どのように競技活動のために仕事をしているのか、選手の立場から明らかにする必要がある。特に、アスリートの勤務先での労働環境は、彼らの競技活動や人生にどのように作用しているのだろうか。本章で議論する競技実践形態は、このような意味でアスリートのキャリアをめぐる現代的課題と重なるものと捉えることができる。

女子サッカー選手の労働環境や選手の日々の生活をめぐる経済上の問題は、2011 年に開催された FIFA 女子ワールドカップで日本代表が優勝したことを契機に、メディアによって取り上げられはじめた。なかでも、多くの選手がサッカーと他の仕事を掛け持ちしていることや、男子サッカー選手との経済的格差がクローズアップされた。また、こうした動向に対応して、女子サッカーの社会学研究も展開されるようになった。女子サッカーにおける競技環境の改善を求める研究［大勝, 2013］や、女子サッカーの発展を促す制度の必要性を提起した研究が出てきたのである［輪田ほか, 2012a; 2012b; 2013］。

一方で、これらの研究は、女子サッカー選手をめぐる困難を競技環境上の問題に還元して、選手の日常生活と競技活動の間に生み出される諸問題は経済的支援によって解決しうるものと捉えられていた[92]。たとえば、輪田ら［2013］は、資金を緊縮的に運用しているチームについて検討し、選手を取り巻く環境整備不足とクラブ運営力の不足を問題視している［輪田ほか, 2013］。なお、選手の待遇面に関しては、選手の就労がチームの斡旋によって行われていたこと、そして、その労働環境に困難を抱えていた選手によるチーム退団や他チームへ

92 女子サッカー選手の生活問題をめぐる解決度合いの判断基準が選手収入の増加額に準拠して語られている［DIAMOND ONLINE, 2015.07.07］。また、選手への支援の一部として「試合や練習時のケガの治療費をチームが負担」するようにガイドラインが策定されたことが触れられている［産経スポーツ, 2014.03.18］。このように、選手の生活困難に対する解決方法が経済的支援のみに中心化されていることが分かる。

の移籍などが発生していた点を明らかにしている。このように輪田らは、選手が勤務先とのミスマッチや連携不足で苦しむ場合があることに言及する一方で、「合宿や遠征などがあると、その分仕事に支障が出るため、収入がなくなってしまうという現状もあり、選手に対するサッカー以外での負担は大きい」［輪田ほか, 2013：31］と述べ、選手が抱える生活上の困難とは経済的問題（主に収入面）について指摘している。しかしながら、ここでは、女子サッカー選手が直面する、労働環境を含む社会生活の困難が不可視化されている。

よって、以下からは、これらの研究に依拠しつつも、従来の研究では見落とされてきたアマチュア選手の労働環境に焦点を当てて論じていく。競技環境だけではなく、既存の研究で十分に論じられてこなかった生活面も含めた労働環境にアプローチし、選手と勤務先との関係性、競技活動と労働環境との関係性に着目する。

１　K チームの選手が支援企業で働くまで

アマチュア選手たちは実際にどのように働いているのだろうか。以下では、支援企業の社員選手に着目したい。なぜなら、第 4 章で述べたように、支援企業の社員選手は、チームにおいて多数を占める競技実践形態であり、女子サッカー選手の労働問題を象徴していると考えられるからである。彼女らはどのように支援企業で就労し、どのような労働環境で働きながらサッカーを実践しているのだろうか。

支援企業が K チームの選手を社員として雇用する方法に着目することは、本章において重要である。なぜなら雇用された選手は、チームと支援企業との関係性を意識しながら、K チームと支援企業の関係の中で生活することになるからである。この点に留意しながら、選手雇用に協力する支援企業について説明を進めよう。

K チームの選手雇用をしているのは、A、B、C の三つの支援企業である（表 8-1）。企業 A では、選手 4 名が事務の仕事を担当している。そのうちの 1 名である AX さんは、月曜日から金曜日まで、9 時から 17 時まで、本社で正社員として勤務している[93]。彼女は、週末の試合結果を月曜日の会社朝礼時に、他の社員たちの前で報告をしなければならない。これに対して他の選手 3 名は、契約社員として、企業 A の支店で事務補助をしている。月曜日から木曜日までは 9 時から 17 時、金曜日は午前中のみ勤務する。金曜日の午後の間は、他の支援企業の社員選手より自由時間がある。また、この 3 名は、月曜日朝礼に試合結果報告をしなくても良い。

企業 B では、AW さんが契約社員として医療系の専門家を補助する仕事をしている。勤務時間は、チームの練習がある火曜日から金曜日までは 8 時半から 17 時までとなるが、チームの練習のない月曜日は、勤務時間が 1 時間延びて 18 時に退社となる。

企業 C では、選手 4 名が正社員として採用され、フルタイムで販売の仕事をしている。選手 4 名は、働く店舗が全員異なるため、出勤時間や勤務時間は、店舗の事情によって変化する。店舗は、週末も営業をしているが、選手たちは、チームの活動に参加しなければならないため、週末の勤務シフトには入らない。

---

93 AX さんだけが正社員として雇用された理由は、最終学歴が大卒だからと推測できる。

表８－１　「支援企業の社員選手」の労働環境

	名前	年齢	雇用形態	学歴	職務内容
1	AD さん	20 代	支援企業 A の契約社員	高卒	事務（デスクワーク）
2	AS さん	20 代	支援企業 A の契約社員	高卒	
3	AT さん	20 代	支援企業 A の契約社員	高卒	
4	AX さん	20 代	支援企業 A の正社員	大卒	
5	AW さん	20 代	支援企業 B の契約社員	高卒	医療補助（主に立ち仕事）
6	AE さん	10 代	支援企業 C の正社員	高卒	販売（立ち仕事）
7	AH さん	20 代	支援企業 C の正社員	大卒	
8	AL さん	20 代	支援企業 C の正社員	高卒	
9	AJ さん	20 代	支援企業 C の正社員	大卒	

以上のように、各企業の選手たちは、雇用形態、職務内容、勤務時間、勤務先などが一様ではなく、同じ企業で勤務する選手間にも差異が見られる。こうした差異は、選手の学歴、経歴などによって決定される。

また、チームは支援企業へ選手の就労を斡旋する一方で、支援企業が決める選手ごとの労働環境については口出しをしないことになっている。たとえば、支援企業への選手の入社過程を見てみると、選手は自分がどのような勤務をするのか、わからないまま勤務先へと割り振られる。何を扱っている企業なのか、どのような仕事をするのか、給料がいくらなのかといった情報がないまま、仕事があてがわれる。いかなる内容と条件であるかについては、斡旋された支援企業によって決定されるのである。チームが行うのは支援企業への選手の紹介のみであり、支援企業が選手へ提示する勤務内容については関与しない。

こうした点が序章で説明したアスナビを通した就労と K チームを通した就労との違いだといえる。アスナビ制度では、アスナビ担当者がトップアスリートの競技活動を重視し労働環境での不安を軽減させることを重視し、企業とアスリートの間に入って積極的に企業訪問や説明会開催などの斡旋活動をおこなう。他方で、K チームは、支援企業の入社過程に介入しないことを前提としている。つまり、支援企業に対して、選手の競技活動の日程は知らせるものの、それ以外の職務内容については関与しない。選手は勤務内容が決まるまで労働不安を抱えたまま、シーズンを迎えることになる。

２　支援企業における選手の働き方

それでは、その支援企業の社員選手の労働環境について確認していこう。彼女らが、支援企業で働くことで得られる一番のメリットは、サッカーを中心とした生活を組み立てられる点である。具体的には、勤務時間への配慮とそれによる経済的保障である。選手たちは、

19 時からの練習に間に合うように退社時間が決められており、残業はない。つまり選手は、チームの活動日程への配慮がなされた上で、勤務日が決まる。

企業 C で働いている AE さんは、以前、一般企業の契約職員として働きながらサッカーを行っていた。しかし一般企業では、チームの活動日程に合わせてサッカーをすることも、平日の練習時間に合わせて退社することもできなかった。そこで AE さんは、新シーズンを迎えるにあたり、支援企業へ転職することを決めた。それゆえ、彼女は、たとえ店舗が混んでいる時であっても、残業せず退社することが認められている。さらに、彼女が務める企業 C では、勤務シフト制が採用されているにもかかわらず、彼女に週末の勤務シフトが組まれることはない。それは、週末に試合や練習、地域イベントなど、チームの活動が入りやすいためである。

また支援企業では、チームの活動で選手が会社に出勤しなくても、サッカーも仕事の一部として認められ、選手に固定給が支払われる。たとえば、表 8–2 に記した 4 月 17 日のように、翌日の遠征試合で金曜日が移動日となった場合、それも勤務として認められる。

表８－２　支援企業と一般企業での労働環境上の差異

	12日(日)	13日(月)	14日(火)	15日(水)	16日(木)	17日(金)	18日(土)
チームの日程	試合	休み	練習：19時～21時	練習：19時～21時	練習：19時～21時	練習後、遠征先へ移動	試合
支援企業の社員選手の勤務日程	休み	勤務	勤務	勤務	勤務	欠勤 (出勤認定・固定給)	休み
一般企業の社員選手の勤務日程	休み	勤務	勤務	勤務	勤務	①欠勤 (減給・有給休暇使用) ②仕事で遠征先への同行不可能	休み

このように支援企業における選手の働き方は、一般企業との比較を通じて差異が浮き彫りになる。一般企業では、サッカーやチームの活動は仕事とは見なされない。そのため、一般企業の社員選手（AG さんと AV さん）は有休休暇を取得するか、仕事の休みが取れない場合は遠征先に同行できない場合もある。アルバイトの場合は、休みを取ることができたとしても、毎月の収入は一定しないため、給料の減額を引き受けなければならない。

AG：大変、大変、自分の場合はさ、スポンサーのところに働いているわけじゃないから、だから練習を全部優先つったら、優先できないときもあるし、だから合宿とかも出席の出勤の関係で遅れてたりとかもしないといけない。そういうのは、やっぱり最初から行きたいっていう、サッカーは全部出たいっていうのもあるけど。でも、まあ、スポンサーで働いてるわけじゃないから、そういうとこは割り切ってやるしかないんじゃないのかっていうのはあるから。まあ、大変だけど、それが普通？当たり前？

……もちろん、スポンサー企業だったら合宿とかあってもさあ、有休使わずサッカーまで休めて、さらに有休は自分であるから休めるときに休めるっていうのは、すごい理想だよね。固定給だし。自分の場合は有休で（合宿）休むしかないから。平日に仕事あるときは、まあ、それは言っても仕方ないなとか思ってるけど、歩合だから。その月によって上下あるから賭けっていうのも賭けだけど。

このように、AG さんは、サッカーを最優先に生活したいと考えているが、仕事の関係で思い通りにできないことも多々ある。しかし、《スポンサーで働いてるわけじゃないから、そういうとこは割り切ってやるしかないんじゃないのかっていうのはあるから。まあ、大変だけど、それが普通？当たり前？》と話しているように、それは、自分でコントロールできない部分である。それは、AG さんが、支援企業で働きたい気持ちはあったが、販売の仕事をすることや年齢のことも考え、その気持ちを断念せざるを得なかったからでもあった。その後 AG さんは、一般企業で働くことを選択したため、彼女は一般企業で働く上で、このようなことは当たり前のことだと受け止めるしかないと考えている。このように、AG さんが、支援企業の社員選手と自分の待遇を比較して語っている様子を見てみると、一般企業の社員選手である彼女自身は、支援企業の社員選手より経済的・時間的に苦労していると考えている点が見てとれる。

以上、支援企業の社員選手は、チームの活動日程に従ってサッカーをすることができ、さらに一定の給与が保障される。このように選手の働き方は、支援企業で勤務するか、一般企業で勤務するかによって異なる。したがって、支援企業で働くことは、サッカーに取り組む生活上の基盤を築くことを意味する。

３　順応しようとする選手の行為

しかし、一般企業の社員選手より支援企業の社員選手の方が、サッカー活動に配慮した環境を提供されているからこそ、チームと支援企業による拘束性が最も大きくのしかかるようになる点を見逃してはならない。

なぜなら、支援企業の社員選手はチームの看板として支援企業で勤務しており、また競技活動のために社内で他社員に比べ優遇されているからである。さらに、次年度にも支援を継続して受けるためには、支援企業にとっての K チームの評価が重要となり、その評価は社内での選手の働きぶりによって決まると言っても過言ではないからである。こうして支援企業の社員選手は、支援企業とチームとの関係を常に念頭に置いた上で行為することが求められると同時に、支援企業から決められた労働環境にそのまま順応しようとする。

それゆえに、常に評価されなければならない、このような立場におかれるのを拒否する選手もいる。そうした選手は、支援企業とは関係のない勤務先（専門学校・大学）を探し、生活の両立を図ろうとする。たとえば、AK さんは、支援企業で就職することを断り、専門学校に通っていた。AK さんが、就労しないで専門学校に進学することを決定したとき、スタッフは、K チームと提携している、高額の授業料一部を免除してくれる専門学校に AK さんが進学することを推奨した。しかし、AK さんは、この経済的支援の提案も自ら断り、チー

ムとは一切かかわりのない別の専門学校を選び進学した。その理由は次のようである。

AK：オフまでチームに頼りたくない。だから、その自分、高校 3 年のときに、チームでサッカー優先にする、仕事？就職？説明あったけど、自分はサッカーでこのチームにかかわっているだけで、オフまでチームに関与したくない。だから、その支援企業である専門学校も〔スタッフに〕行けって言われたけど、それも断った。全てこのチームに頼りたくない。自分でできることは、自分でしたいし。

AK さんのいう《オフ》とは、チームの活動以外の時間を意味する。《オフまでチームに関与したくない》と話す理由は、支援企業で働くことやそれと同系列の専門学校に通うことになると、生活全般において、支援企業とチーム双方の秩序に順応しなければならなくなると考えているためだ。AK さんは、チームの活動以外の生活においても、チームのために努力をすることは必要だと理解しているが、だからといって自分の生活全体をチームに一任することは望んでいなかった。つまり、支援企業での労働というのは、チームのかかわりの影響下で働くことを意味するのである。

AK さんは、このような理由で、スタッフの勧誘を断って別の専門学校に進学した。《全てこのチームに頼りたくない》と語ったのも、チームの斡旋によって支援企業に所属できるようになると、《オフ》までチームと支援企業の関係性に縛られることを、両者の仕組みにのしかかる日々を過ごすことになる点を識別していたからだと考えられる。そのため、彼女は、自分自身の進路先を、チームに頼らず自分で決めたがったのである。つまり、選手が支援企業で働くということは、競技活動以外時においても、両者の関係性に強く縛られることになる。

ところで、労働者が雇用主によって決定された労働環境に従って働くことは、一般的なことであるが、支援企業の社員選手において、どのような点が生活上の縛りとして特に大きく表れるのだろうか。

まず K チームの選手たちは、チームの斡旋による就労のため、提示された労働環境について意見を述べたり、交渉したりすることは、一般の労働者よりいっそう難しくなる。たとえば AS さんは、チームが主に使用する A グラウンドの近い場所に自宅があるが、決まった勤務先は自宅から約 1 時間離れていた。そのため 17 時に退社できたとしても、練習に遅れずにたどり着くことが難しかった。だが AS さんは、通勤について会社に不満や要求を言い出すことはできず、そのまま働いていた。提示された労働環境について意見を述べることは、支援企業とチームとの関係を悪化させる恐れがあると判断したのである。

また、先ほども指摘したように、選手は他社員に K チームの選手を雇用したことが望ましい支援であったと評価されるように、常に勤務先では模範的に振る舞わなければならない。たとえば、AE さんは、支援企業から信頼を得るために、勤務シフトに入っていない週末にも自主出勤をしていた。彼女は K チームの選手であるため、週末の勤務シフトに入ることはない。だが、週末のチームの練習が午前中で終わった日には、午後に自主出勤することで、支援企業にも役に立つ社員として社内の同僚から認められようと努力している。すな

わち、AE さんは支援企業との友好な関係を維持できるように行動しようとして自主出勤はセルフ・デボーションの一環だと考えているのである。このように、AE さんは、労働の場においても K チームの選手として自覚を持って働こうとしていた。

４　セルフ・デボーションに逆向する労働環境

このように、選手たちはサッカーと労働の両立を実現しようとすると同時に、選手自身が支援される立場であることを認識した上で、支援企業の労働環境に自ら順応しようとしながら働いている。他方で、選手にのしかかる統制を詳細に注視していくと、支援企業における給料や勤務時間などの経済的条件だけではなく、そこでの職務内容という質的条件の重要性が見えてくる。この点について、企業 C で働く AH さんの事例から考察したい。

AH さんは、シーズン途中に一般企業のアルバイトに転職したいと考えたが、オフシーズンになるまで支援企業で労働を続けていた。なぜ彼女はすぐに転職せず、働き続けていたのだろうか。

ホーム試合があった日、当時の AH さんは、ケガのリハビリ中であったため試合に出場することができない選手たちと、設営からビデオ撮影、片づけなど、運営業務を担当していた。試合終了後、彼女はリハビリをするため、ジムに向かおうとしていた。筆者はジムに向かう彼女に同行しながら、仕事と競技実践の難しさについて話し合ったが、その際、彼女は支援企業によって構造化された自らの生活の内実に疑問を抱きはじめていた。それは、以下の彼女のインタビューに鮮明に示されている。

> AH：それがちょっとあれかな。何でサッカー選手なのに立ち仕事だろうって。何でわざわざって、思っちゃうもん。事務とかにしてくれたら良かったのに。確かに、何で立ち仕事してるんだろう。

AH さんは、立ち仕事が必要な労働環境であるため、サッカー選手として困難を経験していた。サッカーのために支援企業での就労を選択した彼女は、サッカー以外の時間では身体を磨耗させたくないにもかかわらず、立ち仕事をしなければならないという事態に直面していた。つまり競技実践への自らの志向性と労働環境のズレであった。特にケガを抱えていた彼女は、立ち仕事が身体のケアとは逆向するものであり、回復を遅らせるものと捉えていた。《サッカーのために仕事をしている》AH さんにとって、彼女の労働環境はサッカーへの復帰を遅らせるものであると認識されるようになった。

だが、支援企業とはいっても、身体のケアを理由にして休みをとることはできない。AE さんが《その練習すると、明日絶対にきつくなるから》と語っているように、練習メニューによって翌日の身体の疲労が予想できても選手たちは休めない。つまり彼女らは、サッカー選手であるという理由で、身体の疲労を訴えたり、仕事の手を抜いたりすることはできない。AH さんが支援企業へ入社した頃、チームミーティングを通じてサッカーと仕事を分けることが強調されていたこともあり、彼女は立ったまま仕事をしながらも、身体の疲労を表に出さずに勤務していた。さらには、支援企業だからこそ、仕事を他社員以上に懸命に行う必要

があるのは、すでに見た通りである。

それに加えて、AH さんには別の困難もあった。それはチームへの帯同の意味が、彼女と支援企業では異なる点であった。ケガをしている間、彼女は週末の勤務を要請されるようになった。一方で、彼女にとっては、ケガをしていてもグラウンドに行き、チームの練習に参加することが、選手としておこなうべきデボーションであり、それはチーム内で共有されている規範であった。これについては、AH さんと同じ時期に、ケガでリハビリをしていた AF さんの語りから確認できる。AF さんは、ケガ人が合宿メンバーから除外されたことについて以下のように述べている。

AF：見たかったし、参加したかったし、同じ環境にいて同じ意識でやりたいという気持ちもあったけど。おいて行かれるっていう気持ちもあったから、もうおいて行かれてるから、仕方ないなという切り替えにかえって、今できることは何なんだと思ったら、自分はリハビリしかないし、それだったらこっちでビッチリやってという、、

ここで、極めて印象深いのは、《見たかったし、参加したかったし、同じ環境にいて同じ意識でやりたい》という部分である。選手たちにとっては、ケガの治療中であっても、チームの練習を見ておくこと、情報を共有するということが、競技に対する最も大切なデボーションなのだ。この点については AH さんも同様で、ケガの治療中であっても練習に参加すること自体が、彼女にとって最も重要なことだった。

しかし、支援企業からすると、走ることができない者が毎日の練習に参加することに疑問を抱いた。結局、彼女は、練習への帯同の意味が自らと支援企業のそれの間では違いがあると感じており、彼女の考えを店長に説明しても、この違いを一致させることは難しいと判断した。ゆえに、彼女はチームに相談したが、それに対してチームは、支援企業の店長と彼女が話し合って決定するようにという指示を、彼女に伝えるだけだった。

この指示を受けた彼女は、勤務シフトへの違和感を拭いきれず、一般企業のアルバイトに転職を希望したが、行動には移さなかった。なぜなら AH さんは、K チームと支援企業の関係を考えると、自らの意思だけで支援企業での仕事をやめることはできないと判断したからである。そのため、彼女はオフシーズンの契約更新時期まで、同企業での労働を続けたのである。

５　安定させるための労働から不安定な労働へ

このように、筆者がフィールドワークをする中で見えてきたのは、支援企業での就労が競技活動を安定させるための労働から、競技活動を不安定化させる労働へ転換していくメカニズムであった。そこにおいて立ち仕事は、支援の矛盾が象徴的に表れているものであり、選手のセルフ・デボーションを妨げるものとして作用していたのである。

AS さんは《私は座って仕事できるから、ラッキーでした》と語ったことがあった。この語りからも分かるように、支援企業によって決まる選手の労働環境が、立ち仕事なのか、それとも座ってできる仕事なのかといった点が、彼女らにとっては日々の生活を左右する重

要な問題となっていた。なぜなら、彼女らは、理性的には競技活動と仕事を割り切って行動することはできるが、身体の感覚は割り切ることができず、どこにいても疲れが続くからだ。つまり、サッカーを通じて身体に蓄積する脚の疲れは、勤務中にも響いてくるものであり、その労働環境が本来の業務であるサッカーに支障をきたす点に、彼女らは支援の矛盾を感じるようになった。

なお、ここで注目したいのは、AH さんが支援企業で正社員として雇用されたにもかかわらず、支援企業との契約期間が終了してからアルバイトに転職してサッカーを続けている点である。この事例から、たとえ経済的支援が保障されていたとしても、サッカーに専念できない労働環境であれば、むしろ一般企業のアルバイトに転職してでもサッカーを続けたい、という女子サッカー選手の生き方であった。これは選手の生活上の困難について Edwards［2014］が述べた「正規職／非正規職」という雇用形態の枠組みからでは説明できないものである。

言い換えると、彼女らにとって雇用形態よりも深刻な問題は、選手が自分の日常を自らが計画したり調整したりすることができず、支援企業から提示される通りに、生活せざるを得なくなる点である。どの支援企業で就労するかという決定に関してはチームに丸投げとなり、そこでの職務内容は支援企業に一任される。チームは支援企業へ選手の就労を斡旋するが、支援企業が決定する選手の労働環境には関与しない。そのため選手は、どのような労働環境に置かれるのか予見できないという不安な状況に直面する。

また、支援企業とそこに雇用された選手の関係は、支援する側／支援される者といった力関係が胚胎しているため、選手が支援企業の要請に従うことが暗黙の前提になっていた。すなわち、選手は極めて脆弱な労働者であった。それは支援企業と AH さんとのチームへの帯同に対する意味の捉え方の違いからも、AS さんが支援企業に提示された労働環境にそのまま順応しようとした点からも確認できる。なかでも、そうした支援の質的問題を象徴的に示していたのが、立ち仕事であった。

以上のことから、女子サッカー選手の生活全体において重要なことは、どれだけサッカー選手として良い待遇が受けられるかだけではなく、どうすれば競技実践に妨げのない日々を過ごすことができるのかであった。とりわけ、本章を通じて明らかになったことは、チームと支援企業の関係性から生じる統制の中で、「サッカーのための労働」が「サッカーから疎外される不安定な労働」へと変化していく矛盾を感じながら生きる選手たちの姿であった。その上で、支援に対する逆説的な状況が選手の生活上の問題を構成していた点も浮き彫りになった。

ここで議論したいのは、こうした不安定な労働が支援企業の社員選手にアイデンティティ葛藤を生み出すという点である。彼女らからすると、自分はサッカー選手であるというアイデンティティが、支援企業の社員であることに先立つからである。繰り返しになるが、彼女らはサッカーをするために仕事をしているわけである。支援企業での労働環境が自分の志向と一致すれば、デュアルキャリアとして勤務し続けるかもしれない。だが、それは今を生きる彼女らにとって、それほど重要な問題にはならない。彼女らにとって大切なのは、競技活動をするための労働環境なのである。

しかし、支援企業での労働によって徐々にデボーションが難しくなる場合もある。そこで、AH 選手が《何でサッカー選手なのに立ち仕事だろうって》と語っているように、彼女は、何のために働くのか、自分は何者であるのか、なぜ立ち仕事をしているのかといった疑問を抱き始めることが読み取れる。すなわち、支援企業の社員選手にとっては、競技活動のための労働がむしろアスリートとしてのアイデンティティを揺るがす状況を生じさせている面もある点が明らかになった。

最後に、Edwards は、支援企業では、生活を理由に引退を表明した女子サッカー選手に対して「プロ意識のない者」［Edwards, 2014：450］と評価されがちな点に言及している。しかし、女子サッカー選手への支援の質的位相を踏まえないまま、そうした女子サッカー選手に対し、プロ意識のないものとして烙印を押すことには、慎重であるべきだろう。なお、本章で描出してきた「支援する者／支援される者」という関係性については、日本の女子サッカー選手の日常生活全般に構造化されている点を指摘できる。また、そこから重層的なデボーションが選手にのしかかっているならば、彼女らの競技活動が労働によって、より疎外されるのではないか考える余地があるだろう。

6 小 括

第 8 章では、支援企業の社員選手の労働に焦点を当て、「サッカーのための労働」が「サッカーから疎外される不安定な労働」へと変化していく矛盾を感じながら生きる選手たちの姿を描出した。支援企業とそこに雇用された選手の関係は、支援する側／支援される者といった力関係が胚胎しているため、選手が支援企業の要請に従うことが暗黙の前提になっていた。すなわち、選手は極めて脆弱な労働者であった。それは支援企業と AH さんとのチームへの帯同に対する意味の捉え方の違いからも、AS さんが支援企業に提示された労働環境にそのまま順応しようとした点からも確認できた。なかでも、そうした支援の質的問題を象徴的に示していたのが、立ち仕事であった。彼女らにとって大切なのは、競技活動をするための労働環境であり、働くことそれ自体ではなかったが、AH さんの職務内容である立ち仕事は、支援の矛盾が象徴的に表れているものであり、選手のセルフ・デボーションを妨げるものとして作用していた点が浮き彫りになった。そのため、支援企業の社員選手は、競技活動のための労働が、むしろアスリートとしての生活維持を妨げられることにつながり、アスリート・アイデンティティを探求するにあたって葛藤が生じている点が明らかになった。

第９章　女子サッカー選手におけるジェンダーと
アスリート・アイデンティティの探求

AS：女子だから男子と比べてどうだって言われるのはすごい嫌だな……
女子サッカーってみるんじゃなくて、普通にサッカー選手でみてほしい。

これまでに見えてきた女子サッカー選手の競技活動と労働・生活の不安定さには、いくつかの場面でのジェンダー構造が通底している点も加わっていると言える。選手には、それらが重なり合って凝縮的に作用していると考えられる。そこで本章では、まず、その重層的なジェンダー構造について整理する。その上で、重層的なジェンダー構造が選手たちにとってどのように表出されているのかを描き出す。そして最後に、その中で選手たちがどのようにアスリートへ自己を同一化させようとしているのかを明らかにする。

１　重層的なジェンダー構造

ここでは、第 8 章までで述べてきたことの中から、女子サッカー選手の生活全体に形成されているジェンダー構造を再構成すると、彼女らは、以下の 4 つのジェンダー構造が重層的に形成された状況の中に置かれていると考えられる。

第一は、競技種目上のジェンダー構造（近代スポーツにおけるジェンダー構造）である。性別二元論にもとづく近代スポーツは、各競技種目と性別（ジェンダー）を結びつけて捉えている構造がある（第 1 章、表 1–3）。その中でサッカーは、歴史的に見ても、現在においても、「男性向きの」スポーツ、男性に適したスポーツ、「男らしいスポーツ」と位置付けられ、また「男性性」を体現する競技として人気を得ている。このことは、女子選手にとっても「男らしさ」と親和的な性質が求められることを意味する。そのため、女子サッカー選手には、よりいっそう「二流の選手」という烙印が付与されやすい[94]。

第二は、サッカーチームのジェンダー構造である[95]。K チームの内部を見てみると、チームの運営に関連する意思決定は全て男性によって行われるなど、組織運営体制には男女の序列が見られた。また、指導者と選手の関係においても、男性スタッフ（指導者）の地位は権威づけられており、女子選手はそれに従順に従うしかない構造も形成され、序列関係による上意下達は、チーム内のジェンダー秩序を強化していた。そのため、女子選手は、チームの活動の全般において、男性スタッフに認められるために振る舞うことが重要であった。

そして、K チームと地域社会の関係を見ると、K チームのお祭りでのキャラバン活動に象

94 これはサッカーに限らず、野球、ラグビーなど「男らしいスポーツ」（表 1-3）に共通に言えるものである。

95 本論文では正面から論じていないが、地域のサッカー少年団、学校体育、部活動、クラブチームなども、ここに含まれる。

徴的に見えたように、女子サッカーチームは、地域全体（企業、住民、自治体など）の理解や支援のもとで活動せざるを得ない状況であった。そのような地域の人々からみる女子サッカーチームは、男の世界で頑張っている女の子たちの集団として見なされていると言える。女子サッカーチームの存続には、チームの全員が総力を結集して、地域の諸団体や住民たちと友好的な関係を築く必要があり、地域社会によるバックアップの継続はチームにとっての一大事であった。そこでは、チームとして女子サッカーという競技を自ら宣伝し、プロスポーツとしての可能性を地域に認知させて支援者を集めるなど積極的な宣伝活動も行う必要があった。そこでは、地域社会のジェンダー秩序をむしろ積極的に活用して女子サッカーを宣伝するという状況すら見られ、チームのスタッフが選手たちにそれを促していた。また、選手たちの中でも、支援企業の社員選手には、常に地域社会から評価され見られる立場にあることが強調されていた。

第三は、サッカーにかかわる組織・機関のジェンダー構造である。協会、競技大会、広報活動機関は、その競技の振興や活性化、社会的アピールを行っている。これらの組織・機関でも、サッカーは「男のスポーツ」として見なされ、女子サッカーの組織も多くの男性の役員によって占められてきた。サッカーは男女で明確に区別されており、それに参加した女性たちはホモソーシャルな男同士の絆に割り込み、それを脅かす存在として受け止められている。こうして女子サッカーは「異物」、女子選手は男の世界に入ってきた「異端児」と扱われ、彼女らは幼児化されるか、性的対象として捉えられていた。つまり、女子選手は、それらの組織・機関においても、男子選手と同列にあるサッカー選手としては見なされていない。

そのため、とりわけ広報活動に見られる女子サッカーの扱いは、サッカーの実力への評価とともに、競技活動以外の私生活、なかでも「女らしい」サッカー選手の姿を取り上げることに注力してきた。サッカーは、「男らしい」スポーツと捉えられてために、そのジェンダー・ギャップ（選手としての「男らしさ」と個人としての「女らしさ」のギャップ）にも注目が集まるからである。ただし、時代とともに、初のプロリーグの新設が決定され、女子サッカーの地位向上の取り組みが進んできている。女性もサッカーを享受できる存在として認知させようとしている動きや変化が見られる。

第四は、職場（企業）のジェンダー構造である。性別役割分業が組み込まれた職場のジェンダー構造とは、男性が基幹的な職務や地位に、女性が補助的・従順的な職務や地位に配置されることや、「女らしさ」と適合的だとして接客やケア的職種に女性があてがわれることとして把握できる。K チームのアマチュア社員たち（社会人）の職務内容は、事務、営業、医療補助、販売であった。これらは、STEM（Science、Technology、Engineering、Mathematic）以外の業種のもので、彼女らには女性に適した職務と見なされる労働環境に従事していることがわかる。このことから、女子サッカー選手たちは、ジェンダーステレオタイプ化が反映されている職場の中にいると言える。女性労働は、一般的に、性別役割分業を前提とした家計補助的な位置付けとされることで脆弱な基盤にとどめ置かれる。女性アスリートもまた、そうした女性労働の中に位置づけられ、職場におけるジェンダー構造が、彼女らの労働をさらなる不安定へと追いやることとなっている。

また、特に企業（支援企業）では、女子サッカー選手に対して、単なるアスリートではなく、頑張っている女性たち（「女の子たち」）への応援であることを強調する。企業の女子サッカーへの支援は、地域社会のジェンダー構造と重なり合わせられ、社会貢献活動の一環として評価され、それが企業の宣伝につながる。これを裏返して考えると、女子選手たちは、企業の宣伝のために雇用されているとも言える。だが、実際には、雇用された女子選手たちは、社内で他の社員と同じように働くか、それ以上に努力することが迫られている。このことは、男子サッカーより経済的価値が低いとされる女子サッカーだからこそ見られる現状だと考えられる。女子サッカー選手たちは、このような職場のジェンダー構造の中にも置かれているのがわかる。

以上のように、女子サッカー選手たちの労働と生活は、4 つのジェンダー構造の重なりの中にある。そしてそれゆえに、その競技活動と労働・生活は不安定なものとなっていると言える（図 9–1）。

それでは、このような状況を、女子選手たち自身はどのように受け止めているのだろうか。次節では、彼女らのジェンダー意識に迫ることにする。

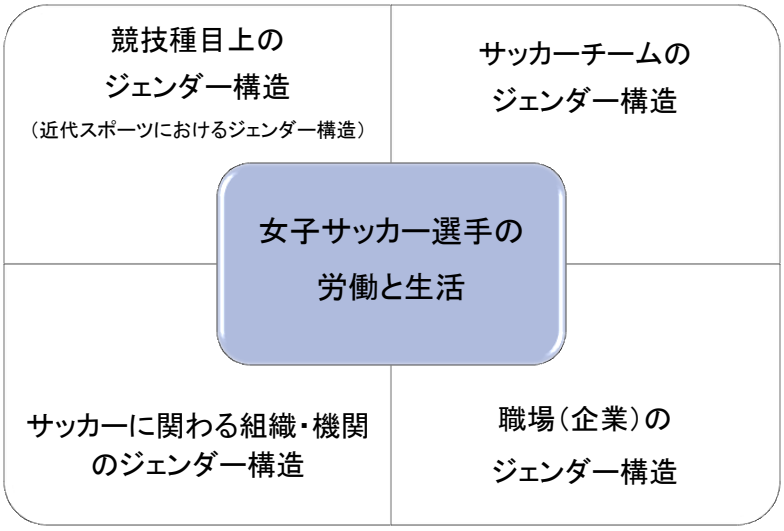


図９－１　女子サッカーの労働と生活をめぐる重層的なジェンダー構造

２　女子サッカー選手たちのジェンダー意識

結論を先取りすると、女子サッカー選手たちは、ジェンダーに処遇に対して不平不満を言うことも、疑問を口にすることもない。少なくとも筆者のインタビュー調査ではそうした発言はなかった。彼女らにとって、サッカーは性別に関係なく楽しめる競技、女性であっても享受されるに値する、素晴らしい競技である。そのため、サッカーをプレーするにあたって、男子選手とは異なる扱われ方をされることは望んでいない。より強く、たくましく、サッカー選手として優れたプレーができるように身体訓練に集中して、いわば「男らしく」プレー

できることを目指してサッカーに取り組んでいる。多くの女子サッカー選手たちにとって、理想の選手像は男子サッカー選手である。つまり、彼女らの自意識としては、あくまで「サッカー選手」であって、「女子サッカー選手」ではない。

このような彼女らの意識は、どこからきているのだろうか。彼女らはどのようにしてそのような理解をするようになったのだろうか。

２－１　サッカー経験の中で意識させられたジェンダーと男子選手への自己同一化

これらを考えるために、彼女らがこれまでサッカーをする上で、どのようなジェンダーにかかわる経験をしてきたか、また、それに対してどのように対応したのかを検討する。

AW : 皇后杯とか、そういう試合が増えたっていうことと、やっぱり男子に比べて女子のサッカーは〔あまり人気がない〕っていう感じだったじゃないですか。でも、そういう、女子の注目度があがったこと？サッカーなんてやってたって〔どうするんだ〕、女の子のなのにって言われる世代だったんですよ、自分。でも、そうじゃなく、すごいね。なでしこジャパンだねっていうような周りに、そう理解されるような環境になった……なんか、そう言われて来たから。女の子なのにって。サッカーなんて辞めてっていう、小さいときから言われたことだから。

AW さんは、日本女子代表が 2011 FIFA 女子ワールドカップで優勝して以来、女子サッカーへの注目度が上がったことを実感したという。それは、子どものときから《女の子なのに》《サッカーなんて辞めて》と言われ続け、女の子でありながら、サッカーをすることを否定的に受け止められてきた経験を持つ彼女にとって、感慨深いものであったようだ。AW さんは、自分が参加したいもの、好きなスポーツとしてサッカーを選んだ。競技のジェンダー・イメージに影響されて、どのスポーツをするかを選択したわけではない。彼女はサッカーが好きで、サッカーを自分でプレーしたかったのである。

しかし、サッカーは男性に向いているスポーツと見なされていることから、彼女はサッカーをする女性として、男性よりも格下に置かれてきた。なぜなら、サッカーをする女性たちは、身体的に、社会的地位に、経済的においても男性にはかなわないとされている世界へ最初から負け組として参加すると言えるからである。このように、周りの人びとは、サッカーをする人を女なのか男なのかと区別して、そこに序列をつけたがる。そうした他者からの区別と序列化こそが、彼女らを抑圧し、男子選手に劣る女子選手という性による差別を生み出しているのである。

また、女性はサッカーをするにあたって周辺化されやすい。この例としては、K チームの選手ではないが、P チームの恵さんの経験を追記したい。彼女の小学生時代の経験は、女の子がサッカーをすることが、どれほど他者によって性別を意識させられることかをよく表している。

恵さん : そんな選手同士とか、そういうやってる子同士では、別になかったんですけど。

まあ対戦チームの相手の親とかは、女の子はやっぱり珍しいから、女の子に負けるんじゃないよ、みたいな。すごい聞こえてきて、女の子に負けるなって。でも、そんな悔しいから、くそって。地元はあんまり女の子少なかったんで、こちらは女の子とか、女のチーム多いんですけど、地元では珍しかったんですよね。女の子がやってるのは。

◎：チームメイトとかにはやっぱり仲良くしてもらえたり、監督とかにも

恵さん：全然、監督とかは、全然監督とか仲良くしてくれて。女の子って思われなかったから。お前も男だろうっていう感じだったんで。

このように、恵さんは、地元に子どもを対象にする女子サッカーチームがなく、男の子ばかりのサッカー少年団に入ってプレーしていた。そこにおいて、恵さんは、常に性別を意識させられていたのがわかる。それは、まず、試合場面で対戦チームの親によって発せられる声によってであった。《女の子に負けるんじゃないよ》という声が、恵さんの耳に響いていたからである。彼女はサッカーの試合をしていただけだが、男性が女性に負けるのは不名誉なことであり、男性ならば女性に負けてはならないものであるという規範も、否応なく、周囲によって学習させられてきた。その掛け声は、10 年以上経った今でも、恵さんの中に残っている。恵さんは、男子が主体とされるサッカーで、周辺に位置づけられる女子としてプレーしたことによって、観客からは特別な人物として名指され、覚えられるという経験をしたのである。

また、恵さんは、《女の子って思われなかったから》と語っているように、仲間からは同じ男の子として扱われていたことがわかる。これは、男の子のようにならないと女の子は仲間としてチームに受け入れられることが困難になるということを示している。このことによって、恵さんは、男の子のように行動する必要性を自覚させられ、またそのように振る舞うようになった。このような意味において、彼女はサッカーをする上で、常に自らの性別を意識させられていたと言える。

K チーム選手の中では、AS さんの経験が印象的である。

AS：小学生のときは、15 年ぐらい前だから、全然女子がサッカーやってたら珍しかったときだから。自分、男子のチームの中でやってて、試合会場行ったら男子しかいないんじゃないですか。だから、トイレが男子用しかないんですよ。自分トイレするとこないし、みたいなことがありました。だから、サッカーは男子がやるのが当たり前みたいな時代だったのかな?

◎：〔トイレがないことに対して〕文句はなかったですか?

AS：男子トイレに入りました。でも、時代もありますよね。だんだん変わって、今は女子サッカーやっても珍しくなくなってきたし。

この事例からわかるように、女子サッカー選手は、トイレという競技場の施設（環境）によっても性別を意識させられていた。AS さんが、《トイレが男子用しかないんですよ》と語

っているように、女子トイレがないサッカー会場という競技環境は、彼女に自分が女子としてそこにいることを自覚させ、サッカーは男子を主体とする活動だということを改めて認識させることになったのである。

しかし、AS さんは、そうした状況にありながらも、男の子たちと仲間になって無邪気にプレーしていた。AS さんは、日常的に男子トイレを使いながら、男子のチームメイトとともに、サッカーをやってきた。

AS：あんまりサッカー始めた理由はなくて、気づいたらもうサッカーやっていたっていう、それだけなんですよね。最初は、男しかほとんどいなくて、男子がずっとサッカーやっていたから一緒にやってて、少年団に入れる年になったら、普通にあたり前の感じで入って今になった。

AS さんは、サッカーを始めたときは、男の人がほとんどであると感じていたが、サッカーに夢中になっていくうちに、サッカーをする仲間の性別を考えなくなっていた。むしろ、たまたま一緒にサッカーをする仲間たちの性別が男であったかのようだ。このように、AS さんは、性別を意識させられながらも、自分が女性であることに悩むことはなく、そこまで深く性別に囚われず、女だからと自分を抑制することも、「女らしく」振る舞おうとすることもなく、サッカーに取り組んできた。

さらに言えば、K チームの選手たちは、ピッチ上では、良いサッカー選手になるためには強いキックとシュートを中距離でも簡単に打つプレーができるようになることを望んでおり、《女の子みたいな走り方》は、サッカー選手として恥ずかしいことと思っている。サッカー選手としての目標、プレーのモデルは男子選手であり、自分自身をいかに男子サッカー選手へと同一化させていくことができるか、日々それに向けた努力を重ねている。

２－２　ピッチ上での「男らしさ」と、ピッチ外での「女らしさ」

他方で、社会生活上は、男性のように生きることのみを志向していない。男性への自己同一化はあくまでサッカーのプレーにおいてのみであって、それ以外は、社会の中のジェンダー規範を疑うこともなく、大きな違和感を抱くこともなく、ジェンダーによる差別や抑圧もさほど感じていなかった。それが、少なくとも表面化されることはなかった。それどころか、選手の中には、女子サッカー選手に対するメディアなどからの期待（ピッチ上での「男らしさ」とピッチ以外での「女らしさ」というギャップ）に積極的に応えようとする者もおり、特にそれを嫌がっているようには見えなかった。その点について、AX さんの事例をあげて検討する。

AX は、日本サッカー女子代表になるのを夢見ている。彼女は選手としての身体能力に優れているため、あらゆるポジションもプレー可能である。彼女は高校時代にも身体能力テスト時に、いつも部内で 1 番だったという。彼女はサッカー選手に適した身体の持ち主であると言える。

◎：不安なところは？

AX：筋肉ムキムキになるところ。あのね、だってズボン入らないんだもん。

◎：いいじゃん、別に。〔筆者が自分の太ももを指しながら〕サッカーの固有性がここに入ってるっていうことだから。

AX：でも、さあ、雑誌とか見ててもさ。最近、ほら、細い女子の方がモテるからさ、すごい結婚できるか不安。サッカーしてて。……そうなの、結婚できるかが不安。

◎：結婚した後にもサッカー続けたいの？

AX：どうだろう、結構二つのことできないタイプだから、やるとしても趣味になると思う。競技レベルじゃなくて、分かんない。相手によるんだと思う。全然わからない。

この対話の通り、筆者は、AX さんに競技活動をする上での不安について質問をした。ところが、この質問に対して返ってきた彼女は、ズボンが入りにくい程、筋肉質である自分の身体を不安だと答えてきた。さらに、AX さんは、《二つのことできないタイプだから、やるとしても趣味になると思う。競技レベルじゃなくて》と語り、結婚相手によっては《競技レベル》（プロ・スポーツとしてのサッカー）は断念し、趣味としてのサッカーをする可能性もあると考えている。これらのことから、彼女は、サッカー選手として評価される身体を持ちながら、「女らしい」可愛い身体への憧れがあること、結婚後もサッカーを続けるか否かは結婚相手によると考えていること、そして、そうした事柄については漠然として不安を抱いていることが見て取れる。

しかし、彼女は、そのような不安は持っていたとしても、サッカー選手である自分を改造してまで、ジェンダー・ステレオタイプに即した体を作ろうとは思っていなかった。むしろ、AX さんには、競技スポーツとしてのサッカーを続けたい自分を、ありのままに受け入れてくれる相手を探す意向があるようにも見える。このように、彼女は、ジェンダー規範の中で、多少の不安を感じながらも、基本的には割り切って優れたサッカー選手になること、「筋肉ムキムキ」な、一般には「男らしい」とされる身体を志向している。

次に紹介する身体能力測定の場面のエピソードは、女性という性別を否応なく意識させられ、それを全く無視できず、「サッカー選手」でありたいが、「女子サッカー選手」から逃れないときもあることを示している。

この測定は、選手たちとスタッフたち、測定専門家が同じ空間にいる中で行われた。測定する室内サッカー場には、専門性の高い、高度な測定機器が設営されていた。この測定機器を目の前にした選手たちは、その瞬間、とても興奮し、歓声をあげていた。なぜなら、このようなテクノロジーを用いた専門的な測定を受けられる者は、高いレベルのアスリートであることの証明であると選手たちに理解されていたからである。言い換えれば、この測定は、選手たちが、一流のサッカー選手として認められているということを実感する場であり、サッカー選手としてのプライドを感じられる時間になるのだ。また、この測定をするにはチームとして実力的にも経済的にも一定程度の余裕が求められることから、この測定に参加する選手にとっては、このチームに所属していることの喜びや満足感を得る機会ともなる。

このように、この身体測定は、単に身体能力を測るだけではなく、アスリートとしてのプライドを高揚させ、アスリート・アイデンティティを享受し、帰属チームへの愛着を増幅させる、貴重な時間として解釈することができる。このようなことから、この測定の日、選手たちは、普段よりも、やや興奮気味に、真剣に、ウォームアップに集中していた。自分を見せる場として、自分の身体能力をアピールする場として、この場を積極的に生かしたいとの強い思いを持ってのぞんでいる様子が伝わってきた。

当日の状況について説明しよう。測定種目は、ジャンプ動作のビデオ撮影、ショットシャトルラン、20mシャトルランなどいくつかあった。なかでも、筆者には、ジャンプ動作をバイオメカニクス的に分析するためのビデオ撮影時のことが非常に印象的だった。そのときの様子をやや詳しく紹介する。

ジャンプ動作のビデオ撮影は、年1回ほど実施するチームもあるが、Kチームにとっては初めてのことであり、すべての選手にとっても初体験であった。撮影のために、選手は上下タイツの姿にならなければならない。そのジャンプ動作による測定は、カウンタームーブメントジャンプというもので、アスリートの「高い跳躍能力、爆発的な加速を伴う疾走スピード、さらに素早く巧みな方向転換能力などが必要な体力要素」［湯浅ほか, 2019：83］を測定するために用いられる。選手はタイツ姿でこれを 1 人あたり 2 回行い、その姿を正面からカメラで撮影することになった。

選手たちは、最初はジャージ姿で整列し、自分の撮影が次の順番になるタイミングでジャージを脱いで上下タイツ姿になる。自分の番が来たら、一人ずつ、ジャンプ動作をする。選手は、上下タイツ姿で、十数人のスタッフ（男性が半分強）の前で行うのだが、タイツ姿で体の線が如実に見えるのに加え、ジャンプ動作で胸部の揺れ動きが撮影されて観察の対象となる。そのため、この測定に対して、たじろぎ躊躇する選手が見られた。

とりわけ、PRさんは、自分の順番に近づくと、手で胸を覆っている状態で《恥ずかしい》と言いながら、タイツ姿になることに戸惑い、撮影直前まで恥ずかしがっていた。しかし、PRさん自身の口から、なぜタイツ姿にならなければならないかといった服装に関する発言は何もなく、自分の順番が来たら、上体を隠していた腕を広げてジャンプをした。ジャンプを終えたPRさんは、何も言わずに、素早く戻って、ジャージを羽織った。

他方、他の選手たちは、PR さんのような様子は見せなかった。特に、AG・AM さんは、自分の測定順を待って並んでいるときから上体を隠そうともせず、恥ずかしがる態度も示さず、無言で待機していた。そのままジャンプ動作の測定にのぞみ、測定後も何もなかったかのようにジャージを着た。

このジャンプ動作測定場面での様子から何が読み取れるだろうか。PRさんの様子と、AG・AMさんの対照的な様子から考えてみる。

PRさんにとって、この測定の場は、通常とは異なる身体の露出に対する大きな戸惑いを感じるものであった。皆の前で上下タイツ姿になるということは、サッカー選手として、本来、他者の前で隠すべき身体（「女の身体」）を、公の場でさらさねばならないと感じられていたのであろう。サッカー選手は、そのユニフォームの特徴上、器械体操選手やフィギュアスケート選手、競泳選手などとは異なり、そもそも競技時において選手の身体が剥き出しに

される場面はほとんどない。タイツ姿のような、サッカー選手の生身の身体が露出される場面は、彼女らにおいて日常的に起きることではない。そのため、この日の測定については歓迎していたPRさんだったが、身体が剥き出しにされる、このジャンプ動作測定に関してのみ、羞恥心をあらわにし、戸惑いを隠せなかったのである。

このようにPRさんにとって身体測定は、アスリートとしての自分を享受し、格下で劣位である女子サッカー選手という状況から解放される、最高の機会であったはずだが、これは同時に女性である自分を突きつけられ、そこから逃れられない自分を否応なく確認させられる場となっていたと解釈できる。PRさんは、こうした状況の中で明らかに戸惑っていたように見えた。しかし、その戸惑いは、諦め、または割り切りへと変わり、表面上、何事もなかったかのように振る舞っていた。

これに対して、AG・AMさんにとっては、このジャンプ動作測定も、他の測定と何ら変わることがなかった。上下タイツ姿になることについては、おそらく、男であろうが女であろうが、このチームに入った以上、そのようなことは意識すべきことではなく、そんなことで戸惑っているようではプロのアスリートにはなれない、アスリートならば淡々と測定にのぞむものだと思っていたと考えられる。口には出さないものの、この程度で恥ずかしがっているのは、くだらない、プロではない、アスリートとしての意識や自覚が欠けていると、思っていたように見えた。ここで、2人は、自分自身を「アスリート」として認識し、一貫してそれを意思表明するかのように無言で淡々とした態度であった。この測定の場面においてAG・AMさんは、一貫してアスリートであろうとしていたと言える。

この事例から言えるのは、次の二つのことである。ひとつは、競技のため、アスリートであるために最善を尽くすことと、女性としての身体や意識との間には、齟齬が生じ、そこで戸惑いが生じることがあるということである。と同時に、もうひとつは、女性であるという自覚的な意識（身体の性的な側面への意識）に対して、「アスリートである」という意識が、それを凌駕することがあるということである[96]。女子サッカー選手たちは、多かれ少なかれ、こうした状況の中にいる。個々の選手について見れば、そこで躊躇したり戸惑ったりする選手もいるし、わりきっている選手もいる。しかし、アスリートであろうとすることに対しては、皆、同じ姿勢である。つまり、彼女らは、あくまで「サッカー選手」としてあることを望み、そうあることに向けての努力を大事なものとしながら日々を過ごしている。

以上のことから、本節では、彼女らがサッカーをする上で、小さい頃には性別を意識させられることが多々あったものの、全国リーグで活動している現在は、メディアなどによって間接的に「女の子」扱いされることやステレオタイプな女性イメージの付与を経験すること

96 この場面は、PRさんが、アスリートとしてそこにいるという心理的な圧迫によって、自分の身体を露出せざるをえなくなったとも解釈できる。これ以上は言及できないが、PRさんからすれば、これはセクシュアル・ハラスメントだったとも言いうる。こう考えると、この事例は、女性アスリートたちの性目的撮影被害と関連して捉えることもできる。近年、陸上、新体操、ビーチバレーボールなどの女性アスリートたちが、競技会場で性的な目的で盗撮される被害が相次いでいる［日刊スポーツ, 2020.11.13・2020.12.09］。これらのことからも、女性アスリートたちが安心して競技を実践できるようにするためには、現在も多くの課題が残されていると言える。

があっても、直接的にほとんど日常の意識にはのぼっていないことを確認した。かえって女子サッカー選手たちは、そうした経験を小さい頃にしてきたからこそ、女子チームに所属している現在の時間と空間を、自分にとって大切なものだと考えている。彼女らにあるのは、ただサッカーがしたいとの想い、ただそれだけなのである。

それどころか、ジェンダーにかかわる違和感や「ちょっとした悩み」に立ち止まることなく、彼女らはそれを気にせず、そこで動揺もしていなかった。太ももを気にしながらも深くは悩まず、また、競技場に男性用トイレしかなくても、女子サッカーが「なでしこ」と呼ばれることに対しても、測定時のさらされる身体に抵抗を示しながらも、サッカーをすることを躊躇したり、それに対して怒ったりして、それが前面に表出されることは見られなかった[97]。これらを克服すること、また、ピッチ上とピッチ外で割り切って振る舞うことが、アスリートになることだと彼女らは理解している。このように、個々人の女子サッカー選手は、周囲で問題視される男女サッカーの様々な格差に対して政治的・制度的に闘おうともしていない。彼女らは、サッカーにおけるジェンダーに関する事柄に対して、とりわけ自覚的な意識は持っていなかった[98]。

こうした状況をどのように解釈すればよいだろうか。まず、女子サッカーの競技環境が以前の状況と比較して大きく改善されたため、選手たちは、それを「サッカーをプレーすることができて、ありがたい」と思うようにと誘導されており、ジェンダー格差に問題を感じたりすることを困難にするという状況の中にいる。これは、日本における現在の女子サッカーが、機会の平等を成し得た段階から脱し切っていないことを表していると言える。そのため、サッカーへの機会は女子にも開かれたものの、男子と対等な関係となるには程遠く、機会の平等と実質的な平等の間に大きな懸隔がある。それをもたらすメカニズムが重層的なジェンダー構造であり、選手たちはサッカーをする限りにおいて、否応なくその中に埋め込まれる。この現状が、ジェンダーに関する女子サッカー選手たちの自覚や問題化への回路を困難にさせていると言わざるを得ない。

そうした中で、女子サッカー選手たちは、とにかくサッカーができることが彼女らの全てであって、ピッチの中でプレーすることに最大の価値を置く。K チームや女子サッカー選手の意識は、サッカー活動時においてジェンダーに関する迷いや葛藤による抵抗は、ほとんど見られなかった。ピッチ外のことは考えないように自らを追い込み、その結果、ピッチ外でのジェンダー格差や制約に対しては意識を向けないようにしているとも見ることができる。

---

97 こうしたジェンダー意識は、あくまでサッカー選手というアスリート・アイデンティティを探求する現役の女子選手にとって当てはまるかもしれない。途中でサッカーを辞めた女性から話を聞けば、また異なることが語られることはあり得る。

98 PB さんは、女子サッカーより男子サッカーの方が面白いと語っていた。彼女は、男子サッカーの方が人気なのを認めていた。また、AK さんは、サッカーをする上で差別されていると思ったことはほとんどないという。男子と同じ時間にいくつかの競技場のある同じ場所で試合があるとき、彼女のチームは女子チームということで人工芝生のグラウンドを、むしろ男子は土のグラウンドが割当てられた経験もあると語った。

しかし、筆者としては、この点について、選手たちがピッチ上でだけでもジェンダーにとらわれずに解放されているということに積極的な意味を見出したいと考える。

だとすると、彼女らにとって、「ピッチに立てる」ということはどのような意味があるのだろうか。そこには一言では言い切れない理由がある。

３　「サッカー選手」として生きる：アスリート・アイデンティティの探求

PR：サッカー続ける理由ね、好きだけど。こう見てて、面白いって思わせたいっていうのもあるし。なんか、結構理由っていうと、すごくいっぱいある。小さいときからもやってきてるからのもあるし。親の感謝の気持ちも、すごくお金かけてもらったから、そういうことに恩返ししてっていうのもあるし。すごく持ってる。ここの理由には、好きだからには、すごいなんか、分かる？入ってる、その中に想いが。感謝の気持ち、もう、、でも単純に好き、重みがある好き、伝わる？

本節では、女子サッカー選手として評価されてきた彼女らが、「本当のサッカー選手になる」ために、自己の生活においてどのようにサッカーと向き合おうとするのかについて確認しよう。彼女らはどのようにして「アスリート」へと自らを集中させているだろうか。また、そのために、何を乗り越えようとするのかについて検討しよう。

３－１　サッカーは私の人生である

PB さんは、保健体育教員になることを目指し、大学卒業後は非常勤講師として働きながら教員採用試験を準備しようとした。そのため、彼女は大学でのサッカーを最後にして、選手としては引退することを決めていた。しかし、大学時代の最後の大会で、彼女は試合に出場したにもかかわらず、負けてしまい悔しさでいっぱいになったという。そのとき、ちょうど試合を観に来ていた K チームの監督（ML さん）から、試合終了後に名刺を渡されて、K チームへ入団しないかと提案される。

PB：最初、全然そういう気なかったけど、こことか〔地元から〕遠いし。でも、最後負けたときに、まだサッカーやりたいと思ってて、ちょうどその話が来たから、その後、実家帰って考えたときに、どんどんやりたい気持ちが強くなった。

このように、彼女は引退を決心していたが、その気持ちは ML さんのオファーによって動き出した。やがて、彼女は K チームのプロ選手として入団して、サッカーを続けることになる。彼女は、大学卒業というライフステージを区切りに引退を決心していたが、それが監督のスカウトによって覆された。思いきりサッカーができるチャンスが訪れるということは、彼女らにとって一体どういう意味を持つのだろうか。

また、AE さんは、高校生のときから K チームで活動している。彼女が進学しようとした高校にはサッカー部がなかったため、進学先が決まったとき、サッカーのできるクラブチー

ムを探した。彼女は、高校を卒業してからは一般企業の契約社員として働きながらサッカーを続けた。今は、支援企業で勤務しながらサッカーに取り組んでいる。彼女は、仕事と競技の両立が大変なときもあるが、サッカーを中心にして自分の生活を過せることに感謝している。今の仕事に手を抜けないと考えるのも、サッカーをするためなら仕事による苦労は我慢する必要があるという思いから来ている。

AE：なんか自分が、もし、今サッカーを辞めたとしたら、これからの人生に何が残るってなったら、なんか、それぐらいサッカーは偉大だったなって考えたら、人生の中にサッカーっていう、なんだろうね。サッカーがすごい重いんだなと思って。自分の人生の中、10 だったら 7 はサッカーだな、みたいな。

このように、AE さんの人生において、サッカーは大きな位置を占めている。それをよく表しているのが《人生の中にサッカーっていう、なんだろうね。サッカーがすごい重いんだなと思って》の語りであろう。このことから、彼女にとってサッカーは単なるスポーツではなく、言葉ではすべてを表現できない、人生の土台を作ってくれた重い想いのあるものとして意味づけられている。

そして AF さんも AE さんと同じく、サッカーを通して生きる意味を感じている。AF さんは、大学に通いながら学生選手としてサッカーを続けている。彼女は、大学の授業料や生活費を家族に負担してもらい、家族に支えられながら生活をしていた。彼女は、アルバイトをして家族の負担を減らしたい気持ちはあるが、そうするとサッカーができなくなるため、アルバイトを断念していた。その点を申し訳ないと思いつつ、サッカーをしている彼女であった。なおかつ、昨シーズンに大きなケガを負ってしまい、手術を受けた。調査時点ではリハビリをしている最中だった。

AF：今、怪我して筋肉も全然下がってるし、復帰できないんじゃないかなという不安で、それだったら、もうここで辞めた方がいいんじゃないかなという、自分の判断もあったけど。自分からサッカー取ったら何も残らないというのが一番あって……それ取ったら普段、この夜の時間、何もすることがないことになって。そういう怖さもあったし、やり切った感がなかったですよね。1 年間で、試合も全部出れたわけでもないし、途中出場が多かったし。国体とか連れてもらえなかったから。ベンチの方が多かったから、そういうところで辞めたら自分に負けてるという気持ちもあったし、ここで辞めるのは悔しかったし、逃げるように思えて、だから続けようっていうふうに思った。

AF さんは、サッカーを続ける理由を大きく二つのことから説明する。一つ目は《自分からサッカー取ったら何も残らない》ことと、二つ目は、《やり切った感がなかった》という点があげられる。彼女は怪我で《もう辞めた方いいんじゃないか》と考えたこともあったが、サッカーをしない自分の生活に怖さを感じていた。つまり、AF さんは、これまで夜の時間

にずっとサッカーをしてきたため、むしろ両立しなくなることに対して、《何も残らない》という大きな喪失感を感じるだろうと考えている。サッカー選手であるというアイデンティティを失うことへの恐怖がある。これほど、彼女の生活においてサッカーが占めている部分は大きい。

また、彼女は途中出場やリーグ戦のときもベンチが多かった。レギュラーでキックオフをした経験も少ない。けれども、そこで、彼女は怪我を理由にしてやめることはしたくなかった。彼女は、たとえ怪我で辞めたとしても、ずっと試合にレギュラーで出られないまま、怪我を言い訳にして辞めるようなことは選択したくないという、あくまでアスリートとして評価されることを志向したいと考えている。このように、AF さんは、サッカーをしない自分の生活に対する恐怖や、選手としてやり切ったという達成感を求めて、アルバイトの代わりにサッカーを選択して競技を続けている。

次に、AP さんの事例を紹介したい。AP さんは、サッカーができない生活を経験したからこそ、その生活の大切さを感じ取っていた。彼女は、小学校のときからサッカーが好きで、今はプロ選手になることを目指しながら、引退後は子どもや中学生を対象にする指導者になることを希望している。彼女は、自分の一生をサッカーで生きる気持ちを持っている。それほど、サッカーが好きな選手である。こうした彼女は、高校時代に負ってしまった怪我で、生活全体が変化したという。AP さんは、高校生のときに足の靭帯を切ってから 9 ヶ月をかけてリハビリを行っていた。そうした中、もう少しで復帰となるところで、また足の靭帯を切ってしまったのである。

AP : 結構ケガ多くて、なんか、そのリハも結構長くて、結構病んでて、そしたらなんか、軽いうつ病みたいな感じになっちゃって。高 2 のときから、高 2 のときなっちゃって。で、あのう、そう、朝とか、起きれなくなっちゃって。夜も眠れなくなって。なんか逆転した感じ、朝と夜が。で、部屋からも出れなくなったし。人と会うのも本当に嫌になって。なんかサッカーできないことが本当につらくて。で、あのう、なんかね、人と喋るのとかも嫌だったし、なんかサッカーできてる人が、いや、マジつまんねとか。

AP さんにとってサッカーができないことは《軽いうつ病》のようになるほど、つらいことであった。それは《部屋からも出れなくなったし。人と会うのも本当に嫌になって》《人と喋るのとかも嫌だったし、なんかサッカーできてる人が、いや》という語りから表出されている様に、彼女のサッカーでの人間関係や、サッカーする人を憎んでしまうほどであった。彼女が自分の人生をつまらなく感じさせる深刻な挫折、喪失感を起こす要因となっていた。サッカーができなくなる生活は、身体だけではなく、精神的な健康も全てを失ってしまうような感覚を生じさせていた。

彼女らにとってのサッカーを続ける意味について見てみよう。ここから、彼女らの過去から現在までの人生において、サッカーがいかに大きな部分を占めているかがわかる。

将来の計画を後回しにしても、現在のオファーを受け入れた PB さんが追求するサッカー

は、遊びや趣味としてするものではないという。

PB：これ限界だって感じたら辞めたい。でも、遊びで？フットサルとか。そういうのは地元に戻った後にしたいなとは思う。趣味みたいな感じではしたいなとは思う。真剣に本気でやるのは、自分の体に限界を感じたとか、これ以上、うまくなれないなと思ったら辞める。

PB さんは、K チームに入団してサッカーを継続する理由を《真剣に本気でやる》サッカーを実践したいからだと思っている。ここで彼女は、自分のサッカーを《遊び》や《趣味みたいな感じ》のものと異なるものと説明している。彼女が下した選択は、《趣味》ではなく、生活全体をかける労働として、職業として選んだアスリートへの道である。

さらに PB さんは身体能力の限界も視野に入れながら、サッカーをするかどうかを選択していた。PB さんはアスリートの身体能力における時間への限定性、つまり歳を取るとともに身体能力が衰えてしまう点を考慮している。そこから、将来の計画を変えて、女子サッカーのプロ選手という不安定な日々を選択してでも、若いうちにしかできないアスリートになることを優先したと言える。確かに、滅多にプロ選手になれないという女子サッカーの現実は、PB さんの競技への気持ちを大きく揺るがすことになったかもしれない。その上、女子プロサッカー選手の待遇は前述のように極めて貧弱なものである。

このように見てくると、AP さんや PB さんがサッカーにもう一度携わろうと決心した理由は、自分の生活においてサッカーから離れて生きることができないという、「生活感覚としてのサッカー」を追求したいからだと考えられる。それは、競技を中心に生活してきたアスリートが体得した、簡単に消し去ることは難しい生活感覚なのである。よって、彼女らは、生活の中でサッカーをしていた時間に余裕ができてしまうことを拒み、身体能力のある今のうちに、サッカーをする喜びを求めて、K チームでサッカーを継続していると言える。

３－２　女子サッカー選手という困難を、あえて選択する

AG さんは、一般企業の社員選手としてチームで活動している。一般企業の社員選手として K チームに所属するというのは、第 8 章で詳しく述べた通り、サッカーのために会社を欠勤することも認められず、毎月固定給を受け取ることも保証されない不安定な生活を意味する。それに彼女は、両親に金銭的な支援を求めることも難しい立場であった。しかし、AG さんは、サッカー選手になる以上、すでにそのような経済的困難があることを覚悟していた。

AG：まあね、お金がかかる、かからない、それは別にないよ。そういうサッカーにお金かかるのは、当たり前の話だったから。で、まあ、きついなっていうときもあったけど、遠征とか行く度に。それは、別に、当たり前の話だって変わらないし。今年に関しては、負担してくれるっていうので、すごい感謝している。というのはあるから、それに関しては、辞めたいと思ったことはないけど。

AG さんはサッカーを行う上で、選手が負担する私費やそれによる経済的困難は《当たり前の話》としている。選手たちは、女子サッカーの経済的状況を理解しており、高いレベルの選手たちも私費を投じて競技活動をすることであると認識していた。彼女からすると、このチームで活動する以上は遠征費の用意など、金銭面で豊かな生活はできないことを承知のことである[99]。

また、AG さんが《辞めたいと思ったことはないけど》と話しているように、彼女において経済的困難は、サッカーを辞めようと考える根本的な要素にはなっていなかったのがわかる。彼女にとってサッカーという競技活動は、経済的な豊かさを度外視しても還元できない、生活全体をかけて向き合う価値があるものとされている。それは、次の AP さんの事例からも確認できる。

リハビリ中であった AP さんは、復帰を目の前にして負った連続の怪我で、鬱になるほど大変な思いをしていた。彼女はそこで一旦前所属チームから離れることを選択した。しかしながら、サッカーをしたい気持ちが収まらなかったため、彼女は監督 ML さんに自ら連絡をして、もう一度サッカーをしたい気持ちを、リハビリ中だが入団したいという気持ちを伝えたという。それを ML さんが承諾したため、AP さんは K チームに入団することになった。このように、AP さんはサッカーによる怪我、怪我による精神的プレッシャーを、再度サッカーをすることで自分の抱える困難を乗り越えようとしていた。

◎：AP さん、〔前の試合で〕ボレーシュート決めたっけ、それ覚えてるよ。

AP：だから、その一瞬の、そのね。試合の、きっと試合だよね。1 回 2 回打つ、ずるずる、どうかっていうぐらいの。その一瞬の、そのゴール決めるときって、周りの、そのつらいことも忘れられるし、その普段のね。単純に嬉しい気持ちだけで、気持ちだけじゃゴール決められないけど。まあ、自分が決めるのも、本当に嬉しいけど。まあ、そのやっぱ、自分がゴール決めることでの、その燃え上がりっていうか。まあ、自分も嬉しくなるし、それは本当に。

◎：でも、その一瞬のために 1 年間の生活の中で我慢しないといけないことが多いじゃない。それってシビアなことだと思わないの？

AP：シビアだけど、何て言うのかな。その一瞬の楽しさを知っちゃってるわけだから。それを求めて自然とやれるっていうか。まあ、シビアできついときもあるけど。その一瞬の喜びっていうか、楽しさを求めて自分自身やっているから。しかも、サッカーやれてるってこと、本当に幸せなことかなと。

この対話から分かるように、AP さんはゴールを決めたときは周りのつらいことも忘れら

99 女性が全国レベルのサッカー選手として活動することは、経済的困難が伴う場合が多くある。そのため、AG さんは、インタビュー中に《1 年をやるっていう、サッカーと向き合うっていうことは、やっぱりそれなりの覚悟とか必要だから》と語ったと考えられる。

れるという。とくに、《周りの、そのつらいことも忘れられるし、その普段のね》という語りに注目すると、彼女は、ゴールを決めた瞬間とこれまでのつらさを引き換えにしているように見える。つまり、怪我から復帰への不安な日々、復帰に向けて自分自身と戦ってきたリハビリへの忍耐、また、回復した後も試合に出られる身体をつくる時間など、これまで彼女の経験したつらい日々は、ゴールという一瞬の喜びとして報われているように見える。さらにいうと、逆にその喜びを求めて、AP さんは怪我中の時間を耐えて来られたように見られる。このように、AP さんは、競技をめぐる日々の困難を乗り越え、それを試合で結果として出すという、そのプロセスを通してアスリートとしての大きな喜びを感じていた。それは、彼女のアスリート・アイデンティティの探求の仕方であるとも言える。

また、印象深い点は、《シビアできついときもあるけど。その一瞬の喜びっていうか、楽しさを求めて自分自身やっているから》という AP さんの語りであった。AP さんにとって、サッカーを通して感じる一瞬の喜びは、1 年間の契約期間中に発生せざるを得ない様々な困難に耐えることを可能にするほどの価値のあるものとされている。

以上、K チームの選手が不安定な日々の中でも、サッカーを続ける理由を考察してきた。彼女らの過去と現在の生活は、サッカーを土台にして、それに集中する生き方を選択していることが確認できた。それらを通して読み取れた点は、たとえ、「女という二流の選手」のように周囲から思われたとしても、また経済的な保証がされないとしても、とにかくサッカーができるのであれば、それを追求するための生活を探し出し、それに没入していくのが、彼女らの生き方だということであった。彼女らにおいて、アスリートとしてあり続ける時間と空間には経済的な利益では還元できない価値がある。彼女らにとってサッカーというのは、日々の辛さを実感しながら、アスリート・アイデンティティを享受し、また、ピッチ上ではジェンダー規範からも解放される、悲しみと喜びを代わる代わる味わう人生の一部分が刻み込まれている実践であった。

4　小　括

第 9 章では、まず、ここまで本論文の中で見えてきたものをもとに、女子サッカー選手の労働と生活に大きく関与する 4 つのジェンダー構造を整理した。その結果、女子サッカー選手たちは、競技種目上のジェンダー構造（近代スポーツにおけるジェンダー構造）、サッカーチームのジェンダー構造、サッカーにかかわる組織・機関のジェンダー構造、職場（企業）のジェンダー構造、これらの重なりの中に位置づけられているのがわかった。

その上で、彼女らのジェンダー意識について検討した。その結果、彼女らには、ただサッカーがしたいとの想いそれだけでサッカーに打ち込み、ジェンダーにかかわる違和感や「ちょっとした悩み」に立ち止まって、サッカー活動時においてそれらに抵抗しようとしなかった。

その理由としては、女子サッカーの競技環境が以前の状況と比較して大きく改善されたため、選手たちは、それを「サッカーをプレーすることができて、ありがたい」と思うようにと誘導されており、ジェンダー格差に問題を感じたりすることを困難にするという状況の中にいるからであろう。これは、日本における現在の女子サッカーが、機会の平等を成し

得た段階から脱し切っていないことを表していると言える。そのため、サッカーへの機会は女子にも開かれたものの、男子と対等な関係となるには程遠く、機会の平等と実質的な平等の間に大きな懸隔がある。それをもたらすメカニズムが重層的なジェンダー構造であり、選手たちはサッカーをする限りにおいて、否応なくその中に埋め込まれる。この現状が、ジェンダーに関する女子サッカー選手たちの自覚や問題化への回路を困難にさせていると言わざるを得ない。

しかし、こうした状況の中でも、彼女らはサッカーを続けることを選択し、「女子サッカー選手」ではなく、あくまでも「サッカー選手」へと自分を追求する生活を過ごそうとしている点が見出せた。経済的に厳しい状況にあっても、自分自身のために、また周囲からアスリートとして認められるために、彼女らは、24 時間、365 日、スポーツのための労働、訓練、食事、人間関係、睡眠など、日々の暮らし全般にわたってサッカーのために生きていた。このように、彼女らは、女性であるがゆえに二流の選手として周囲から思われたとしても、経済的な保証がされないとしても、サッカーができるのであれば、あえて脆弱な立場に自らが置かれることも引き受けようとする、そうした生活感覚を追求していたのであった。

そのため、女子サッカー選手が、そうした扱いをされる中でも競技を実践していることは、それだけで大きな価値がある。諦めずに競技を続けること、困難に耐えながら踏ん張る彼女らの姿は、サッカー、そしてスポーツにおけるジェンダー秩序に挑んでいることに他ならない。なぜなら、スポーツ界それ自体、競技種目においてもサッカーは男の世界と見なされているからである。よって、それほどまでにスポーツ、そしてサッカーにおけるジェンダー構造は重層的に積み重なり根深い世界に、彼女らが競技を続けていることはそれだけで大きな価値があると言える。

終　章

１　本論文のまとめ

本論文は、女子サッカー選手において、競技活動とそれを可能とする労働・生活の双方がどのように相互に関わりながらなされているかを、女子サッカーの固有性やその文脈を踏まえつつ、フィールドワークによって得られた選手の視点を通して内側から理解することを目指してきた。

従来のアスリートに関する研究では、トップの男子プロ選手に焦点が当てられ、彼らの競技活動とセカンドキャリアについて主に議論されてきた。また、女子サッカーに関する先行研究では、競技人口増加、選手育成・強化、環境整備、男女格差問題といった、経済的位相に基づいて量的な発展を目指すための議論が主流であった。

これらに対して、本論文では、競技としても、労働としても脆弱な基盤に置かれている女子サッカー選手に注目して、女子サッカーの文脈を踏まえながら、彼女らがサッカーをするためにどのように生計を立てているか、競技と労働をどのように両立しながら、どのようにアスリート・アイデンティティを獲得し、それを探求しているか、また、その過程において女性アスリートとしてどのような困難に直面し、それをどのように克服して競技を継続しようとするのかを明らかにしようとした。そして、これに答えるために、女子サッカーK チームの選手たちの生活全体（競技活動、労働）のリアリティーをフィールドワークの結果をもとに描き出した。

まず、大きな枠組みを確認すると、第 1 章から第 3 章では、女子サッカーが日本においてどのように受け入れられ、浸透し、定着しているかを明らかにするために、日本女子サッカーの全体像を把握することを目指した。そもそも女子サッカーはどのような意図で作られたのか、どのような競技として見なされてきたのか、女子サッカーの固有性を検討した。これを考慮しながら、第 4 章以降では、フィールドワークによって把握した女子サッカーK チームと選手の生活全体を、チームの秩序と選手たちの経験を軸にしながら描出した。

第 4 章と第 5 章では、K チームと地域社会、選手を規定する外部要因の整理し、第 6 章から第 9 章では、これまで明らかにした女子サッカーの状況の中で、個々人の女子サッカー選手たちがアスリートとしてどのように生きているか、また、どのようにアスリート・アイデンティティを探求しながら労働と生活をいとなんでいるかを明らかにした。各章で明らかにした内容を、以下にまとめる。

第 1 章では、女子サッカーの脆弱な基盤は、女子サッカー競技自体の固有性から由来することをスポーツとジェンダー研究の観点から明らかにした。日本において、サッカーは、男性が多く参加するスポーツとして位置づいていた。こうした現実を踏まえると、女子サッカー選手は男子サッカー選手よりも、多くの葛藤や矛盾を抱える可能性がある。また、歴史をさかのぼれば、そもそもサッカーは性別不問の競技であり、「女らしさ」を考慮したスポーツではなかった。つまり「男らしいスポーツ」として発展したサッカーに参加する女性は、男性と同じフィールドで戦うことが求められ、その結果「二流の選手」として位置づけられ

てしまうのである。このような意味でのジェンダー秩序がサッカーに強くすり込まれている。だからこそ、サッカーへの女性の参加は、そこにおけるジェンダー秩序を揺るがす可能性を秘めているのではないかと考えた。

第 2 章では、前章を踏まえて、日本の女子サッカーはなぜ脆弱な競技環境に置かれているのか、リーグの変遷や現状を確認することで、これを把握した。日本においてサッカーは、「男らしいスポーツ」として発展してきたため、女子サッカーには男子とは異なるルールが適用され、男子にはかなわない格下の存在として捉えられてきた。また、長らく性的イメージが絶えず付与されてきており、女子サッカーへの性的眼差しとジェンダー・バイアスの強化がおこなわれてきたことがわかった。それゆえに、リーグ当局は、女子サッカーに「なでしこリーグ」「なでしこジャパン」のような「女らしい」女子サッカー選手というイメージを付与し、「男らしい」サッカー選手のイメージとのギャップを売りにして人びとの耳目を集めることで、女子選手を活用して女子サッカー業界を盛り上げようとすることも見られた。さらに、女子サッカーは、1998 年度の 1 シーズンのうちに 4 つの企業チームが、1999 年度に 3 つの企業チームが廃部を発表したように、社会や企業の経済的状況によってチームの存続自体が左右されやすい点が確認できた。このこともあって、リーグ当局は女子サッカー普及と選手の育成、代表強化などを目的にして、リーグをめぐる様々な事業を進め、女子代表の大会結果とリーグ自体の予算に依存しながら、リーグを拡張したり再編成したりする方法で、リーグ運営に務めていることが明らかになった。

第 3 章では、加盟チームの実態を明らかにした。とくに、そこでは、どのような財政的な困難が生じているか、それが選手たちの競技活動と労働・生活をいかに不安定にさせるかを解明した。チームの運営難の中で、選手たちはサッカーを続けるために、きわめて脆弱なプロ選手にしても、別の仕事をしながら生計を立てなければならないアマチュア契約にしても、不安定な労働と生活を送っていた。チームでは、リーグ拡張とともにチーム間の競争も激しくなるに伴い、チーム自体を存続させ、また競技力を向上させるための戦略として、同じチーム内にプロ選手とアマチュア選手を混在させる形で、選手を構成せざるを得なかった。こうして選手の競技実践形態は複数化していった。女子サッカーの労働市場は、選手がプロ選手として活動することがほぼ不可能な現状にある。一方で、2021 年のプロリーグの開幕は、女子サッカーのプロ化に向け期待が寄せられるが、これによって女子サッカーの社会経済的な脆弱性が根本的に改善されるとは考えにくく、むしろそれによって女子サッカープロリーグの限界が示されることが危惧される。女子サッカー選手の多くがアマチュア選手として活動することは、すぐには変わらない現実である点が確認できた。

第 4 章では、個々の女子サッカーチームが、実際にどのように運営され、選手の競技実践形態はどのようにあらわれているかを K チームに即して確認した。K チームは、地域標榜型の運営を行なっており、サッカー活動とともに地域内のイベントなどの活動も行っていた。選手たちは、チームの活動だけでなくそれ以外の労働と生活においても、K チームの秩序や規律に即して振る舞うことや、周りの人びとに模範的で良識のある態度を示すことが求められ、選手たち自身もそれを受け入れ、同一化し、「よりよきアスリート」になろうと努力していた。他方で、選手間の競争とそれによる選手の葛藤が生じる局面もあった。本章

では、選手間のレギュラー争いとそれに伴う処遇の差異が見られた。ここには、異なる競技実践形態を結びながら、スタッフからは、サッカー選手として一律的に処遇するという状況が前提とされていた。このことについて選手たちは仕方がないことだと理解する一方で、それがチーム内での緊張感を孕んだ不安定要素にもなっている点が見出せた。

第 5 章では、地域社会における活動を通して、K チームが地域企業（支援企業）や地域住民とどのように関係を築きながら活動しているかを検討してきた。サッカーチームでは、J リーグの理念とその活動方針のもと、地域社会に貢献する活動を行うことを重要視する考え方が求められ、女子サッカーチームである K チームでもそれに則って活動を行っていることが確認できた。ただし K チームは、女子サッカー競技自体が脆弱であることとも関わって、地域社会によって支援されるものとしての位置づけが大きかった。選手たちは、その支援への恩返しの一環として、地域社会への貢献活動やサッカー教室などに励んでいた。自らを単にスポーツチームを運営している者にとどまらず、地元地域を代表する社会的責任を持つ集団として意味づけていた。それは、選手たちも理解しており、勝利によって地域へ貢献することはもちろん、地域住民の模範になること、道徳的な存在であり続けること、地域住民とパーソナルな関係を結ぶことが重要とされていた。

以上のように、第 1 章から第 5 章では、女子サッカーという競技、業界、リーグ、チームといった全体の現状を明らかにしてきた。次に、個々人の選手の競技活動とそれを可能にする労働と生活に焦点を当てた。

第 6 章では、同じチーム内にいる選手の競技実践形態が異なる中で、選手たちはどのような経験をしているかについて検討した。選手たちが K チームに所属するということは、選手個々人の感情を抑えてまで、チームの指示事項に従順にならなければならないことを意味していた。そこで「本当の選手」にはセルフ・デボーションが理想的な態度と見なされていた。これは女子サッカー選手が獲得すべきアイデンティティであった。これを獲得するために、K チームの選手たちは、それぞれの競技実践形態を相互に理解しつつ、その秩序を維持するための行為を学習していた。一方で、プロ選手とアマチュア選手の生活実態が異なることから、プロ選手の方がより厳しい評価の目にさらされ、追い詰められがちであった。例えば、プレー場面において、プロ選手は昼間に仕事をしていないため、小さなミスでも責められる立場に立たされていた。そのため、一般的には、アマチュア選手とプロ選手が混在している場合、プロ選手に発言権があると思われがちであるが、ここでは学生を除いて、その立場が逆転していた。このように K チームの選手たちは、サッカー選手として同じ競争をしながら、他方で契約上のステータスと認識上のステータスにおける差異の中で、相互に競争的な関係にあり、それによって競技活動とそれ以外の生活が総体的に不安定性にさらされている点が明らかになった。

第 7 章では、プロ選手の労働環境に着目し、それがいかに不安定であるかを検討してきた。同じチーム内に競技実践形態が異なる選手がいる場合、プロ選手は、アマチュア選手からの評価の目に晒され、その労働環境が不安定である点が、プロ選手の月経の痛みへの対応場面に顕著に見られた。月経の痛みをチームメイトにも隠していた PB さんの行為から、集団内で月経への対応が自分の認識上のステータスの維持に関わり、また、その痛みを訴える

ことが、チーム内での居場所の喪失、アイデンティティの不安を自らが招くことになりかねないことがわかった。

第 8 章では、支援企業の社員選手の労働環境について描出した。彼女らは、「サッカーのための労働」が「サッカーから疎外される不安定な労働」へと変化していく矛盾を感じながら生きていることが明らかになった。支援企業とそこに雇用された選手の関係には、支援する側／支援される者といった力関係が胚胎しているため、選手が支援企業の要請に従うことは暗黙の前提になっていた。すなわち、選手は極めて脆弱な労働者であった。それは支援企業と AH さんとのチームへの帯同に対する意味の捉え方の違いからも、AS さんが支援企業に提示された労働環境にそのまま順応しようとした点からも確認できた。なかでも、そうした支援の質的問題を象徴的に示していたのが、立ち仕事であった。彼女らにとって大切なのは、競技活動をするための労働環境であり、働くことそれ自体ではなかったが、AH さんの職務内容である立ち仕事は、支援の矛盾が象徴的に表れているものであり、選手のセルフ・デボーションを妨げるものとして作用していた点が浮き彫りになった。そのため、支援企業の社員選手は、競技活動のための労働が、むしろアスリートとしての生活維持を妨げていることにつながることから、アスリートとして全うするにあたって葛藤を抱えていた。

第 9 章では、女子サッカー選手の労働と生活に大きく関与する 4 つのジェンダー構造を整理した。その結果、女子サッカー選手たちは、競技種目上のジェンダー構造（近代スポーツにおけるジェンダー構造）、サッカーチームのジェンダー構造、サッカーにかかわる組織・機関のジェンダー構造、職場（企業）のジェンダー構造、これらの重なりの中に位置づけられているのがわかった。各ジェンダー構造を明らかにした上で、彼女らのジェンダー意識について検討した結果、女子サッカーの競技環境が以前の状況と比較して大きく改善されたため、選手たちは、それを「サッカーをプレーすることができて、ありがたい」と思うようにと誘導されており、ジェンダー格差に問題を感じたりすることを困難にするという状況の中にいることがわかった。これは、日本における現在の女子サッカーが、機会の平等を成し得た段階から脱し切っていないことを表していると言える。そのため、サッカーへの機会は女子にも開かれたものの、男子と対等な関係となるには程遠く、機会の平等と実質的な平等の間に大きな懸隔がある。それをもたらすメカニズムが重層的なジェンダー構造であり、選手たちはサッカーをする限りにおいて、否応なくその中に埋め込まれる。この現状が、ジェンダーに関する女子サッカー選手たちの自覚や問題化への回路を困難にさせていると言わざるを得ない。

しかし、こうした状況の中でも、彼女らはサッカーを続けることを選択し、「女子サッカー選手」ではなく、あくまでも「サッカー選手」へと自分を追求する生活を過ごそうとしている点が見出せた。経済的に厳しい状況にあっても、自分自身のために、また周囲からアスリートとして認められるために、彼女らは、24 時間、365 日、スポーツのための労働、訓練、食事、人間関係、睡眠など、日々の暮らし全般にわたってサッカーのために生きていた。彼女らは、サッカーができるのであれば、あえて脆弱な立場に自らが置かれることも引き受けようとする、そうした生活感覚を追求していた。このように、彼女らは誰よりもサッカーのために生きる、サッカーを人生の一部として捉え、日々を丁寧に過ごすアスリートであった。

以上、本論文では、女子サッカーは、競技面、財政面、身体能力において男性より脆弱な存在として位置づけられ、抑圧されてきた結果、女子サッカーチームは不安定な運営を強いられており、それによって選手も不安定な契約、競技活動、労働環境に置かれている点を見てきた。チームの運営は地域との関係性に依存せざるをえず、選手はチームと地域の間に立たされていた。選手の競技実践形態も複数化し、そこでの差異の存在が、選手たちをさらなる競争にさらしている要素になっている点も確認した。次に、これらの結果を踏まえ、本論文が見出した新たな知見を示したい。

２　結論

今日、アスリートの労働に関する研究では、現役引退後のアスリートの生活を展望して、セカンドキャリア、デュアルキャリアをめぐる議論が活発になっており、それらをどのように制度化していくかが、アスリートの労働と生活に関する研究の課題となっていることを序章で確認した。そこで、本論文が指摘した先行研究の課題は、研究対象が男性トップアスリートに集中していること、アスリート現役時代の労働の実態が構造的な特徴を踏まえながら解明されていないこと、そして、アスリートがその実態をどのように理解し、その状況の中でどのように競技活動と仕事を両立させているかが十分に明らかにされていない点であった。これらに対して、女子サッカー選手を対象に検討した本論文の結果を踏まえると、以下のことが言える。

２－１　労働と生活から見た競技活動における不安定化の要因とその内実

アスリートの競技活動は、それを可能にするための経済的基盤の確保（労働）と競技以外の生活のありよう、そしてアスリート・アイデンティティの探求とのせめぎ合いの中で展開する。ここにおいて、競技活動を最優先するアスリートにとっては、競技以外の労働は、競技環境を最大限保障できるかどうかが最も大事な問題となる。なぜなら、アスリートとは、競技のために、その生活を捧げることを志向する者だからである。しかし、商業主義的・資本主義的なプロスポーツの世界では、トップではないアスリートは、その経済的基盤の確保（労働）において、より不安定な状況におかれるため、その不安定性が競技活動を強く規定する。財政的な基盤を持ち得ない競技に携わるアスリートたちは、そうでないアスリートよりも、競技種目自体とそれに関連する組織とのやりくり（リーグ当局、チーム、選手間など）によって、さらに不安定な競技活動を行わざるを得ない状況にあると言える。

トップではないアスリートの労働は、同じチームの選手同士であっても、その雇用主、雇用形態、勤務先、勤務形態、給与など、労働環境が異なるのが通常である[100]。これは、地域スポーツの振興とアスリートへの支援としてチームの斡旋によって取り組まれるアスリートの雇用（支援企業による雇用）であっても、そうした労働環境は一様ではない。そして、

100 ここでは企業チームではない場合が想定されるが、企業チームであっても似たような状況が生じることは考えられる。つまり、その雇用主こそ同一企業であったとしても、その労働環境（立ち仕事かデスクワークか、非正規雇用か正規雇用かなど）が多様であることを言える。

チームの斡旋による雇用であるため、自分の労働条件について雇用主と交渉することはできない。どのような仕事をするか、どこで勤務をするかが分からないまま、提示された労働条件を受け入れなければならない立場に置かれる。つまり、競技活動を安定化させるために行うはずの労働が、むしろ競技活動を不安定化させる事態も招いているのである。チームと支援企業の結節点に配置されている個々の選手は、両者の関係の只中で、チームを背負って働くことを強いられるという意味で、相対的に「安定的な雇用契約（競技活動が保障される）」を結ぶのと引き換えに、不安定で不自由な労働を強いられるという危険性もある。

また、チームと雇用主（支援企業）との間に立たされ、勤務先で一社員としてだけでなく雇用主から支援されているチームの一員として振る舞うことも要請される。選手の振る舞いがチームに対する評価に直結するがゆえに、雇用主によるチームへの信頼が維持できるよう、選手は従順な、よい社員になることが求められる。それと同時に、チームが好成績を残して雇用主の支援を宣伝することや、雇用主が主催するイベントを支えること、それらによって支援への「恩返し」をすることも要請されている。このように、選手は、たとえ正社員として雇用されたとしても、チームと雇用主の関係性に拘束された不自由な労働者とならざるを得ず、チームを介した就労は、むしろ選手の競技活動を妨げ、選手を追い込む、不安定な就労の要因となりうるのである。このことから、Edwards［2014］が「正規職／非正規職」の枠組みで選手の労働環境や生活困難は改善される可能性があるという指摘は、本論文の事例においては一致しないことが明らかになった。

では、プロ選手になれば、労働と生活をめぐる問題は解決するのだろうか。実際のところ、そうではなく、プロ選手はまた別の困難を抱えることになる。そもそもすべてのアスリートがプロ選手になることは現実的に不可能である。競争的で序列的なアスリートの世界においては、例えば同じ男子プロサッカー選手であっても J1 と J3 で活動する選手間の年俸には差があるように、多額の契約金を得る選手の周縁には、必ず薄給のプロ選手が存在する。そのような周縁にあるプロ選手は、契約上ではプロでありながら、生活費を切り詰めなければならないほどの金額の報酬に甘んじなくてはならないのが現実である。

このような労働とそれに伴って生じる競技実践形態における選手間の差異が同じチーム内で可視化されることは、選手の序列を複雑化させる。「契約上のステータス」と「認識上のステータス」の間には対応関係がなく、プロ選手のように競技活動の基盤が相対的に安定している立場であっても、チーム内ではアマチュア選手に対して弱い立場に置かれるなど、「契約上のステータス」の高いプロ選手における「認識上のステータス」の低さが見られ、一般に想定されるのとは逆の現象が生じている。このことは、プロ選手にとって過度に競争的な環境を強いる作用を持つ。

このように、プロ選手であっても、アマチュア選手であっても、その労働と生活は不安定化せざるをえない。そのため、選手個々人は、各々の不安定さに向き合いながら、サッカー選手であろうとして試行錯誤する。模索しながらも、いかに競技を実践していくかが、選手にとっては重要な課題なのである。

以上が、トップではないアスリートの労働と生活から見た競技活動における不安定化の要因とその内実である。

２－２　ジェンダーの視点から見た生活全体における不安定化の要因とその内実

ここに重層的なジェンダー構造を重ねてみると、トップではないアスリートであることに加えて、女性であるということは、ジェンダー秩序が色濃く浸透しているスポーツにおいて、女性アスリートたちに、さらなる不安定化を強いる要因となっている。

まず、女性がサッカーを行うということそれ自体が、プロスポーツとしての存立基盤を経済的に脆弱化させる要因になっている。なぜなら女子サッカーは、「男らしく」プレーこそが魅力とされる競技だからである。そのため、女子サッカーチームと選手の競技活動は必然的に不安定なものになる。また、その脆弱性を克服しようとしてリーグ当局によって行われる取り組みは、各チームや選手に新たな負荷を課し、これらに起因して生じるさらなる経済的・労力的負担は、チームの安定的な存続とチームにおける選手雇用に困難をきたし、選手の生活全体（労働・競技活動を含む）を不安定なものにしていた。サッカーが「男性向きの」「男らしい」スポーツとされていることが、女子サッカーにおける経済的な不安定化の何よりも大きな要因である。

競技種目上のジェンダー構造（近代スポーツにおけるジェンダー構造）は、チームのジェンダー構造にも影響を及ぼしている。特に、サッカーチームのジェンダー構造では、監督（指導者）の多くは男性で、女性は選手という関係に位置づいており、女性スタッフは所属していたとしても、チームの意思決定は男性によって行われ、そこから女性スタッフは排除されているのが現実である[101]。チームの意思決定における女性スタッフ及び女子選手の不在は、彼女らの競技活動以上に、それを保障する労働と生活（将来構想も含む）において、特に大きな影響を及ぼしていると考えられる[102]。また、こうしたサッカーチームのジェンダー構造は、組織・機関のジェンダー構造とも相似形を成している。さらに、職場（企業）のジェンダー構造では、そもそも、労働待遇、賃金、職種などにジェンダーの偏りが見られ、男性に対して女性は相対的に脆弱な労働者として処遇される現状がある。女性アスリートもまた女性労働者として、こうした構造の中に置かれる。

以上のように、ジェンダーの視点から見ると、競技種目上のジェンダー構造（近代スポーツにおけるジェンダー構造）によって経済的な脆弱性は、特に女子サッカー（及び女子野球、女子ラグビーなど「男らしいスポーツ」）にとりわけ大きく生じており、それと関わりながらスポーツチームのジェンダー構造、スポーツにかかわる組織・機関のジェンダー構造が作用していた。さらにそれを取り巻いているのが職場（企業）のジェンダー構造である。このようにして女性アスリートの労働と生活の不安定性は強化されていると言える。

このような重層的なジェンダー構造は、女性アスリートがアスリートとしてアイデンティティを形成していく過程に混乱をもたらす要因になる。たとえKチームの選手個々人が、チームの秩序に順応して「本当の選手」になるためにセルフ・デボーションを実践し、さら

---

101 だからこそ WE リーグは、設立にあたってガイドラインに「運営にあたる法人を構成する役職員の 50%以上を女性とする」、「意思決定に関わる者のうち、少なくとも 1 人は女性とすること（取締役以上が望ましい）」などを設定したと考えられる。

102 これは、経済的な脆弱性とは別に、サッカーに限らず、女子スポーツチームに共通して現れていると考えられる。

に地域社会との友好的な関係を維持するために尽力したとしても、他者からはアスリートとして認められにくいジェンダー構造の中にいるからである。チーム（男性は指導者、女性は選手)、地域社会（女子選手は支援してあげる対象、女子サッカーが支援されるためには「女らしさ」が欠かせない)、組織・機関（幼児化、性的対象、広告活動におけるジェンダー・ギャップという売りの要請)、職場（性別役割分業、脆弱な労働者）など、彼女らが活動する各社会の主体（行為者）が、彼女らをアスリートではなく、女性（男の世界で頑張っている女の子）と見なす。このことは、彼女たちが日々積み上げてきたアスリート・アイデンティティを傷つけ、このような矛盾の繰り返しが、女性アスリートがアスリートであろうとすることを妨げ、アスリートの基準が男性であるという、スポーツにおけるジェンダー秩序を確固たるものにしていると言える。

２－３　女子サッカーがアスリート及びスポーツ界にもたらす可能性

最後に、本論文を通して得られた知見をもとに、女子サッカーが、今後、アスリートやスポーツ界にもたらす影響の可能性について述べる。

一つ目は、複数の競技実践形態が同じチームに混在しているという事実が持つ可能性である。確かに、これはアスリートの競技活動を不安定化させる要因となっていた。しかし、見方を変えれば、これはセカンドキャリアへの切り替えをスムーズに移行できる「学び」の機能を持つということもできるのではないか。現役アスリートがセカンドキャリアを考え、将来に向けて準備したり、そのためにデュアルキャリアを実践したりすることは、アスリートであることを志向する者にとって、そう容易く受け入れることはできないものだと考えられる。

他方で、現実的な必要から仕方なく生じた、同じチーム内にプロ選手、支援企業の社員選手、一般企業の社員選手（アルバイトを含む)、学生選手がいることは、互いの生活が見える環境にあるとも言える。プロ選手だけでなく、サッカーとは別の仕事をしている選手の労働と生活、その職種も多様であることは、サッカー以外の世界を現役中にも垣間見つつ、その労働について理解することにつながる。女子サッカーは、サッカーだけに閉じられた世界ではなく、常にセカンドキャリアや外部とのつながりを意識することを可能にする場であったとも言える。この点は、プロ選手だけで構成される男子サッカー・男子野球などのスポーツチームでは経験できない、競技実践形態の多様性が見られるがゆえの女子サッカーの固有性であるとも言える。つまり、女子サッカーはセカンドキャリアへの切り替えなど、キャリアをめぐる「学び」を生み出すという固有な性質を有しているのではないか[103]。

二つ目に、スポーツにおけるジェンダー秩序を揺るがす何よりも大きな可能性である。サッカーは「男性向きの」スポーツとして強固なジェンダー秩序が形成されている競技である

103 さらに、サッカー以外の世界と直接的・間接的につながりながら、チーム内の選手における各々の異なる環境を理解し、さらに、その上で、ひとつのチームとしてサッカーという競技に挑戦している K チームのようなあり方は、プロスポーツの将来の姿として、今後、むしろアスリートのキャリア教育という観点から現実味を帯びてくるものであるように考えられる。

ため、女子サッカー選手が存在し続けること自体がどれほど難しいことなのかが、本論文を通して浮き彫りになった。これは、サッカーにおいても性別（ジェンダー）がいかに機会の平等を侵害しているのかを表す。さらに、ジェンダー格差に対しては意識を向けないようにしているとも見える女子選手たちは、サッカーにおけるジェンダー構造の根深さを示していると言える。だからこそ、女性たちがそうしたサッカーに参加すること自体が、性別によって可能性を制限されない、女性だからといってスポーツ機会を享受することを妨げられることのない、アスリートとしての自由を実現できる可能性を示すものである。

すなわち、K チームの選手の姿は、女性もアスリート・アイデンティティを探求できる主体になり得るという点、さらには、女性がそもそもアスリートの基準から排除されてきた現実を気づかせることにつながる。そのため、彼女らがサッカー選手として生きている存在自体が意義のあることであり、これは「男らしさ」とサッカーの連結を揺るがすと考えられる。つまり、女子サッカーは、これまでどのような対象をアスリートとして認識し評価しているのか、その「男らしさ」を問い直すきっかけを人びとに提供する[104]。ひいては、女子サッカー選手の姿によって、個々のアスリートが競技活動において、ジェンダーから解放されることも可能になると考えられる。

また、女子サッカー選手たちは、次世代の女の子たちのロールモデルになりうる。女子サッカー選手と、彼女らに憧れる子どもたち（特に女の子）との、地域におけるサッカーを通じた直接的な出会いは、双方にとって大きな力となっている。子どもたちは、彼女らのサッカー実践を通して「男性向き」と見なされてきたサッカーが、性別に関係なくできる競技である点に気づくようになる。また、彼女らも、子どもたちを通して、自分もサッカー選手として憧れの対象になりうることに自信がつくようになる。さらに、今後彼女らがジェンダーに関わる意識を自覚した上でサッカーを実践するのであれば、根深いジェンダー構造も変えて行くことがより早まると考えられる。法律や制度が改革されたとしても、人びとのジェンダー意識がすぐに変化するとは限らない中で、女子サッカー選手たちは大きな組織的変革を担うことは難しくても、身近な社会生活（地域社会の中から個々の関係など）を通じてボトムアップ的に時間をかけながら、スポーツにおけるジェンダー秩序を変えてゆく可能性を持つと言える。また、これはサッカーだけでなく、サッカー活動を通じて社会生活（職場など）、さらにはより広い公共的空間に対してジェンダー公正な関係形成につながると考えられる。

3　今後の課題

本論文の今後の課題として、以下の 4 点について述べておきたい。

---

104 ただし、これだけでは、ジェンダー秩序の大きな改革には限界があるかもしれない。そのため、ここで言及しておきたい点は、女子サッカー選手、女性指導者に対するジェンダー教育だけでなく、サッカーにかかわる男性関係者（男子サッカー選手、男性指導者、男性教員、協会などの組織の男性管理職、男性ジャーナリストなど）に対するジェンダー教育が不可欠だと言える。女子サッカーが男性たちによって発展してきた事実であれば、サッカーにかかわる男性関係者のジェンダー意識改革やサッカーにおけるジェンダー平等社会の実現に向けて共に努力することは必然的なことではないだろうか。

第一に、競技種目別に女性アスリートの労働と生活の実態を明らかにしたい。本論文は、女子サッカーを事例に取り上げたものであって、この事例が他種目の女性アスリートにも当てはまるものだとは言い切れない。そこで、サッカー以外の競技に従事する女性アスリートの労働と生活を実証することで、女性アスリートであることはどのようなものであるかを、一般化してゆきたい。

第二に、本論文では、アスリートの労働と生活を実証的に論じることを目的とするゆえに、まずはアスリート個人の性別を男か女（性別二元論）で捉えてきた。今後は、性の多様性という視点を取り入れて、サッカーそしてスポーツのあり方を議論していきたい。

第三に、男子サッカーにおける女子サッカー選手の包摂の可能性についてである。2020 年 9 月 10 日、元日本女子代表であった永里優季選手が、米女子サッカーリーグのオフ期間を利用して、現所属チームであるシカゴ・レッドスターズから、神奈川県 2 部の男子チームである「はやぶさイレブン」へ期限付きで移籍したことが、国内外のメディアや SNS などで取り上げられた。ただし、現在、永里選手は、2021 年のシーズンにはアメリカに戻り、女子チームであるレーシング・ルイビル FC に所属することが決まっている［日刊スポーツ, 2020.09.27 ; ゲキサカ, 2020.10.29］。しかし、オフ期間中の短い期間ではあるが、女性が J リーグへの参入を目指すチームに移籍できたことは、サッカーにおけるジェンダー秩序を揺るがす有意義なチャレンジであると考えられる。今後は、こうした観点を取り入れ、男子サッカーにおける女子選手のあり方についても、議論を展開してゆきたい。

第四に、女性アスリートに対する男の子の眼差しについてである。本論文では、女子サッカー選手の地域貢献活動において、女子サッカー選手に憧れる女の子たちがいる点が明らかになった。しかし、男の子たちは、「男性向きの」「男らしい」スポーツに参加する女子サッカー選手（女性アスリート）をどのような眼差しで見ているのだろうか。この点において、今後議論を深めていくことは、スポーツのあり方と女性アスリートのあり方を検討していく上で重要なヒントになると考えられる。これがジェンダー平等社会の実現を展望する上で、重要な手がかりを与えてくれるであろうことは言うまでもない。

・初出一覧・

序　章　書き下ろし

第 1 章　申恩真, 2017,「日本女子サッカー選手の生活形態に関する研究――支援の質的位相をめぐって」,『スポーツ社会学研究』第 25 巻第 2 号, 71-83（大幅加筆修正）【課題研究Ⅰ】

第 2 章～第 3 章　申恩真, 2019,「不安定な女性アスリート――女子サッカー界の制度をめ

ぐる一考察」,『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 134 号, 17-42（加筆修正）

第 4 章〜第 5 章　申恩真, 2017,「日本女子サッカー選手の生活形態に関する研究――支援の質的位相をめぐって」,『スポーツ社会学研究』第 25 巻第 2 号, 71-83（大幅に加筆修正）【課題研究Ⅰ】

第 6 章〜第 7 章　申恩真, 2018,「女性アスリートの痛みをめぐるエスノグラフィー――サッカー選手の月経をめぐる対応から」,『スポーツとジェンダー研究』VOL.16, 6-19（大幅に加筆修正）【課題研究Ⅱ】

第 8 章　申恩真, 2017,「日本女子サッカー選手の生活形態に関する研究――支援の質的位相をめぐって」,『スポーツ社会学研究』第 25 巻第 2 号, 71-83（加筆修正）【課題研究Ⅰ】

第 9 章　書き下ろし

終　章　書き下ろし

【参考文献】

有村信子・岩本愛子, 2005, 「女子短期大学生の月経痛と彼らのソーシャル・サポート」, 『鹿児島純心女子短期大学研究紀要』35, 43-52

青石哲也・佐々木康, 2010, 「企業スポーツチームにおけるトップアスリートのセカンドキャリア形成に関する研究――ラグビー部を有する企業に所属している選手を事例として」, 『生涯学習・キャリア教育研究』6, 37-45

青沼裕之, 2014, 「フットボール協会（FA）結成と FA 規則制定の意図はどこにあったのか : 1863 年 FA 会議の審議過程の分析」, 『体育学研究』59, 869-885

Black, H.K.・Rubinstein, R.L., 2004, "Themes of Suffering in Later Life", *Journal of Gerontology : SOCIAL SCIENCES 59B(1)*, S17-S24

Coakley, J.・Donnelly, P., 2009, *Sports in Society: Issues and Controversies*, McGraw-Hill Ryerson; 2 edition（＝前田和司・大沼義彦・松村和則共編訳, 2011, 『現代スポーツの社会学――課題と共生への道のり』南窓社）

Edwards, E., 2014, "Fields of Individuals and Neoliberal Logics: Japanese Soccer Ideals and the 1990s Economic Crisis", *Journal of Sport and Social Issues 38(5)*, 432-464

江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房

Gabriel, K., 2011, *Soccer vs. the State: Tackling Football and Radical Politics*, PM Press Oakland（＝甘糟智子訳, 2012, 『アナキストサッカーマニュアル――スタジアムに歓声を、革命にサッカーを』現代企画室

Hall, M.A., 1996, *Feminism and Sporting Body*, Human Kinetics（＝飯田貴子・吉川康夫監訳, 2001, 『フェミニズム・スポーツ・身体』世界思想社）

浜田雄介, 2019, 「『アスリートとして生きることと消尽の体験に関する社会学的研究』研究経過報告」, 『京都産業大学総合学術研究所所報』14, 147-150

橋本純一, 2012, 「メディア・イベントとしてのスポーツ」, 井上俊・菊幸一編『よくわかるスポーツ文化』ミネルヴァ書房, 18-19

橋本有紀・目崎登・村井文江, 2003, 「運動が月経周期および月経に関する意識に及ぼす影響」, 『日本女性心身医学会雑誌』8(2), 161-168

Ho, Michelle H. S., 2014, "Is Nadeshiko Japan "Feminine?" Manufacturing Sport Celebrity and National Identity on Japanese Morning Television", *Journal of Sport and Social Issues38(2)*, 164-183

福田拓哉, 2010, 「企業スポーツにおける運営論理の変化に関する史的考察――日本的経営・アマチュアリズム・マスメディアの発達を分析視座として」, 『立命館経営学』第 49 巻第 1 号, 183-207

舩場大資, 2015, 「『明治武士道』にみる『文明の精神』の普及――新渡戸稲造と実業之日本社を中心に実業之日本社を中心に」, 『東アジア研究』223-245

Hwang, S.H., 2016, "A Narrative Inquiry for Gender-Role Conflict of Female Soccer Players", *Korean Journal of Sport Studies 55(1)*, 61-73（＝황성하, 2016, 「여자축구선수의 성

역할 갈등에 대한 내러티브 탐구」, 『한국체육학회지』55(1), 61-73）

飯田貴子, 2004, 「スポーツ・ジェンダー学のプロローグ」, 飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店, 11-19

飯田貴子・井谷恵子編著, 2004, 『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店

池田恵子, 2002, 「ジェントルマン・アマチュアとスポーツ――19 世紀イギリスにおけるアマチュア理念とその実態」, 『近代ヨーロッパの探求⑧スポーツ』ミネルヴァ書房, 3-39

池田恵子, 2016, 「英国女性スポーツ史研究にみるジェンダー空間の分析」, 『スポーツとジェンダー研究』14, 58-69

猪瀬優理, 2010, 「中学生・高校生の月経観・射精観とその文化的背景」, 『現代社会学研究』23, 1-18

井上雅雄, 2009, 「職業としてのアスリートとプロスポーツの諸問題」, 『スポーツ社会学研究』17(2), 33-47

井谷恵子, 2018, 「体育カリキュラムのポリティクス」, 飯田貴子・熊安貴美江・來田享子編著『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房, 34-35

井谷聡子, 2020, 「男女の境界とスポーツ――規範・監視・消滅をめぐるボディ・ポリティクス」, 『思想』1152, 156-175

石岡丈昇, 2012, 『ローカルボクサーと貧困世界――マニラのボクシングジムにみる身体文化』世界思想社

石坂友司, 2002, 「学歴エリートの誕生とスポーツ――帝国大学ボート部の歴史社会学的研究から」, 『スポーツ社会学研究』10, 60-71

石山隆之・川名光太郎・平田竹男, 2009, 「関東大学女子サッカーリーグに関する研究――MARCHG ゾーンにおける女子サッカー部創設の必要性と今後」, 『スポーツ産業学研究』19(1), 75-81

Jeong S. J., 2014, “Human Right Abuse of Female Athletes and Solution for the Problem”, *The Journal of Sports and Entertainment Law 17(4)*, 153-173（＝정승재, 2014, 「여성 운동선수의 기본권 침해와 보장방안――여성 축구선수 박은선 사건을 중심으로」, 『스포츠엔터테인먼트와 법』17(4), 153-173）

Kleinman, A., 1988, *The Illness Narratives : Suffering, Healing, and the Human Condition*, Basic Books（＝江口重幸・五木田紳・上野豪訳, 1996, 『病いの語り――慢性の病いをめぐる臨床人類学』誠信書房）

国友宏渉, 1991, 「社会人野球の構造と選手の生活・意識に関する研究」, 『名古屋文理短期大学紀要』16, 67-79

日下裕弘, 1996, 「日本スポーツ文化の源流」, 『茨城大学教養部紀要』30, 195-223

楠永敏惠・山崎喜比古, 2009, 「在宅要介護高齢者が経験する苦痛と困難およびそれらの心理的影響に関する研究」, 『社会医学研究』27(1), 25-33

Kwon, K.N.・Kwon, S.Y., 2012, *"*A grounded theory approach toward female soccer players gender identity conflict*"*, *The Korean Journal of Physical Education 51(3)*, 39-51（＝권기남・권순용, 2012, 「여자축구선수들의 성 정체성 갈등에 관한 근거이론적 접근」, 『한국체육학회지』51(3), 39-51）

前田博子・川西正志, 1994, 「女子サッカー選手のスポーツキャリアパターン――日本女子サッカーリーグ選手について」, 『鹿屋体育大学学術研究紀要』12, 41-48

Matteo, S., 1986, "The Effect of Sex and Gender-Schematic Processing on Sport Participation", *Sex Roles 15(7/8)*, 417-432

宮睾健一, 2003, 「競争のシステムと互助のシステム――市場機構・社会保障の接点と制度デザイン」, 『日本学士院紀要』58(2), 97-126

水上博司, 2009, 「1964 年東京オリンピック出場アスリートのライフヒストリーからみた就労体験」, 『スポーツ社会学研究』17(2), 49-64

森田浩之, 2009, 「ジェンダー」, 『メディアスポーツ解体――<見えない権力>をあぶり出す』NHK 出版, 91-124

森田浩之, 2012, 「3.11 とメディアスポーツ――物語の過剰をめぐって」, 『スポーツ社会学研究』20(1), 37-48

森山廣芽, 1977, 「わが国のスポーツにおける、アマチュアリズムの発展過程とその方向」, 『信州大学教養部紀要』第二部自然科学 11, 77-89

中村英仁, 2017, 「企業スポーツ選手の労働と引退後のキャリアとの関係性」, 『日本労働研究雑誌』688, 72-84

日本サッカー協会, 2011, 「日本女子サッカーの軌跡～世界一にたどり着くまで」, 『JFA news』328, 14-15

日本サッカー協会, 2011, 「なでしこジャパンが『国民栄誉賞』を受賞」, 『JFA news』329, 14-15

日本サッカー協会 75 年史編集委員会, 1996, 『財団法人日本サッカー協会 75 年史――ありがとう。そして未来へ』, 財団法人日本サッカー協会

日本スポーツ振興センター, 2014, 「デュアルキャリアに関する調査研究」報告書

西原茂樹, 2013, 「甲子園野球の『物語』の生成とその背景――明治末期～昭和初期の『青年らしさ』『純真』の言説に注目して」, 『スポーツ社会学研究』21(1), 69-84

野崎武司, 1991, 「現代スポーツ事情」, 『体育・スポーツ経営学研究』第 8 巻第 1 号, 23-31

小田有里彩・田島誠・米谷正造, 2010, 「ストレスコーピングが女性アスリートの月経イメージに与える効果」, 『川崎医療福祉学会誌』20(1), 197-202

小笠原裕子, 1998, 『OL たちの〈レジスタンス〉』中公新書

荻野勝彦, 2007, 「企業スポーツと人事労務管理」, 『日本労働研究雑誌』564, 69-79
岡部祐介・友添秀則・吉永武史・稲葉佳奈子, 2010, 「マラソン競技者・円谷幸吉の自死に関する一考察――競技スポーツおよび競技者の問題性との関連から」, 『スポーツ教育学研究』30(1), 13-23
大住良之・大原智子, 2004, 『がんばれ！女子サッカー』, 岩波書店
大勝志津穂, 2013, 「愛知県における一般成人女子サッカー選手の活動環境に関する研究」, 『スポーツとジェンダー研究』11, 43-56
大崎企業スポーツ事業研究助成財団, 2005, 「『社員選手』の処遇のあり方に関する調査研究」
ウルヴェ京・筒井香・神武直彦, 2018, 「夏季冬季・男女の違いによる日本のオリンピック選手の競技引退理由の量的調査」, 『スポーツ産業学研究』28(4), 295-306
佐伯年詩雄, 2017, 「企業スポーツの現在を考える――変化する経営課題と企業スポーツの展望」,『日本労働研究雑誌』688, 58-71
佐々木勝, 2005, 「企業がスポーツチームを持つべきか」, 『日本労働研究雑誌』375, 46-48
佐藤麻美・斉藤ふくみ, 2010, 「女子大学生の月経の実態調査――月経のとらえ方を中心に」, 『茨城大学教育実践研究』29, 213-222
関めぐみ, 2018, 『〈女子マネ〉のエスノグラフィー――大学運動部における男同士の絆と性差別』晃洋書房
申恩真, 2017, 「日本女子サッカー選手の生活形態に関する研究――支援の質的位相をめぐって」, 『スポーツ社会学研究』25(2), 71-83
申恩真, 2018, 「女性アスリートの痛みをめぐるエスノグラフィー――サッカー選手の月経をめぐる対応から」, 『スポーツとジェンダー研究』16, 6-19
申恩真, 2019, 「不安定な女性アスリート――女子サッカー界の制度をめぐる一考察」,『北海道大学大学院教育学研究院紀要』134, 17-42
Skille, E. A., 2008, “Biggest but smallest: female football and the case of Norway”, *Soccer & Society9(4)*, 520-531
サッカーマガジン編集部, 2018, 『なでしこリーグ 30 年の軌跡』ベースボール・マガジン社
佐藤郁哉, 2008, 『フィールドワーク――書を持って街へ出よう』新曜社（増訂版第 4 刷）
杉野昭博, 2010, 『スポーツ障害から生き方を学ぶ――ケガをめぐる競技者たちの語り』生活書院
武谷雄二, 2012, 『月経のはなし――歴史・行動・メカニズム』中央公論新社
田口亜紗, 2003, 『生理休暇の誕生』青弓社
田口禎則, 2009, 「日本女子サッカーリーグの現状と将来」, 『フットボールの科学』4(1), 11-14
高藤順, 2017, 「女子サッカークラブの発展過程と社会的背景――INAC 神戸のクラブマネジメントを事例に」,『吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）』, 増刊号, 163-174
髙橋義雄, 1994, 『サッカーの社会学』, 日本放送出版協会
東明有美・入口豊・山科花恵, 2002, 「女子サッカーの日米比較研究（I）――アメリカ女子

サッカーの歴史と現状について」,『大阪教育大学紀要』第IV部門 51(1), 165-180
東明有美・入口豊・山科花恵・松原英輝, 2003,「女子サッカーの日米比較研究（II）――日本女子サッカーの歴史と現状について」,『大阪教育大学紀要』第IV部門 51(2), 433-451
豊田則成, 1999,「アスリートの競技引退に伴うアイデンティティ再体制化に関する研究――中年期危機を体験した元オリンピック選手」,『スポーツ教育学研究』19(2), 117-129
豊田則成・中込四郎, 1996,「運動選手の競技引退に関する研究：自我同一性の再体制化をめぐって」,『体育学研究』41, 192-206
豊田則成・中込四郎, 2000,「競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討」,『体育学研究』45, 315-332
津野千尋・鈴木郁弥・荒井弘和, 2015,「大学生における月経前症状に関するコミュニケーション」,『法政大学スポーツ研究センター紀要』33, 27-31
角田聡美, 2000,「女子体育における身体への政治――「婦人衛生会雑誌」の分析を中心に」,『スポーツ社会学研究』8, 73-85・129
上野千鶴子, 1998,「国民国家とジェンダー」,『ナショナリズムとジェンダー』青土社, 9-96
内海和雄, 2003,「プロ・スポーツ論――プロ・スポーツとスポーツの公共性」,『一橋大学スポーツ研究』, 27-35
内海和雄, 2007,『プロ・スポーツ論――スポーツ文化の開拓者』創文企画
牛木素吉郎, 2013,「ワールドカップ・サッカー」,『スポーツ文化論』（第 3 刷）ミネルヴァ書房, 12-13 題
Wacquant, L., 2004, *Body and Soul: Ethnographic Notebooks of An Apprentice-Boxer*, New York: Oxford University Press（＝田中研之輔・倉島哲・石岡丈昇訳, 2013,『ボディ＆ソウル――ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー』新曜社）
輪田真理・入口豊・井上功一・山科花恵・東明有美, 2012a,「日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望 (I) ――日本女子サッカー（なでしこ）リーグの歴史と現状」,『大阪教育大学紀要』第IV部門 60(2), 15-28
輪田真理・入口豊・井上功一・山科花恵・東明有美, 2012b,「日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望（II）――浦和レッドダイヤモンズ・レディース」,『大阪教育大学紀要』第IV部門 61(1), 19-32
輪田真理・入口豊・井上功一・山科花恵・東明有美, 2013,「日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望（III）――伊賀フットボールクラブ・くノーに焦点を当てて」,『大阪教育大学紀要』第IV部門 61(2), 25-39
Williams, J., 2003, *A Game for Rough Girls?: A History of Women's Football in Britain* , Routledge
山本浩, 2020,「イングランドのフットボール――階級の視点から」,『サッカー13 の視点』創文企画, 21-36
山室敦嗣, 2007,「フィールドワークが〈実践的〉であるために――原子力発電所候補地の現場から」, 好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社,

132-166（第 2 刷）
山中義博・上林功・澤井和彦・間野義之, 2018, 「人事労務管理から見た新しい企業スポーツのモデル――「アスナビ」をケースとした雇用に関する概念抽出を通して」,『スポーツ産業学研究』28(2), 189-205
山科花恵・入口豊, 2006, 「サッカー競技とジェンダーに関する一考察」, 『大阪教育大学紀要』第IV部門 54(2), 5-23
吉田毅, 2010, 「金メダル獲得をめぐる競技者のキャリア形成プロセス――ノルディック複合金メダリストのライフヒストリー」, 『スポーツ社会学研究』18(1), 43-58
湯浅康弘・栗原俊之・積山和明・小澤翔・有賀誠司・小山孟志・伊坂忠夫, 2019, 「アスリートにおける方向および様式の異なる跳躍能力と足趾筋力の関係――足趾筋力発揮時の中足趾節関節角度に着目して」, 『体力科学』68(1), 83-90

【参考資料】

朝日新聞, 1993.12.16, 「日産がリーグ脱退：親会社の業績悪化／日本女子サッカー」朝刊
朝日新聞, 1996.03.18, 「シダックス女子サッカー部解散（ルポ・都市の鼓動）／東京」朝刊
朝日新聞, 1998.10.04, 「日興証券が女子サッカー・L リーグ撤退：フジタも今季限り」朝刊
朝日新聞, 1998.11.05, 「女子サッカーの L リーグもリストラ：日興証券、フジタ撤退」朝刊
朝日新聞, 1999.04.09, 「なぜ私ばかりリストラ：移籍のたび廃部、女子サッカーの吉泉愛選手」朝刊
朝日新聞, 1999.10.06, 「寒風、女子サッカー：L リーグ選手、アマチュアに逆戻り… 」夕刊
朝日新聞, 2000.02.26, 「女子サッカー『鈴与清水 FC』解散へ：年 1 億円の経費重く／静岡」朝刊
朝日新聞, 2000.08.02, 「激変、女子サッカー：企業撤退、『仕事』から『趣味』に」夕刊
朝日新聞, 2004.05.24, 「女子蹴球 11 楽坊の面：五輪戦士たちの意外な素顔」週刊
朝日新聞, 2008.04.12, 「『くノー』サッカー、苦境忍んで奮戦中：伊賀 FC、仕事終え夜練習／名古屋」朝刊
朝日新聞, 2008.10.11, 「田崎真珠、なでしこリーグを撤退／サッカー女子」朝刊
朝日新聞, 2015.07.31, 「大阪高槻が支援金募集へ／女子サッカー 」朝刊
朝日新聞, 2020.12.09, 「性別に関係なく夢はめざせる」（構成・高津祐典）
BBC NEWS, 2016.08.16, 「＜リオ五輪＞中国の競泳選手、生理とスポーツのタブー破る」http://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-37091556（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
BBC NEWS, 2020.09.29, 「日本航空、『レディース&ジェントルメン』のアナウンス廃止へ」https://www.bbc.com/japanese/54336284（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
Cycle, 2016.03.10, 「＜THE REAL＞なでしこジャパンはなぜ輝きを失ったのか…マンネリ化を招いた危機感の欠如」https://cyclestyle.net/article/2016/03/10/33534.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

DIAMOND ONLINE, 2015.07.07, 「なでしこたちの『待遇』は 4 年前より良くなったか」http://diamond.jp/articles/-/74483?page=3（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

ゲキサカ, 2020.10.29, 「久々に腹立った」男子チーム所属・永里優季の誤情報が拡散…クラブも訂正の声明を出す異例の事態」, https://news.yahoo.co.jp/articles/07fe043a2fd5b46edab66c9745f0339a19e0684d（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

Jackie D.G., 2019.07.10, 「女子サッカー選手の貧し過ぎる現状を憂う」https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/07/post-12530.php（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

JBpress, 2010.06.08, 「なでしこジャパン主将が語る、「世界で勝つ」とは 澤穂希×平田竹男対談～その 1」https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/3663（最終確認日 2021 年 2 月 20 日）

J-CAST ニュース, 2015.07.07, 「『なでしこ』信じられない待遇　代表入りでも年俸 300～400 万、アルバイトする選手も」https://www.j-cast.com/2015/07/07239660.html?p=all（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

時事通信社, 2004.07.07, 「女子サッカー澤穂希　写真特集」https://www.jiji.com/jc/d4?p=swh706-jpp01915970&d=d4_ftbnn（（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

順天堂大学女性スポーツ研究センター, https://www.juntendo.ac.jp/athletes/notebooks/

順天堂大学マルチサポート事業, 2013,『女性アスリート戦略的強化支援方策レポート』

NEWS ポストセブン, 2015.07.09, 「女子サッカー選手：男子と比べてその待遇が低すぎる現状もあり」http://www.news-postseven.com/archives/20150709_334922.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

日本経済新聞, 2015.07.30, 「なでしこ、高槻が経営危機：リーグは資金援助せず」https://r.nikkei.com/article/DGXLSSXK40716_Q5A730C1000000?s=0（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

日本経済新聞, 2020.06.11, 「女子サッカー、新プロリーグに込めた大いなる理念」, https://www.nikkei.com/article/DGXMZO60137390Z00C20A6000000/（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

日本高等学校野球連盟, 「部員数統計」, http://www.jhbf.or.jp

日本オリンピック委員会, 2019, 「アスナビ――トップアスリートの就職支援ナビゲーションパンフレット」

日本プロサッカーリーグ, 2019, 「Ｊリーグ入会（Ｊ3 リーグ参加）の手引き【新たに入会を目指すクラブ向け】」

日本サッカー協会, http://www.jfa.jp

日本女子サッカーリーグ, http://www.nadeshikoleague.jp

日本女子サッカーリーグ, 1989, 「第 1 回日本女子サッカーリーグプログラム」

日本女子サッカーリーグ, 1990, 「第 2 回日本女子サッカーリーグプログラム」

日本女子サッカーリーグ, 1991, 「第 3 回日本女子サッカーリーグプログラム」
日本女子サッカーリーグ, 1992, 「第 4 回日本女子サッカーリーグプログラム」
日本女子サッカーリーグ, 1993, 「第 5 回日本女子サッカーリーグプログラム」
日本女子サッカーリーグ, 1994, 「第 6 回日本女子サッカーリーグプログラム」
日本女子サッカーリーグ, 1994, 「information Network」4
日本女子サッカーリーグ, 1994, 「information Network」5
日本女子サッカーリーグ, 1994, 「information Network」6
日本女子サッカーリーグ, 1994, 「information Network」12
日本女子サッカーリーグ, 1994, 「information Network」13
日本女子サッカーリーグ, 1995, 「第 7 回 L・リーグプログラム」
日本女子サッカーリーグ, 1995, 「information Network」18
日本女子サッカーリーグ, 1996, 「第 8 回 L・リーグプログラム」
日本女子サッカーリーグ, 1996, 「information Network」28
日本女子サッカーリーグ, 1996, 「information Network」29
日本女子サッカーリーグ, 1997, 「第 9 回 L・リーグ公式パンフレット」
日本女子サッカーリーグ, 1997, 「information Network」39
日本女子サッカーリーグ, 1998, 「information Network」51
日本女子サッカーリーグ, 1998, 「information Network」53
日本女子サッカーリーグ, 1998, 「information Network」61
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「第 11 回 L・リーグ公式プログラム」
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」63
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」65
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」66
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」67
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」68
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」70
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」71
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」73
日本女子サッカーリーグ, 1999, 「information Network」74
日本女子サッカーリーグ, 2000, 「第 12 回 L・リーグ公式プログラム」
日本女子サッカーリーグ, 2000, 「information Network」77
日本女子サッカーリーグ, 2001, 「第 13 回 L・リーグ公式プログラム」
日本女子サッカーリーグ, 2001, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 87
日本女子サッカーリーグ, 2001, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 89
日本女子サッカーリーグ, 2002, 「第 14 回 L・リーグ公式プログラム」
日本女子サッカーリーグ, 2002, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 99
日本女子サッカーリーグ, 2002, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 102
日本女子サッカーリーグ, 2002, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 110

日本女子サッカーリーグ, 2003, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 111
日本女子サッカーリーグ, 2003, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 114
日本女子サッカーリーグ, 2003, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 116
日本女子サッカーリーグ, 2004, 「第 16 回 L・リーグ公式プログラム」
日本女子サッカーリーグ, 2004, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 125
日本女子サッカーリーグ, 2004, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 130
日本女子サッカーリーグ, 2004, 「エ・ルキューブ」L・リーグ公式機関紙 132
日本女子サッカーリーグ, 2009, 「日本女子サッカーリーグ規約・規定集」
日本女子サッカーリーグ, 2013, 「一般社団法人日本女子サッカーリーグ規約・規定集」
日本女子サッカーリーグ, 2014, 「女子チーム創設ガイド――未来の創設x女子サッカー」
日本女子サッカーリーグ, 2020,『Plenus なでしこリーグ/Plenus チャレンジリーグ オフィシャルガイドブック 2020 特大号』
日刊スポーツ, 2017.03.02, 「女子野球競技人口１・５万人！中２で完封投手も現れる」https://www.nikkansports.com/baseball/column/techo/news/1786093.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
日刊スポーツ, 2019.11.04, 「21 年に女子プロリーグ誕生「なでしこ」と別に新設」https://www.nikkansports.com/soccer/news/201911140000598.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
日刊スポーツ, 2020.09.27, 「永里男子加入でスポンサーに好影響　ピッチでは？」https://www.nikkansports.com/soccer/column/writers/news/202009260000689.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
日刊スポーツ, 2020.10.15, 「ＷＥリーグ『オリジナル 11』決定『開幕戦派手に』」https://www.nikkansports.com/soccer/news/202010150000843.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
日刊スポーツ, 2020.11.13, 「女性アスリートら性目的撮影被害、室伏長官に要望書」https://www.nikkansports.com/sports/news/202011130000441.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
日刊スポーツ, 2020.12.09, 「性的画像を批判受けても投稿　男性の理解不能な主張」https://www.nikkansports.com/sports/news/202012090000007.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
野田一, 1995, 日本女子サッカーリーグ「第 7 回 L・リーグプログラム」
産経スポーツ, 2014.03.18,「なでしこリーグ来年から 3 部制に､ガイドラインも新たに策定」http://www.sanspo.com/soccer/news/20140318/dom14031804060001-n1.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
産経スポーツ, 2019.11.04, 「女子サッカープロリーグ、２１年開幕へ　なでしこリーグはアマチュアとして存続」https://www.sanspo.com/soccer/news/20191114/scd19111418560001-n1.html（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）

セカンドキャリア Web, http://www.shp.taiiku.otsuka.tsukuba.ac.jp/scweb/index.html
スポシル編集部, 2018.01.08, 「ピステとは？サッカーの練習やランニングで大活躍のおすすめ 10 選」https://sposhiru.com/4232#-1（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
Sportiva web, 2018.04.06, 「女子大生なでしこ 2 人の危機感。W杯で結果を出さねばプロになれない」https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/football/jfootball/2018/04/06/___split_23/index.php（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
鈴木保, ,2004, 日本女子サッカーリーグ「エ・ルキューブ」123
竹本一彦, 2000, 日本女子サッカーリーグ『information Network』76
The FA, https://www.thefa.com/
THE PAGE, 2016.04.25, 「『低所得層』とは、どのくらいの収入の人たちのことなのか」https://news.yahoo.co.jp/articles/f2e7fc67f16d0878e552be9b2eb5eea0e0bea76c（最終確認日 2021 年 2 月 14 日）
WE リーグ, https://weleague.jp/
読売新聞, 1999.11.12, 「企業に頼れない！：女子サッカーＬリーグ転換期、市民クラブ化／リーグ分割案も」大阪夕刊
読売新聞, 2000.01.26, 「女子サッカー『プリマハム FC くノー』: 市民クラブに移行＝三重」中部朝刊
読売新聞, 2004.12.04, 「女子サッカー『宝塚バニーズ』: “雑草魂”で企業チーム倒せ＝兵阪神」大阪朝刊
読売新聞, 2008.09.12, 「北京五輪４位、『なでしこ』に記念品」大阪朝刊
読売新聞, 2008.11.08, 「なでしこリーグ上位 12 クラブ化、拡充案、13 年から入れ替え戦も」東京朝刊
読売新聞, 2009.05.13, 「スポンサー撤退でみんなの力を：湯郷ベル、月内入会会員に特典＝岡山」大阪朝刊
読売新聞, 2010.01.22, 「プレナスなでしこリーグ概要発表」東京朝刊
読売新聞, 2011.03.03, 「女子リーグが一般社団法人化へ」東京朝刊
読売新聞, 2011.09.17, 「なでしこに支援続々、公式スポンサー」東京朝刊
読売新聞, 2011.10.15, 「なでしこリーグ：トヨタ、公式スポンサーに」東京朝刊
読売新聞, 2012.03.23, 「女子リーグが補助金 200 万円」東京朝刊
読売新聞, 2012.05.24, 「［WOMEN］なでしこの明日（3）プレー専念できる環境に」東京朝刊
読売新聞, 2013.11.13, 「なでしこリーグ、来季はスプリット方式で」東京朝刊
読売新聞, 2014.03.18, 「女子も 3 部制に」東京朝刊
読売新聞, 2016.06.09, 「［論点］女子サッカー：2020 年の先へ、今井純子氏（寄稿）」東京朝刊
ベガルタ仙台オフィシャルウェブサイト, https://www.vegalta.co.jp/
全国高等学校体育連盟, 「令和元年度加盟登録状況」https://zen-koutairen.com/

【謝　辞】

博士論文をまとめるにあたり、多くの方々のご指導とご助言をいただきました。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

主査をつとめていただいた辻智子先生に厚くお礼を申し上げます。辻先生のご指導のおかげさまで、フィールドワークの成果を労働と生活の視点から述べた上で、さらにジェンダーの視点も持って議論を深めることができました。辻先生の下で、研究活動ができたことは、私にとって貴重な財産となりました。博士論文の執筆、最後の最後まで辛抱強くご指導やご助言をいただいたこと、また、励ましていただいたことを深く感謝申し上げます。

また、本論文をまとめるにあたって、4 名の先生に副査をお願いしてご助言とご指導を賜りました。日本大学文理学部の石岡丈昇先生、北海道大学大学院教育学院の小内透先生と池田恵子先生、帝塚山学院大学の飯田貴子先生に副査としてつとめていただきました。

石岡先生は、研究の初歩から修士論文の主査、博士論文の副査まで担当してくださいました。石岡先生よりフィールドワークを通じて選手当事者の視点から研究を進める大切さを教えていただきました。それだけではなく、留学生である私の立場を気にかけてくださり、研究活動と大学院生活双方において、明確なアドバイスをしてくださいました。厚く感謝を申し上げます。私には、辻先生にも石岡先生にもご指導をいただくという幸せが与えられました。

小内先生には、フィールドワーカーとしての私の強みが活かされるようにご指導をいただきました。小内先生のご指導と暖かいご助言により、本論文をより磨き上げることができました。心より感謝申し上げます。

池田先生には、修士論文の副査も担当していただき、現在にわたりご指導を賜りました。女子サッカーの固有性を見出すために必要なご助言を初め、多くの励ましのお言葉をいただきました。誠に感謝申し上げます。

飯田先生には、本論文に関してのみならず、日本スポーツとジェンダー学会においても、ご指導とご応援をしていただいております。私の研究活動を暖かく見守ってくださり、研究者として成長するようにご助言をいただきました。深く感謝を申し上げます。

以上の審査員の先生方のおかげさまで、博士論文を完成することができました。改めて心よりお礼を申し上げます。

また、北海道大学大学院教育学院の先生方、青年期教育論・体育社会学研究室のみなさま、日本スポーツとジェンダー学会のみなさま、日本スポーツ社会学会のみなさまにも深くお礼を申し上げます。お一人ずつお名前をあげることはできず恐縮ですが、なかでも、大学院生活から研究活動において、多くのご指導とご助言くださった大沼義彦先生（日本女子大学人間社会学部）と松井理恵先生（跡見学園女子大学観光コミュニティ学部）、金誠先生（札幌大学）、高峰修先生（明治大学政治経済学部）、鷲谷洋輔先生（東北大学大学院教育学研究科）、水野英莉先生（流通科学大学人間社会学部）、松宮智生先生（清和大学法学部）、山崎貴史先生（北海道大学大学院教育学研究院・修正論文の副査）にも、心よりお礼を申し上げます。

そして、K チームの選手たちに感謝の気持ちをお伝えいたします。K チームの選手たちが、自分自身の生活に向き合って日々を過ごす姿は、素晴らく貴重なものでした。皆さんがサッカーのために尽力することを、その場で見て感じ取れる機会が与えられたことに本当に感謝します。皆さんが、現在においても、将来においても、自分らしく輝き続けることを心から願っております。また、本調査にご協力くださったみなさまにも、厚くお礼を申し上げます。

最後に、ウリ家族（我が家族）に本当に感謝したいです。育ってくれて、離れ離れの時間を耐えてくれて、また応援もしてくれて本当にありがとうございました。また、共に喜び、共に悲しめる、アン Family、世光 Family、心で通じ合い支え合っているみなさま（一人ずつお名前をあげられず申し訳ありません）にも感謝いたします。そして、「苦難さえも喜んで…苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出す（ローマ人への手紙 5：3~4）」ことを悟らせ、落ち込んだ時に共にいて助けてくださり、これまでの私の人生における全ての出来事（楽しかったことも、苦しかったことも、多くの方々に出会ったことも含めて）を計画し、ここまで来られるように導いてくださった創造主である神に心から感謝申し上げます。

2021 年 2 月 26 日　札幌にて

申　恩真